

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

Ⅱ

1996年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 II

1999.3

長原遺跡東北地区における本格的な発掘調査はまだ緒についたばかりであるが、本書では最新の成果をもとに長原遺跡東北地区における基本層序を提示した。

本年度の調査では、縄文時代の遺物が出土したのをはじめ、弥生時代の溝や水田を検出した。古墳時代には大規模な洪水が数次にわたってこの地を襲ったことが判明した。洪水によって形成された自然堤防上で、古墳時代から飛鳥時代にかけて展開する集落が発見された。この間、周辺地域も含めた集落と生産域は、洪水などの自然的要因と、政治的要因の2つの軸の中で大きく変動していた様相がうかがえた。また、飛鳥時代の集落からは牛骨を埋納した土壙も見つかっており、これについても考察を加えた。奈良～平安時代にかけても地形の変化と開発などの人間の活動との係わりについての予察を述べた。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

Ⅱ

1996年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人 大阪市文化財協会



飛鳥時代の土器

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

Ⅱ

1996年度大阪市長吉東部地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

前書に引続き、新シリーズ『長原遺跡東部地区発掘調査報告』の第2冊目を刊行する運びとなりました。当協会にとって新たな事業である長吉東部地区区画整理事業に伴う発掘調査もようやく軌道にのってまいりました。

さて、当事業の対象である長原遺跡東北地区は沖積平野にあたるため、一般に遺構・遺物の埋没深度が深く、太古の昔から自然と人間が係わってきたことを示す情報が豊富にとどめられています。特に、治水・利水と人間の生活の深い係わりを示す痕跡を数多く見出すことが可能です。

地中の情報をひとつひとつ掘り起し、地域の歴史を復元することが発掘に携る者の責務でありましょう。本書はこうした作業の一端であり、本書を通じて読者の皆様に沖積平野発掘の魅力を少しでも感じていただければ幸いです。

本書収録の調査成果は地元の方々や、大阪市建設局をはじめとする関係諸機関の御理解と御協力の賜であり、深く謝意を表します。

1999年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐 治 敬 三

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1996年度に実施した、大阪市建設局長吉東部土地地区画整理事務所による平野区長吉六反1丁目、長吉出戸7丁目の土地地区画整理事業に伴う発掘調査(NG96-9・40・66次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査部長永島暉臣慎の指揮のもと、調査課調査員高橋工・絹川一徳が行った。各調査の担当者・面積・期間などは第Ⅰ章第2節表2に示した。本書の編集は、永島・調査課長代理京嶋覚・同課主任趙哲済の指導のもとに、高橋が行った。本書の執筆は、京嶋・高橋・絹川・調査課調査員大庭重信・同杉本厚典・同久保和士が行った。文責は各自担当個所の文末に示した。また、第Ⅱ章の表3長原遺跡東北地区の基本層序については、報告書作成時に同地区で発掘調査を担当していた絹川・杉本・大庭・調査課調査員松本百合子に趙・高橋を加えた6名で検討し、最終的に高橋がまとめた。なお、英文目次・要旨の作成はRobert Condonと調査課調査員岡村勝行が行った。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。
- 一、遺物写真の撮影は徳永罔治氏に委託した。遺構等の写真の撮影は各調査担当調査員が行い、一部を徳永氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、縄文土器については、大阪府教育委員会の大野薫氏、財団法人東大阪市文化財協会の菅原章太氏から御教示を得た。記して深謝します。

凡 例

- 1、本書では、図1に示したように、長原遺跡全体の地区割りを行った。これは、『長原・瓜破遺跡発掘調査』Ⅱ以降で採用している地区割のうち東南地区の範囲を修正し、新たに、北・東北・東の各地区を加えたものである。本書に収めた発掘成果は、この中の東北地区で行われた調査のものである。一方、本報告書シリーズの表題は、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』で、この東部地区は大阪市長吉東部地区区画整理事業が施行される地域を示しており、新しい地区割の東地区とは同じ地域を指さない。
- 2、本書における遺構名の表記は、掘立柱建物にはSB、柱穴・ピットにはSP、土坑にはSK、溝にはSD、自然流路にはNR、不明遺構にはSXの略号を冠した。遺構番号はまず長原遺跡東北地区の基本層序(RK層序、第Ⅱ章第1節参照)に対応させ層序番号を冠し、その後に各現場での遺構番号を続けて表記した。一例をあげると、RK4C層に対応する溝SD01はSD4C01としている。
- 3、本書における遺物番号は、土器・石器・金属器と動物遺体の別に通し番号を付した。前者をゴシック体、後者を明朝体で示している。
- 4、本書で用いた座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)に基づくもので、大阪市1級基準点を既知点とした基準点測量によって得た。水準点は、大阪市土木局管理の「南-49(大阪市立長吉南小学校内)」をもとに長吉東部区画整理事務所が設置したものを利用し、T.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。なお、本文中ではTPと略称した。
- 5、本書で用いた土器編年と器種名については、弥生土器は[寺沢薫・森井貞雄1989]に、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の土器は[奈良国立文化財研究所1976・1978]に、平安時代の土器は[佐藤隆1992]に、平安後期以降の瓦器は[鈴木秀典1982]に従った。
- 6、本書の地層断面図・柱状図で用いた岩相の基本パターンは[趙哲済1995]のそれに準じて表現している。
- 7、註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 経緯と調査地の位置	1
1) 発掘調査にいたる経緯	1
2) 遺跡の立地と調査地の位置	3
第2節 発掘調査の経過と概要	6
1) 東調査地 (NG96-9次)	6
2) 西調査地 (NG96-40・66次)	6
第Ⅱ章 長原遺跡東北地区の基本層序	7
第1節 基本層序	7
1) 沖積層上部層Ⅰ	7
2) 沖積層上部層Ⅱ	10
3) 沖積層上部層Ⅲ	12
4) 沖積層下部層	13
5) 低位段丘構成層	13
6) 中位段丘構成層	14
第2節 各層準の年代	15
第Ⅲ章 調査の結果	17
第1節 東調査地 (NG96-9次調査)	17
1) 地層と遺物	17
2) 弥生時代の遺構と遺物	23
3) 古墳時代の遺構と遺物	24
4) 飛鳥時代の遺構と遺物	25
5) 平安時代の遺構と遺物	28
6) 鎌倉時代以降の遺構	32
第2節 西調査地北区 (NG96-66次調査)	34
1) 地層と遺物	34
2) 古墳～奈良時代の遺構と遺物	40

3) 平安時代の遺構と遺物	58
4) 江戸時代以降の遺構と遺物	64
第3節 西調査地南区 (NG96-40次調査)	65
1) 地層と遺物	65
2) 飛鳥時代の遺構と遺物	69
3) 平安時代の遺構と遺物	70
4) 鎌倉時代以降の遺構と遺物	76
第IV章 遺構と遺物の検討	79
第1節 長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態	79
1) はじめに	79
2) 古墳時代中～後期前葉の地形	79
3) 古墳時代後期中葉～飛鳥時代の地形	87
4) 古墳時代中期～飛鳥時代の集落の変遷	90
5) 古墳時代中期～飛鳥時代の水田遺構	96
6) 集落の系統と特性	102
7) 土地利用形態の変遷と政治的背景について	105
第2節 動物遺体の調査結果と検討	107
1) 資料の概要	107
2) 資料の記載	107
3) 小結	111
4) SP6001出土牛骨に関する若干の考察	111
第V章 まとめ	121
第1節 長原遺跡東北地区の基本層序と縄文～飛鳥時代	121
1) 長原遺跡東北地区の基本層序について	121
2) 縄文時代	121
3) 弥生時代	122
4) 古墳～飛鳥時代	122
第2節 奈良時代以降の長原遺跡東北地区	123
1) 奈良時代	123
2) 平安時代以降	123
引用・参考文献	128
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

原色図版目次

- | | |
|---|--|
| 1 縄文・弥生時代の遺物
上：石庖丁・弥生土器・縄文土器
下：弥生土器 | 2 古墳・平安時代の遺物
上：RK7A層出土の須恵器
下：RK4B層出土の陶磁器 |
|---|--|

図版目次

- | | |
|---|--|
| 1 層序(1)
上：東調査地 東壁(RK2・3・4B層)
下：西調査地南区 東壁(RK4C・6・7Aiii・iv層) | 下：同上 近景(SB603など；上から) |
| 2 層序(2)
上：西調査地北区 東壁(RK7Aiv・vi層)
下：西調査地北区 東壁(RK7Aiv・vi層) | 13 西調査地北区 古墳～奈良時代の遺構(3)
上：SP6001牛骨出土状況(東から)
下：SP6068断面(西から) |
| 3 層序(3)
上：西調査地南区 東壁(RK7Aiii・iv・vi層)
下：東調査地 北壁(RK11i層) | 14 西調査地北区 古墳～奈良時代の遺構(4)
上：SD602遺物出土状況(西から)
下：SX608遺物出土状況(東から) |
| 4 層序(4)
上：東調査地 東壁(RK7B～11i層)
下：西調査地北区 東壁(RK7Aiv～9A層) | 15 西調査地北区 平安時代の遺構
上：NR4B01内地割れ断面(南から)
下：NR4B01断面(北西から) |
| 5 東調査地 弥生・古墳時代の遺構
上：RK8C'層上面検出水田(北から)
下：RK7Bi層上面検出踏込み群(南から) | 16 西調査地南区 飛鳥時代の遺構
上：RK5層基底面検出SD601・602検出状況(南から)
下：SD601・602(北から) |
| 6 東調査地 飛鳥時代の遺構(1)
上：RK4Biv層基底面掘立柱建物など検出状況(南から)
下：同上完掘状況(南から) | 17 西調査地南区 平安時代の遺構(1)
上：RK4Cvi層基底面検出SP4C27遺物出土状況(西から)
下：RK4Cvi層基底面検出SP4C28遺物出土状況(西から) |
| 7 東調査地 飛鳥時代の遺構(2)
上：SB602検出状況(南西から)
下：SB603柱穴遺物出土状況(南東から) | 18 西調査地南区 平安時代の遺構(2)
上：RK4Cv層下面検出遺構 全景(南から)
下：RK4Cv層下面検出SP4C16遺物出土状況(北から) |
| 8 東調査地 平安時代の遺構(1)
上：RK4Biii層基底面検出遺構 全景(北から)
下：SB4B01など(南から) | 19 西調査地南区 平安時代の遺構(3)
上：RK4Cv層下面検出SP4C18遺物出土状況(北から)
下：RK4Cii層下面検出遺構 全景(北から) |
| 9 東調査地 平安時代の遺構(2)
上：SE4B01遺物出土状況(西から)
下：RK4Bii層基底面検出土器埋納遺構SP4B30(北から) | 20 東調査地 各層出土の遺物(1)
2層 3ii層 4Biii層 4Biv層 4B②層
4C層 4B～4C層 |
| 10 東調査地 鎌倉時代以降の遺構
上：RK4Bii層下面検出遺構 全景(北から)
下：RK3iv層下面検出遺構 全景(南西から) | 21 東調査地 各層出土の遺物(2)
7Aiv層 7Bi層上面付近7Aiv層
8C'層畦畔内 9層 |
| 11 西調査地北区 古墳～奈良時代の遺構(1)
上：RK5-6層内検出遺構 全景(北から)
下：同上 近景(北から) | 22 東調査地 飛鳥・平安時代遺構出土の遺物
SX610 SX605 SB603 SE4B01
SB4B01 SP4B21 SX4B09 |
| 12 西調査地北区 古墳～奈良時代の遺構(2)
上：RK5-6層内検出遺構 近景(SB601など；上から) | 23 東調査地 平安時代の遺物、西調査地 飛鳥時代の遺物
土器埋納遺構SP4B30 SX4B01 4C層 |

- 4Biii層 SD4B03 5層下部 SX301
- 24 西調査地北区 各層出土の遺物(1)
2～3層 2iv層 SD207 SD208
4C層上部 4C層下部 5層 3～5層
- 25 西調査地北区 各層出土の遺物(2)
5層 5-6層
- 26 西調査地北区 各層出土の遺物(3)
5-6層 7Aiv層 7Avi層
- 27 西調査地北区 各層出土の遺物：飛鳥時代遺構出土の遺物
8A層 8C層 9B層 SX602
- 28 西調査地北区 飛鳥時代遺構出土の遺物
SD602 SD603
- 29 西調査地北区 飛鳥・平安時代遺構出土の遺物
SX601 SX608 NR4B01上層
NR4B01中層
- 30 西調査地北区 平安時代遺構出土の遺物
NR4B01下層 SD4C01 SD4B01
- 31 西調査地北区 土錘・製塩土器
上：SD4C01 NR4B01 4B層 SX613
SX631 5-6層 7Avi層
下：7Avi層
- 32 西調査地北区 製塩土器
上：SX601 SD603 SX604 SD604
5-6層内溝群
下：4C層下部 5-6層
- 33 西調査地南区 各層出土の遺物
3層下部 4Cv層 4Cvi層 4Cvii層
4Ci～vii層 4Cv・vi層 4Cv～vii層
4Cvi～vii層
- 34 西調査地南区 各層出土の遺物・飛鳥時代遺構出土の遺物
4Cvi～5層 5層 6層 SD601
- 35 西調査地南区 飛鳥・平安時代遺構出土の遺物
SD601 SD602 SD4C10
- 36 西調査地南区 平安時代遺構出土の遺物
SD4C10 SP4C18 SP4C27 SP4C28
SD4C06
- 37 遺物細部
- 38 縄文・弥生時代の遺物
上：縄文土器・弥生土器・石庖丁(東調査地)
8C'層基底 9層 11i層
下：弥生土器(東調査地・西調査地北区)
- 39 古墳・飛鳥時代の遺物
上：須恵器(東調査地・西調査地北区)
下：須恵器(西調査地南区)
- 40 飛鳥時代の遺物
上：土師器(西調査地北区)
下：土師器(西調査地北・南区)
- 41 平安時代の遺物
上：土師器・黒色土器(西調査地北・南区)
下：土師器(西調査地北・南区)
- 42 西調査地北区出土の動物遺体(1)
上：SP6001 ウシ前肢骨
下：SP6001 ウシ後肢骨
- 43 西調査地北区出土の動物遺体(2)
上：SP6001 ウシ手関節・足関節周辺の部位
下：各層出土のウマ・ウシ遺体

挿 図 目 次

- 図1 長原遺跡の地区割と周辺遺跡 …………… 1
- 図2 長吉東部区画整理事業施工予定地域と既往の調査
…………… 2
- 図3 東調査地トレンチ配置図 …………… 3
- 図4 西調査地トレンチ配置図 …………… 3
- 図5 長原遺跡周辺の地形分類図 …………… 4
- 図6 長原遺跡東北地区のパネルダイアグラム … 折込
- 図7 東調査地東壁地層断面図 …………… 折込
- 図8 東調査地各層出土の遺物(その1) …………… 20
- 図9 東調査地各層出土の遺物(その2) …………… 22
- 図10 東調査地SD8C01平・断面図 …………… 23
- 図11 東調査地遺構配置図(弥生時代) …………… 23
- 図12 8C'層上面検出水田平面図 …………… 24
- 図13 水田関連の遺物実測図 …………… 24
- 図14 東調査地遺構配置図(古墳時代) …………… 24
- 図15 踏込み群付近7Aiv層出土遺物実測図 …… 25
- 図16 東調査地遺構配置図(飛鳥時代) …………… 25
- 図17 SB601平・断面図 …………… 26
- 図18 SB602平・断面図 …………… 26
- 図19 SB603平・断面図 …………… 26
- 図20 SB601・603出土遺物実測図 …………… 26
- 図21 SK605・610平・断面図 …………… 27
- 図22 飛鳥時代土壌・溝・その他の遺構出土の遺物
実測図 …………… 27
- 図23 東調査地遺構配置図(4C層段階) …………… 28
- 図24 東調査地遺構配置図(4B層段階) …………… 28

図25	SB4B01平・断面図	29	図62	SX4C02出土遺物実測図	59
図26	SB4B01出土遺物実測図	29	図63	西調査地北区遺構配置図(平安時代)	60
図27	SE4B01平・断面図	30	図64	SX4B01平・断面図	60
図28	SE4B01出土遺物実測図	30	図65	SD4C01・4B01平・断面図	61
図29	平安時代ピット・その他の遺構出土の遺物実測図	31	図66	SD4C01・SD4B01・SX4B01出土遺物実測図	61
図30	SX4B09平・断面図	31	図67	NR4B01断面図	61
図31	SX4B09出土遺物実測図	31	図68	NR4B01内地割れ断面図	62
図32	土器埋納遺構SP4B30平・断面図	32	図69	NR4B01出土遺物実測図	62
図33	土器埋納遺構SP4B30出土遺物実測図	32	図70	西調査地北区遺構配置図(江戸時代以降)	63
図34	東調査地遺構配置図(鎌倉時代以降)	33	図71	2層下面検出溝群出土遺物実測図	64
図35	西調査地北区東壁地層断面図	折込	図72	西調査地南区東壁地層断面図	折込
図36	西調査地北区各層出土の遺物(その1)	36	図73	西調査地南区各層出土の遺物	67
図37	西調査地北区5-6層出土の遺物	38	図74	西調査地南区遺構配置図(飛鳥時代)	68
図38	西調査地北区各層出土の遺物(その2)	39	図75	SD601出土遺物実測図	69
図39	7Aⅴ層中製塩土器出土状況平面図・垂直分布図	41	図76	SD601・602出土遺物実測図	70
図40	7Aⅴ層中出土製塩土器実測図	42	図77	西調査地南区遺構配置図(平安時代)	71
図41	SK7A01・02平・断面図	42	図78	飛鳥～平安時代溝断面図	72
図42	SK7A03断面図	42	図79	SD4C10・4C11出土遺物実測図	73
図43	西調査地北区遺構配置図(古墳～奈良時代)	43	図80	SD4C06・SP4C18出土遺物実測図	74
図44	SB601平・断面図	44	図81	SP4C27・4C28平・断面図	75
図45	SB602平・断面図	44	図82	SP4C16・4C18平・断面図	75
図46	SB603平・断面図	45	図83	SP4C27・4C28出土遺物実測図	76
図47	掘立柱建物・ピット出土の遺物実測図	45	図84	SX301断面図	76
図48	SP6001平・断面図	46	図85	SX301出土遺物実測図	76
図49	溝・ピット断面図	48	図86	噴砂断面図	77
図50	SD602遺物出土状況平面図	48	図87	西調査地南区遺構配置図(鎌倉時代以降)	77
図51	溝・その他の遺構出土遺物実測図	49	図88	長原遺跡と周辺遺跡における主要な調査	80
図52	SD602出土遺物実測図	50	図89	古墳時代中～後期前葉の地形復元図	82
図53	SX608遺物出土状況平面図	52	図90	出戸自然堤防地質柱状図	83
図54	その他の遺構出土遺物実測図	53	図91	亀井自然堤防(弥生時代)地質柱状図	84
図55	5-6層内溝群平面図	55	図92	六反・亀井・久宝寺自然堤防地質柱状図	85
図56	5-6層内溝群出土遺物実測図	55	図93	古墳時代後期中葉～飛鳥時代の地形復元図	88
図57	5-6層高まり内出土遺物実測図	56	図94	長原遺跡台地部における水田開発と集落	97
図58	古墳～奈良時代遊離資料実測図	57	図95	長原遺跡南・東南部における水田開発	99
図59	土錘実測図	58	図96	骨の設置順序	112
図60	製塩土器実測図	58	図97	骨格中に占める出土部位の位置	113
図61	SX4C01・4C02平・断面図	59	図98	東調査地遺構配置図(平安時代)	125
			図99	西調査地遺構配置図(平安時代Ⅲ・Ⅳ期)	125

表 目 次

表 1	長原遺跡東北地区におけるおもな調査	2	表 6	古墳～飛鳥時代の集落	91
表 2	平成 8 年度実施発掘調査の期間など	6	表 7	動物遺体一覧表	107
表 3	長原遺跡東北地区の基本層序	8-9	表 8	SP6001出土牛骨計測値一覧表	110
表 4	5-6層内検出遺構の時期	54	表 9	平安時代以降の遺構	124
表 5	長原遺跡と周辺遺跡における主要な調査一覧	81			

写 真 目 次

写真 1	東調査地7Aiv層下面のグループキャスト	18	写真 7	西調査地北区SX4C02遺物出土状況	59
写真 2	東調査地10C層内噴砂	18	写真 8	西調査地南区 5 層内遺物出土状況	65
写真 3	東調査地SB4B01根石出土状況	29	写真 9	西調査地南区 5 層内遺物出土状況	65
写真 4	東調査地SE4B01曲物出土状況	30	写真 10	SP6001牛骨出土状況(左：南から、中：東から、 右：北から)	112
写真 5	西調査地北区7Aiv層内製塩土器出土状況	40	写真 11	NG89-63次調査牛頭蓋出土状況	118
写真 6	西調査地北区 5 層下面の高まり	55			

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 経緯と調査地の位置

1)発掘調査にいたる経緯

長原遺跡東北地区(図1)にあたる地域を対象とする長吉東部地区土地区画整理事業の施行(図2)にあたり、埋蔵文化財の取扱いについて、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所と略称する)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下、文化財保護課と略称する)、財団法人大阪市文化財協会の3者は平成7年9月に事前協議を行い、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」

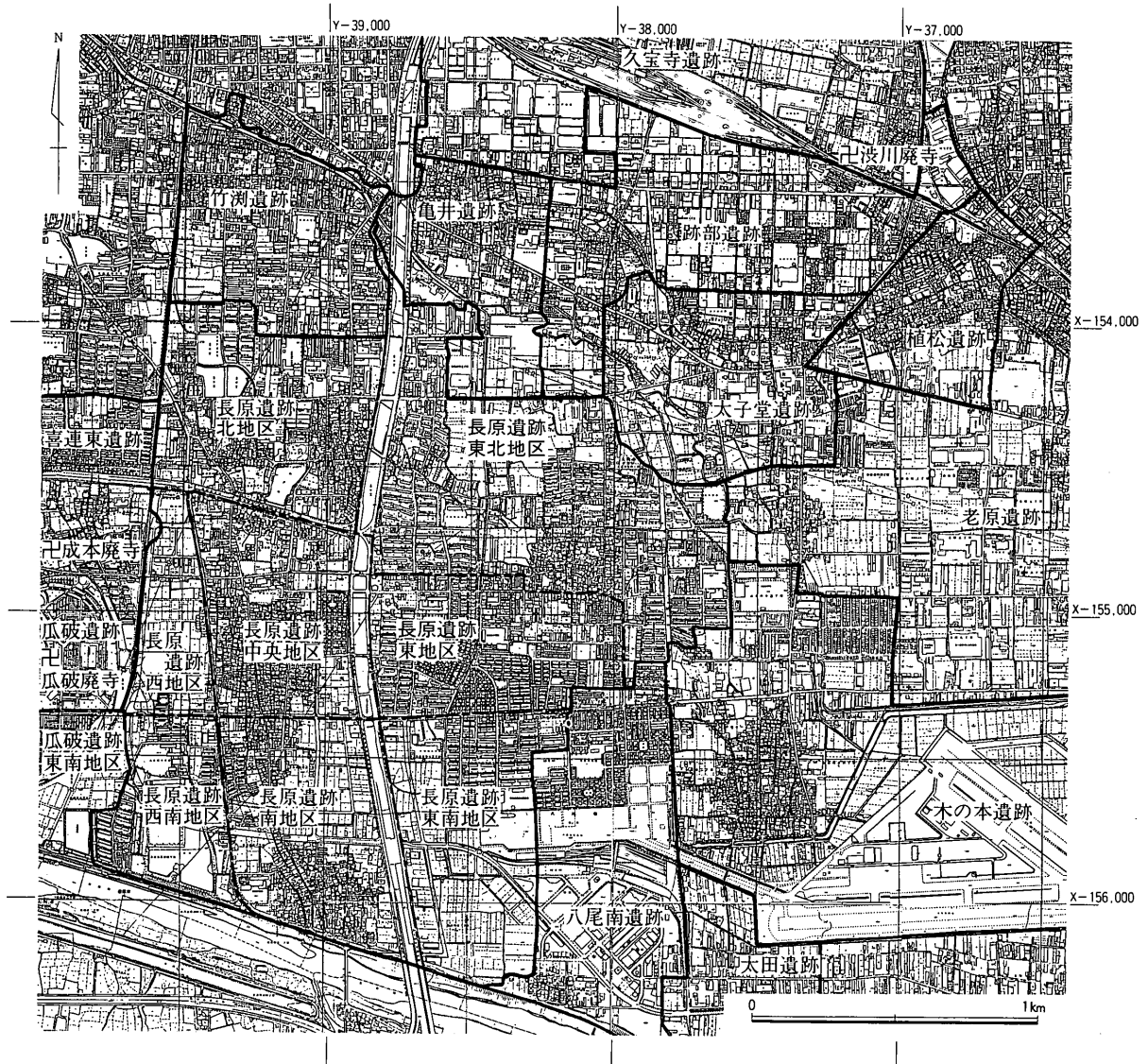


図1 長原遺跡の地区割と周辺遺跡

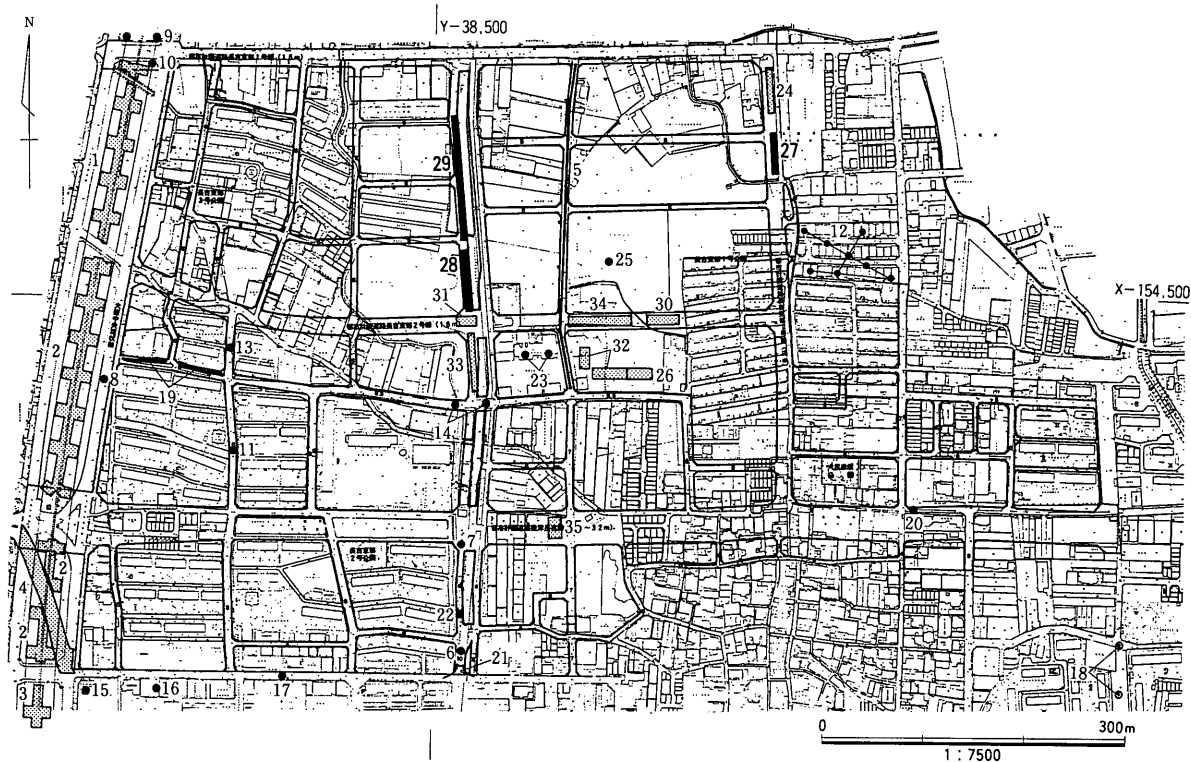


図2 長吉東部区画整理事業施工予定地域と既往の調査(番号は表1に対応する)

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査

番号	調査	おもな内容	文献
1	城山B・C区	弥生中期方形周溝墓、古墳、飛鳥自然流路	大阪文化財センター 1986a
2	城山D・E・F区	弥生中・後期集落、古墳中期水田・土壇、飛鳥～平安溝、中世水田	大阪文化財センター 1986a
3	城山G区	弥生土壇群、飛鳥～中世水田	大阪文化財センター 1986a
4	NG 1	弥生中期溝・土壇墓、古墳中期溝、飛鳥大溝	大阪市文化財協会 1978
5	NG12	飛鳥杭列・流路・土器溜まり、平安土壇	大阪市文化財協会 1979a
6	NG16	弥生～古墳中期遺物、弥生溝、古墳前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会 1979b
7	NG80-1	TP7.2mで奈良溝、TP6.9mで砂層(NG 8層)	大阪市文化財協会 1980a
8	NG80-2	弥生・古墳遺物	大阪市文化財協会 1980b
9	NG23	弥生中期遺物、古墳	大阪市文化財協会 1980c
10	NG25	縄文晩期・弥生中期遺物	大阪市文化財協会 1980c
11	NG83-1	弥生中期住居?、古墳中期住居	大阪市文化財協会 1983b
12	NG83-5	TP約8mで砂層	大阪市文化財協会 1983f
13	NG83-22	TP7.6mで奈良時代の包含層	大阪市文化財協会 1983c
14	NG83-43	TP7.8mで砂層	大阪市文化財協会 1983g
15	NG83-54	TP8.1mで砂層(NG 5層か)	大阪市文化財協会 1983h
16	NG83-63	縄文～奈良遺物、弥生中期土壇	大阪市文化財協会 1983d
17	NG83-65	弥生中期遺物、古墳中期土壇状遺構	大阪市文化財協会 1983e
18	NG84-4	古墳中期溝・土壇、飛鳥水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会 1984a
19	NG84-18	TP8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会 1984e
20	NG84-49	TP7.7mで砂層	大阪市文化財協会 1984f
21	NG84-86	弥生後期～古墳中期の遺物、庄内期の井戸・建物、古墳中期の土壇	大阪市文化財協会 1984d
22	NG85-17	縄文晩期の遺物	大阪市文化財協会 1985b
23	NG88-6	TP7.8mで砂層(飛鳥初頭の須恵器が出土)、飛鳥包含層、奈良溝	大阪市文化財協会 1988
24	NG95-57	TP8.2mで砂層(古墳後期中葉の須恵器が出土)、古墳後期の柵、平安の集落	大阪市文化財協会 1998
25	NG95-77	TP8.0mで砂層(古墳後期前葉の須恵器が出土)、古墳後期の柵	大阪市文化財協会 1995g
26	NG96-79	旧石器遺物、TP7.5mで砂層、飛鳥・平安の井戸・溝	大阪市文化財協会 1995h
27	東調査地	弥生後期の水田、TP8.2mで砂層、飛鳥・平安の集落	本書収録
28	西調査地南区	TP7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安の溝	本書収録
29	西調査地北区	弥生中期～庄内期の遺物、TP7.8mで砂層、古墳後期～奈良の集落	本書収録
30	NG97-12	1997年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会 1997d
31	NG97-13	1997年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会 1997e
32	NG97-41	1997年度調査	大阪市文化財協会 1997g
33	NG97-43	1997年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会 1997h
34	NG97-52	1997年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会 1997i
35	NG97-56	1997年度東部地区区画整理事業関係調査	大阪市文化財協会 1997j

を締結した。発掘調査を実施するにあたっては、本事業における埋蔵文化財の取扱い全般を協定書で、各年度における具体的内容は年度ごとの契約書で定めることとした。

第1回目の発掘調査(NG95-57次)は、都市計画道路長吉1号線北半部(図2・3)を対象にして1995年10月から1996年3月に実施された。この調査では、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物や古墳時代後期の流路・柵(しがらみ)とされた土手状遺構などが出土し、その成果は1996年度に整理作業を実施したのち、1997年度に『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Iとして刊行された。

つづく1996年度の発掘調査は、前年度実施した調査地の南側42m部分を対象として、前回と同様に幅8.8m、深さ8mまでの調査を実施することになった(NG96-9次; 図3)。調査は5月に開始したが、前年度の調査では近隣住宅への振動・騒音・粉塵などの影響があったことから、区画整理事務所と当協会と事前に協議し、調査区を住宅から十分に離して設定すること、重機の使用方法などについても留意することを打ち合わせた。

また、この年度には、大正川の西側に沿う都市計画道路長吉3号線予定地内での調査を実施することになったが、発掘調査すべき深度を判断するために文化財保護課と区画整理事務所の立会のもと、5月に2箇所の試掘坑を掘削して地層の確認を行った。この結果、1995年度の調査で検出された古墳時代後期の厚い洪水堆積層と同様の地層を確認し、現地表下4mでその下の遺構面が検出されることが判明したため、3号線予定地内での調査(図2・4)は現地表下4mまで行うこととなった。また、トレンチ幅は工事車両の通行を確保するため6mとした。この協議結果をうけて、長吉2号線との交差点の北側にあたる南北60m分の調査(NG96-40次)を8月に開始し、さらに11月には、その北側敷地内での南北120m分の調査(NG96-66次)を開始することになった。

(京嶋)

2) 遺跡の立地と調査地の位置

長原遺跡は瓜破台地と呼ばれる、河内台地から北に張出した台地の大和川以北の部分の北東の縁辺部と、その北から東にかけて展開する沖積平野にまたがって立地する(図5)。長原遺跡の地山層である段丘構成層は、南西から北東に向って分布高度を減じており、遺跡の西・西南・中央などの各地区(図3)では地山の埋没深度は比較的浅いが、東地区や東北地区では分厚い沖積層の下に潜込んでい

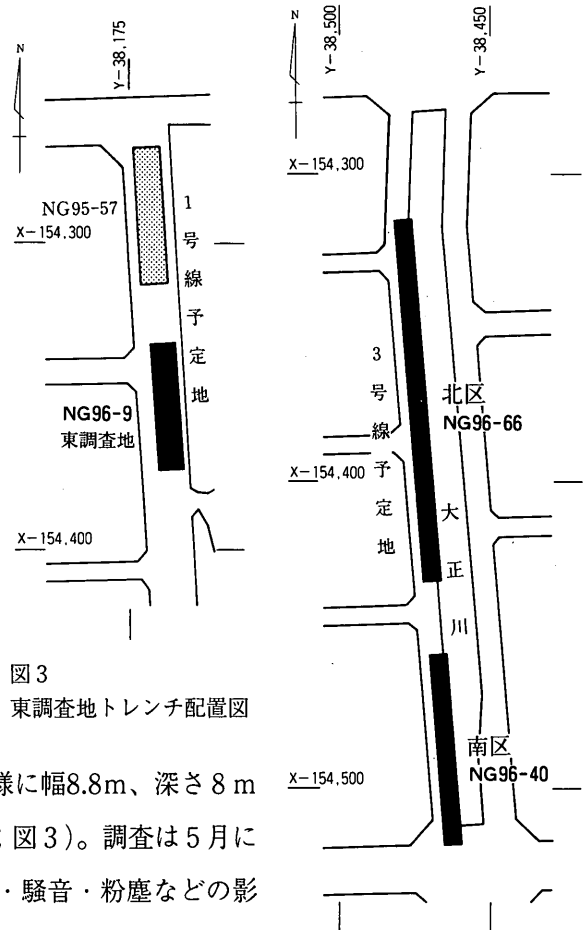


図3 東調査地トレンチ配置図

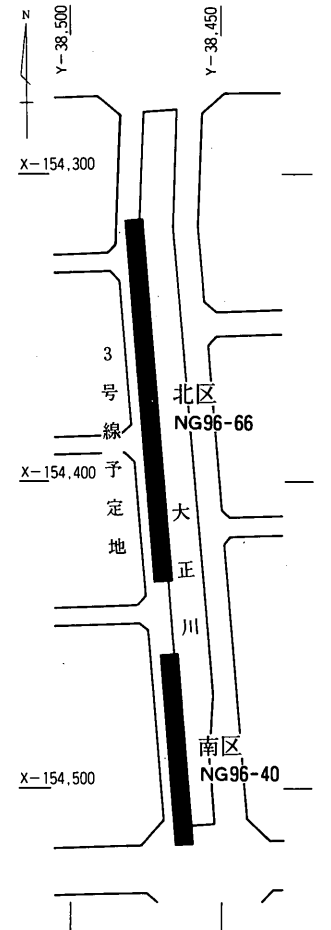


図4 西調査地トレンチ配置図

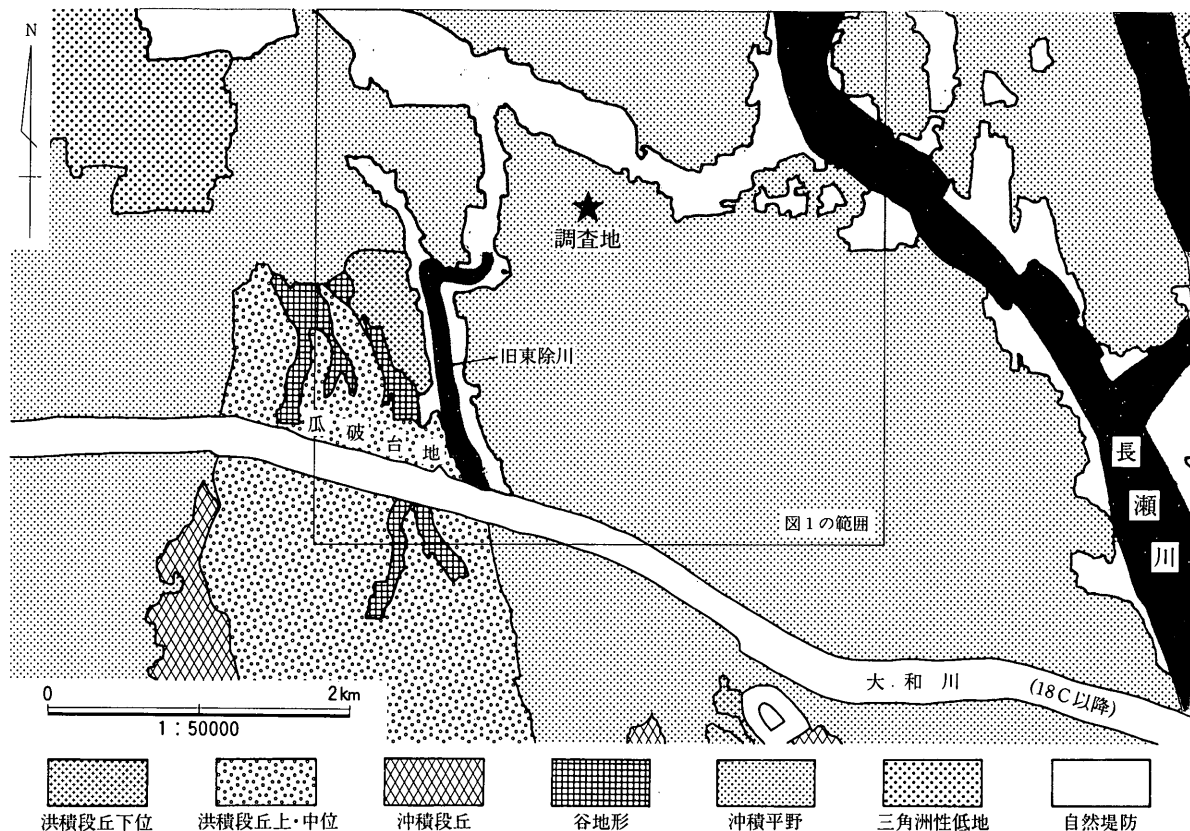


図5 長原遺跡周辺の地形分類図

る。一方、沖積平野には幾筋もの自然堤防がみられる。瓜破台地の東方約4 kmには長瀬川の河道が北西に流れ、その周囲には自然堤防が形成されている。長原遺跡の北側にも南南東から北北西方向に延びる自然堤防が存在する。これは縄文時代以降の平野川に由来するものと考えられ、八尾市の植松町付近で長瀬川から西南西方向へ分岐、蛇行したのち北北西に向っている。分岐点付近の八尾市植松町、春日町などで行われた調査では、分厚い洪水堆積層の上で弥生時代後期の包含層が発見されており、自然堤防の形成がこれ以前の時代であったことを示している。一方、長原遺跡の北に接する八尾市域には、ほぼこの自然堤防上にのるかたちで、西から竹渕・亀井・跡部・太子堂・植松の諸遺跡が展開し(図1)、さらにその北側には久宝寺遺跡、JR久宝寺駅東方には渋川廃寺遺跡が立地している。長原遺跡東側の沖積平野には、同じく八尾市域の木の本・八尾南遺跡が存在する。

瓜破台地の東縁でほぼ南北に延びる自然堤防は旧東除川によって形成されたもので、近世以降に下る。また、長原遺跡の西側の台地上には、瓜破遺跡、その北側に喜連東遺跡が立地している。

区画整理事業施工予定地域は長原遺跡東北地区(図1・5)内にあり、地形的には沖積平野内にあたる。NG96-9次調査地は地区の東北部にあたり、昨年度事業として調査を行ったNG95-57次調査地からは約20mの間隙をおいて南に位置する(図3)。NG96-40・66次調査地はここから約300m東側の地点にあたり、北側の調査区がNG96-66次、南側がNG96-40次である(図4)。以後煩雑さを避けるため、1号線調査地を東調査地(NG96-9次)とし、3号線調査地を西調査地北区(NG96-66次)、同南区(NG96-40次)とする。

区画整理事業施工予定地域内と近隣の地域では、1988年度までに当協会によって20件の発掘調査

が行われた(図2、表1)。これらの調査は、いずれも下水道工事や個人による宅地造成を原因とし、比較的小規模なものであった。88年度時点でのこの地区に対する認識を要約すると以下になるであろう。地区内の東南部では、NG16・83-1・84-86次などの調査で古墳時代中期の遺構・遺物が発見されており、かつ、初期須恵器・韓式系土器が多く出土することが知られていた。同じ地域では弥生時代中期から古墳時代前期初頭の遺構・遺物も発見されており(NG83-63・65・84-86次調査など)、このことから弥生時代中期から古墳時代中期中葉の集落の存在が想定されていた。地区内の北部では、NG12次調査で飛鳥時代の土器が多量に出土し、NG88-6次調査では同時期の遺物や金環が出土したことから、飛鳥時代の集落が存在すると考えられていた。また、この2つの調査やNG83-5・84-49次調査で分厚い洪水層が存在することは確認されていたが、小規模な調査のために層中から遺物が発見されず、砂層下位の地層も調査できていなかったことからその年代については不明であった。段丘相当層についてはこれを検出した例がなかった。また、西に接した近畿自動車道の建設の際には、大阪文化財センターによる調査が1983から1985年の間に行われている。当協会の調査結果と同様に弥生時代中・後期・古墳時代中期の集落址が検出され、加えて弥生時代の方形周溝墓や古墳時代中期の水田址・方墳群なども発見された。なお、調査地は地山の地形が尾根状に北に張出す部分に立地しているために東北地区のほかの地点よりも標高が高く、顕著な砂礫層の堆積は見られなかった。95年度以降は区画整理事業や市営住宅建設に先立つ調査が開始され、段丘面の検出を想定した本格的な調査が増えてきている。NG95-57(昨年度報告分)・77・79次調査ではともに段丘構成層の検出に成功した。NG95-77次調査では、縄文海進時の海岸線が当地区にまで達していることが判明した。また、上下2層の分厚い砂層が堆積していることが確認され、下位の砂層はNG10・11層に相当し、上位の砂層は古墳時代後期に属し、長原遺跡の総合層序に直接対比できない層準であることが判明した。1988年度以前に部分的に存在が知られていた砂層は、このうちの上位のものに相当することがわかった。また、NG96-79次調査では存在が想定されていた飛鳥時代の遺構が実際に発見され、NG95-57次調査では、平安時代の建物なども検出されている。これら周辺における調査のおもな成果は表1にまとめた。

第2節 発掘調査の経過と概要

1) 東調査地(NG96－9次)

本路線は本来幅員16mの計画道路であるが、昨年度の調査成果から段丘層が地表下約8mに埋没すると予想され、シートパイルによる土留め工事を行う必要があった。そのため工事車両の通行を確保して東西の両側に十分な控えをとり、表2の規模のトレンチを設定した。実際に調査を行った期間は1996年5月23日～同年9月4日で、その前に土留めなどの準備工を、調査終了後に埋戻しおよび撤収を行っているので、調査関連の全作業期間は表2のとおりになる。調査が進行し、掘削深度が下がるのに応じて、支保工として2段の切梁を架設した。掘削は、RK(六反の略号；次章参照)2層以上と調査区南半分のRK3層、RK7A層(洪水堆積層)、RK11i層(洪水堆積層)を重機を用いて行い、その他は人力によって行った。しかし、土留め・支保工の設計による限界掘削深度である地表下8mに達しても段丘層が検出されなかったため、地表下8m以下の観察は検土杖を用いて行った。また、シートパイル下から地下水が浸入し始めたため、RK12層以下の平面的発掘調査は断念し、地層断面のみの観察にとどめた。

2) 西調査地(NG96－40・66次)

本路線も本来幅員16mの計画道路であるが、東調査地と同様に両側に十分な控えをとり、表2の規模のトレンチを設定した。実際に調査を行った期間は、北区が1996年11月5日～1997年3月7日、南区が1996年8月5日～同年12月2日で、両区ともに準備工・埋戻しなどを含めた全調査期間は表2のとおりである。本調査地の限界掘削深度は地表下4mであるため、支保工として1段の切梁を架設した。北区の掘削は、RK2層以上を重機を用いて行い、その他は人力で行った。南区では、RK3層以上とRK7A層(洪水堆積層)を重機で掘削し、その他は人力によって行った。限界掘削深度付近の地層については、工事業者と協議の上、安全に十分留意しながら若干のトレンチなどを設け、最大限に情報の収集に努めた。

(高橋)

表2 平成8年度実施発掘調査の期間など

計画道路名	調査次数	調査地番	幅×長さ	面積	調査期間	担当者
長吉東部1号線	NG96－9	平野区長吉六反1丁目3	8.8m×42m	370m ²	1996年4月23日～1996年10月17日	高橋 工
長吉東部3号線	NG96－40	平野区長吉出戸7丁目12	6 m×60m	372m ²	1996年8月5日～1996年12月2日	絹川一徳
	NG96－66	平野区長吉出戸7丁目12	6 m×120m	726m ²	1996年11月5日～1997年3月31日	高橋 工
調査面積合計	1,468m ²					

第Ⅱ章 長原遺跡東北地区の基本層序

第1節 基本層序

長原遺跡では[大阪市文化財協会1983a]以来、遺跡東南地区を模式地とした基本層序が数次の改訂を経て、長原遺跡の標準層序[大阪市文化財協会1992b・1995aなど]として確立されてきている。一方、東北地区での発掘調査を進めてゆくうちに、特に古墳から平安時代にかけての層序に、長原遺跡の基本層序と大きく異なる部分が存在することが判明してきた。この相違は長原遺跡が立地する地形環境に、大きく分けて台地およびその周辺地と沖積層の厚い沖積平野の2者があり、当該地区が後者に、いままで調査が行われてきた地域がおもに前者に属することに起因するものである。このほかの部分は長原遺跡の層序とおおむね一致し、対比は比較的容易であった。当該地区の地質的・地形的な特質は、長原遺跡の層序との比較の中で、同じ点・異なる点を明確にすることによってより正確に理解できるものと考えられる。また、今後この地区で継続される調査において地層の対比を容易にするためにも、長原遺跡東北地区における基本層序(表3、図6、図版1～4)を提唱する。地層にはこの地域の通称である「六反」を略したRKの記号を冠することにするが、以下本書中では基本的に省略し、特に長原遺跡南部の基本層序との区別が必要なばあいにはのみRKの略号を用いる。

1) 沖積層上部層Ⅰ

0層：現代の盛土である。

1層：現代の作土である。層厚は10～20cmであった。

2層：おもに砂混りシルトで構成される作土層で最大4層に細分することが可能であった。西調査地北区北部を模式地とする。断面観察によると各層下面で耕作に係わる小溝が検出された。

3層：シルト～細粒砂で構成される作土層で、最大4層に細分することができた。NG95-57次調査地・東調査地を模式地とする。各層下面で耕作に係わる小溝や島畠溝が検出された。

4A層：黄褐色礫混り細粒砂で、斜行葉理の顕著な水成層である。自然流路を卓越し、側方へシルト質細粒砂に移化していた。NG97-12次調査地などを模式地とする。層厚は15～20cmであった。

4B層：粘土質シルト～細粒砂で構成される作土層で、最大4層に細分することが可能であり、部分的に暗色を帯びる個所があった。東調査地を模式地とする。同調査地では耕起されていない集落地内での堆積状況もみられた。岩相は、黄褐～暗灰黄色シルト～中粒砂で、暗色帯を形成し、層厚は最大で55cmであった。この地点では層内で井戸・溝などが検出された。

4C層：おもに砂混りシルトで構成される作土層で、西調査地南区を模式地とし、7層に細分することが可能であった。模式地の4Civ層はおもに砂によって構成され、その堆積において河川の影

表3 長原遺跡東北地区の基本層序

層 序	層序 概念図	主 た る 岩 相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	模式地	NG層序 との対比	時 代	
RK0層		現代客土						近代・現代	
RK1層		現代作土	10-20				1		
RK2層	i	オリーブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト	≦15		↓小溝群	NG96-66北部	2	江戸	
	ii	灰～オリーブ灰色細粒砂混りシルト	≦15						
	iii	オリーブ灰色細粒砂混りシルト	≦15						
	iv	灰色粘土質シルト	≦10		↓小溝群・畝間				
RK3層	i	灰オリーブ色粗粒砂混りシルト	≦20			NG95-57 NG96-9	3		
	ii	黄褐色粘土質シルト	≦10		↓島島溝				
	iii	灰オリーブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂	5-15						
	iv	オリーブ色シルト質極細粒砂	≦20		↓小溝				
RK4A層		黄褐色シルト質極細粒砂～礫混り粗粒砂	15-20		↓自然流路	NG96-79 NG97-12 NG97-52	4A	室町～鎌倉	
RK4B層	i	オリーブ褐色粘土質シルト	≦15		↓不整形落込み	NG96-9	4B		
	ii	オリーブ褐色シルト	≦10		↓土器埋納遺構				
	iii	黄褐色～暗灰黄色シルト～中粒砂	10		▽井戸新 平安Ⅲ新 ～平安Ⅳ新				
	iv	オリーブ褐色中粒砂混りシルト	10		瓦器 (C-Ⅱ期) 平安Ⅳ期 (96-9次) 瓦器 (C-Ⅱ期) 平安Ⅳ期 (96-9次)				
RK4C層	i	オリーブ褐色中粒砂混りシルト	8		平安Ⅲ期 (96-40次)	NG96-40	4C	平安	
	ii	黄褐色中粒砂混りシルト	≦8		↓溝				
	iii	灰オリーブ色中粒砂混りシルト	6-10						
	iv	にぶい黄褐色中粒砂混りシルト	8-12		↓溝				
	v	暗灰黄褐色シルト	≦14		↓溝				
	vi	灰黄褐色細粒砂混りシルト	10		↓土器埋納遺構				
	vii	暗灰黄色中～細粒砂混りシルト	5-20		↓溝				
RK5層		暗灰黄色シルト質細粒砂	≦15		↓鉄跡	NG96-66	5A・B～6A	奈良	
RK6A層		暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂	10		▽溝・掘立柱建物 TK43～平城Ⅵ	NG96-79	6B～7A	飛鳥	
RK6B層		灰色シルト	10		↓溝・土壙・井戸				
RK6C層		暗灰色粘土質シルト	10		↓溝				
RK7A層	i	オリーブ褐色シルト～細粒砂	≦40		飛鳥Ⅱ (97-43次)	NG97-43	7Bi	古墳後期	
	ii	灰色砂礫	≦70		TK209 (97-43次)				
	iii	黄褐色細～粗粒砂	≦180		TK10新相 (97-13次)				
	iv	暗オリーブ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫	≦250		TK10 (95-57次など)				
	v	黒色シルト～粘土質シルト	30		TK23・47 (97-41次)				
	vi	灰黄色砂礫	≦210		TK23・47 (96-66次など)				
	vii	灰オリーブ色中粒砂～砂礫	≦110		初期須恵器 (97-43次)				
RK7B層	i	灰オリーブ色シルト	5-25	植物遺体を 多く含む	←踏込み	NG96-79 NG97-12 NG97-41	7Bii	古墳前期	
	ii	灰オリーブ黒色粘土質シルト		植物遺体を 多く含む	土師器 (船橋O-Ⅰ or Ⅱ ; 97-12次)				
RK8A層		暗緑灰色シルト	5-20		布留式土師器 (96-66次)	NG96-66	7Biii	弥生後期	
RK8B層		緑灰色粘土質シルト	7		布留式土師器 (96-9次)	NG96-66			
RK8C層		暗灰色シルト	≦10		←水田面	NG96-9			
RK8C層		暗緑灰色シルト	5-20		弥生V様式 (96-66次)	NG96-66			

沖積層上	RK9A層	暗オリーブ灰色シルト～極細～粗粒砂混り粘土質シルト	≤20	←土城	NG97-41	8A	弥生中期
沖積層上	RK9B層	暗灰色シルト～シルト質粘土	≤18		NG96-79 NG96-66	8B	
沖積層上	RK9C層	暗オリーブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土	≤30		NG97-12	8C	
沖積層上		オリーブ黒色シルト質粘土	20	←水田面・溝	NG97-52	9A	
沖積層上		緑灰色シルト	≤3		NG97-52		
沖積層上	RK10A層	オリーブ黒色シルト	5		NG96-79	9A	弥生前期
沖積層上	RK10B層	灰オリーブ色シルト	40				
沖積層上		暗オリーブ色粘土質シルト	≤5				
沖積層上		暗オリーブ色シルト	≤25				
沖積層上		オリーブ黒色シルト	≤25				
沖積層上		緑灰色シルト～灰色中粒砂	≤5				
沖積層上	RK10C層	黒色シルト	10				
沖積層上		緑灰色シルト	8		NG96-79	9Ci	縄文後期
沖積層上		黒色シルト	8			9Cii	
沖積層上		黒褐色シルト質極細粒砂	15			9Ciii	
沖積層上	RK11層	灰色砂礫	≤250		NG96-79 NG97-12	10・11	
沖積層上		暗オリーブ灰色粘土	≤70				
沖積層上	RK12A層	黒色シルト	5	立木石		12A	縄文中期
沖積層上		黒色シルト質細粒砂	10				
沖積層上		オリーブ黒色シルト質細～粗粒砂	12				
沖積層上	RK12B層	暗褐色細粒砂質シルト	15		NG96-79 NG97-41 NG97-52	12B	
沖積層上		緑灰色シルト～灰色細粒砂	30-120				
沖積層上		灰黄色粘土質シルト	30-40				
沖積層上	RK12C層	灰色中～細粒砂質シルト	12	生痕化石			
沖積層上		灰色極粗粒砂～黒褐色シルト	≤90	植物遺体			
沖積層上		黒色中粒砂質シルト	30	生痕化石			
沖積層上	RK12D層	オリーブ黒色シルト質細粒砂	5		NG97-52	12/13漸移層	
沖積層上		黄灰色シルト質極細粒砂	5	横大路火山灰			
沖積層上		オリーブ黒色極細粒砂質シルト	10	生痕化石			
沖積層上	RK13A層	灰オリーブ色火山灰質シルト	10-20		NG96-79 NG97-12 NG97-52	13A	
沖積層上		灰オリーブ色火山灰質シルト	5-10	阪手火山灰			
沖積層上	RK13B層	灰色砂礫質粘土	10-20		NG96-79	13B	
沖積層上		オリーブ灰色ガラス質火山灰	5	平安神宮火山灰	NG97-52		
沖積層上	RK13C層	オリーブ灰色粘土質シルト	10		NG97-52	13C	後期旧石器
沖積層上	RK14層	緑灰色砂礫混り粘土質シルト	20-40		NG97-12	14	
沖積層上	RK15A層	緑灰色シルト～シルト質粘土	100-150		NG97-12 NG97-52	15	
沖積層上	RK15B層	灰色砂礫	≥100	←ゾウ足跡化石			
沖積層上	RK16A層	緑灰色シルト質極細～細粒砂	20-30	凡例 ←は上面検出遺構 ↑は下・基底面検出遺構 ▽は層内検出遺構	NG96-79	16A	
沖積層上	RK16B層	暗灰色泥炭中粒砂質粘土	120				
沖積層上		暗灰色泥炭中粒砂質粘土	10-20		NG96-79	16B	中期旧石器
沖積層上		灰色火山灰極細粒砂質シルト	10	吾彦火山灰			
沖積層上		緑灰色粘土層	40				

響をうけているとみられた。また、西調査地北区では4C層に相当する2層準の間にごく薄い水成砂層が挟在し、将来4C層中に分厚い氾濫性堆積層が発見される可能性を示唆した。

5層：暗灰黄色シルト質細粒砂の作土層で、層厚は最大で15cmであった。暗色帯を形成し、下面は凹凸が激しく、下位層との境界が明瞭で、鋤跡が検出された。西調査地北区北部を模式地とする。

6層はおもにシルトで構成され、NG96-79次調査地を模式地とする。

6A層：暗灰黄色細粒砂質シルト層で、層厚は約10cmであった。下面で溝や土壌が検出された。

6B層：灰色シルト層で、層厚は約10cmであった。下面で溝や土壌、井戸が検出された。

6C層：暗灰色粘土質シルト層で、層厚は約10cmであった。下面で溝が検出された。

西調査地北区では、5層から6層の同時異相を示す地層が発見された。堆積物は淘汰不良の暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂で、暗色帯を形成していた。層厚は最大で70cmであった。耕起されていない集落地内での堆積状況を示している。この地層は年代的には5層から6層に平行するが、一連の堆積物として細分されないという意味で5-6層と表記する。層内で掘立柱建物・溝などが検出された。

7A層は砂礫～シルトで構成される氾濫性の堆積層である。模式地はNG95-57次調査地、東調査地、西調査地南区・北区、NG97-13・41・43・52次調査地である。一見すると層厚1.8m前後の水成層であるが、子細に観察すると層理面を見つけることができ、複数の単層で構成されていることがわかった。各層の出土遺物にも時期差を見い出すことができる。氾濫性の堆積層の時期を決定するのはむずかしい作業であるが、暫定的に8層に細分した。また、西調査地南区とその南側のNG97-13・43次調査地では、南方ほど新しい層が堆積している状況がみられた。

7Ai層：オリーブ褐色シルト～細粒砂層で層厚は最大で40cmであった。側方と上方へシルトに移化していた。NG97-43次調査地を模式地とし、同地点では上面で溝が検出された。

7Aii層：灰色砂礫層で、層厚は最大で70cmであった。NG97-43次調査地を模式地とする。

7Aiii層：黄褐色細～粗粒砂層で、層厚は最大で180cmであった。NG97-13次調査地を模式地とする。

7Aiv層：明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、層厚は最大で250cmであった。おもに上方へ細粒化していた。NG95-57次調査地、東調査地・西調査地北区を模式地とする。西調査地北区では下位層準を著しく侵食していた。NG95-57次調査地では本層中で柵が検出された。

7Av層：黒色シルト～粘土質シルト層で、層厚は約30cmであった。NG97-41次調査地を模式地とする。上面で土壌などの遺構が検出された。

7Avi層：灰黄色砂礫層で、層厚は最大で210cmであった。側方と上方へ泥に移化していた。西調査地北区を模式地とする。下位層準を著しく侵食している地点があった。

7Avii層：灰オリーブ色中粒砂～砂礫層で、層厚は最大で110cmであった。NG97-43次調査地を模式地とする。下位層準を著しく侵食している地点があった。

2) 沖積層上部層Ⅱ

7Bi層：灰オリーブ色シルト層で、層厚5～25cmであった。植物遺体を多く含み、厚さ1～2cm

の水平方向の薄層が顕著に観察された。7A層が斜行葉理の顕著な、氾濫性の地層で構成されていたのに対して、本層準は低湿地状の地形内でゆっくりと堆積した地層であろうと考えられる。地区内に広く分布し、鍵層となる地層である。上面で踏込みが検出された。

7Bii層：オリブ黒色粘土質シルト層で、層厚は約7cmであった。植物遺体を含み、水平方向のラミナが検出された。NG97-12次調査地を模式地とする。

8層は東調査地、西調査地北区北部などを模式地とする。シルトで構成され、模式地では基本的に3層に細分可能で、上・下部の層準は暗色帯を形成していた。模式地が地区内でも北に偏ることからわかるように、北方に向って細分化し、地区中部以南では一層に収斂するようである。

8A層：暗緑灰色シルト層で、層厚は5～20cmであった。暗色帯を形成していた。

8B層：緑灰色粘土質シルト層で、層厚は7cmであった。

8C'層：暗灰色シルト層で、層厚は最大で10cmであった。東調査地で検出された作土層で、下位層である8C層を耕起していた。上面で水田畦畔が検出された。

8C層：暗緑灰色シルト層で、層厚は5～20cmであった。暗色帯を形成していた。

9A層：暗オリブ灰色極細～粗粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は最大で20cmであった。西調査地北区、NG97-41次調査地を模式地とする。

9B層：暗灰色シルト～シルト質粘土層で、層厚は最大で18cmであった。暗色帯を形成し、上面で土壌などの遺構が検出された。NG96-79次調査地、西調査地北区、NG97-41次調査地を模式地とする。

9Ci層：暗オリブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土層で、層厚は最大で30cmであった。氾濫性の堆積層で、側方へシルトに移化していた。NG97-12次調査地を模式地とする。

9Cii'層：オリブ黒色シルト質粘土層で、層厚は20cmであった。作土層で、上部は耕作によって脱色し、灰色味が強いシルト質粘土層となっていた。上面で水田畦畔・溝が検出された。NG97-52次調査地を模式地とする。

9Cii層：緑灰色シルト層で、層厚は最大約3cmであった。作土層である上位層の母材層で、耕作によって破壊されている個所が多かった。NG97-52次調査地を模式地とする。

10A層：オリブ黒色シルト層で、層厚は約5cmであった。暗色帯を形成していた。NG96-79次調査地を模式地とする。

10B層は粘土質シルト～中粒砂層で構成され、5層に細分することができた。NG96-79次調査地を模式地とする。

10Bi層：灰オリブ色シルト層で層厚は約40cmであった。下部に粗粒砂がみられる部分があった。

10Bii層：暗オリブ色粘土質シルト層で、層厚は最大で5cmであった。

10Biii層：暗オリブ色シルト層で、層厚は最大で25cmであった。

10Biv層：オリブ黒色シルト層で、層厚は最大で25cmであった。やや暗色を呈し、植物遺体を含んでいた。

10Bv層：緑灰色シルト～灰色中粒砂層で、層厚は最大で5cmであった。

10C層はシルト～シルト質極細粒砂で構成され、暗色帯を形成していた。4層に細分することができた。NG96-79次調査地を模式地とする。

10Ci層：黒色シルト層で、層厚は約10cmであった。

10Cii層：緑灰色シルト層で、層厚は約8cmであった。

10Ciii層：黒色シルト層で、層厚は約8cmであった。

10Civ層：黒褐色シルト質極細粒砂層で、層厚は約15cmであった。

11層はラミナが顕著な氾濫性の水成堆積層で、東北地区のほぼ全域に分布する。暫定的に2層に分層したが、両者が漸移的に層相変化する一連の堆積物である可能性がある。

11i層：灰色砂礫層で、層厚は最大で250cmであった。側方へ細粒化していた。

11ii層：暗オリーブ灰色粘土層で、層厚は最大で70cmであった。上方へ細粒化し、暗色化する部分があった。

3) 沖積層上部層Ⅲ

12層はNG96-79、97-41・52次調査地などを模式地とする。上半部は粗粒な堆積物を一部含みながらシルトを主体とした水成堆積と暗色化が繰返され、6層に細分可能であった。下半部は模式地で確認された埋没谷内で顕著に発達し、上下に生痕化石の顕著な層が存在した。

12Ai層：腐植質の黒色シルト層で、暗色帯を形成していた。層厚は約5cmで、12Aii層との境界は不明瞭であったが、下位層上面の浅い凹地に水成の細粒砂質シルトが薄く堆積しており、区分された。

12Aii層：黒色シルト質細粒砂層で、暗色帯を形成していた。層厚は10cmで、下限に層理面はなく、下位層とは漸移していた。

12Aiii層：水成のオリーブ黒色シルト質粗～細粒砂層で、層厚は平均12cmであった。上部で粗粒化し、下位層上面の凹地を最大厚で90cm埋積していた。

12Bi層：暗褐色細粒砂質シルト層で、微細な炭化物が散在する一部水成の暗色帯構成層であった。層厚は15cmで、下限に層理面はなく、下位層とは漸移していた。下位層上面の凹地部分では植物遺体が密集して堆積していた。

12Bii層：水成の緑灰色シルト～灰色粗粒砂層であり、側方へ細粒化していた。部分的に下位層を著しく浸食していた。層厚は平均で30cm、最大で120cmあった。

12Biii層：水成の灰黄色粘土質シルト層で、層厚は30～40cmであった。上部および下部に炭化物が集積した薄層が挟まれていた。

12Ci層：淘汰不良の灰色中～細粒砂質シルト層で、層厚は12cmであった。上位および下位層との層理面は明瞭であった。本層は埋没谷の肩付近に分布し、谷の内部へ移行するにつれて薄くなり、消滅していた。生物擾乱が顕著であり、カニの巣穴と思われる生痕化石がみられた。

12Cii層：灰色極粗粒砂～黒褐色シルト層で、層厚は最大で90cmであった。埋没谷内に顕著に発達し、上部へ細粒化し、泥質に移化していた。上半部には、木片および植物遺体を多く含み、部分的に密集して堆積していた。

12D層：淘汰不良のオリブ黒色中粒砂質シルト層で、堅果類の種子や木片などの植物遺体を多く含んでいた。埋没谷内部に分布し、層厚は30cmであった。肩部付近で約80cmと厚くなっていた。生物擾乱が激しく、カニの巣穴と思われる生痕化石が顕著に認められた(註1)。

4) 沖積層下部層

12/13層漸移帯は高所部では12層と比較的明瞭な境界をもつが、下位層とは漸移関係にあった。低所部では3層に細分が可能であったが、高所部では収斂し、層厚5～10cm程度の灰色粘土質シルトの漸移帯を構成するばあいが多かった。低所部のNG97-52次調査地では以下の3層が認められた。

12/13i層：オリブ黒色シルト質細粒砂層で、平均層厚5cmであった。

12/13ii層：黄灰色シルト質極細粒砂層で、平均層厚5cmであった。火山灰の濃集層準で、上・下位との境界は比較的明瞭であった。

12/13iii層：オリブ黒色極細粒砂質シルト層で、平均層厚10cmである。下位層との境界は明瞭で、生痕などによる堆積後の擾乱が著しい。

13A層はシルト～シルト質粘土を主体とし、高所部の広い範囲に分布する。2層に細分が可能であるが、堆積後の風化・擾乱による土壌化が著しいため、細分が困難で13A層として一括されるばあいが多い。長原遺跡の標準層序の埋没低位段丘を覆うNG13A層に対比される。NG96-79、97-12・52次調査地を模式地とする。

13Ai層：灰オリブ色シルト層で、層厚は10～20cmであった。下位層との境界は漸移的であった。

13Aii層：灰オリブ色火山灰質シルト層で、層厚は5～10cmであった。NG97-79次調査地では、阪手火山灰層から由来した、中間型から多孔質の火山ガラスと角閃石が多く含まれていた。

13(一括)層からは、NG97-12・52次調査地などで、サヌカイト製ナイフ形石器が出土したが、13層の風化による土壌化が著しく、その細分が困難であったため、13A層か13B層、あるいは13Ai層か13Aii層のいずれが出土層準であるかは明らかにできなかった。

5) 低位段丘構成層

13B～15層は低位段丘を構成する地層であり、最上部、上部、下部に区分した。最上部は13B～C層であるが、現在のところNG96-79、97-52次調査地などごく局所的にしか認められない。上部の14層も同様に、NG97-12次調査地で確認されている。下部の15層は広い範囲に認められ、低位段丘の高所部を形成した地層であるとみられる。

13B層はNG96-79、97-52次調査地を模式地とし、2層に細分が可能であるが、NG97-12次調査地のような高所部においては堆積後の土壌化のため13A層との分層が困難で、13層として一括した。

13Bi層：灰色砂礫質粘土層で、層厚は10～20cm程度であった。NG96-79次調査地で局所的に認められた。

13Bii層：無色透明の扁平型ガラスを多く含むオリブ灰色ガラス質火山灰層で、層厚は平均5cmであった。NG97-52次調査地を模式地とするが、分布は局所的であった。下位層とは明瞭な層理

面をもっていたが、上位層とは風化などによる土壌化のため、境界は漸移的で不明瞭であった。

13C層：オリブ灰色粘土質シルト層で、層厚は平均10cmであった。暗色帯を構成し、NG97-52次調査地で局所的に認められた。下位層とは明瞭な層理面をもっていたが、高所にあたるNG97-12次調査地では、層厚はごく薄く、その下限は不明瞭であったため、下位層上部が土壌化した部分として認められた。

14層：緑灰色～暗黄灰色砂・礫混り粘土質シルト層で、層厚は20～40cmであった。下半部は細礫～中礫が主体となり、下位層とは明瞭な不整合面をもっていた。また、高所においては、層厚が薄く全般に細粒化するため、堆積後の土壌化により上・下位層との境界は不明瞭であった。NG97-12次調査地を模式地とする。

15層は緑灰色～白色のシルト～シルト質粘土の優勢な上半部と下半部の砂礫から構成される地層で、前者を15A層、後者を15B層とするが、両者は漸移的であった。層厚は200cmを超える個所があった。NG96-79、97-12・52次調査地の広範囲に認められた。低位段丘の主たる構成層である。

15A層：緑灰色シルト～シルト質粘土層で、層厚は100～150cmであった。非常によくしまっており、上面では乾痕が認められた。下部は砂質シルトへ移化していた。

15B層：灰色砂礫層で、層厚は100cm以上であった。下位層との間には不整合面がみられた。

6) 中位段丘構成層

16A・B層は長原遺跡の層序との対比において、中位段丘を構成する地層の上部にあたり、NG96-79次調査地を模式地とする。

16A層：緑灰色シルト質極細～細粒砂層で、層厚は20～30cmであった。樹木片、種子等を包含していた。NG96-79次調査地では本層上面よりナウマンゾウの足跡が検出された。

16Bi層：暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土層で、層厚は約120cmであった。

16Bii層：暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土層で、層厚は10～20cmであった。暗色帯を構成していた。

16Biii層：灰色火山灰極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm程度であった。吾彦火山灰層とみられる褐色角閃石を含む火山灰層がレンズ状に挟まれていた。

16Biv層：緑灰色粘土層で、層厚は40cm以上であった。 (高橋・杉本・大庭・絹川)

註)

(1) 12D層の下面で確認した巣穴は、下方に直線的にもぐったあと途中で横方向に曲がる形態のものが多く、直径は4～5cm、深さは検出面から20cm前後あった。一方、12Ci層中で確認した生痕化石は12D層のものと類似した形態であるが、直径が2～3cmと小型のものも認められた。

第2節 各層準の年代

0・1層は現代の地層である。2層から出土した遺物で最新のものは伊万里系の染付で、17世紀以降の年代が与えられる。

3層からは土師器・瓦器・瓦質土器・緑釉陶器などが出土している。東調査地では、最下部の3iv層から出土した瓦器小皿にC－Ⅳ期の形態のものがある。また、西調査地北区の3層一括層準から出土した瓦器椀にも、C－Ⅳ期でも新しい段階の形態のものがある。このことから、本層の年代を14世紀後半以後とすることができる(第Ⅲ章第1節1)・第2節1)参照)。

4A層は水成層で、本来下位層準に属する遺物を包含しているとみるべきである。最新の遺物はNG97-52次調査地で出土したC－Ⅲ期の形態をもつ瓦器椀で、本層の堆積は13世紀以後で14世紀までとみることができる。

4B層は土師器・須恵器・黒色土器に加えて瓦器を含む。瓦器椀の形態でみると、東調査地の4Bi層出土のものはC－Ⅲ期でも新相であり、4Biii層・4Biv層出土のものはC－Ⅰ・Ⅱ期の形態を有する。各層準の年代は、4Bi層が13世紀後半以降で14世紀まで、4Biii層・4Biv層が11世紀後半から12世紀後半までとみられる。

4C層は土師器・須恵器・黒色土器を含み、瓦器は含まない。西調査地南区で、最下部の4Cvii層から出土した土師器は平安時代Ⅰ期の、4Cv層から出土した土師器は平安時代Ⅲ期の特徴をもつ。このことから、4C層の年代はおよそ9～11世紀前半と考えられる。なお、4A・4B・4C層出土遺物については第Ⅲ章各節1)で詳述する。

西調査地北区の5層からは奈良時代の特徴をもつ土師器・須恵器が出土しており、8世紀を中心とした時期が与えられる(第Ⅲ章第2節1)参照)。

6A・6B層から出土した土器は未整理で詳細は不明であるが、ともに飛鳥時代の土器が出土している。また西調査地南区の6層からはTK217型式の須恵器杯が出土している(第Ⅲ章第3節1)参照)。この層準は6A・6B層のいずれかになるか、両層を一括層として呼ぶべきものかはまだ判断のつかない状況であるが、いずれにしても6層には7世紀を中心とする年代が与えられよう。

NG97-43次調査地の7Ai層からは飛鳥Ⅱの特徴をもつ土師器杯が、7Aii層からはTK209型式の須恵器杯が出土しているので、両層の下限は7世紀前半に求められる。NG97-13次調査地の7Aiii層からはTK10型式でも新相を示す須恵器杯身が出土しており、その年代は6世紀後半に求められる。7Aiv層からは弥生土器・古式土師器・須恵器などが出土しているが、もっとも新しい遺物はNG95-57次調査地出土のTK10型式の須恵器杯で、本層準の年代は6世紀中葉に求められる。7Av・7Avi層からも雑多な遺物が出土しているが、TK47型式の須恵器杯が最新の遺物で、本層準の下限は5世紀末に求められる。7Avii層から出土した遺物はあまり多くない。最新の遺物はNG97-43次調査地出土の定型化しない段階の須恵器杯で、5世紀中葉の年代が考えられる。

NG97-12次調査地の7Bii層からは、船橋O－ⅠないしO－Ⅱ型式とみられる土師器直口壺が出土

している。7Bii層の年代は5世紀前半ごろと考えられる。

東調査地の8B層からは布留式古相の土師器甕が出土した。8C層からは畿内第Ⅴ様式の弥生土器が出土している。8層の年代は弥生時代後期から古墳時代前期に属するものとみられる。これらの土器については第Ⅲ章第1・2節の1)で触れる。

9B層は、西調査地北区ではその上面に貼付く状態で畿内第Ⅳ様式の弥生土器甕が、NG97-12次調査地ではその層中から同Ⅱ様式の土器片が出土している。このことから、本層準は弥生時代中期に属するものとみられる。

NG97-52次調査地では、9Ci層中から小片であるが弥生土器片が出土しており、弥生時代中期初頭の特徴が認められる。本層準は水成層であることから下位層準の年代を反映しているとみられるので、本層準直下の9Cii層水田の埋没年代は弥生時代中期初頭に求められよう。

NG97-41次調査地の10A層からは縄文晩期最終末に位置づけられる長原式土器[家根祥多1982]と畿内第Ⅰ様式の弥生土器が出土しており、弥生時代前期が本層準の年代として考えられる。

東調査地で10C層基底部から北白川上層3期の土器片が出土し、本層準は縄文時代後期中葉に属するものと考えられる。

東調査地で11i層と考えた層からは縄文中期船元Ⅲ式から縄文後期北白川上層3期までの土器片が出土した。この土器が示す時期幅はあまりに大きく、長原遺跡の基本層序に対比すればNG12B層～NG9C層の時期幅にほぼ相当する。この原因は調査時のミスによる遺物の混入か、もしくは本層としたものの一部が上位層準であるRK10C層の一部に属する層準であることが考えられる。この点については今後の調査成果蓄積によって判断してゆきたい。

NG96-79次調査地では、12A層から里木Ⅱ式の土器片が出土した。本層準は縄文時代中期後半に属するものとみられる。

13(一括)層からはNG97-12次調査地で、瀬戸内技法や石刃技法によって製作されたサヌカイト製のナイフ形石器が出土した。13層は後期旧石器時代後半に属する。

以上のように層序と各層準出土遺物の年代の検討によって長原遺跡の基本層序との対比(表3)が可能になった。RK4C層以上(平安時代以降)の地層はNG4C層以上の地層と、RK9A層以下(弥生時代以前)の地層はNG8A層以下の地層とおおむね一致している。また、特にRK10～12層は遺存状態のよい分、より良好な地質学的情報を提供してくれるものと期待される。一方、RK5～7B層(平安時代初頭から古墳時代前期)の様相は長原遺跡基本層序の同時代相当層と大きく異なったが、この点については第Ⅳ・Ⅴ章で周辺地域の地形の変化と関連づけて説明を試みたい。

(高橋)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 東調査地(NG96-9次調査)

1) 地層と遺物

i) 層序

本調査地には、0・1層(現代の盛土と作土)の下に、2層、3(i・ii・iv)層、4B(i~iv)層、4C層、7Aiv層、7Bi層、8A~C'・8C層、9層(一括)、10A~C層、11i層が分布した(図7、図版1・3・4)。前章でふれたように、3・4B・8C'層については本調査地が模式地のひとつである。

2層はオリーブ褐色砂混りシルト層で、3層に細分できた。全体としての層厚は約20cmであった。

3i層は灰オリーブ色粗粒砂混りシルトからなる作土層で、層厚は最大で15cmであった。下面で南北方向の鋤溝が検出された。

3ii層は黄褐色粘土質シルト層で、層厚は約10cmであった。やや暗色を帯び、泥質である。作土層で、下面で鳥畠溝が検出された。

3iv層はオリーブ色シルト質極細粒砂からなる作土層で、層厚は最大で20cmであった。下面で南北方向の鋤溝が検出された。

4Bi層はオリーブ褐色粘土質シルト層で、部分的に暗色を呈する。層厚は最大15cmである。

4Bii層はオリーブ褐色シルト層で、層厚は最大10cmであった。基底面で土器埋納遺構が検出された。

4Biii層は灰オリーブ色シルト~細粒砂層で部分的に暗色を呈する。層厚は約10cmである。基底面で平安時代の掘立柱建物や溝などが検出された。

4Biv層はオリーブ褐色粘土質シルト層で、層厚は約10cmであった。基底面で平安時代の溝群や飛鳥時代の掘立柱建物などが検出された。

上記の4B層は作土層であったが、調査区北端から約7mの間には耕作によって攪拌を受けていない状態の4B層が分布した。この部分は以下のように4層に細分が可能で、集落地内での同層の堆積状況を示すと思われる。なお、2・3i層を除く上記の層準は、耕起されていない4B層の遺存範囲以南に分布していた。

4B①層はオリーブ褐色粗粒砂混りシルト~細粒砂層で、層厚は約8cmであった。

4B②層は暗灰黄色粗粒砂混りシルト層で、層厚は約20cmであった。本層中に平安時代の井戸SE4B01が掘込まれていた。

4B③層は黄褐色細~中粒砂層で、層厚は約20cmであった。

4B④層は黄褐色中~粗粒砂層で、層厚は約15cmであった。

4C層は灰褐色粗粒砂混りシルト層で、4Biv層基底面で検出される溝群の埋土として遺存していた。層厚は最大で10cmであった。

7Aiv層は灰オリーブ～明黄褐色砂礫層で、層厚は約200cmであった。上方へ細粒化し、下面は下位層準を著しく侵食していた。葉理が顕著な水成層で、東壁断面では北下がりのラミナが優勢で、北壁でのラミナは水平に近かった。このようなラミナの傾斜の検討から、本層を堆積させた水流は、南南東から北北西方向へ流れたものと判断された。しかし、7Bi層上面では東西方向のグループキャスト(写真1)が観察された。グループキャストは水流と同じ方向に形成されるものであるから、東壁断面の下位層直上でみられた、砂礫の水平なラミナが観察される部分は違う層準で、東から西へ水が流れた可能性がある。

7Bi層は灰色粘土質シルト層で、層厚は最大で20cmであった。多くの部分では上位層の下刻によって失われており、中央部と南端部付近に遺存していた。中央部では上面で踏込み群が検出された。

8A層は暗灰色粘土質シルト層で、層厚は約10cmであった。やや泥質を呈していた。

8B層は灰オリーブ色シルト層で、層厚は約12cmであった。

8C'層は暗灰色シルト層で、層厚は最大で10cmであった。北方に向って層厚を減じ、上面で弥生時代の水田面が、9層上位の基底面で溝が検出された。

8C層はオリーブ黒色粘土質シルト層で、層厚は最大で8cmであった。上位層の攪拌で破壊され、南部にのみ遺存していた。



写真1 東調査地7Aiv層下面のグループキャスト

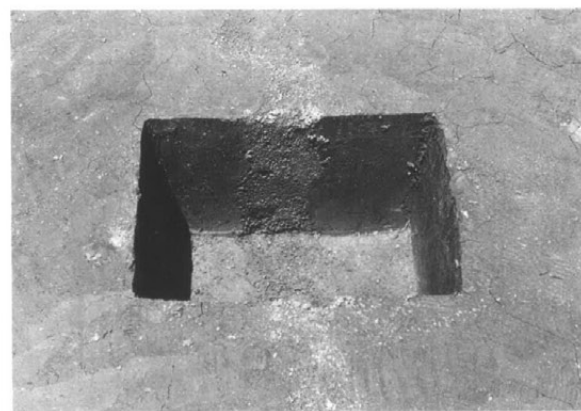


写真2 東調査地10C層内噴砂

9層はオリーブ黒色粘土質シルト～暗オリーブ色シルト層で、層厚は最大で15cmであった。出土遺物からみて、9A～C層が1層に収斂した層準であると判断された。

10A～C層は、調査地北部では各々の層厚も比較的厚く、明瞭に分層できたが、南部では層厚を減じつつ収斂し、明確には分層できなかった。

10A層は黒色中粒砂混りシルト質粘土層で、層厚は最大で20cmであった。

10B層はオリーブ黒色粘土質中粒砂層で、層厚は最大で5cmであった。北部でのみ分層が可能であった。

10C層は黒色中粒砂混り粘土で、層厚は最大で20cmであった。本層を突き破って9層中に達する噴砂が観察された(写真2)。

11i層の上部はオリーブ色シルト、中部は灰～緑灰色中～粗粒砂、下部は灰色砂礫で構成されていた。層厚は約500cm以上であった。葉理の顕著

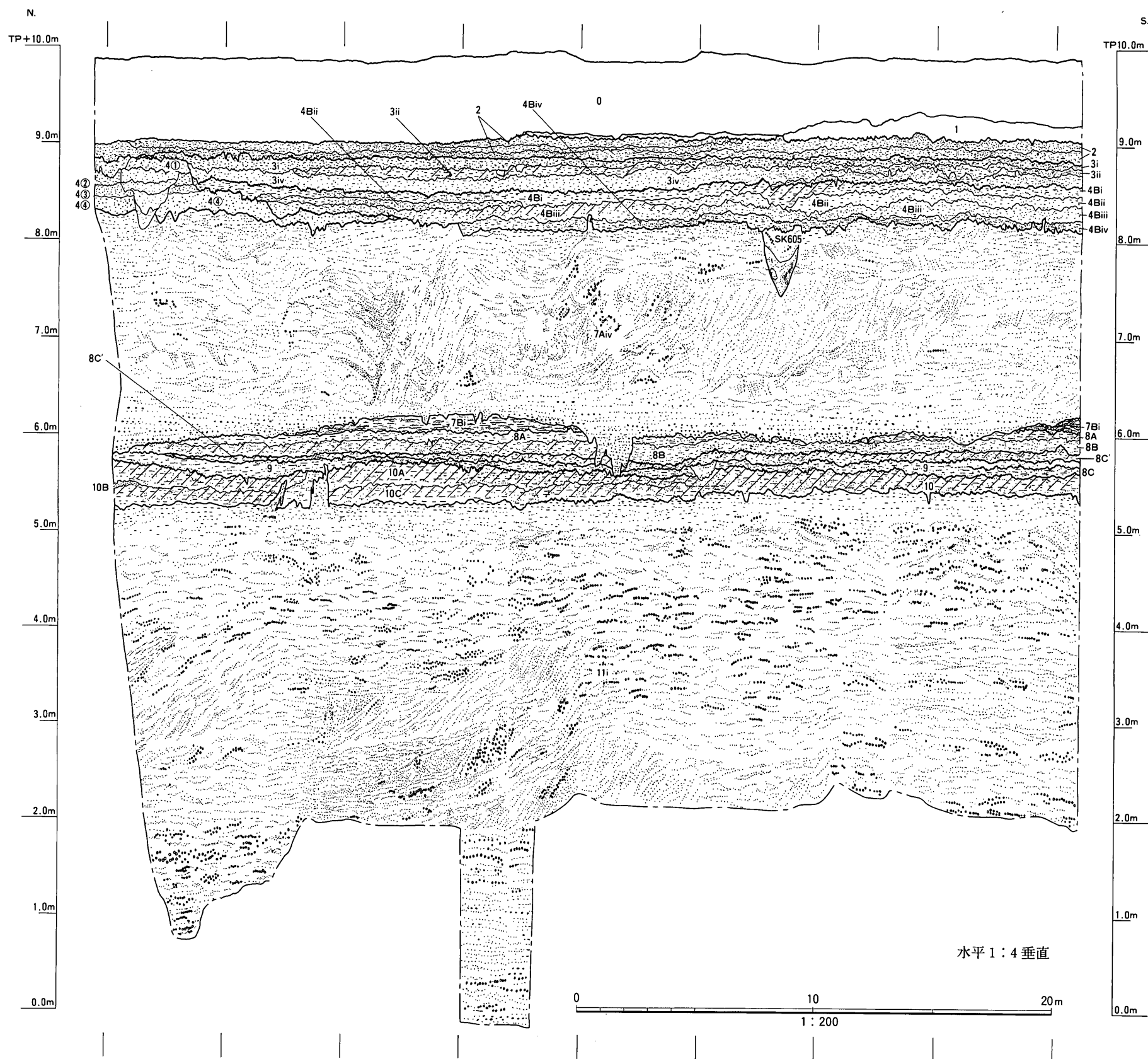


図7 東調査地東壁地層断面図

な水成層で、断面での葉理の傾斜の観察から、本層を堆積させた水流は東南東から北北西に流れたものと判断された。本層下面および地山層を確認するべく検土杖による調査を行ったが、TP+1.3mで明灰色細粒砂混りシルト層、TP+0.4mで灰色砂礫層となり、砂礫層がTP-0.1mまで続いていた。これらはいずれも11i層を構成する水成層と考えられる。北側のNG95-57次調査地ではTP+1.8mで低位段丘構成層が確認されていることから、本調査地では地山層が11i層を堆積させた水流によって大きく侵食されているものと考えられた。(高橋)

ii)各層出土の遺物

2・3層出土の遺物(図8、図版20)

1・2は2層出土の陶磁器である。近世以降に属する。3は3ii層出土の中国製青磁碗、27・28は3iv層出土の瓦器小皿である。瓦器小皿は、内・外面ともにほとんどヘラミガキを省略し、C-Ⅳ期の特徴をもっているため、年代は14世紀以降に属する。

4B・4C層出土の遺物(図8、図版20・23)

15は土師器小皿、34は瓦器碗とともに4Bi層の出土である。34は高台が低平化しており、C-Ⅲ期でも比較的新しい段階の特徴をもっている。16は4Bii層出土の土師器小皿で、口径は9.8cmである。56は4Bi~ii層の出土で、瓦質土器三足釜の支脚部である。4Biii層出土の遺物には、磁器4~6、土師器皿8・9・11・12、緑釉陶器碗49、土師器小皿17~20、瓦器碗37・40・42、瓦器小皿30~33などがある。土師器皿はいずれも内面と口縁部の外面にナデ調整を加え、底部外面には指頭圧痕が残る。土師器小皿の調整技法も同様であるが、口縁端部の形態は17・18のように上外方へまっすぐ立上がるものと、20のように「て」字状を呈するものがある。20の口縁端部は屈曲がかなり乱れた「て」字状で、平安時代Ⅳ期ごろの特徴とみられる。瓦器碗は内・外面にヘラミガキを施している。42は外面にヘラケズリを施したのち、非常にいいヘラミガキを加えた古い特徴をもっており、C-Ⅰ期に属するものである。瓦器小皿も内・外面にヘラミガキを施しており、30・31は外面のヘラミガキの前にヘラケズリが加えられている。瓦器碗・小皿ともに、こうした古い特徴をもつもの以外はC-Ⅱ期に属する。4は白磁皿、5は白磁碗、6は緑釉陶器皿である。土師器小皿23・24、瓦器碗41は4Biv層からの出土であるが、41は内・外面にヘラミガキを施しており、C-Ⅱ期に属するもので4Biii層の遺物との差異はあまりない。

4B①~③層出土の遺物には、土師器皿10、土師器高杯14、土師器小皿21・22、瓦器碗36・38・43~46、瓦器小皿29などがある。4B②層から出土した土師器小皿21・22の口径は10cm弱で、口縁端部はややくずれた「て」字状を呈する。平安時代Ⅳ期に属する。瓦器碗では、35が4B①層から、36・38・43~46が4B②層からの出土である。4B②層出土のものは、内・外面のヘラミガキが精緻な43や、ミガキ以前にヘラケズリを施す44・45など古い特徴をもつものが多く、C-Ⅰ期からC-Ⅱ期に属するものと考えられる。4B①層出土の35は、ヘラミガキがやや疎らになってきており、C-Ⅱ期でも新しい段階の所産と考えられる。

4C層からは瓦器は出土していない。47・48はA類の黒色土器碗で、48は外面の高台との境目付近に部分的なヘラケズリを施している。土師器小皿も25のような深い器形のもので、平安時代Ⅲ期に属

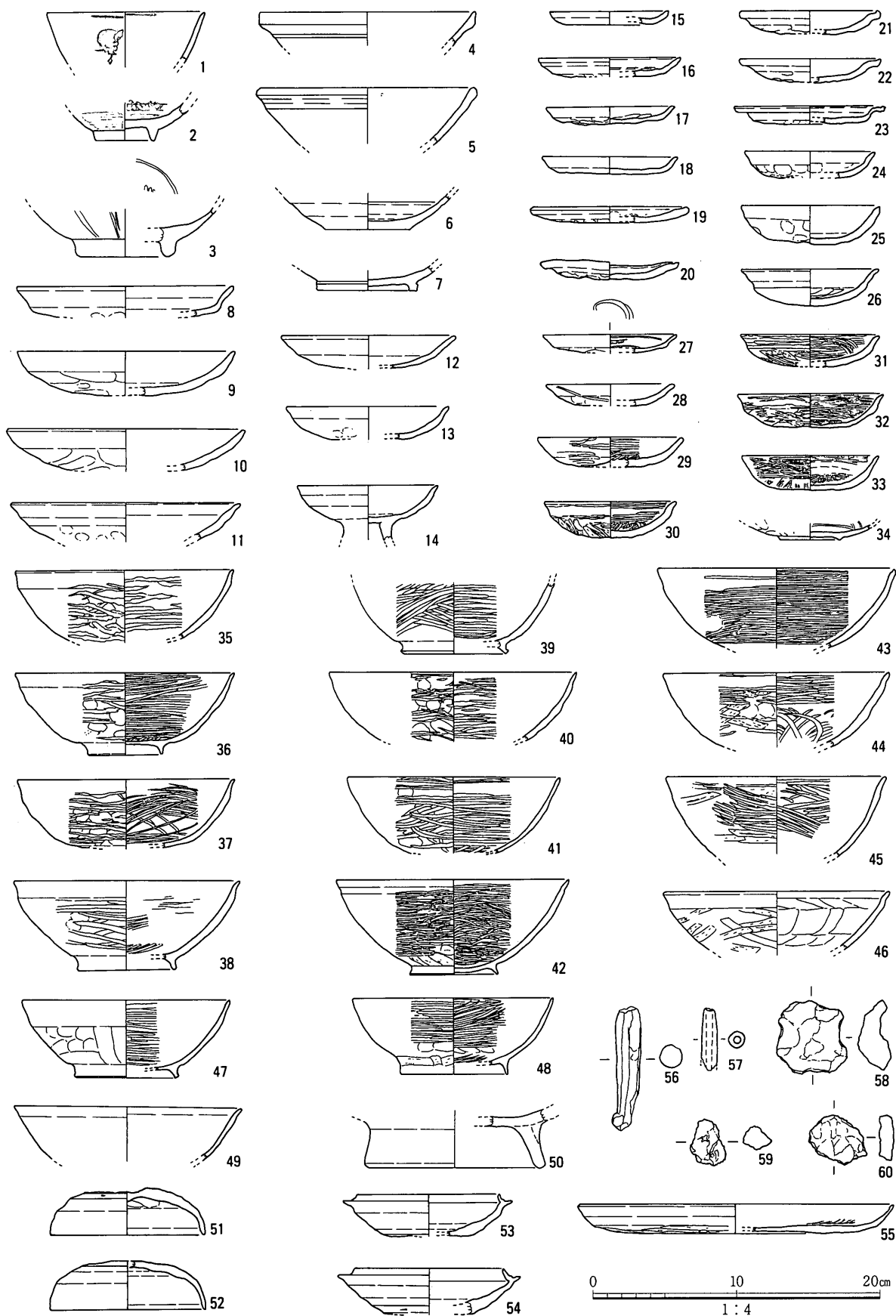


図8 東調査地各層出土の遺物(その1)

2層: 1・2、3ii層: 3、3iv層: 27・28、4Bi層: 15・34、4Bii層: 16・59、4Biii層: 4~6・8・9・11・12・17~20・30~33・39・40・42・49、4Biv層: 13・23・24・37・52・53、4C層: 7・25・47・48・50・51・54・57、4B①層: 29・35・58、4B②層: 10・14・21・22・26・36・38・43~46・60、4B③層: 55、4Bi~ii層: 56

するものとみられる。7は緑釉陶器皿の高台部分である。長原遺跡では緑釉陶器の出土は平安時代Ⅲ期以降に顕著であるという[佐藤隆1992]。こうしたことから、本層出土の土器は平安時代Ⅲ期に属するものとみられる。

以上のように土器の特徴からみた各層の年代は、4Bi層は13世紀後半以降、4Biii・4Biv層は11世紀後半から12世紀第3四半期、4B①層は12世紀後半、4B②層は11世紀後半から12世紀前半、4C層は10世紀第4四半期から11世紀前半とみてよいであろう。4Bii層は層中の遺物から明確に時期を決定できなかったが、後述するように基底面で検出された土器埋納遺構の出土遺物の時期が12世紀中ごろから12世紀第3四半期とみられるので、それ以降の年代が与えられる。

57は土師質の土錘、58～60は鉄滓である。また、51～55は4B・4C層から出土したものであるが、飛鳥ⅠないしⅡの特徴を示し、本来は下位層準に帰属するものである。

7Aiv層出土の遺物(図9、図版21)

61～65は須恵器、66・68・70・71は土師器、67は埴輪、69・72・73は弥生土器である。本層準は水成層であるため、本来下位層準に帰属する雑多な遺物を含む。68は高杯で、器高に対して杯の口径が小さい。脚内に絞り痕をとどめ、脚のスカシ孔は3つである。古墳時代前期末と考えられる。69は甕で、肩が張出す器形である。タタキは断続的に施されている。弥生時代後期中葉、西ノ辻EからD式の段階であり、河内V-3様式に属する。生駒西麓産の胎土である。70は山陰系の二重口縁壺である。頸部付け根に羽状文をヘラで刻みこんでいる。胴部内面のケズリは頸部直下まで施される。鳥取県青木遺跡の編年の青木VからⅥ期に属し、古墳時代初頭に属すると思われる[青木遺跡調査団1978]。胎土はいわゆる生駒西麓産のものと同様に角閃石と長石の細粒を多く含み、暗茶褐色を呈している。71は台付き甕で、脚台部を巻上げによって成形している。生駒西麓産の胎土である。甕底部は焼成前に穿孔されている。72は壺で、頸部と胴部の境に削出突帯をもつ。弥生時代前期、河内Ⅰ-2様式[寺沢・森井1989]に属する。73も壺で、頸部と胴部の境に突帯を貼付け、その上に刻目を施している。弥生時代前期、河内Ⅰ-3から4様式に属する。

もっとも新しい時期を示すものは須恵器で、61～65がある。61・63は杯身、62は有蓋高杯の杯部である。61～63はTK23ないしTK47型式に属する。64は杯蓋で、天井部と口縁部の境の稜がややあまく、口径も13.0cmとやや大型化していることからMT15型式と判断される。65は短脚高杯の脚部であるが、TK47型式以前にはみられないもので、MT15ないしTK10型式に属するものとみてよいであろう。以上の遺物の中でもっとも新しい遺物はMT15型式の須恵器杯蓋64であるが、NG95-57次調査地では本層準からTK10型式の須恵器が出土している。このことから本層準の年代は6世紀中葉とすることができる。

8・9層出土の遺物(図9、図版21・38)

74は8B層、75は8C層、76～79は9(一括)層から出土した。74は河内型庄内式甕(生駒西麓産)、75は弥生時代後期の甕の胴部の破片である。76・77は甕である。76は如意形の口縁で口唇部に比較的細かな刻目を入れる。倒鐘形の器形と考えられる。弥生時代前期に属する。77は、刻目突帯文を口唇部にもち、刻みの形はD字形というよりも細かな長方形であり、長原式縄文土器と考えられる。78

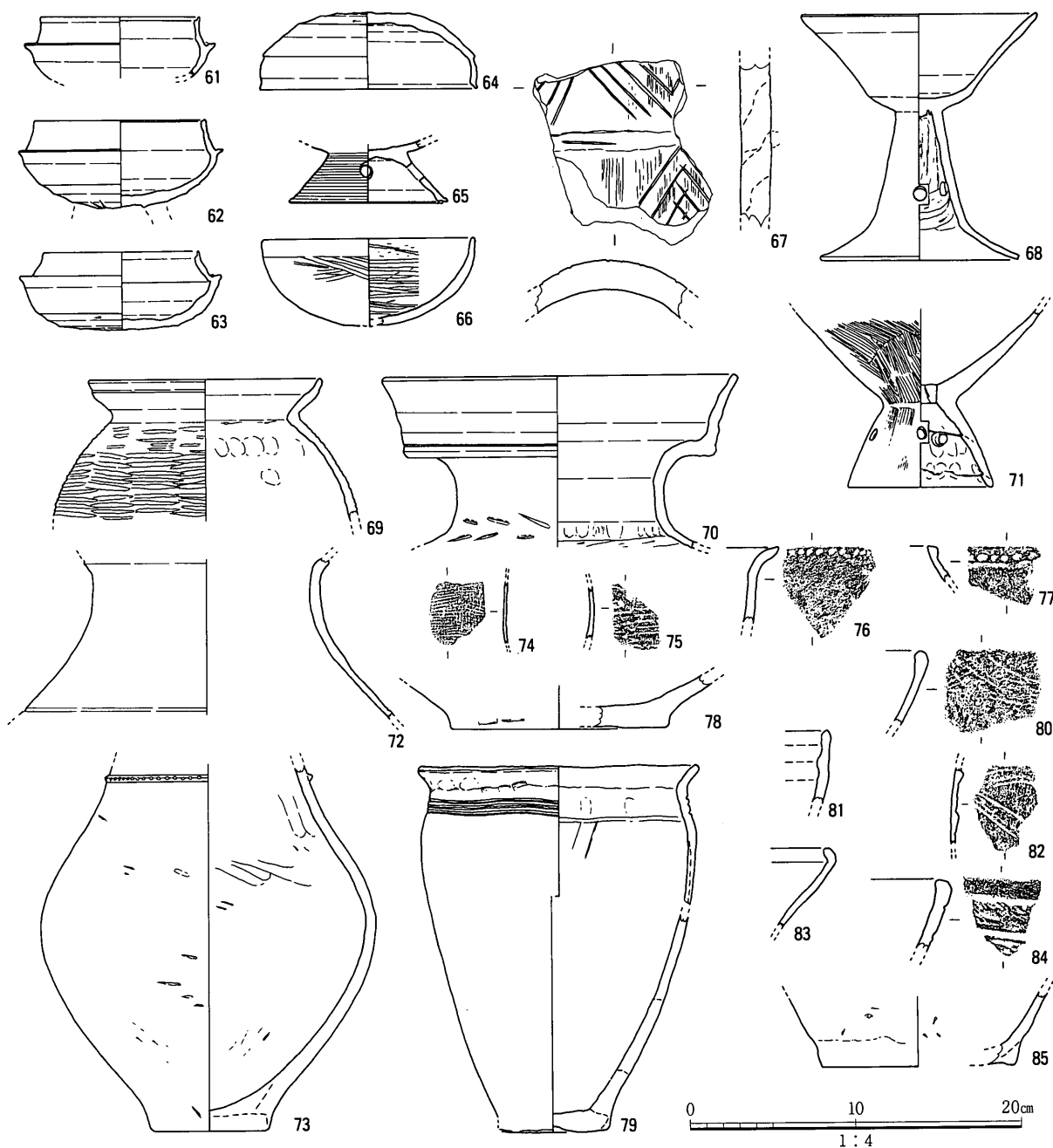


図9 東調査地各層出土の遺物(その2)

7Aiv層: 61~73、8B層: 74、8C層: 75、9層: 76~79、11i層80~85

は大型甕の底部と考えられる。粘土を充填して底部内面を補強している。弥生時代前期ないし中期に属する。79は甕である。胴部上半にふくらみをもつ。頸部には3条のヘラ描沈線文を施す。弥生時代前期、河内Ⅰ-3から4様式に属する。生駒西麓産の胎土である。

8B層は古墳時代前期初頭、8C層は弥生時代後期、9(一括)層は弥生時代前~中期に属する。

11i層出土の遺物(図9、図版38)

80~85はすべて縄文土器で、80・81・83・84は口縁端部の破片、85は底部の破片である。80は口縁端部を丸く肥厚させ、外面に条線文を施している。北白川上層式に属する。81は端部からやや下がった内面ににぶい稜を巡らせている。北白川上層ⅡないしⅢ式に属する。82は体部の破片で、横と斜め方向に突帯を貼付け、輪郭に沈線を刻んでいる。船元Ⅲ式に属する。83は無文で、口縁端部を内

側に折り曲げている。北白川上層Ⅲ式に属する。**84**は口縁端部をやや内側につまみ出し、外面に2条の沈線を刻んだのち、その間を縄文で充填している。中津式でもやや新相を呈する。**85**は胎土に2mmほどの砂粒を多く含み、外面にケズリ調整を加えている。**80・81・83**は縄文時代後期前半、**84**は後期初頭、**82**は中期にさかのぼる。

(高橋・杉本)

2) 弥生時代の遺構と遺物

i) 溝

SD8C01(図10・11)

調査区中央からやや南寄りで検出された溝である。検出面は9層上位の8C'層基底面である。幅約1m、深さは0.1~0.2mで、東西方向に直線的に延びていた。埋土は上層が暗オリーブ灰色粗粒砂混りシルト、下層は暗緑灰色粘土質シルトで、いずれにも顕著な流水の痕跡はなかった。時期が判定できる遺物は出土しなかったが、次に述べるように上位層からは弥生時代後期の土器が、遺構の基底をなす9層からは弥生時代前~中期の土器が出土したことから弥生時代の遺構と判断した。

ii) 水田

調査区南端の8C'層上面で、東西方向にやや弧状を呈して延びる畦畔と、これにT字状に取付いて南北に延びる畦畔を検出した(図12、図版5)。いずれも幅0.5m、高さ0.10~0.15mほどであった。畦畔内と水田作土中から弥生土器**86**が、畦畔と水田作土直上の8B層から土師器**88**が出土した。作土中からは石庖丁**87**も出土している。水田の広がり把握するべく北側でも畦畔の検出に努めたが検出されなかった。またNG95-57次調査区でも畦畔は検出されておらず、水田域は本調査区南端を北限として

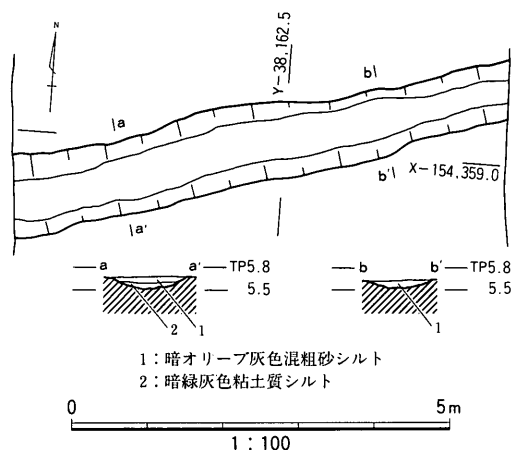


図10 東調査地SD8C01平・断面図

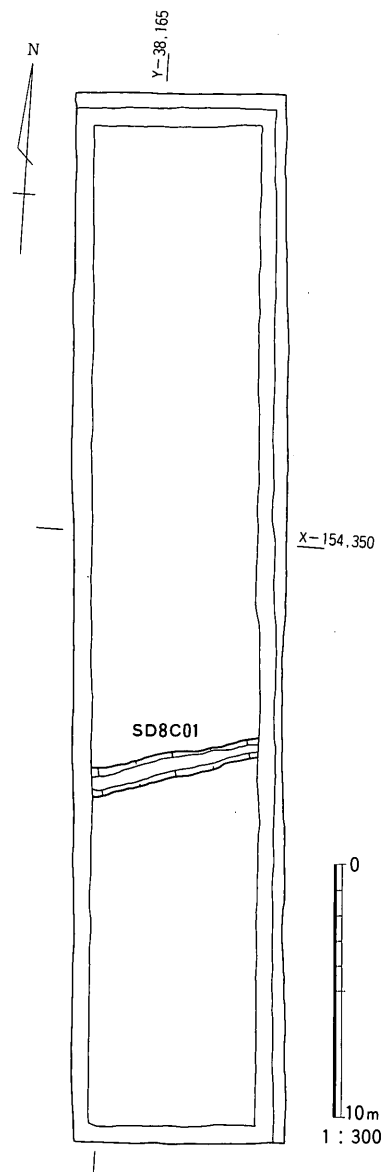


図11 東調査地遺構配置図(弥生時代)

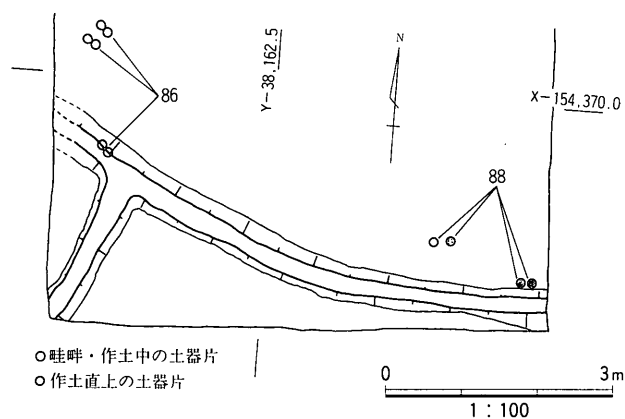


図12 8C'層上面検出水田平面図

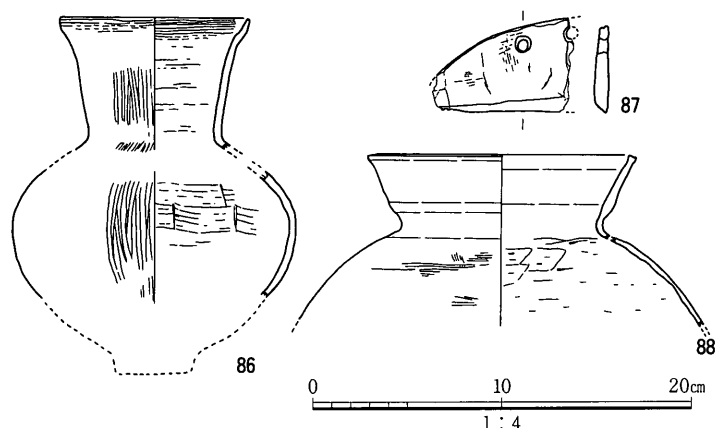


図13 水田関連の遺物実測図

8C'層畦畔内：86、8C'層基底面：87、8B層中(畦畔直上)：88

のケズリも、庄内式の甕のように頸部直下まできていることから、布留式甕の古段階の資料といえる。これらの遺物から、本水田の年代は弥生時代後期後半から古墳時代初頭ごろに求められる。
(高橋・杉本)

3) 古墳時代の遺構と遺物

7Aiv層の砂礫層を除去すると7Bi層の上面で、踏込みの密集する個所と溝状の遺構が検出された(図14)。7Aiv層堆積時の激しい流水のため、同層の下面は下位層準を削込んで大きく凸凹しており、一部では8C層にまで達していた。調査区北部の幅広い溝状の落ちや、中央やや南寄りの溝状の地形も、埋土は7Aiv層の砂礫で、これらは7Aiv層堆積時の水流の下方浸食によって形成されたものと考えられる。中央やや南寄りのものは、水流で削られて肩がオーバーハングしている部分もあったが、平面形態はかなり直線的で、本来人工の溝であった可能性がある。

踏込み群は調査区の中央やや北寄りに、東西約5m、南北約

南側に展開するものと考えられる。

86(図13、図版21)は長頸壺である。推定器高が16~20cmと小型で、扁球形の胴部である。弥生時代後期後半、河内VI-2様式に属する。87(図13、図版38)は石庖丁である。近畿地方で一般的にみられる直線刃半月形のタイプで、結晶片岩製である。88(図13)は甕である。口縁端部は、典型的な布留式甕のように肥厚あるいは巻込みをもたず、胴部内面

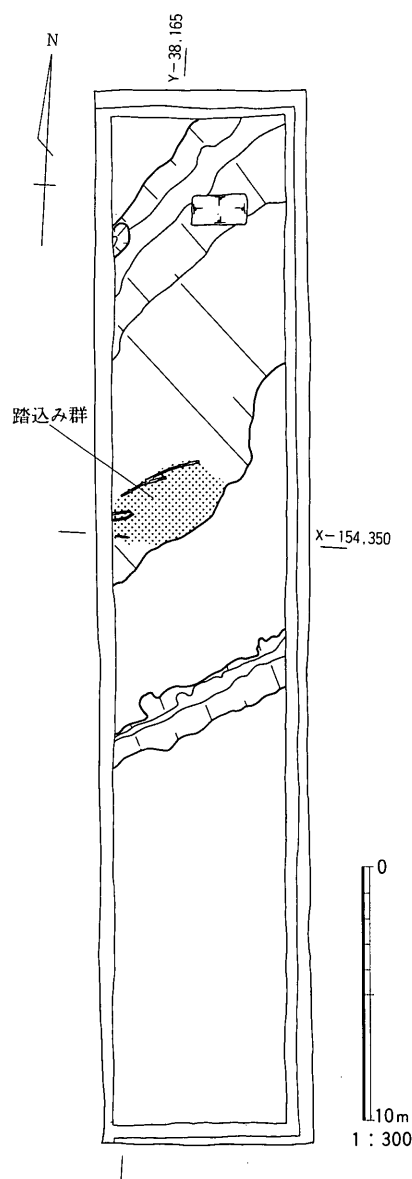


図14 東調査地遺構配置図(古墳時代)

3mの楕円形の範囲で、7Bi層上面に踏込みが密集する個所がみられた(図14、図版5)。踏込みを埋積しているのは7Aiv層の粗粒砂で、人の足跡のほかに、ウシらしい偶蹄目の足跡がみられた。踏込み群が検出された個所は周囲よりもやや高く、本来周辺にも分布していた踏込みが7Aiv層堆積時に削られ、部分的に残ったものと考えられた。この個所で、7Bi層上面に近い7Aiv層中から完形の須恵器89・90が出土した。ウシを耕作に用いたとすると、付近に水田が存在する可能性もあろう。

89・90(図15、図版21)はいずれも須恵器杯身である。89は口径10.4cm、90は口径11.0cmで、ともに口縁はやや内傾し端部内面にあまい面をもつ。90は、底部全面に焼成の際に自然釉が付着し融解して流れた状況(図版37)がみられる。ともにTK23型式に属するものである。(高橋)

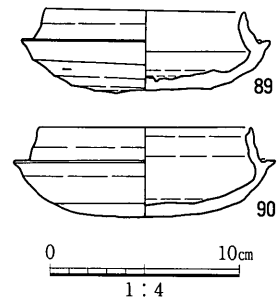


図15 踏込み群付近7Aiv層出土遺物実測図
7Aiv層(7Bi層上面付近): 89・90

4) 飛鳥時代の遺構と遺物

4Biv層を除去すると7Aiv層上位の基底面で遺構が検出された。掘立柱建物や土塙などは調査区の南半部に偏って分布しており、北端部付近には溝が1条検出された(図16、図版6)。

i) 掘立柱建物

SB601(図17)

南北2間(3.45m)、東西1間(2.10m)以上が検出された。柱穴は長径0.8m前後で、柱痕跡は断面観察によると直径約0.2mであった。柱間は1.7~2.1mで、東西の柱通りの方位はN55°Eであった。柱穴の掘形部分から土師器92~94が、柱痕跡部分から土師器95が出土した。

92~95(図20)はいずれも杯で、95は直径17.0cmの大型品である。92・93は内面に1段の放射状暗文を、95は2段の放射状暗文を施しているが、94の内面はナデ仕上げである。93は底部外面にケズリを施している。これらはいずれも飛鳥Ⅱに属する。

SB602(図18、図版7)

南北2間(3.45m)、東西3間以上(3.95m)が検出された。柱穴は長径1.0~0.8mで、柱痕跡は直径0.1~0.2mであった。柱間は1.30~1.75mで、東西の柱通りの方位はN49°Eであった。

SB603(図19)

南北2間(3.43m)、東西1間(1.75m)以上が検出された。柱穴は長径1.0~0.8mで、柱痕跡は直径0.2~0.3mであった。柱間

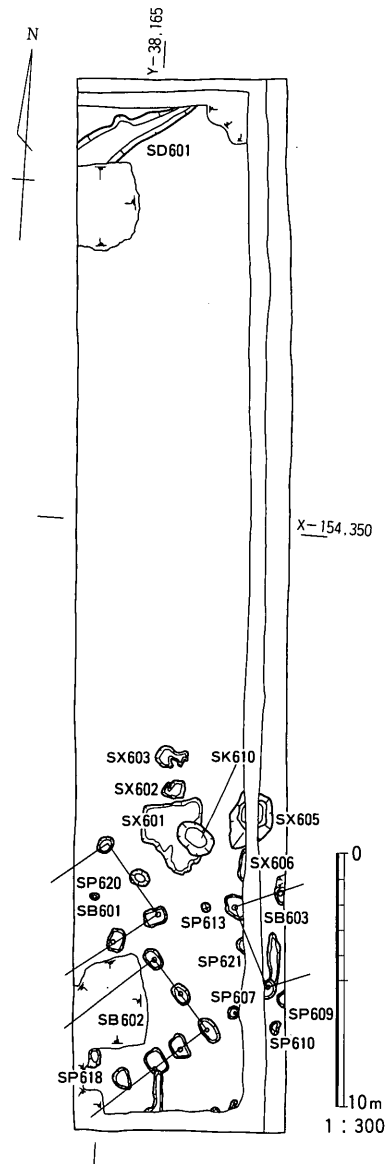


図16 東調査地遺構配置図(飛鳥時代)

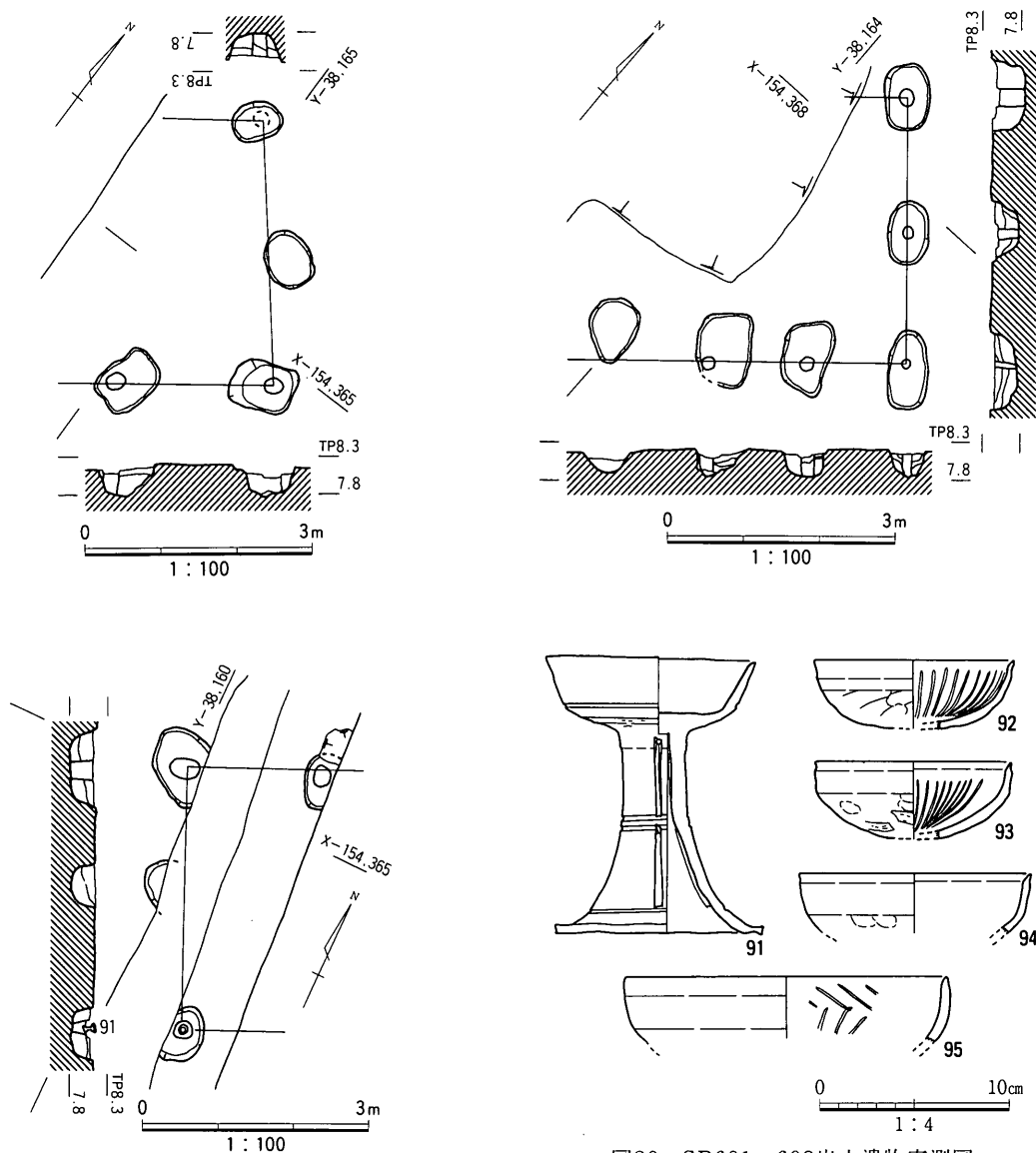


図19 SB603平・断面図

図20 SB601・603出土遺物実測図
SB603:91、SB601:92~95

は約1.7mで、東西の柱通りの方位はN65°Eであった。南東隅の柱穴の柱痕跡にすっぽりと納まる状態で須恵器91が出土した(図版7)。建物が廃絶して柱を抜き去った際にその抜き穴内に置いたものであろう。

91(図20、図版22・39)は無蓋高杯で、杯部口縁は外傾して立上がり、脚部の三方には幅の狭いスリット孔を上下2段に穿っている。TK209型式に属する。

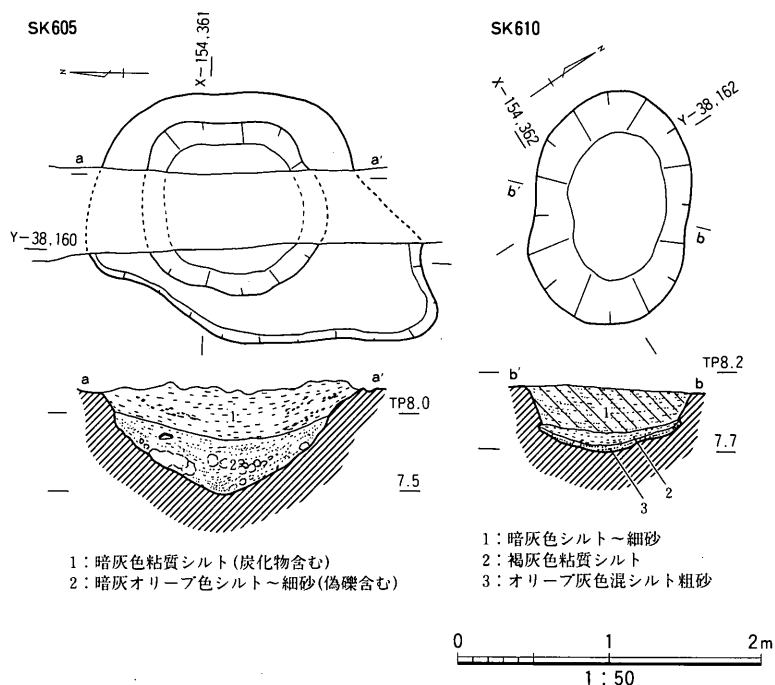
ii) 土壌

SK605(図21)

南北2.4m、東西1.6m、深さ0.7mであった。埋土は上下2層に分かれ、下層は偽礫を多く含み、人為的に埋戻した形跡があった。上層は炭化物を含むラミナが観察され、ゆっくりと自然に堆積したものと判断された。下層中とその上面から土器が出土したが、すべて破片であり、不要品として廃棄されたものとみられる。

102・103は須恵器、104~109は土師器である(図22、図版22)。102・103は杯身で、口径はそれ

それぞれ9.9cm、9.6cmで、底部はともにヘラ切り未調整である。TK217型式に属する。104は高杯の杯部、105は脚部である。104の内面には放射状暗文が施されている。106は鉢で、口径は29.0cmであり、外面にはヘラケズリ調整(図版37)、内面には精緻な暗文(図版37)を施している。107は鍋、108は甕である。109は付け庇竈の焚き口最下部の破片である。



SK610(図21)

図21 SK605・610平・断面図

長径1.5m、短径1.0mの平面小判形の土壌で、深さは0.4mであった。下位の埋土は粗粒砂やシルトなどからなり、ラミナが観察された。この層の上面とはほぼ同じ高さで、底部付近の壁が崩れて小さくオーバーハングしており、この高さまで水が溜まっていたものと考えられた。水溜として利用された遺構と考えられる。須恵器100や土師器の破片が出土した。

100(図22)は須恵器杯身で、口径は10.4cmである。TK217型式に属する。

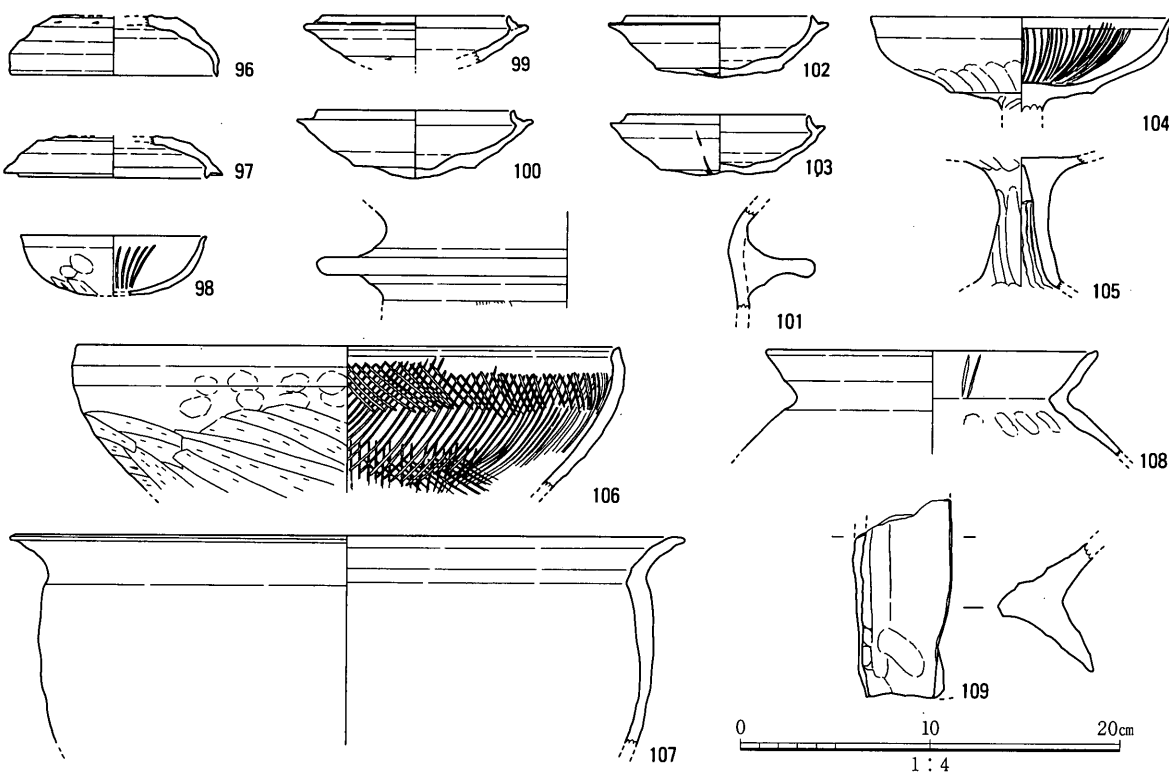


図22 飛鳥時代土壙・溝・その他の遺構出土の遺物実測図

SX601: 96・98、SX602: 97、SX603: 99、SX610: 100、SX605: 102~109、SD601: 101

iii) 溝

SD601 (図16)

調査区北端部で検出された溝で、最大幅1.2m、深さ約0.2mであった。方向がSB601などとはほぼ平行であり、北側のNG95-57次調査区では飛鳥時代の遺構が発見されていないので、集落地の北限を画する溝であるかもしれない。土師器羽釜の破片101 (図22) が出土した。

iv) その他の遺構

SX601 (図16)

南北2.9m、東西2.3m、深さ0.1mを測る不整形の落ちで、埋土は灰色中粒砂混りシルトであった。内部から土師器・須恵器が出土した。

96 (図22・図版22) は須恵器杯蓋で、口径は11.0cmである。天井部はヘラ切り未調整であるが、部分的にヘラケズリを加えている。98は土師器杯で、内面に1段の放射状暗文、外面にヘラケズリ調整

を施している。96はTK217型式、98は飛鳥Ⅱに属する。

SX602・603 (図16)

SX601の北側で検出された不整形の遺構で、いずれも深さは0.1mほどであった。ともに須恵器が出土した。

97はSX602から出土した須恵器杯蓋で、口径は9.8cmであり、内面に短いかえりが付く。99はSX603から出土した須恵器杯身である。ともにTK217型式に属する。

(高橋)

5) 平安時代の遺構と遺物

4C層下面で溝群が、4Biii層基底面で掘立柱建物・井戸・溝が、4Bii層基底面で土器埋納遺構が

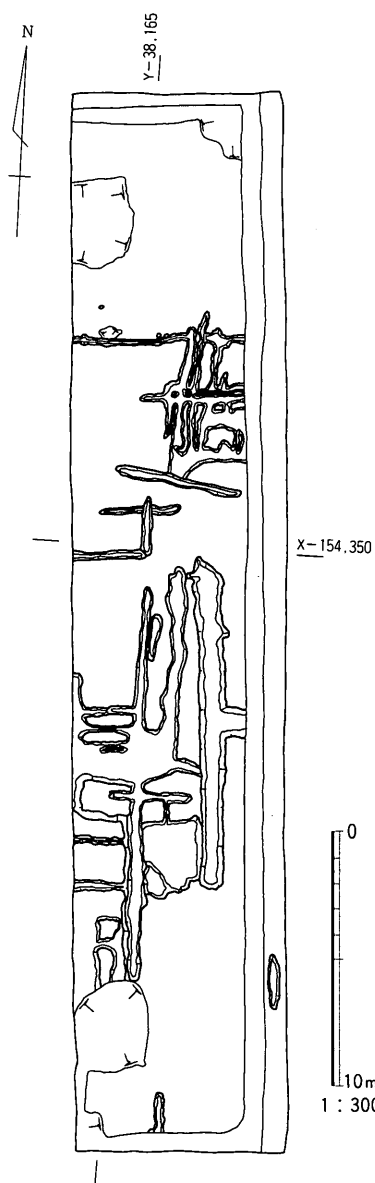


図23 東調査地遺構配置図
(4C層段階)

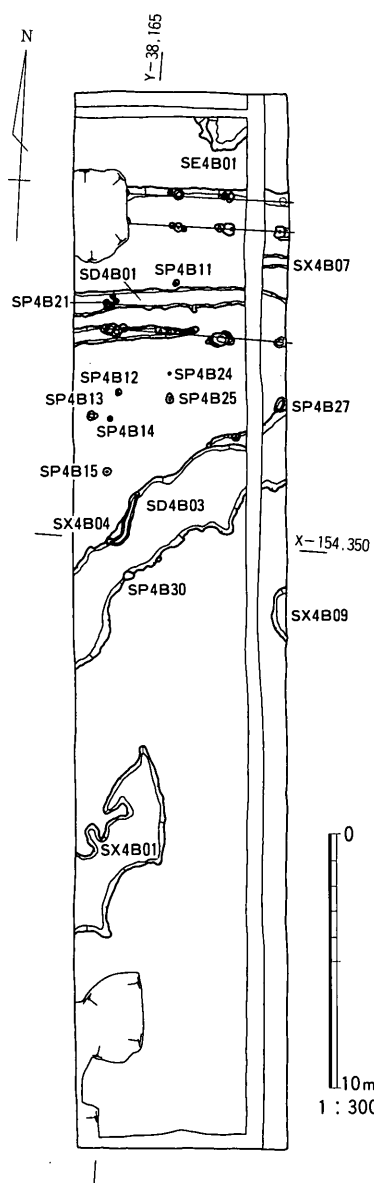


図24 東調査地遺構配置図
(4B層段階)

それぞれ発見された(図23・24、図版8)。

i) 溝群

4C層下面溝群(図23)

幅0.3~1.2m、深さ0.1m前後の溝群で、方向はほぼ正東西南北で、十字に交差するものが多かった。畠の畝間と考えられる。埋土は灰褐色粗粒砂混りシルト(4C層)で、出土遺物は前項で紹介したように、平安時代Ⅲ期のものに限られる。

ii) 掘立柱建物

SB4B01(図24・25、図版8)

調査地北部で検出された。東西3間(6.8m)以上、南北は推定2間(4.2m)で、北面に庇を備えていた。柱間は2m強で、東西の柱通りの方位はE1°Sでほぼ正東西であった。柱穴は直径0.2~0.7mほどで、底部のものは相対的に小型であった。柱穴内に根石を据えたものがあった(写真3)。柱痕跡は直径0.15~0.20mであった。SP4B21が東西の柱通りから直角の位置にあったが、ここが建物の西の妻部にあたるかどうかは不明である。母屋側では柱穴2~3個が切合うか近接して存在し、庇側では2個ずつが相接して検出された。このことから母屋には2回の建替えがあり、庇のない時期もあったものと想定される。柱穴からは土師器・瓦器などが出土した。

110~114は土師器小皿、115・117は瓦器碗(図26、図版22)、116は鉄滓である。110・111・114は「て」字状口縁をもつが、屈曲度があまくなっており、平安時代Ⅳ期の古~中段階に属する。112・

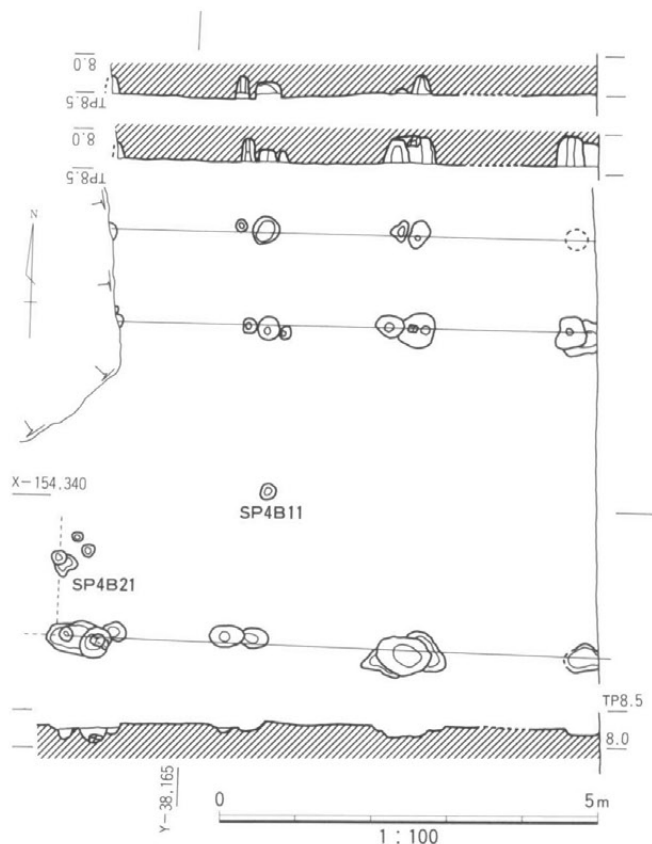


図25 SB4B01平・断面図

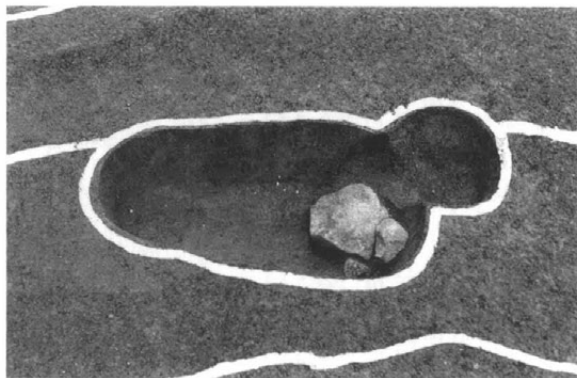


写真3 東調査地SB4B01根石出土状況

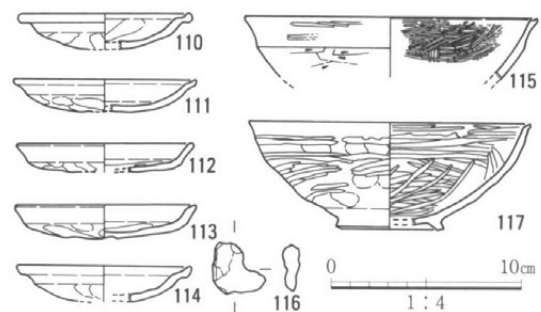


図26 SB4B01出土遺物実測図

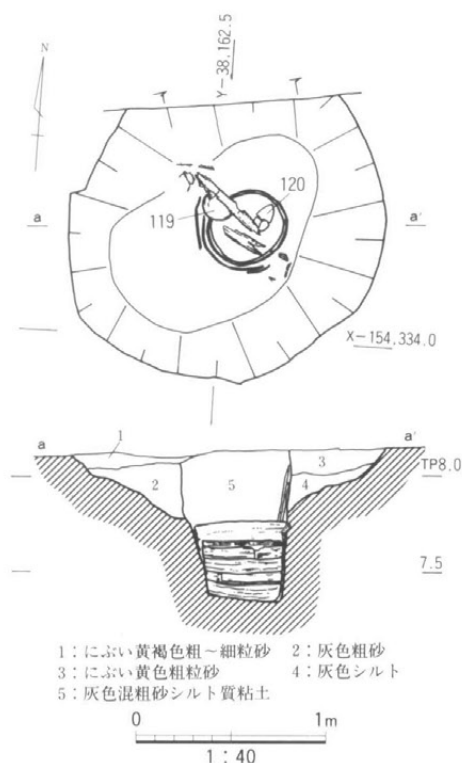


図27 SE4B01平・断面図

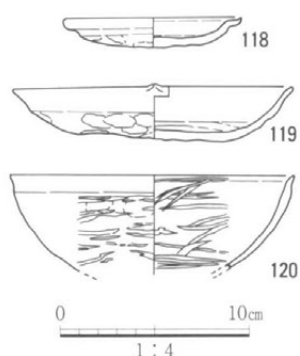


図28
SE4B01出土遺物実測図



写真4 東調査地SE4B01曲物出土状況

113はやや外反しながら上外方に立上がる口縁部をもち、平安時代Ⅳ期でも新段階に下るであろう。115は外面にヘラケズリを施していることから初現期の瓦器碗であり、C-I期に属する。117は内・外面にヘラミガキ調整を施し、C-II期に属する。こうした遺物からSB4B01の年代は11世紀後半から12世紀第3四半期とみられる。

iii) 井戸

SE4B01(図27、図版9)

検出面での直径約1.7m、深さ約0.8mの井戸で、底部の水溜部分は径が小さくなり、5段分の曲物がはめ込まれていた(写真4)。水溜部分以上の構造は抜き取られていて不明であるが、曲物の外側、南東と南西の部分に幅10cmほどの細長い板が垂直に打込まれており、横木を井桁に組んだ際の押さえの板とみられた。水溜部分の堆積物は自然堆積の砂、それ以上は細～粗粒砂の偽礫が混る人為的な埋戻し土であった。水溜部分の上面で遺物(118～120)が出土した。

118は口径9.5cmの土師器小皿(図28、図版22)で、口縁部は「て」字状を呈する。119は土師器皿で内面と外面の口縁部のみにナデ調整を施し、底部には指頭圧痕が残る。口縁部の一部分を内側に折り曲げており、この付近の内面に煤が付着していることから灯明皿として利用されたものと考えられる。120は瓦器碗で、内・外面にやや疎らなヘラミガキ調整を施している。これらの土器はその特徴から平安時代Ⅳ期中段階に属し、SE4B01の年代は12世紀前半と考えられる。

iv) 溝

SD4B01(図24)

幅約0.80m、深さ約0.05mの溝で、東西方向に延びていた。埋土は褐色細粒砂で、顕著な流水の痕跡などはなかった。緑釉陶器・土師器などが出土した。

123(図29)は緑釉陶器皿、128は土師器小皿である。128はやや屈曲のあまい「て」字状口縁をもち、平安時代Ⅳ期古ないし中段階に属する。

SD4B03(図24)

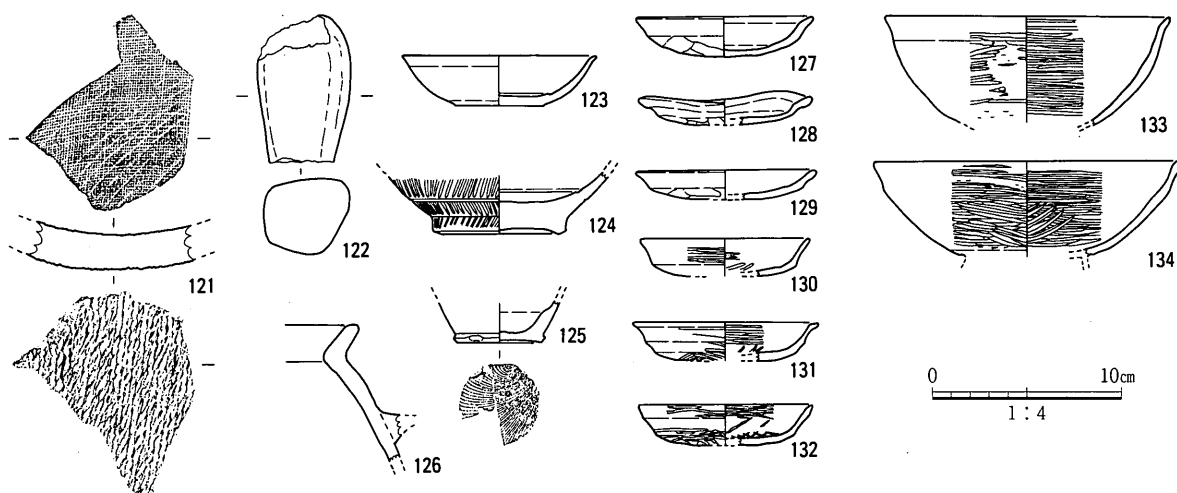


図29 平安時代ピット・その他の遺構出土の遺物実測図

SP4B21 : 127, SP4B25 : 121, SD4B01 : 123・128, SD4B03 : 122・125・132~134, SX4B01 : 124・126・129~131

SB4B01の南で、北東から南西方向に調査区を横切る溝で、幅は約2.50m、深さ0.15m程度であった。埋土はオリブ褐色細粒砂で、顕著な流水の痕跡などはなかった。

SD4B03からはすり石122、須恵器壺125、黒色土器碗133、瓦器小皿132、瓦器碗134が出土している(図29・図版23)。125は回転糸切り未調整の底部をもつ。133はB類の黒色土器で、内・外面をていねいにヘラミガキ調整し、外面にはミガキの前にヘラケズリを加えている。瓦器碗134も内・外面に精緻なヘラミガキ調整を加えている。C-II期に属する。これらの遺物は11世紀後半から12世紀前半に属するものとみられる。

v) その他の遺構

ピット群(図24)

SB4B01を構成する柱穴以外にも9個のピットが検出された。直径0.20~0.30m、深さ0.10~0.15m程度の小規模なものがほとんどであった。柱痕跡がみられるものもあり、SP4B14には直径5cmほどの木杭が遺存し、SP4B25からは根石とみられる凝灰岩が出土したことなどから考えると、いくつかのピットは本来建物を構成していた可能性がある。

SP4B21からは土師器小皿127(図29、図版22)が出土した。口径9.4cmで平安時代IV期中段階に属する。SP4B25からは須恵質の平瓦121(図29)が出土した。凹面に布目と条線が、凸面に縄目がみられる。

SX4B01(図24)

調査区南半部で検出された不整形な落込みで、深さは約0.1mであった。埋土は褐色砂質シルトであっ

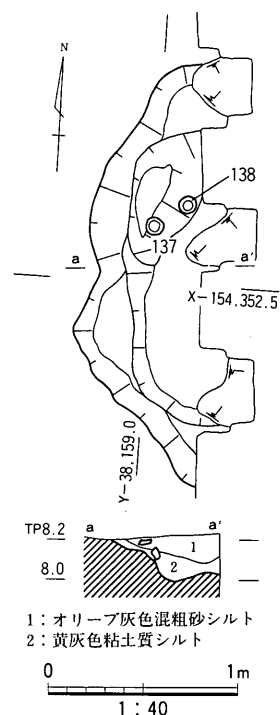


図30 SX4B09平・断面図

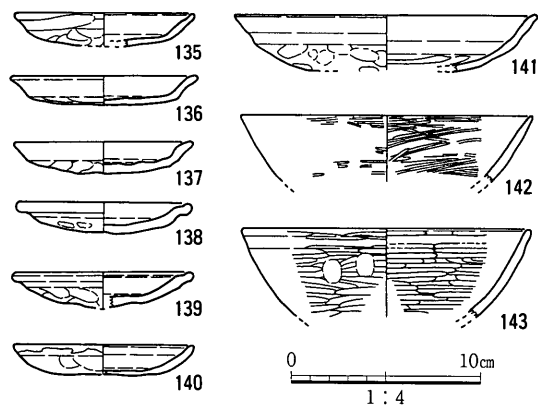


図31 SX4B09出土遺物実測図

た。この遺構からは土師質羽釜126、白磁碗124、土師器小皿129、瓦器小皿130・131が出土している(図29、図版23)。瓦器小皿は深い器形で、C－Ⅱ期ごろに属するとみられる。

SX4B09(図30)

調査区中央部東壁際で見つかった遺構で、南北2.2m、東西1.0mで、深さは0.2mであった。平面の形態は円形を呈するが大半は調査区外にあたり、全体の形状は不明であった。埋土は2層に分れるが、ともに人為的に埋戻した形跡などはみられなかった。

135～141は土師器皿、142・143は黒色土器である(図31、図版22)。小皿138・139はかなり崩れた「て」字状口縁をもち、同136・137は上外方へ少し外反しながら立上がる口縁部をもつ。平安時代Ⅳ期中～新段階とみてよいであろう。142・143はB類の黒色土器碗で、内・外面をていねいにヘラミガキ調整している。これらの遺物からみて、SX4B09の年代は12世紀前半から第3四半期と考えられる。

vi) 土器埋納遺構

SP4B30(図32、図版9)

SB4B01などと同じ4Biii層基底面で検出したが、本来の遺構面は4Bii層基底面である。SD4B03の南の肩を切って検出された。東西0.45m、南北0.30m、深さ0.08mであった。埋土は褐色シルトで、土師器皿10枚が口縁部を上にして雑然と重ねられた状態で出土した。

144～152は土師器小皿、153は土師器皿である(図33、図版23)。144は口縁端部外面の下に強いヨコナデを加えており、「て」字状口縁の崩れきった形態とみることができる。ほかの土師器小皿はやや外反しながら上外方に立上がる口縁部をもっている。153は内面と口縁部外面にナデ調整を加えており、底部外面には指頭圧痕が残っている。これらの土器は平安時代Ⅳ期新段階に属するとみられ、SP4B30には12世紀中ごろから第3四半期の年代が与えられよう。(高橋)

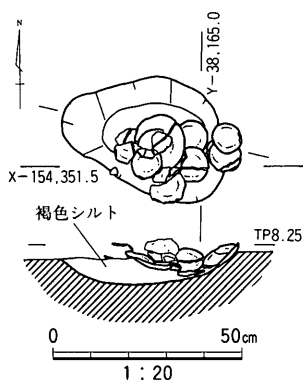


図32 土器埋納遺構SP4B30
平・断面図

6) 鎌倉時代以降の遺構

4Bii・4Bi・3iv・3ii層のそれぞれ下面で遺構を検出した(図34、図版10)。4Bii層下面では調査区北部で東西方向の溝を検出し、やや南側では南北方向の小溝を発見した。4Bi層下面ではおもに調査区南部で不整形の落込みが見られた。3iv層下面では南北方向の小溝や浅い落込みを

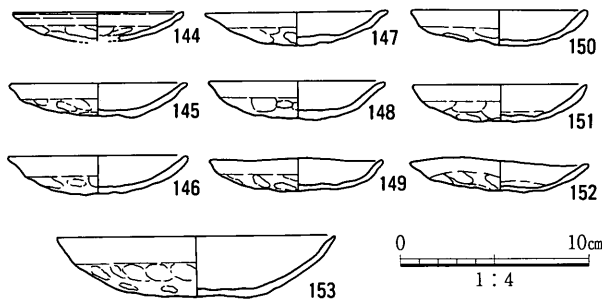


図33 土器埋納遺構SP4B30出土遺物実測図

検出した。この検出面以深は、北方の4B①層以下の耕起されていない4B層が段状の高まりとして残った。以上の遺構は上位層準を埋土とし、平面形態も不整形なものが多い。また、深さも0.1mに達するようなものはまれで、畝間の溝や鋤溝といった耕作に係わる遺構とみられた。3ii層下面は、調査区の南半部については

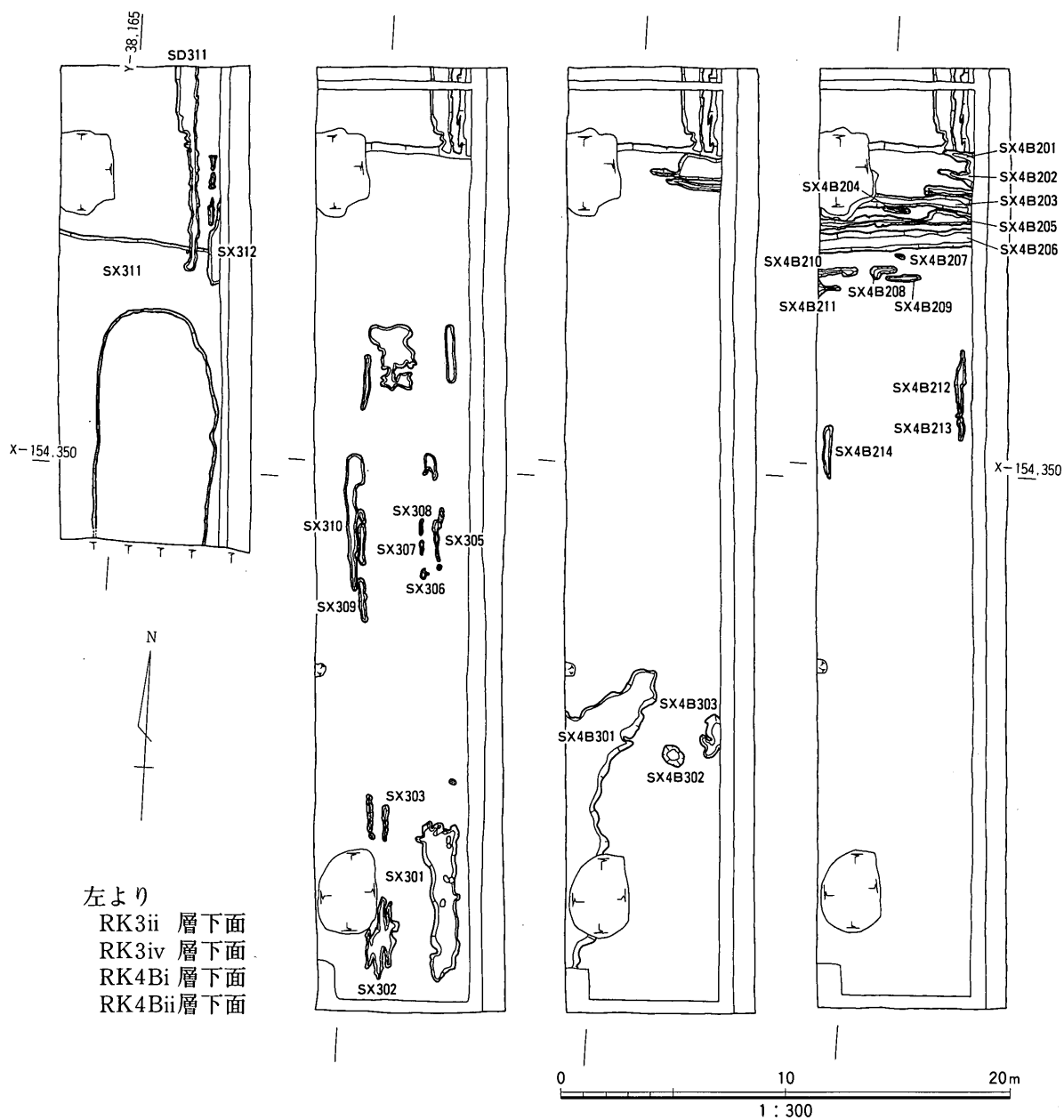


図34 東調査地遺構配置図(鎌倉時代以降)

重機で掘削し、平面的な調査を行っていないが、北半部では島畠溝が検出された。SX311がそれで、深さは5 cm程度であった。内側には平面が舌状に高い部分があり、これが島畠の畝部の基底と考えられる。それぞれの遺構は地層の年代観から、4Bii層下面遺構は13世紀代、4Bi層下面遺構は13世紀後半以降、3iv層下面遺構は14世紀以降と考えられる。(高橋)

第2節 西調査地北区(NG96-66次調査)

1) 地層と遺物

i) 層序

本調査区には現代の盛土・作土である0・1層の下に、2(i~iv)層、3層(一括)、4B層(一括)、4C層(上・下部)、5層、7A(iv・vi)層、7Bi層、8A~C層、9A~C層、10A~C層が分布した(図35、図版2・4)。2層、5層、7A(iv・vi)層、8A~C層は本調査地が模式地のひとつである。

2層は4分された。

2i層：オリブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は最大15cmであった。

2ii層：灰色～オリブ灰色細粒砂混りシルト層で、層厚は最大15cmであった。

2iii層：オリブ灰色細粒砂混りシルト層で、層厚は最大15cmであった。

2iv層：灰色粘土質シルト層で、層厚は最大10cmであった。

3層は黄褐色細粒砂層で、層厚は最大で15cmであった。本調査地では細分されず、3層一括とした。

4B層は灰オリブ色砂混りシルト層で、層厚は最大で20cmであった。本調査地では細分されず、4B層一括層準とした。特に北方に向って砂質が強くなっていた。下面で鋤溝が検出された。

4C層は、本調査区では2分された。西調査地南区で、最大7層に細分された4C層がこの2層に収斂しているのか、あるいは上方が耕起されて下方の2層だけが遺存しているのか判断がつかなかった。4C層上部・4C層下部として記述を進める。4C層上部は黄褐色細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は約10cmであった。本層下面で溝などの遺構が検出された。4C層下部は黄灰色砂混りシルト質粘土層で、層厚は約13cmであった。本層下面で溝などの遺構が検出された。調査区北半部で、両層の間にごく薄い中粒砂層が挟在する地点があった。

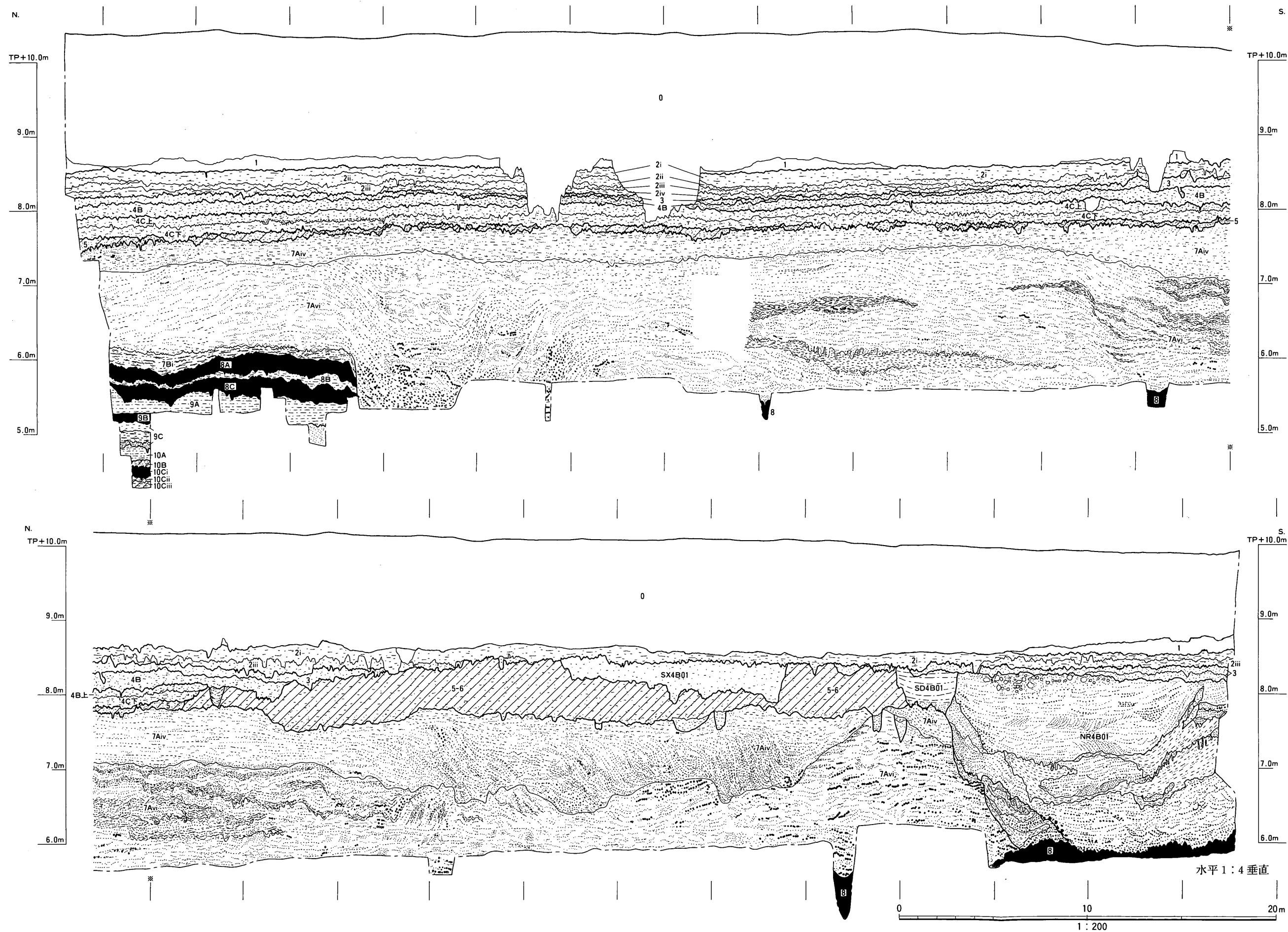
5層は暗灰黄色シルト質細粒砂層で、層厚は最大で15cmであった。下面で鋤跡が検出された。本層から4B層までの層準は、調査地の北半部にのみ分布し、南半部には5～6層に相当する耕起されていない層準が分布していた。

5-6層は、灰黄褐色シルト層で暗色帯を形成し、集落地内での堆積状況を示しているとみられた。層厚は最大で70cmであった。層内で掘立柱建物や溝などの遺構が検出された。

7Aiv層は明黄褐色砂礫～暗オリブ灰色粘土質シルト層で、層厚は最大で130cmであった。側方と上方へ細粒化し、特に北方では粘質が強くなっていた。葉理の傾きからみて、本層を堆積させた水流はほぼ東から西へ向ったとみられた。

7Avi層は灰黄色砂礫層で、層厚は最大で220cmであった。調査地北部に下位層準を激しく下刻するチャネルがあり、側方と上方へ泥に移化していた。北側方では特に泥がちになっていた。本層上面で土壌などの遺構が検出された。葉理の傾きからみて、本層を堆積させた水流はほぼ東から西へ向ったとみられた。

7Bi層以下は北部の地層確認トレンチでの断面観察の所見による。



7Bi層は暗オリーブ色シルト層で、層厚は最大で20cmであった。水平方向に堆積した植物遺体が含まれていた。

8A～C層の記載は前章を参照されたい。

9A層は暗緑灰色粘土質シルト層で、層厚は約20cmであった。

9B層は黒色粘土質シルト層で、層厚は約15cmであった。

9C層は暗灰色シルト質粘土～暗緑灰色粘土質粗粒砂層で、層厚は約30cmであった。

10A層は暗緑灰色粘土質シルト層で、層厚は約20cmであった。

10B層は緑黒色粘土層で、層厚は約10cmであった。

10Ci層は黒色粘土層で、層厚は約15cmであった。

10Cii層は暗灰色粘土層で、層厚は約5cmであった。

10Ciii層は黒色粘土層で、層厚は5cm以上であった。

(高橋)

ii)各層出土の遺物

2・3層出土の遺物(図36、図版24)

154～157は陶磁器、160・161は瓦質土器、162は瓦質焼成の瓦である。154・155・160～162は2iv層出土、156・157は2～3層出土の遺物である。154～157の陶磁器は近世に下るもので、2層は近世以降に属する。160は瓦質焼成の鉢、161は三足釜の支脚部で、ともに14世紀ごろの遺物であり、本来、下位層準に属するものである。158は瓦器碗の底部で、3層から出土した。高台も矮小化しており、C-Ⅳ期でも新しい段階に属する。3層の年代は、14世紀後半以降に下るとみられる。

4B・4C・5層出土の遺物(図36)

159は土師器碗の底部、163は瓦器碗で4B層出土の遺物である。159は高台がかなり高く発達しており、平安時代Ⅲ期新段階か同Ⅳ期古段階に属する。163は内・外面に精緻なヘラミガキを施しており、C-Ⅱ期でも早い段階に属すると考えられる。4B層の年代はこれらの遺物の特徴から12世紀前半ごろとみられる。

165は4C層上部から出土した碗の底部で、発達した高台を有する。平安時代Ⅲ期に属する。図化できるものはなかったが、4C層上部には黒色土器が含まれる。4C層上部は11世紀後半ごろまでの遺物を含むものとみられる。

166・167・169～174は土師器、168は須恵器で4C層下部から出土した。169・170は碗で、内面と外面口縁部付近のみをナデ調整する。ともに平城宮土器Ⅴ～Ⅵに属するとみられる。169は外面に「○」印の墨書がある(図版37)。平安時代Ⅰ期とされるNG87-35次調査南Ⅱ区SD007[大阪市文化財協会1992a]で同様な形態のものが出土しており、ほぼ同時期と考えられる。また、「○」印の墨書土器はNG87-35次調査地で5～6点出土している。166・167は小型壺である。171・173は甕で、口縁部にナデを加え、体部に指頭圧痕が残る。173は、奈良時代から平安時代初頭にかけて、周辺地域でよくみられるものである。172は付け庇竈の焚き口部上方の破片である。以上のように、4C層下部出土の遺物は奈良時代末から平安時代初頭にかけてのものが多く、平安時代Ⅰ期ごろを下限とする。

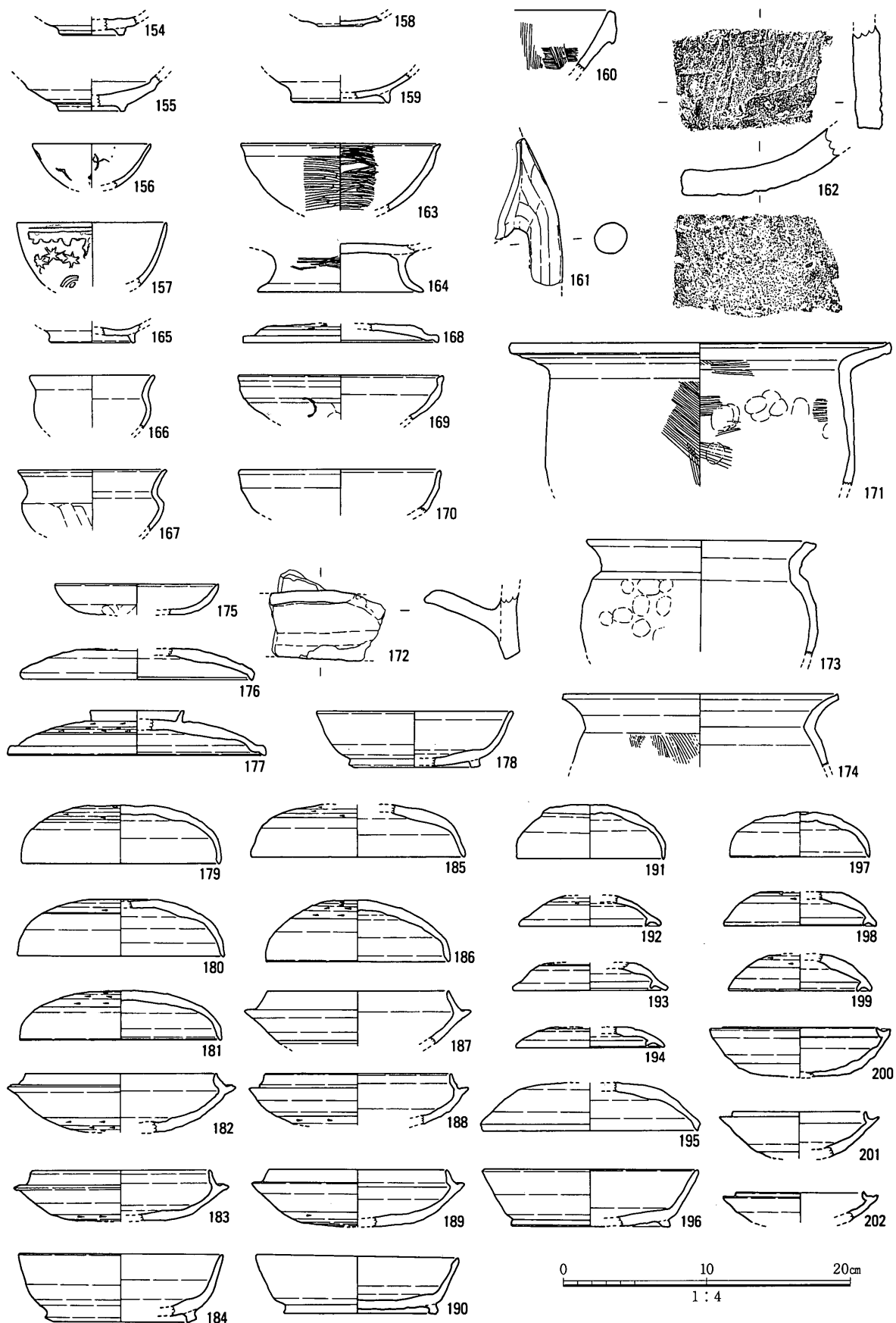


図36 西調査地北区各層出土の遺物(その1)

2iv層: 154・155・160~162、2~3層: 156・157、3層: 158、4B層: 159・163、4B~5層: 164、4C層上部: 165、4C層下部: 166~174、3~5層: 177、5層: 175・176・178、5-6層: 179~202

175は土師器、176・178は須恵器で5層から出土した。175は皿で直径11.4cmを測る。平城宮土器Ⅲとされる平城宮SK820[奈良国立文化財研究所1976]などに類例があり、奈良時代のものと思われる。杯蓋176もその形態から奈良時代のものと考えられる。杯身178は平城宮土器Ⅰに属する。5層に含まれる遺物は奈良時代に属するとみられる。

5-6層出土の遺物(図36～38、図版25・26)

179～202・225・226・228・229・231～234・237・239・243は須恵器、230は瓦、203～224・227・235・236・238・240～242は土師器、213は黒色土器、218は製塩土器である。179～202・237・239は杯身・杯蓋である。杯蓋179～181・185は口径が14～15cmほどで、天井部と口縁部を画する稜は消失し、外面の約2分の1に回転ヘラケズリを施している。これらはTK43型式に属する。杯蓋186・237は口径が13cm前後で、TK209型式に属する。杯身182・183・188・189は口径13cm前後で、短く内傾した立上りを有する。TK43型式に属する。187は口径12.7cmで、立上りはやや高い。TK10型式に属する。杯蓋191・197は口径10cm以内で、天井部はヘラ切り未調整である。杯蓋192～194・198・199は身・蓋逆転後のもので、口径は8cmほどと小型である。これらはTK217型式に属する。杯蓋195は、内面のかえり消失後のもので、奈良時代に属するとみられる。杯身200は口径10.5cmで、底部はヘラ切り未調整である。TK217型式でも古相とみることができよう。口径9cmほどと矮小化した201・202はTK217型式に属する。杯身184・190・196・239は、184・190・196は口径14～15cmで、高台は若干外方に踏ん張っている。飛鳥Ⅳ～平城宮土器Ⅱとみられる。239は口径10.6cmで、口縁は上外方へ立上がり、高台は低くなっている。平城宮土器Ⅵに属する。皿225・226は口径25cmを超す大型品で、底部外面を回転ヘラケズリで調整している。飛鳥時代末ごろから奈良時代前半に属するものとみられる。232は飛鳥時代の長頸壺の脚部である。233は平瓶で、肩部が角張ることから奈良時代のものであろう。234は横瓶で、古墳時代後期のものとみられる。

203～209・238は土師器杯である。203～205・207・238は内面に放射状の暗文を施している。口縁部外面をナデ調整するが、底部にヘラケズリを加えたものはわずかである。飛鳥Ⅲから平城宮土器Ⅰに属するものとみられる。杯220は口径19.6cmで、口縁端部を内側へ丸め込み、内面には1段の放射状暗文を、底部外面にはヘラケズリ調整を施している。平城宮土器Ⅲに属する。219・221・240～242は皿である。口縁端部を内側に丸め込む219は平城宮土器Ⅴに属するとみられる。その他は口縁端部の形態や、1段の放射状暗文(221・241・242)や、底部外面のヘラケズリ(221・241)からみて飛鳥時代のものと判断できる。215～217・223・227は甕で、215・216は飛鳥時代、217は奈良時代のものであろう。224は鍋とみられる。235・236は竈の破片である。

以上のように、本層に含まれる遺物は須恵器TK43型式から奈良時代の平城宮土器Ⅵに及んでおり、地層の年代は5世紀後葉から8世紀末にわたると考えられる。

7Aiv・vi層出土の遺物(図38、図版26)

7Aiv層から出土した製塩土器248は厚手丸底の粗製のものである。[京嶋寛1992a]によれば長原遺跡では須恵器TK10型式以降に登場するものとされ、本層の年代もそれ以降となる。

7Avi層は氾濫性の水成層であるので、本来、下位層準に属するさまざまな時代の遺物を含んでい

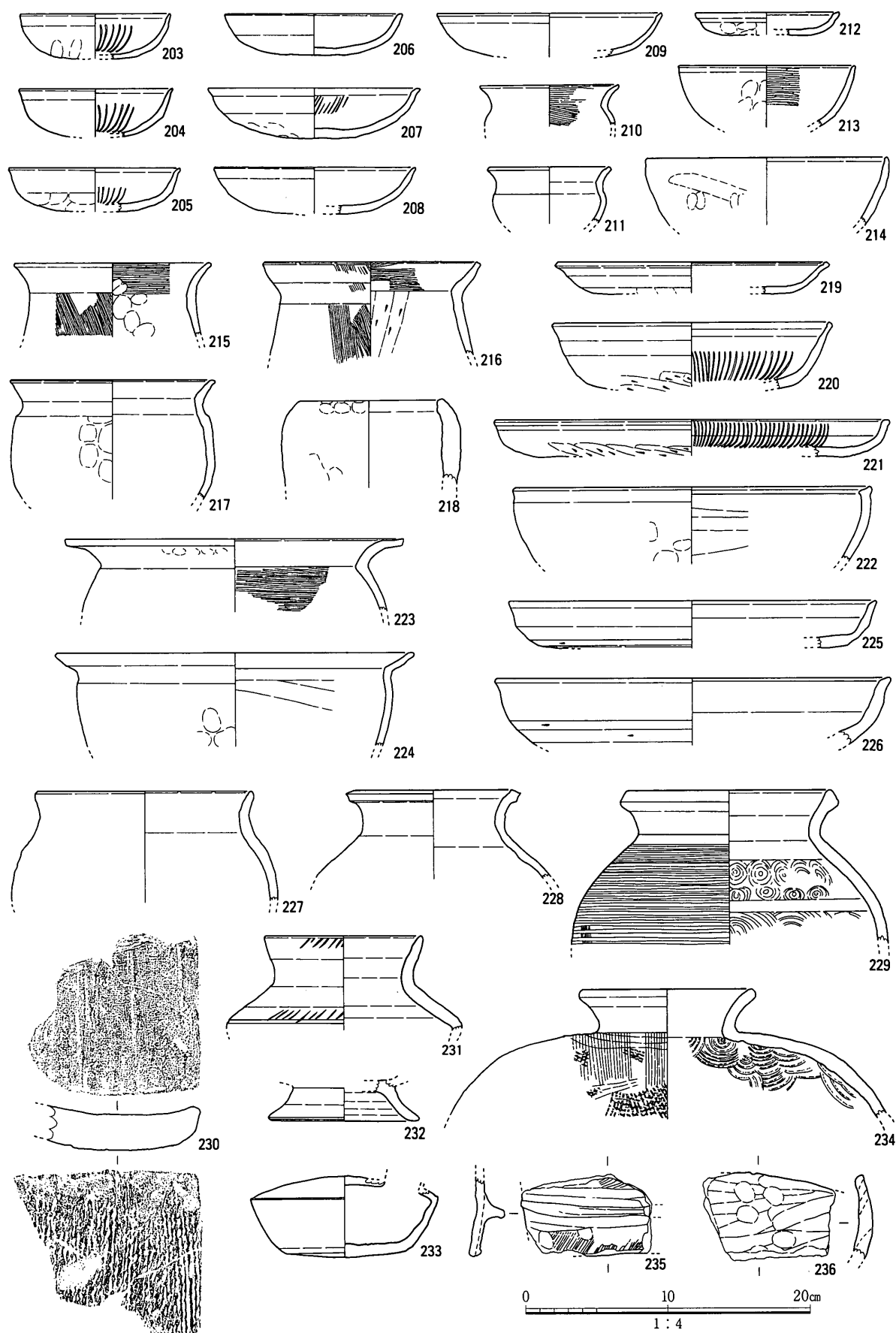


図37 西調査地北区5-6層出土の遺物

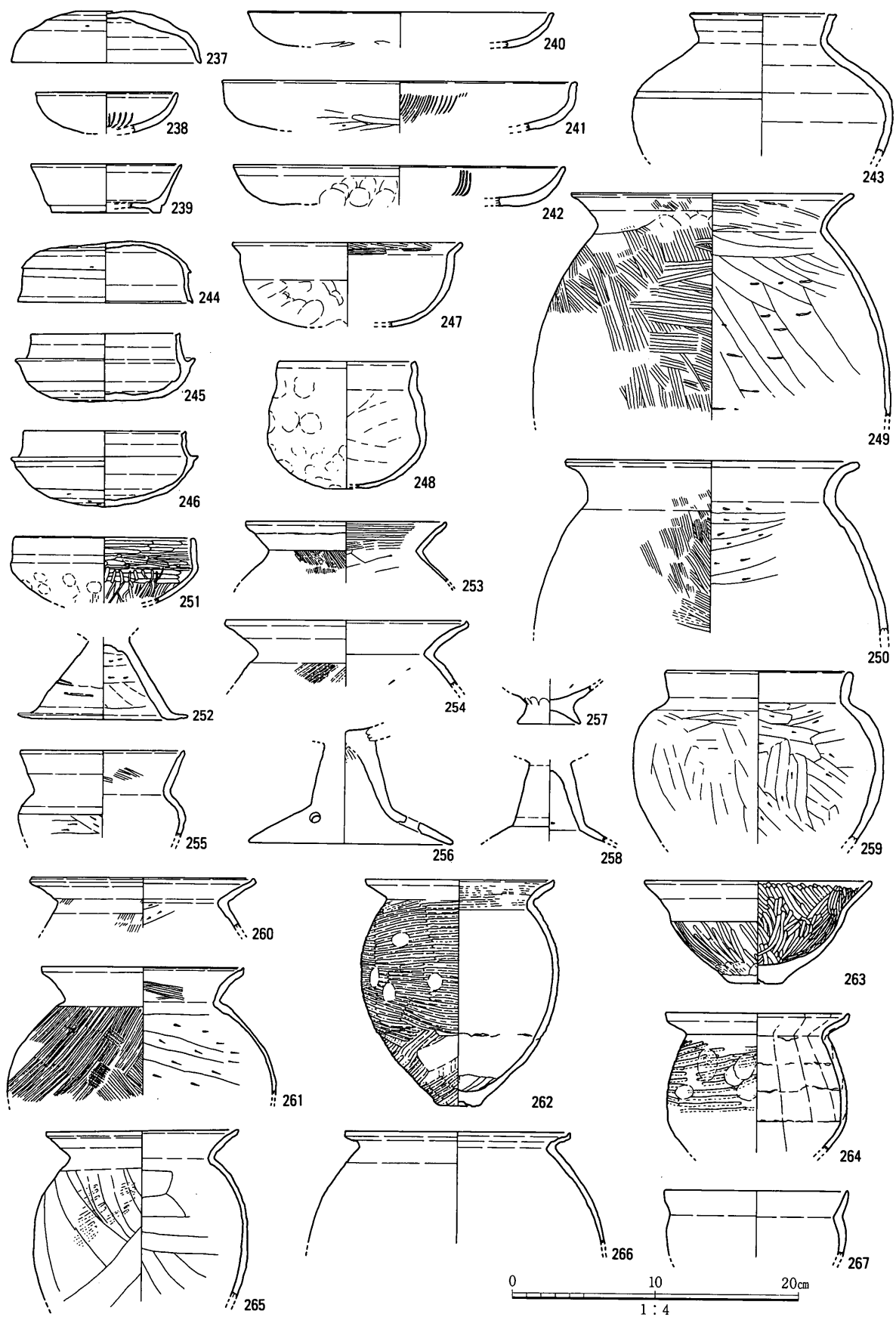


図38 西調査地北区各層出土の遺物(その2)

5-6層：237～243、7Aiv層：248、7Avi層：244～247・249～259、8A層：260・261・267、8C層：262～265、9B層：266

る。244～246は須恵器、247・249～258・259は土師器である。251・252はいずれも高杯と思われる。251は杯部で、精良な胎土であり、内面はミガキ、外面はナデ調整を施している。252は脚部であり、内面にケズリを施す。253・254は河内型庄内式甕(生駒西麓産)である。255は小型丸底壺である。底部外面付近にケズリ調整を加える。古墳時代前期で小若江北式の段階に属する。256・258は高杯脚部である。257は鉢底部である。底部外縁端部をつまみ出す特徴から、弥生時代後期末から庄内期に属すると考えられる。259は甕である。胴部下半に煤の付着が顕著である。肩部から口縁端部にかけてを強い横ナデで仕上げ、内面にケズリを施して器壁を薄くする特徴は、布留式甕と類似するが、口縁端部の肥厚は観察されず、内面のケズリも下から上へ単に削り上げるだけである。典型的な布留式甕の消滅した段階のものか、あるいは、布留式甕を模倣して作製したものかであろう。7Avi層出土遺物でもっとも新しい遺物は杯蓋244、杯身245・246で、244・245はTK23型式、246はTK47型式である。このことから7Aiv層の年代は6世紀中葉、7Avi層は5世紀後半と考えられる。

8・9層出土の遺物(図38、図版27・38)

土師器260・261・267は8A層から出土した。260・261は河内型庄内式甕(生駒西麓産)である。267は鉢で、砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。口縁付近は強い横ナデによって仕上げられている。口縁外面には庄内式の口縁調整によくみられるナデの停止痕が認められる。庄内式から布留式古段階に属するものと考えられる。

262～265は8C層から出土した。262は分割技法を用いて成形し、連続ラセンタタキで、胴部を球形に整えている。弥生時代後期末に属する。263は小型鉢である。口縁部は直線的におさめられており、庄内式のように、口縁端部をはね上げたり、受け口状にするといった特徴は認められない。弥生時代後期後半のものである。264・265は甕である。264は小型の球形の胴部であり、分割成形を行っている。口縁は強い横ナデで調整し、端部を受け口状にする。弥生時代後期末に属すると考えられる。265は胴部を部分的にタタキで整形したのち、ナデによって最終調整を行っている。比較的長い胴部が想定されることも加味すると、弥生時代後期前半のものと思われる。

266は9B層直上から出土した。はね上げ口縁で、器壁はきわめて薄い。頸部から肩部にかけて指頭圧痕がある。弥生時代中期後半に属する。

以上のように出土遺物の特徴から、8A層は古墳時代前期の庄内期から布留式古段階の時期、8C層は弥生時代後期から古墳時代前期の庄内期、9B層は弥生時代中期後半と考えられる。

(高橋・杉本)

2) 古墳～奈良時代の遺構と遺物

i) 製塩土器の出土

5世紀後半の水成層である7Avi層の掘削中、製塩土器が平面的な広がりをもって出土した(図



写真5 西調査地北区7Avi層内製塩土器出土状況

39、写真5)。出土地点は調査区北端から15mほど南側で、分布範囲は南北約2.5m、東西約2.0mであった。製塩土器の分布にはおおむね4個所の集中地点があり、合計約500点の製塩土器片と焼焦げた木片、炭が出土した。垂直分布は、全体でTP+6.5～6.6mの範囲にあり、集中地点別でも約5cmの幅の中に収まる。この地点付近の7Avi層の堆積状況は、シルトや粘土質シルトが水平に堆積し、粘質の強い部分である。出土状況や地層の堆積状況からみて、これらの遺物は水流で押流されてきたというよりは、ほぼこの場で使用された状況のまま埋没したとみた方がよい。製塩土器が塩の容器としても用いられたとみるならば、塩や火を使ったなんらかの祭祀がこの場で行われたと考えられよう。

製塩土器(図40、図版31)は数cmから数mm角に細片化している。厚さは1～2mmと非常に薄い。外面調整は、横方向のタタキを加えるものとナデないし指掌文が残るものがある。内面調整はユビナデないし貝殻条痕の残

るナデで、後者は外面にタタキのない破片に伴うばあいが多い。全体の比率としては外面にタタキを有するものは少ない。全体の形態がわかる個体はないが、体部から口縁部にかけてほぼ直立し、口径はおおむね6～7cm前後とみられる。球面を帯びた底部付近とみられる破片もあることから、全体の形態としては薄手で丸底、体部から口縁部が直立する形態で、丸底Ⅰ式[広瀬和雄1988]に属すると思われる。色調は黄褐色～黒褐色、胎土は精良で、備讃瀬戸産とされるものに特有な細かい砂粒を多く



図39 7Avi層中製塩土器出土状況平面図・垂直分布図

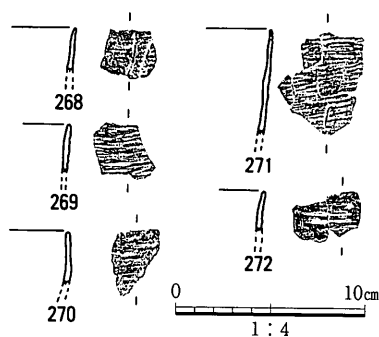


図40 7Aiv層中出土製塩土器実測図

含み、ざらついた感触を与えるものはない。

ii) 土壌とその他の遺構

7Aiv層を除去し、7Aiv層上面で遺構を検出した。調査区北端から約30mの地点で2基の土壌(SK7A01・02)と溝状の遺構SX7A01を検出し、また、調査区南端から18mの東壁断面清掃中に、同じ検出面で、土壌1基(SK7A03)が見つかった。これらの遺構の存在は、7Aiv・vi層の2層の水成層が堆積する間に時間的間隙があったことの証拠である。

SK7A01・02(図41)

SK7A01は南北0.75m、東西0.55mの楕円形の平面形態をもち、深さは0.35mであった。埋土は3層に分層でき、いずれも偽礫を含んでおり、人為的に埋戻したものとみられた。土師器の細片が出土したが、時期判定が可能なものはなかった。SK7A02は直径0.7mのほぼ円形の平面形態をもち、深さは0.2mであった。埋土は2層に分層され、上層は粘土質シルトや細粒砂の偽礫で構成される埋戻し層、下層は細～中粒砂で構成され、ラミナが観察されることから自然堆積層とみられた。SK7A01・02いずれにも柱痕跡はみられず、機能は不明である。

SK7A03(図42)

側溝を掘削した際に大部分を掘ったため正確な大きさや形態は不明であるが、断面観察によると南北0.60m、深さ0.27mであった。残存部分の平面形態は半円形を呈しており、埋土は暗オリーブ灰色細粒砂混りシルトであった。遺物は出土しなかった。SK7A01～03の時期は、遺構が掘込まれた地層と上面を覆う地層の年代から6世紀前葉に求められる。

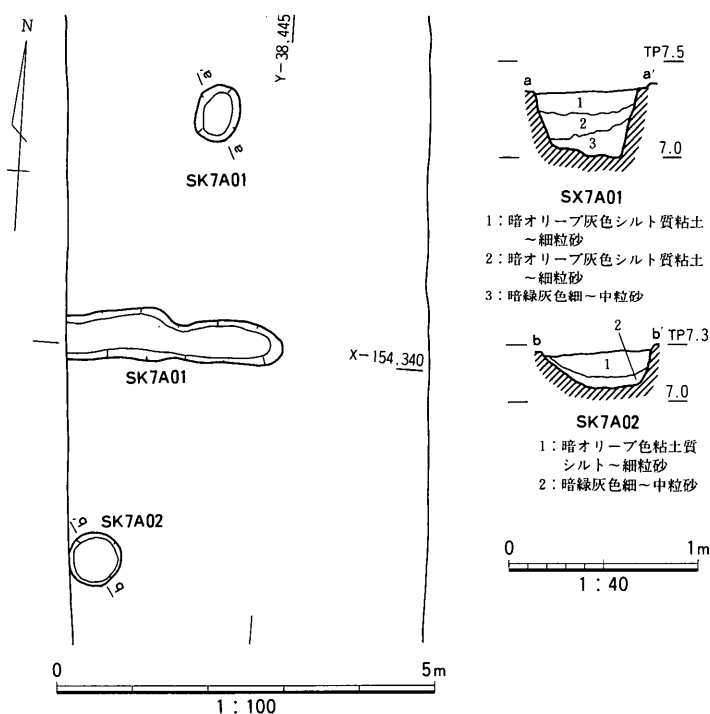


図41 SK7A01・02平・断面図

SX7A01(図41)

SK7A01とSK7A02の間地点で検出された。溝状を呈し、幅は約0.60m、深さは0.06mであった。埋土は灰色粘土質シルトであった。

5-6層はすでに述べたように集落地内の堆積状況を示す包含層であり、断

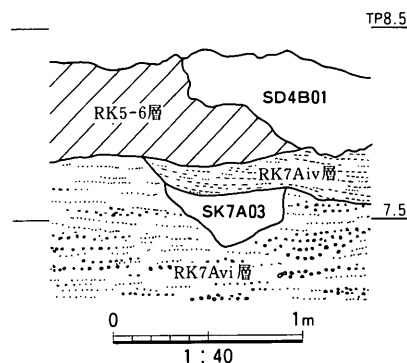


図42 SK7A03断面図

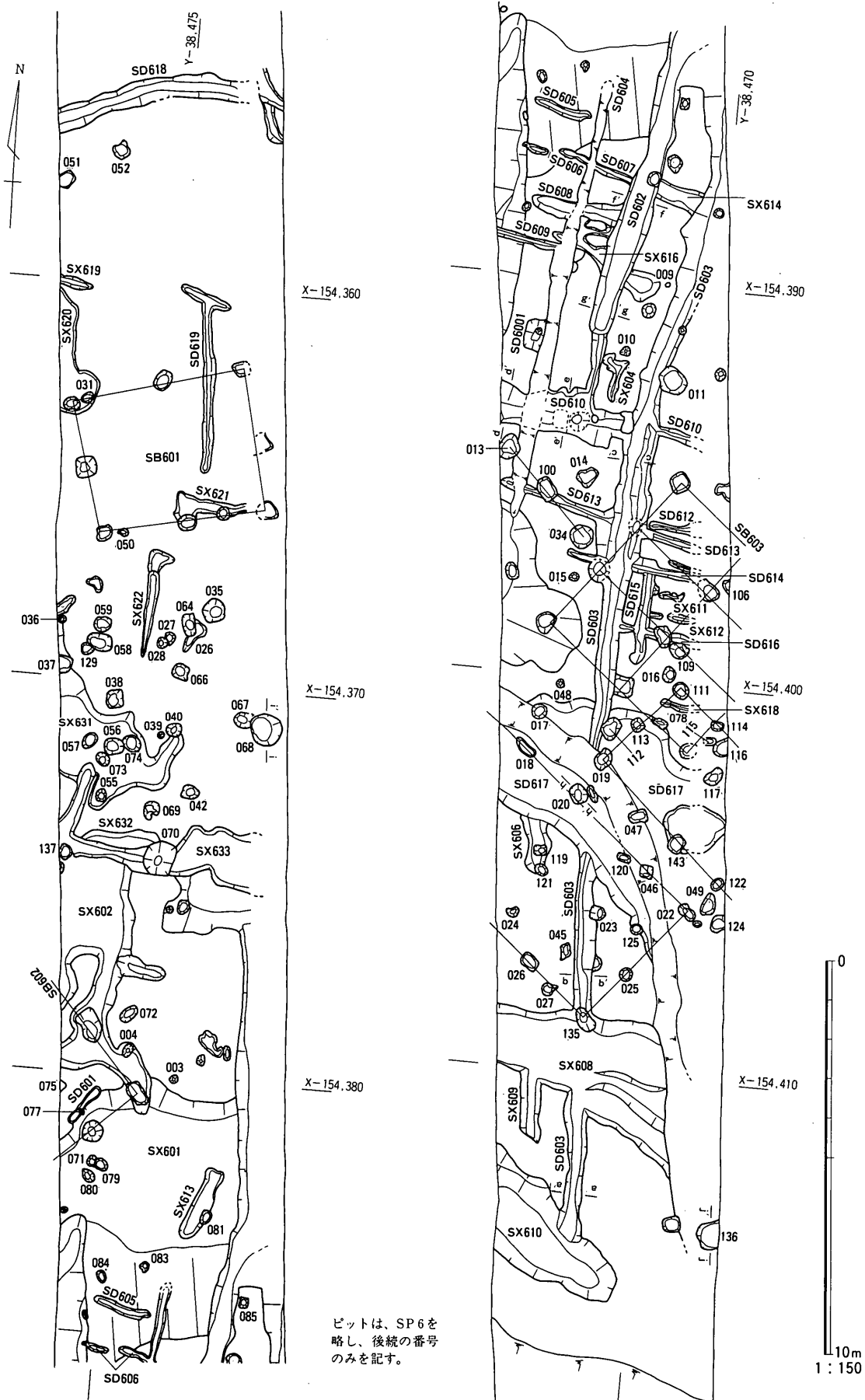


図43 西調査地北区遺構配置図(古墳～奈良時代)

面では明確に分層できなかったが、最大層厚0.7mの層内に生活面が遺存することが予測できた。このため0.1m毎に掘削して遺構検出を行う、任意分層発掘を行った。その結果、層内のTP+7.8m付近で溝群を検出し、さらに、5-6層を除去した7Aiv層上面で、掘立柱建物・溝などの遺構を検出した(図43・図版11)。これらの遺構の掘込み面も、本来5-6層内の生活面に求められるべきものである。以下、iii)からvi)で後者検出面の遺構について述べ、その後vii)で前者検出面の溝群について紹介する。

iii)掘立柱建物

SB601(図43・44、図版12)

南北2間(3.33~3.65m)、東西2間(4.05~4.22m)の建物であった。柱穴は長径が0.5mほどのもので、柱痕跡は直径約0.1mであった。柱間は、南北の柱筋が1.75m、東西の柱筋が2.07mであった。北側の東西の柱通りの方位はN63°Eであった。

柱穴埋土から土師器小皿273(図47)が出土した。口径は9.4cmで、口縁部は外上方へ直線的に延び、外面にナデが加えられている。小さな破片のため断定は避けるべきではあろうが、平城宮長屋王邸宅跡SD4750[奈良国立文化財研究所1989]など奈良時代に類例があるようで、奈良時代のものとしておく。

SB602(図43・45)

調査区の西壁際で、東南隅部の柱穴3個のみを検出した。南北1間(2.05m)以上、東西1間(1.46m)以上であった。柱穴は長径0.5~0.8mほどで、柱痕跡は抜取りのためにはっきりしなかった。南北の柱通りの方位はN40°Wであった。

柱穴の埋土から須恵器杯蓋274(図47)が出土した。口径は14.5cm、高さは3.3cmで、天井部と口縁部を画する稜は消失しており、TK43型式に属する。

SB603(図43・46、図版12)

調査区の中央部のやや南寄りで検出した建物で、建物の東隅は調査区の東の外側にあたる。南西に面する柱通りで2間(復元値で5.00m)、北西に面する柱通りで3間(4.88m)で、総柱の建物であった。柱穴の平面形態はおおむね円形で直径は0.6m前後であった。断面観察によると柱

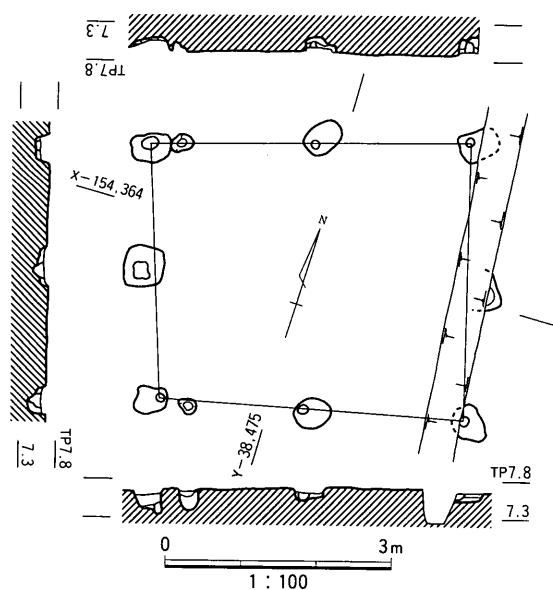


図44 SB601平・断面図

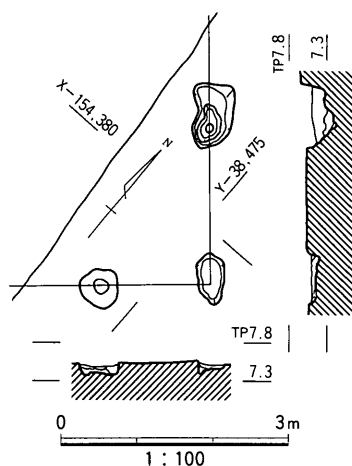


図45 SB602平・断面図

痕跡は直径0.15mほどであった。柱間は、南西に面する柱通りで2.50m、北西に面する柱通りで1.63m(平均値)であった。建物の方角は北西の柱通りでN52°Wであった。

(高橋)

iv) ピット

SP6001(図43・48、図版13)

調査区南半部で検出した柱穴である。柱穴の平面形は隅丸長方形で、長辺0.70m、短辺0.50m、深さ0.15mであった。底面には平面形が円形の柱痕跡があり、この部分は直径0.20m、深さ0.15mであった。この柱穴で注目すべきことは、柱穴内からウシの四肢骨が埋められた状況で見つかったことである。その紹介と解釈の予察は[久保和士1997]で行った。ここでは、より詳しく出土状態を記載・整理しておきたい。

骨が見つかったのは遺構埋土の上部からで、長辺0.4m、短辺0.3mほどの長方形に組み並べられたようであった。その範囲は柱穴の輪郭とおおむね相似形になっていた。遺構検出時には骨の突出した部分のみが見え、下位層起源の偽礫を若干含むシルト質細粒砂で覆われていた。骨の検出と記録が終わった後、[久保和士1995]に述べた

方法によって脆弱な骨を硬化させながら、記録を追加しつつ、上から順に骨を取上げた。すべての取上げが完了したのち、骨が出土した範囲に一部重複する位置から柱痕跡が検出された。しかし、ここに柱が立てられたままの状態、上記の位置に骨を置くことは不可能である。したがって、現場では認識できなかったが、骨が出土したのは柱の抜取穴の中ということになり、柱を抜取る際に掘削した穴の底に骨を並べて埋納した行為が推定される。

次に、各部位の出土状態について述べる。骨の特徴に関する記載は第4章第2節に詳しいが、出土部位の種類と数量を要約すると、肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・手根骨(以上、前肢骨)、大腿骨・脛骨・足根骨(後肢骨)で、左右1点ずつを基本とする。手根骨は左右で出土点数が異なる。

出土した各部位には検出時の損傷がみられたが、左尺骨の肘頭はもともと大きく欠損していた。埋納時の欠失とも思われたが、後から掘られた溝(図43・55)の法面に近いことから考えて、後世の欠

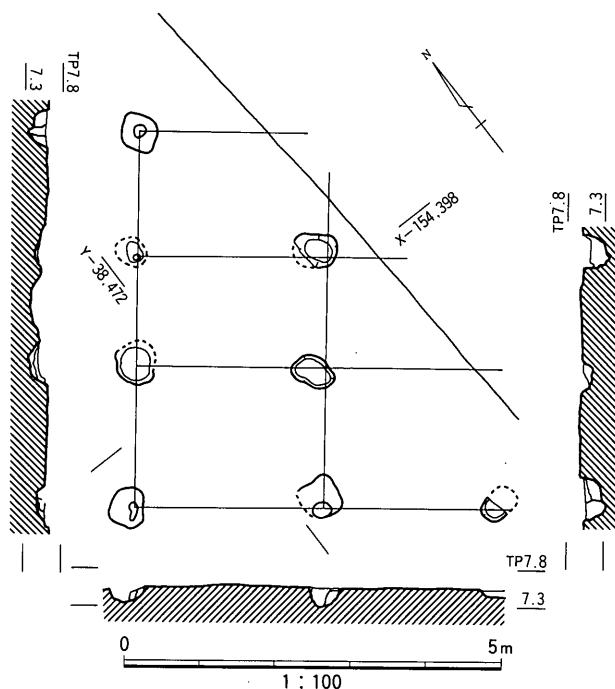


図46 SB603平・断面図

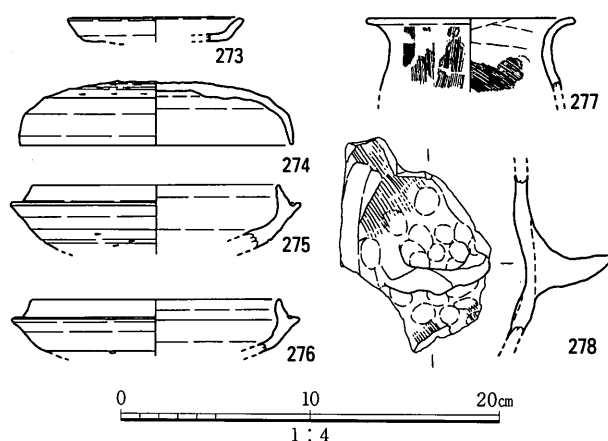


図47 掘立柱建物・ピット出土の遺物実測図

SB601 : 273、SB602 : 274、SP6026 : 275、SP6049 : 276、
SP6038 : 277、SP6071 : 278

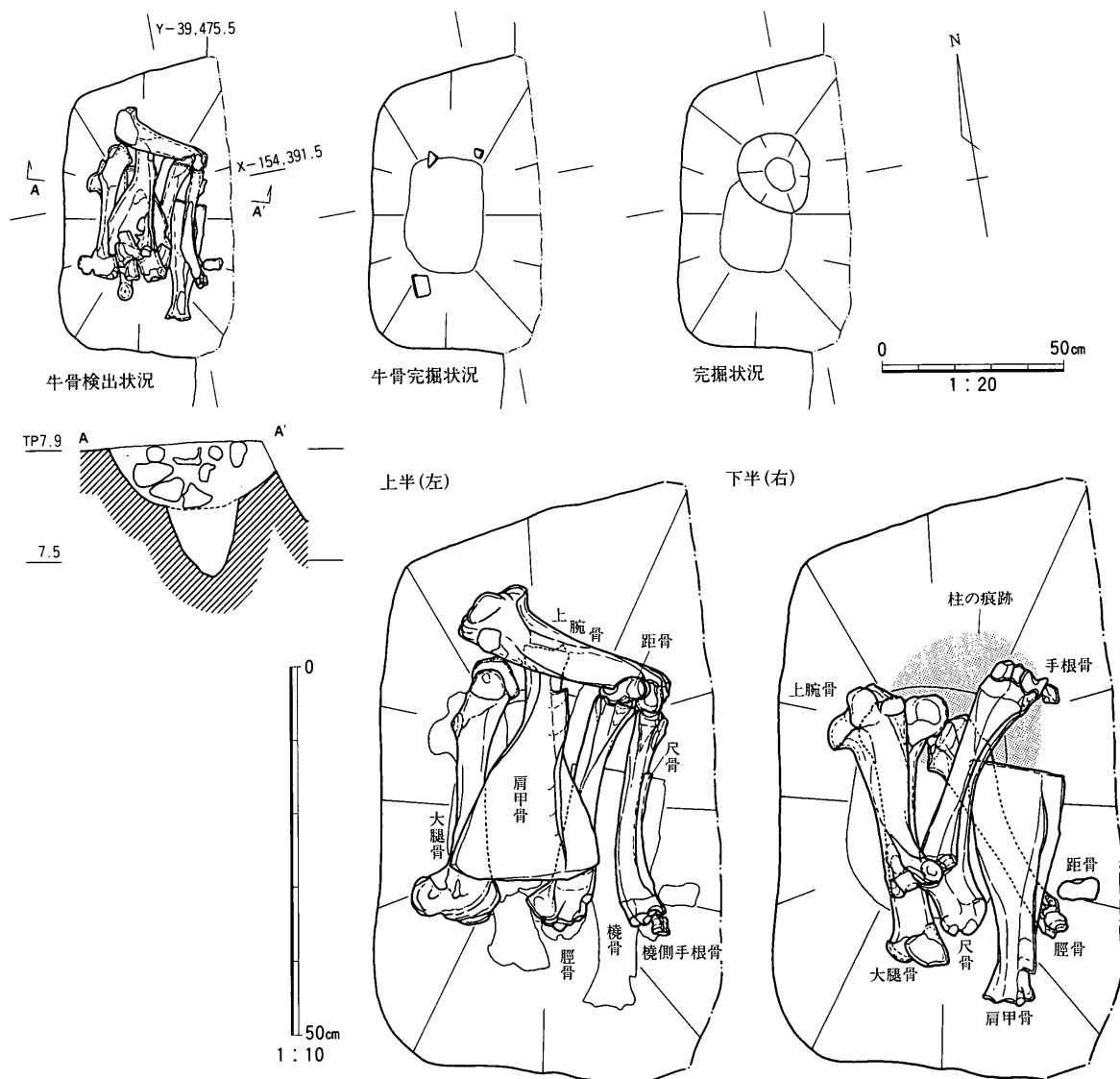


図48 SP6001平・断面図

損であると判断した。前肢骨の上腕骨と橈骨・尺骨は左右とも交連し、橈骨遠位端には数点の手根骨がやはり交連状態で認められた。後肢骨では右側の大腿骨と脛骨が交連し、一方、左側では両者は関節で外されていたが、脛骨の遠位端には足根骨である距骨が交連していた。交連している各部位が同一個体のものであることはいうまでもないが、すべての部位に重複がないことや、後述するサイズやバランスに関する検討結果からみて、これらはすべて同一個体に由来するものと考えられる。したがって、ウシ1頭の四肢(ただし、後肢骨の寛骨と中間列の手根・足根骨以遠を欠く)が埋められていたのである。

出土骨は大きく見て上部と下部の群に分れ、それは左右の違いに対応していた(図48)。骨は長方形の範囲に並べることが意識された上、その順序にまで意図があったことが推測される。また、骨の埋納と直ちに関連するかどうか明らかでないが、骨の直下から須恵器の破片が2個、土師器の破片が1個出土した。この柱穴ではこのほかに出土土器はなかった。須恵器片は最初に置かれた右大腿骨の近位端と遠位端の下に、土師器片は後者のやや東側にあった。これらの位置は「掘形」下端の平面形である隅丸長方形の3つのコーナーに近く、限られた層準・位置に土器があったことは興味深い。

図48の断面図からもわかるように、各部位は非常に近接して出土した。各部位は密着している部分も多く、しかも単純な重層的関係にあるのではなかった。つまり、下位で検出された部位の隙間に差込まれたような位置に、上位の部位の骨端があるばあい認められた。しかも、全体として組み並べられた長方形の範囲から逸脱したようなようすもない。そのようなすは「積んだ」というより「組んだ」というにふさわしい状態であった。そして、これらの部位に付着する筋肉の厚みなども考慮すれば、肉付きの状態で埋められたとは考えられず、肉が除去された四肢骨であったといえる。

このようにSP6001からは非常に特異な状態で埋納されたウシの骨が見つかった。なおかつ、その状況を比較的詳細に記録することができた。第IV章第2節では、動物遺体としての骨学的な特徴を述べるとともに、埋納の意味について若干の検討を行う。

(久保)

その他のピット

明確に建物として認識されたのは先述した3棟だけであるが、ほかにも多くのピットがあり、その中には柱の通りはあるが建物として組まないもの、柱の基部が遺存していたり明瞭に柱痕跡が観察されるが、やはり建物として組まないものがあった。SB603北西のSP6034・6100・6013は直線上に並び(図43)、SP6101には直径0.1mほどの柱が遺存していた。しかし、この直角方向に並ぶ柱穴はなく、建物としては復元できないが、柵であった可能性はある。また、SB603の南側では、SP6122・6143・6019・6113・6111・6114が長方形に並んだが、柱穴の抜けている個所もあり、建物としては明確に復元できなかった。その南側でもSP6018・6020・6046・6022・6025・6135・6026が長方形に並び(図43)、SP6020には柱が遺存したが(図49)、柱間が一定せず1棟の建物として復元するのに躊躇を覚える。さらに、SP6068・6136では明確に柱痕跡が確認できた(図49、図版13)。両者は調査区の東壁際に単独で検出されたため、調査区の東の外側に建物が続くのかかもしれない。SP6068は直径0.8mで、自然に土砂が流入して埋没した抜き穴を掘削すると柱の痕跡が現われた。調査地内では比較的大型の柱穴で、中心的な建物を構成した可能性がある。

ピットから出土した遺物(図47)は少なく、小片化したものが多い。275・276は須恵器杯身で、それぞれSP6026・6049から出土した。口径はそれぞれ13.0cm、13.2cmである。口径や立上りの形態からみていずれもTK43型式に属するものとみられる。277は土師器の小型壺でSP6038から出土した。内・外面にハケ調整を施す。278は土師器甕もしくは鍋の把手部分である。SP6071から出土した。ピット出土の遺物は細片が多いながら時期の判定ができるものではTK43型式に属するものが多かった。

v)溝

SD602(図43、図版11)

南北方向の溝で、幅は最大で0.8m、深さは0.1~0.2mであった。埋土は2層に分層が可能で、下層には中~細粒砂が少量混り、緩い流水があったことがうかがえた(図49)。南はSD610と直交、北方でSD603と合流しており、合流地点付近で土師器壺283・同竈285・286が出土した(図50、図版14)。

283(図51、図版28)は土師器直口壺で、高さは21.0cm、口径は13.8cm、胴部最大径は25.0cmであ

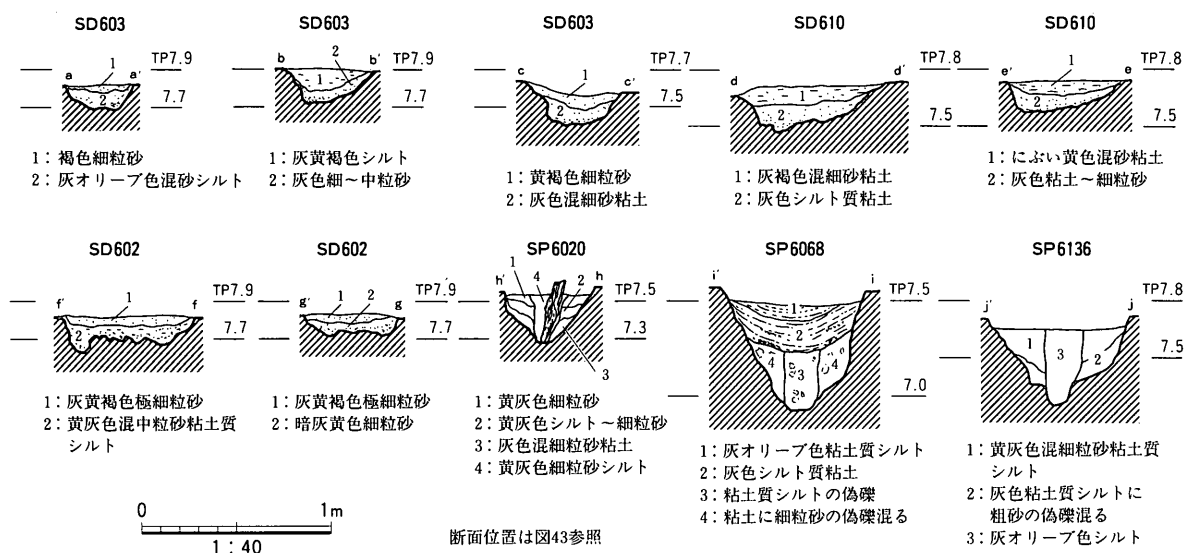


図49 溝・ピット断面図

る。やや扁平な球形の胴部に高さ約4cmの直立する頸部がつく。底部は平底状になっている。頸部外面には縦方向(図版37)の、内面には横方向のヘラミガキを施している。口縁端部はやや内側に肥厚させている。胴部外面の調整は、頸部との境目付近に螺旋状のヘラミガキ(図版37)を加え、その下、胴

部中位までは上から見て六角形を描くように横方向のヘラミガキを施している。その下は斜め方向にヘラケズリを加え、底部は縦横にでないなヘラケズリを加えて調整している。胴部内面は上部が粗いハケ、下部はナデによって調整している。胎土は精良で、色調は赤褐色を呈する。類例は大阪文化財センターによる城山(その2)調査[大阪文化財センター1986a]Fトレンチの溝FSD0803で出土しており、古墳時代末から飛鳥時代前半ごろの遺物と共伴している。竈285(図52、図版28)は破片が少なく、図上で復元した。高さは30cm以上、底部の直径は約44cmと復元された。付け底竈で、焚口から約4cm後退したところに高さ約2cmの底を貼付けている。底の下端部はやや尖らせて底部より突出させてあり、竈の固定のために地面に突き刺したものと考えられる。外面中ほどに上反りの把手が取付けられている。把手は本体に円形の穿孔を行い、その内外から器壁を挟むように粘土を詰め込んで把手を作っている。把手の上位には、両側の底の裏面どうしを結んで断面三角形の突帯が貼付けられている。外面の調整は、突帯以上の破片に縦方向のヘラケズリを施したものがある。突帯以下にはハケ調整がなされたようである。内面は、底部付近は粘

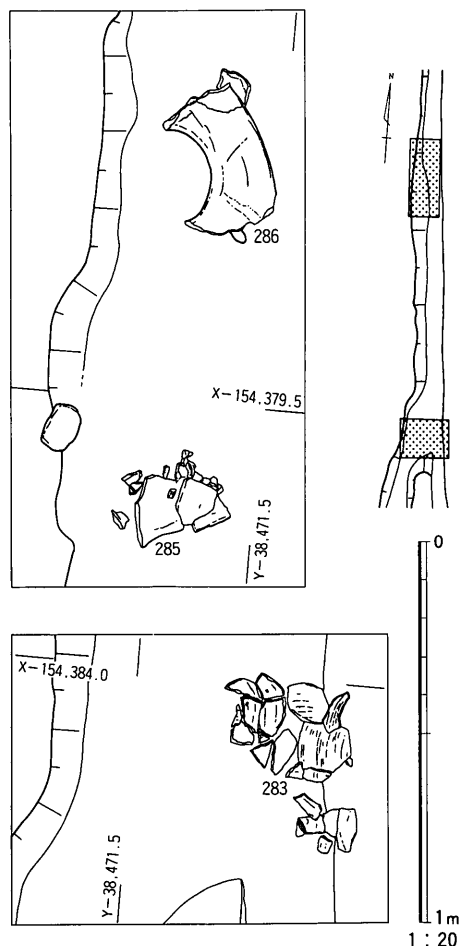


図50 SD602遺物出土状況平面図

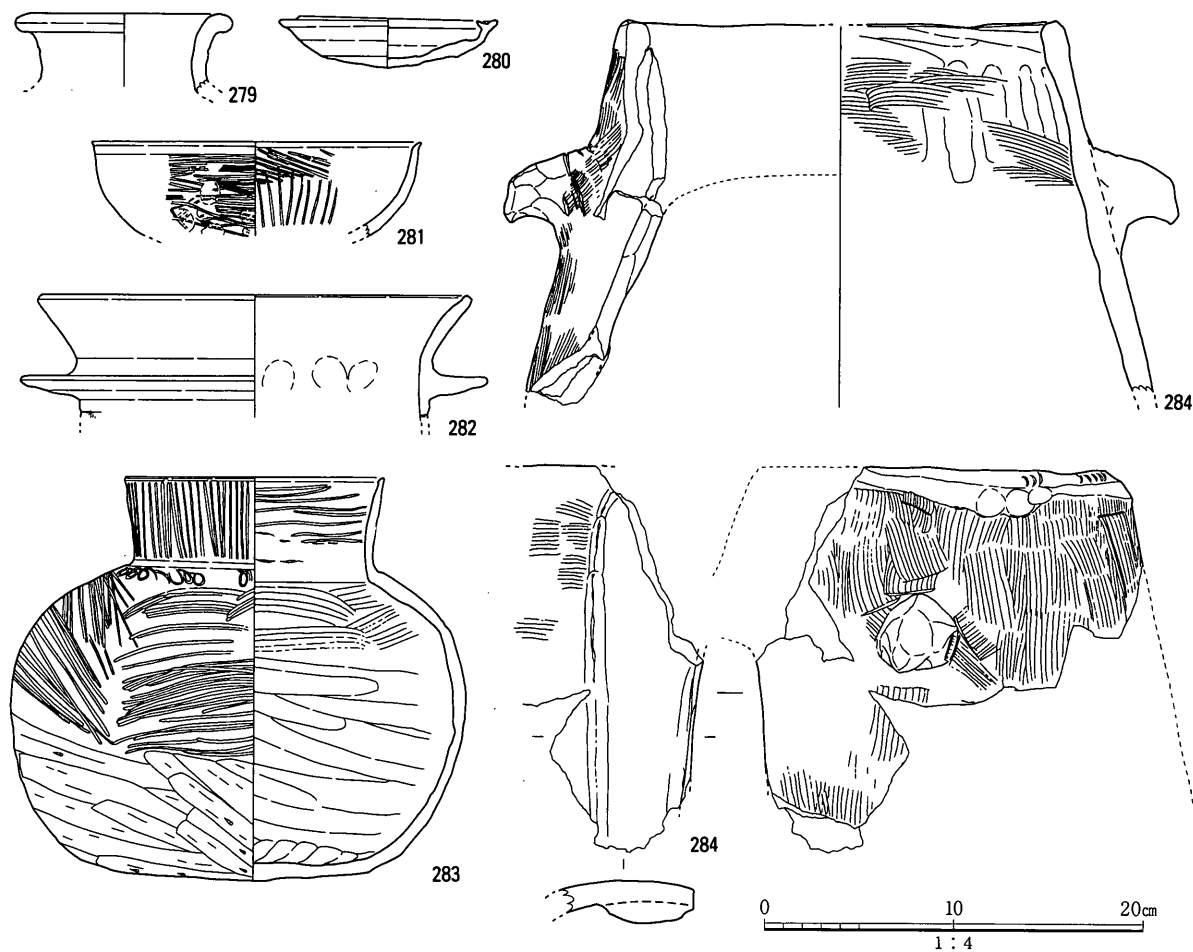


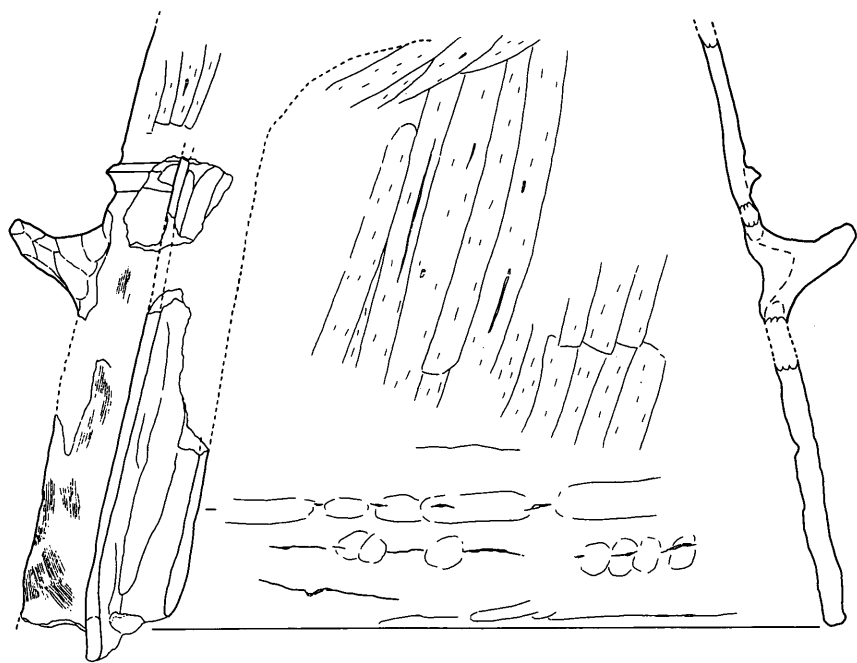
図51 溝・その他の遺構出土遺物実測図

SD617 : 279、SD603 : 280・282、SD610 : 281、SD602 : 283、SX602 : 284

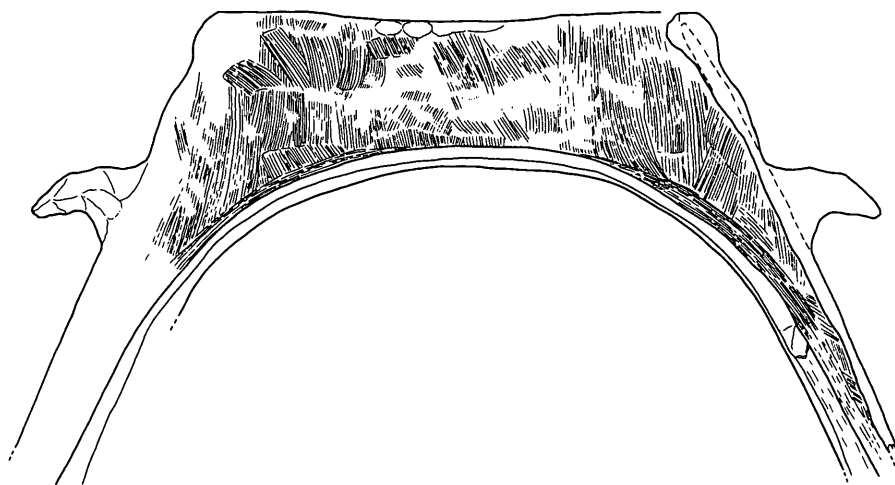
土紐の接合痕や指頭圧痕が明瞭に残り、ほとんど未調整の状態である。上方は縦方向のケズリによって調整されている。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。竈286(図52、図版28)は下半部を欠く。原状での高さは約24cm、復元口径は25.8cmである。曲げ底竈で、焚口上部の端部に粘土帯を貼付け、前方にせり出す底を作っている。内面には焚口部に沿って幅4cmほどの粘土帯を上下方向に貼付け、焚口開口部の補強としている(図版37)。直接接合はしないがこの粘土帯の下に続く部分の破片があって、接地する下端部を三角形に尖らせて底部以下に突出させている。これも竈設置のための工夫であろう。底後方の側面には1対の把手が取付く。把手は下反りのもので、本体には穿孔を行わず、外面に直接粘土を貼付けて作っている。焚口付近の内外面には、開口部の輪郭と平行にハケ調整が施されている。それ以外の外面は縦方向のハケ、内面はナデによって調整されている。色調は暗褐色を呈し、胎土は角閃石を含むいわゆる生駒西麓産のものである。これらの遺物は古墳時代末から飛鳥時代前半に属するものと考えられる。

SD603(図43、図版11)

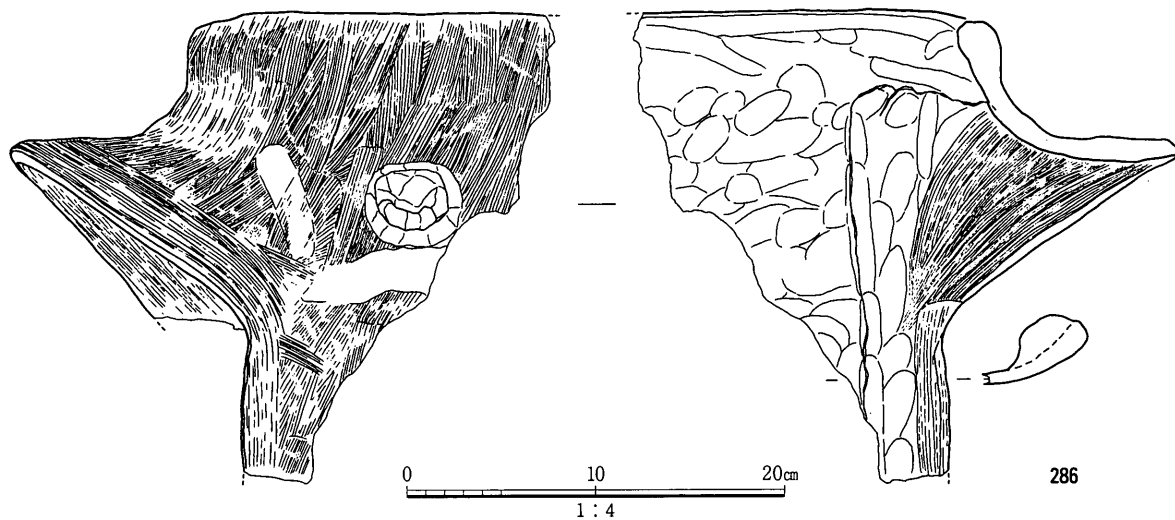
南北方向の溝で、南はSX610から派生し、北はSD602と合流する地点まで、やや弧を描きながら長さ40mにわたって検出された。幅は最大で1.1m、深さは0.1~0.2mであった。埋土の状況はSD602とほぼ同じく2層に分層が可能で、下層はわずかに砂を含み、ごく緩やかな流水があったことがうか



285



286



286

图52 SD602出土遗物实测图
SD602 : 285 · 286

がえた(図49)。土師器・須恵器などが出土した。

須恵器杯身280(図51、図版28)は口径9.4cmを測り、短く内傾した立上がりをもつ。底部はヘラ切り未調整である。TK217型式に属する。土師器羽釜282(図51)は外反する口縁部をもつ。口径は22.6cmである。これらの土器は飛鳥時代前半のものと考えられる。

SD610(図43)

東西方向の溝で、SD602・603と直交していた。幅は最大で0.8m、深さは0.15～0.25mであった。埋土の状況はSD602・603と同様であった(図49)。土師器・須恵器が出土した。

土師器杯281(図51)は口径17.4cmを測る。口縁端部は上外方へつまみあげるように仕上げている。内面は放射状の暗文を2段に施している。外面にも横方向のヘラミガキを加え、底部にはケズリ調整はないようである。飛鳥Ⅱに属する。

SD617(図43)

SB603の南側にあり、幅2.8～3.5m、深さ0.2mで、北西から南東方向に延びていた。埋土は灰黄褐色シルト～極細粒砂で、顕著な流水の痕跡はなかった。須恵器が出土した。

須恵器279(図51)は壺頸部で、口径11.2cmである。口縁端部は丸く仕上げている。

SD618(図43)

東西方向の溝で、幅は約0.6m、深さは約0.10～0.15mであった。埋土は黄灰色粘土で、顕著な流水の痕跡はなかった。緩い弧状に延びるが、この溝より北には同じ検出面の遺構はなく、集落の北限を画する溝であるかもしれない。

その他の溝(図43、図版11)

SD605・606・609・612～614・616は、SD602・603からほぼ直角方向に派生する小溝である。幅は0.1～0.3m、深さは0.1m以内であった。埋土の状況はSD602・603・610と同様であった。SD619は南北方向の小溝で、幅は0.20m、深さは0.05mで埋土は灰オリーブ色シルトであった。

南北方向の溝SD602・603と、それに直交するSD610および小溝群には明確な切合い関係はなく、アミダ状の平面形態をもつ一連の溝とみることができた。これらはみな下層にごく緩やかな水流の痕跡をとどめ、畠作などの耕作に関連する溝であったと考えられる。

vi) その他の遺構

SX601(図43)

幅5.9～6.5m、深さ約0.1mで、東西に延びる溝状の平面形態をもっていた。埋土は暗オリーブ色シルト～細粒砂であった。

287～290・293～295は須恵器、291・292・296～299は土師器である(図54、図版29)。287・293は杯蓋である。口径は287が9.3cm、293が12.3cmで、天井部の調整はともにヘラ切り未調整であるが、293は部分的に回転ヘラケズリを加えている。287はTK217型式、293はTK209型式に属する。288～290・294・295は杯身である。288・294・295は立上がりをもち、289・290は蓋・身の逆転後のもので立上がりはない。口径は288が8.4cm、294が9.9cm、295が13.2cmである。288・294は底部ヘラ切り未調整で、295は回転ヘラケズリを施す。288・294はTK217型式、295はTK43型式に属す

る。289は口径8.8cmで、底部はヘラ切り未調整である。290も底部ヘラ切り未調整である。ともにTK 217型式に属する。

291・292は杯で、口径は291が10.2cm、292が12.1cmである。291は内面に1段の放射状暗文が施される。291は飛鳥Ⅲ、292は飛鳥Ⅴに属する。297・298は鉢で、口径は297が19.2cm、298が20.2cmである。ともに飛鳥ⅡないしⅢに属する。296・299は甕で、299は体部外面と口縁部内面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を加えている。312・313は砥石である。このように、SX601出土遺物は古墳時代後期後葉から飛鳥時代末までの土器を含んでいる。

SX602(図43)

SB602の北で、調査区の西壁際で検出された。南北は約6.5m、東西は2.0m以上で、深さは平均で0.15mであった。複雑に入り組んだアメーバ状の平面形態を呈していた。埋土は2層に分れ、上層は暗灰黄色シルト～細粒砂層で、下層は黄褐色中粒砂混り粘土質シルト層であった。下層は細かいラミナが乱されており、滞水状態の泥を踏み荒らした形跡があった。土師器・須恵器が出土した。

284(図51、図版27)は土師器竈で、口径は22.4cm(復元値)である。口縁部から約9cm下がった個所に下反りの把手が取付く。把手は本体の外面に粘土棒を貼付けて成形している。器壁の調整は内外面ともにハケ調整である。口縁部端面には同心円文のタタキが施されている。焚口開口部の内面には幅5cmほどの粘土帯が貼付けられている。色調は灰褐色で、胎土は角閃石を含む生駒西麓産のものである。焚口上部は欠損して底の形態は不明であるが、竈286と形態や胎土が類似しており、曲げ底竈と考えられる。飛鳥時代前半に属するものと考えられる。

SX608(図43)

SB603の南で検出され、ほぼ東西に延びる溝状の平面形態をもっていた。幅は1.5～2.8mで、深さは0.15mであった。埋土は2層に分れ、上層は灰黄褐色シルト層で、下層は黄灰色極細粒砂混り粘土質シルト層であった。下層の堆積状況はSD602などの溝の埋土下層と類似しており、微細な砂粒のラ

ミナが観察され、緩やかな流水、または滞水状況があったものとみられた。上層から土師器・須恵器が投棄された状態で出土した(図53、図版14)。

300・301・303は須恵器、302・304～309は土師器である(図54、図版29)。300は杯蓋で、口径は11.0cm、天井部はヘラ切り未調整であるが、切り放し面の周囲にのみ部分的なヘラケズリ

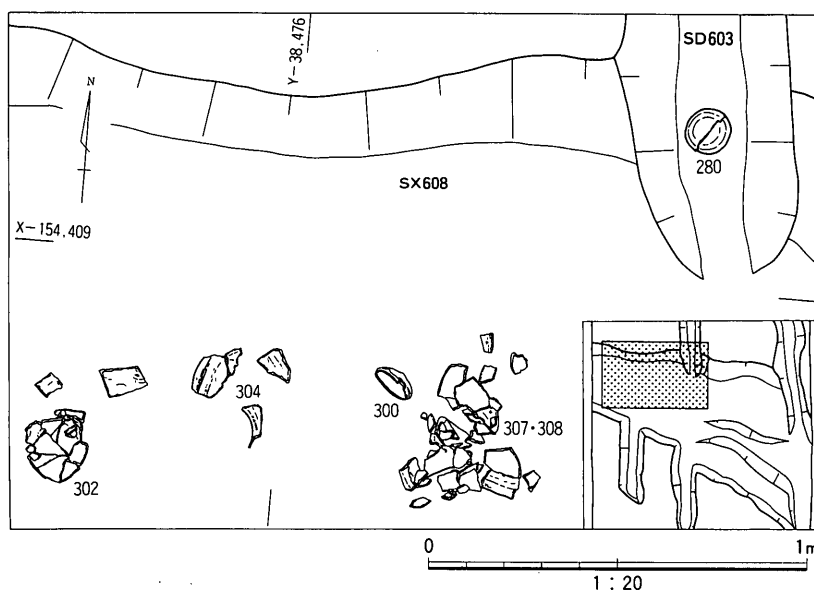


図53 SX608遺物出土状況平面図

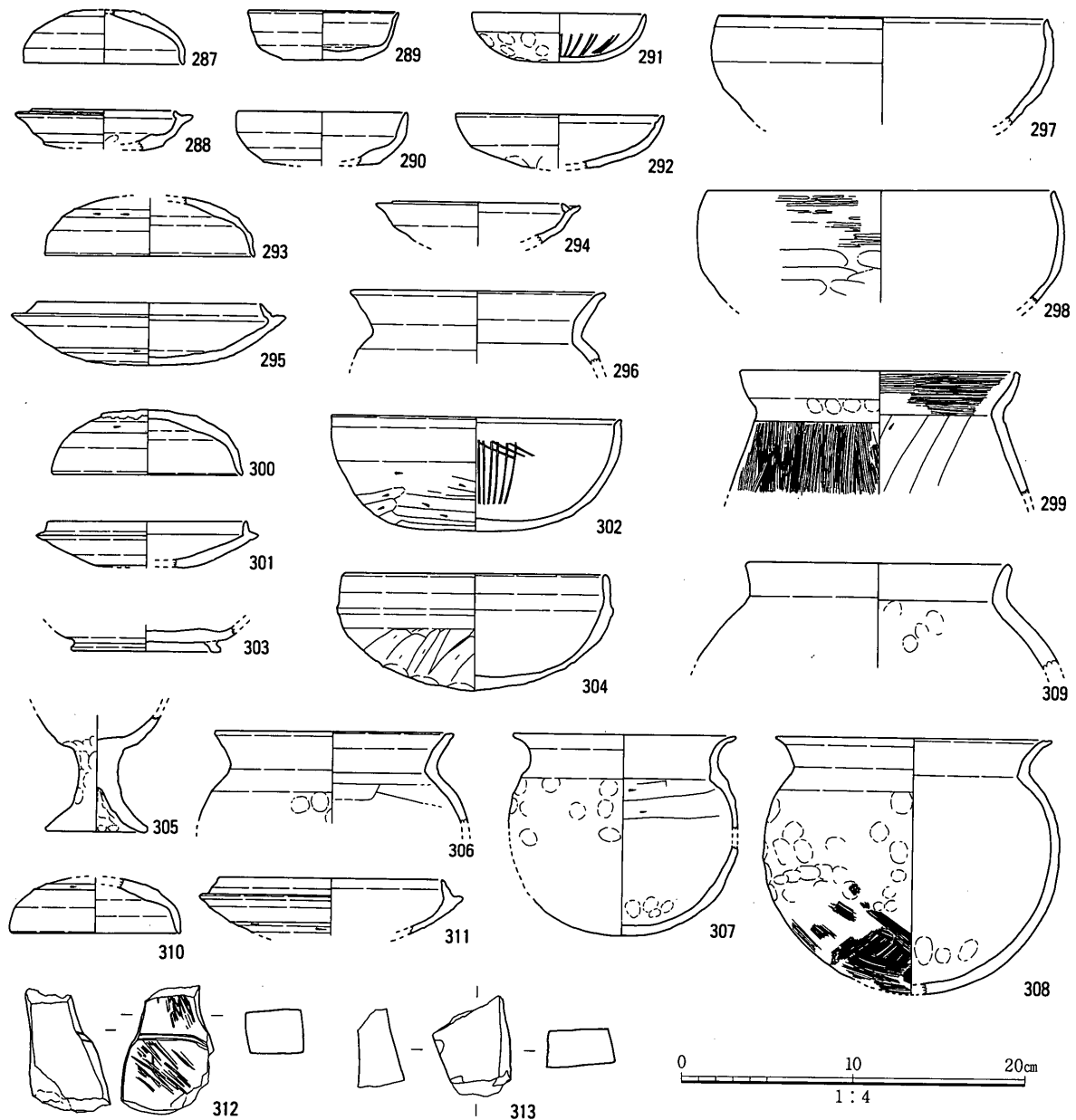


図54 その他の遺構出土遺物実測図

SX601 : 287~299・312・313、SX608 : 300~309、SX613 : 310、SX631 : 311

を施す。TK217型式でも古相を示すものといえよう。301は杯身で、口径は11.6cmで、短い立上がりをもつ。底部は回転ヘラケズリで調整している。TK209型式に属する。303は高台を有する杯身底部である。302は杯で、口径は16.9cm、高さは6.5cmである。口縁端部は上外方へつまみ上げるように仕上っている。内面はていねいな横方向のナデののちに放射状の暗文を2段に施している。外面は口縁部付近はナデ、下半部から底部はヘラケズリによって調整している。色調は赤褐色で、胎土は精良である。飛鳥Ⅰに属するがやや新相を呈するといえよう。304は杯で、口径は15.3cmで、高さは6.8cmである。口縁部はやや内傾ぎみで端部は丸く収めている。内面と口縁部外面をナデ調整し、底部には静止ヘラケズリを施している。口縁部と底部の境目はナデによってにぶい稜を造り出している。色調は橙色で、胎土は細礫を含みやや粗い。類似の資料は飛鳥池の発掘調査[奈良国立文化財研究所1992]や川原寺SD02[奈良国立文化財研究所1980]で出土している。飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する。305は高杯の脚

SX608の南で検出された遺構で、幅1.90m、深さは0.18mであった。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土で、須恵器・土師器・製塩土器が出土したが、時期の判明するものはなかった。

SX601の基底面で検出された。南北0.95m、東西0.25m、深さは0.06mであった。埋土は灰黄褐色シルトであった。土師器・須恵器が出土した。

SX602の北の調査区西壁際で検出された遺構である。南北約4.5m、東西3.0m以上で、深さは約0.1mであった。埋土は2層に分れ、上層は暗灰黄色シルト層で、下層は黄灰色細粒砂混り粘土質シルト層であった。下層には細かなラミナが観察され、緩やかな流水があったものとみられた。須恵器が出土した。

ここで、7Aiv層上面で検出作業を行った上記遺構群について、その時期と切合い関係を整理しておきたい(表4)。まず遺物の年代観から、掘立柱建物は古墳時代末に属するもの(SB602)、奈良時代に下る可能性のあるもの(SB601)があった。ピットは年代の確定できるものは少ないが、SP6026・6049は古墳時代末とみられた。溝はSD602・603が飛鳥時代前半に属し、それに直交する溝(SD610や小規模な溝群)も同時期とすることができた。不整形な平面形態をもつ遺構(SX)は、SX631のように古墳時代末にさかのぼるものもあり、SX602・608・613などは、一部飛鳥時代後半に下るものもあるが、多くは飛鳥時代前半とみられる。つまり大雑把に言えば、ピットは古墳時代末、溝は飛鳥時代前半に属し、不整形遺構は飛鳥時代前半が中心で、古墳・飛鳥両時代にもあるということになる。

この関係は切合いからも検証できそうで、SD603はSB603の柱穴を複数切っている。また、SP6018・6020などはSD617を除去した段階で検出されたのでSD617に切られているとみられる。またSP6135もSX608掘削後に検出され、SX608に切られていると判断される。SB602の柱穴もSX602に切られていた。このようにピット・掘立柱建物と溝・不整形遺構に切合い関係があるばあいにはピットが切られているようであ

時代	古墳時代	飛鳥時代前半		飛鳥時代後半		奈良時代
土器型式	TK43	飛鳥Ⅰ	飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ・Ⅴ	平城
建物	SB602 ← - -	SB603 →				SB601
ピット	SP6026 SP6049					
溝			SD602 SD603 SD610			
その他 遺構	← SX601 SX602 SX608 SX613				→	
5・6層内 溝群						○

る。したがって溝と不整形遺構は掘立柱建物を含むピット群に後出することになる。では溝と不整形遺構はどうかというと、明確な切合い関係はみられず、同時に存在したとみてよいであろう。もちろん溝・不整形遺構と切合いをもたないピットもあり、奈良時代に下る可能性のあるSB601のように、それらのピットの中に溝・不整形遺構と同時あるいは後に存在したものがあつたことは想像にかたくない。

vii) 溝群

5-6層内で検出作業を行った溝群(図55)である。検出面は前項までに紹介した7Aiv層上面検出遺構群の検出面よりも約10cm高い。調査区中央部で検出され、やや幅の広い南北方向の溝から比較的幅の狭い溝が直角方向に派生し、アミダ状に広がっていた。南北方向の溝は幅0.40~0.20mで、東西方向の溝は幅0.25~0.15mで、深さはいずれも0.1m以下であつた。埋土は暗黄灰色シルト~細粒砂で、顕著な流水の痕跡はなかつた。また、各溝間に切合いはなく、同時に存在したものと判断された。平面形態からみて、畝の畝間と考えられる。土師器・須恵器が出土した。

314・316は須恵器、315は土師器である(図56)。314は高台をもつ杯身の底部である。316は直径22.2cmの皿で、底部に回転ヘラケズリを施している。飛鳥ⅣないしⅤに属する。溝群出土遺物の中でもっとも新しい遺物は315の杯である。直径14.0cmで、内外面をナデ調整している。平城宮土器ⅤないしⅥに属する。以上の遺物の特徴から、この溝群は奈良時代末から平安時代初頭に属すると考えられる。

viii) 5-6層高まり遺構

調査区北部で、作土層である5層を除去した段階で、南北6.2m、東西4.0m、高さ0.2mの楕円形の高まりが検出された(写真6)。高まりを構成する堆積物は褐色シルトで、5-6層の遺物包含層に等しい。5層を耕作する際に、下位層準が耕起されずに残つたものとみられた。内部からは、須恵器・土師器などの遺物が出土した。

317・318は須恵器、319~322は土師器である(図57)。317・318は杯身で、口径は317が9.9cm、318が9.4cmである。底部はいずれもヘラ切り未調整で、TK217型式に属する。319は直口壺の頸部で、外面に縦方向のヘラミガキを施している。320・321は甕で、口縁部外面はナデ調整、320は外面をハケ、内面をケズリ調整するのに対し、321は内面はナデ調整、外面には指頭圧痕が残

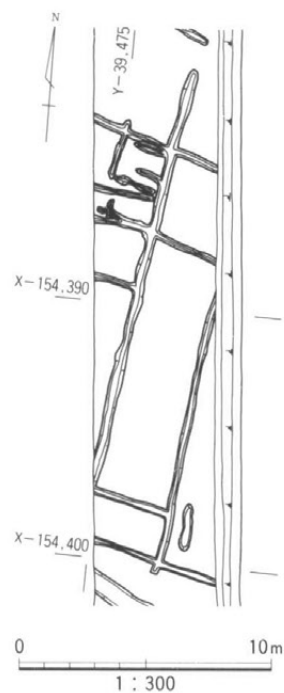


図55 5-6層内溝群平面図

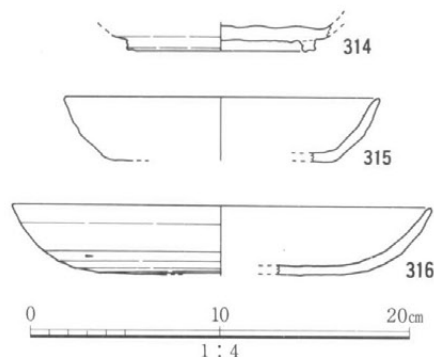


図56 5-6層内溝群出土遺物実測図



写真6 西調査地北区5層下面の高まり

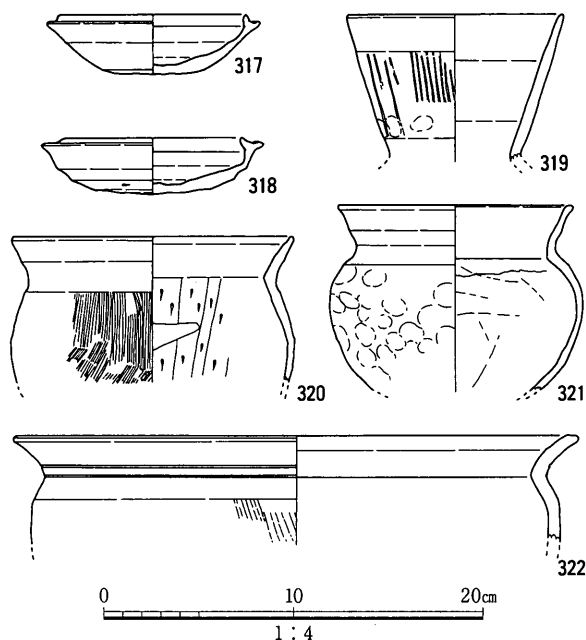


図57 5-6層高まり内出土遺物実測図

る。322は鍋の口縁部で、口径29.7cmを測る。

ix) 古墳～奈良時代の遊離遺物

5層より上位の層準・遺構から出土したが、形態からみて本来5-6層かその層内検出遺構に帰属すると判断された遺物について紹介する(図58、図版23～25)。323～334・336・345は須恵器、335・337～344は土師器、346は砥石である。323・324は杯蓋で、口径は323が12.8cm、324が14.2cmである。323はTK209型式、324はTK43型式に属する。325は無蓋高杯の蓋である。天井部に上面の凹んだつまみがつき、口径は14.2cmを測る。TK43型式に属する。326～328・332～334は杯身である。口径は、326が1.4cm、327が13.0cm、328が11.0cm、332が8.1cm、333が9.4cm、334が9.5cmである。底部調整は、327が回転ヘラケズリを施し、326・328・332～334がヘラ切り未調整である。327はTK43型式、326・328はTK217型式の古相、332～334がTK217型式の新相に属する。329～331は蓋・身逆転後の杯である。329・330は蓋で、内面に短いかえりがつく。つまみの形態は、329が宝珠状、330はやや扁平な乳頭状である。331は口径9.4cmで、底部はヘラ切り未調整である。329はTK46型式、330・331はTK217型式に属する。336は高杯の脚部である。2方向に小さな楕円形のスカシ孔が穿たれている。古墳時代からの系譜をひく器形で、TK217型式以前に属すると考えられる。345は高杯形器台の杯部である。口径は28.8cmで、内・外面の下部にタタキメが残る。TK43型式に属すると思われる。335は皿である。口径は20.0cmで、口縁端部に内傾する端面を設ける。平城宮土器Vに属する。337・338は杯である。337は口径13.5cmで、内面と口縁部外面はナデ調整である。飛鳥Ⅱに属する。338は口径10.4cm、高さ6.2cmで、口縁外面に横方向のヘラミガキを施している。深い器形からみて飛鳥Ⅰに属すると考えられる。339・340は直口壺である。339は頸部はやや外反して立上がり、外面に縦方向のヘラミガキを施している。胴部は最大径が下半部にあり、肩部は横方向のヘラミガキを密に施し、底部は4方向にヘラケズリを行っている。内面はナデ調整である。340は、上外方に直立する頸部をもつ。外面は器壁の荒れが目立つが、ヘラミガキ調整は行っていないようである。底部にはヘラケズリ調整が施される。[秋山浩三1988]によれば、この種の壺の型式変化は、頸部の短く直線的なものから長く外反するものへ、胴部最大径が上半部にあるものから下半部にあるものへと変化するといふ。これを援用すれば、339・340は須恵器TK43型式平行期と判断される。342は把手付鉢で、高さ11.5cm、口径13.0cmを測り、外面の中位に断面円形で上反りの把手がつく。内面をヘラケズリ調整している。須恵器TK209型式以前の所産と考えられる。343は高杯である。口径は17.0cm、高さは11.7cmである。内面には疎らな放射状暗文が施されている。飛鳥Ⅱ前後に属する。344は鉢で、口径は26.2cmで、内面はナデののちに放射状の暗文で調整し、外面は上部は横方向のヘラミガキ、下部をヘ

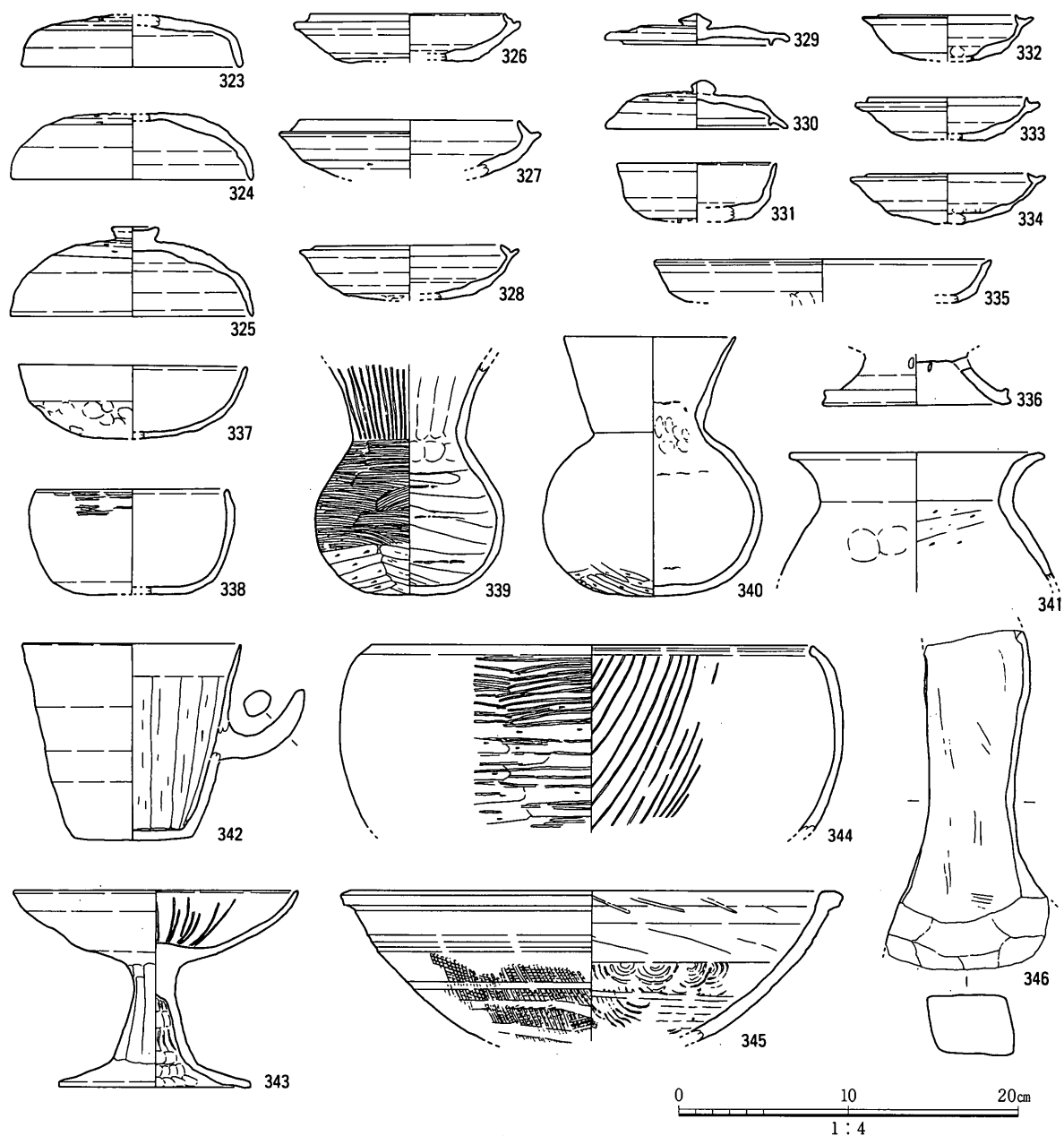


図58 古墳～奈良時代遊離資料実測図

4B層：328・335、4C層上部：329・332、4C層下部：324・326・333・334・336・339・342、4B～5層：344、5層：323・330・331・341、5層下部：325・327・337・338・340・343・345・346

ラケズリで調整している。飛鳥Ⅱ前後に属するとみられる。

x) 土錘

おもに5-6層とその層内の遺構から土錘(図59、図版31)が出土した。土錘はその他の層準や遺構からも出土しているのが、形態的に一様で、ほぼ同時期のものと考えられるので一括して紹介する。24個体を図示したが、ほかに3個体が存在する。すべて土師質で、紡錘形をしており、長軸方向に穿孔がなされている。完形のもののは長さ7.7cm(348)から5.2cm(361)ほどである。外径は最大で3cmほどである。外面は指頭圧痕や、何か平らなもので押さえ付けたい面が残り、棒に粘土を巻付け、手で握ったり押さえ付けたりして成形したものと考えられる。こうした漁撈具は、この地域における生業の一端を示すものである。

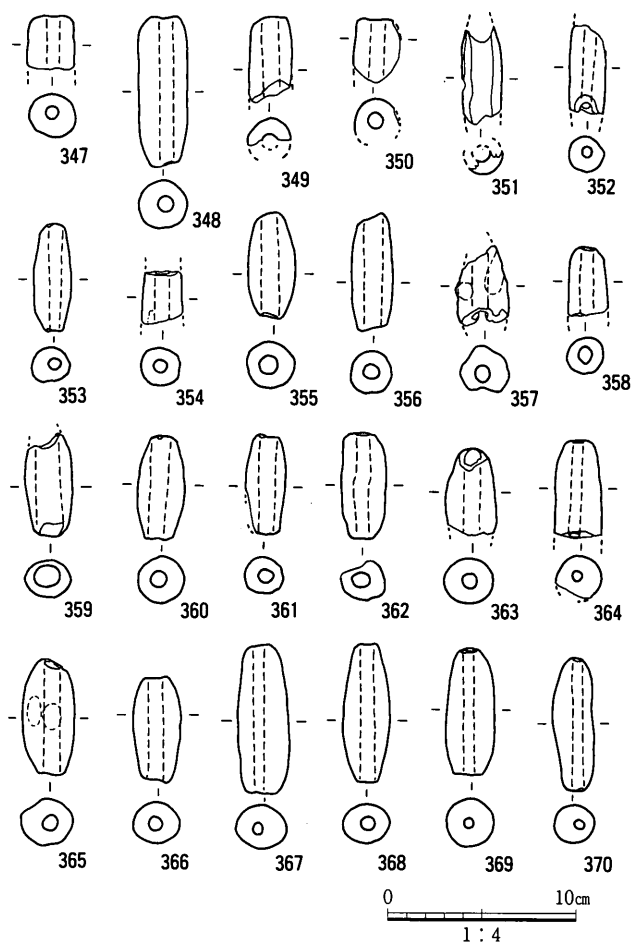


図59 土錘実測図

2iv層：347、4B層：348、SD4C01：352、4C層下部：349・350、5層：351、NR4B01：353、5-6層：354～363、SX601：364、SX613：366、SX631：365、7Aiv層：367～370

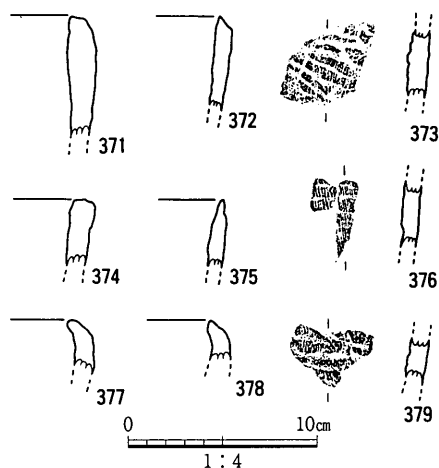


図60 製塩土器実測図

SX601：371、SD604：374、5-6層：372・373・375～379

xi) 製塩土器

5-6層とその層内の遺構を中心に多くの製塩土器(図60、図版32)が出土した。すべて細片化しており、全体の形状の知れるものはない。厚手で、灰褐色から赤褐色を呈し、石英や雲母などの砂粒を多く含む。口縁は直立するものが多く、口縁端部は、肥厚するもの(371・374)、上方へつまみ上げぎみに終るもの(372・375)、内側へ巻込むもの(377・378)などがある。体部内面には明瞭に布目の圧痕が残るもの(373・376・379)がある。薄手のものを含まないことからⅢ期(6世紀中葉～7世紀前半)以降に下る[京嶋寛1992a]ことは確実で、直立する口縁部や内側に巻込む口縁端部、内面の明瞭な布目痕などはⅤ期(8世紀後葉～9世紀初頭)の特徴を帯びている。(高橋)

3) 平安時代の遺構と遺物

4C層下部の基底面でSX4C01・02を、4C層上部下面でSD4C01～03を、4B層下面でSD4B01・SX4B01・NR4B01を検出した(図63)。

i) 不整形な遺構

SX4C01(図61)

調査区中央部やや北寄りで検出した。東西3.8m、南北1.1m、深さ0.2mの溝状を呈していた。埋土は2層に分れ、上層は黄灰色細粒砂層、下層は灰色粗粒砂層であった。下層は砂のラミナが観察され、土砂が流入して埋没したものとみられた。時期を判定できる遺物は出土しなかった。

SX4C02(図61)

SX4C01の東側で検出された。東西約2m、南北約1.8m、深さは0.1mであった。埋土は灰黄褐色

シルト～細粒砂で、須恵器・土師器などの遺物が出土した(写真7)。

385・386は須恵器、380～384・387・388は土師器である(図62)。380は皿で、口径は24.8cmを測り、口縁端部を内側に丸め込むように処理している。平城宮土器Vに属する。381は鍋で、口径は28.2cmである。382・384は碗である。内面と口縁部外面をナデ調整し、底部には指頭圧痕が残る。口径は382が16.6cm、384が14.4cmである。いずれも平城宮土器VI(平安時代I期)に属する。383は小型の壺で、奈良時代の資料に類例が多い。385は壺で、底部径は5.2cmである。386は鉢で、口縁は片口になっている。口縁部の立上がりが高、平城宮土器VI前後に属するとみられる。387は竈の破片である。388は高杯脚部で、十一角形に面取りをしている。皿380や碗382・384は、8世紀末～9世紀初頭とされるNG87-35次調査南Ⅱ区SD007出土遺物[大阪市文化財協会1992a]に類似した資料があり、同時期と考えられる。

SX4B01(図63・64)

幅11.7m、0.5mの溝状の平面形態をもち、調査区を横断して検出された。さらに底部では幅0.5m前後の溝が多数見つかった(図64)。埋土は暗灰黄色極細粒砂で、顕著な流水の痕跡はなかった。埋土中から、土師器・須恵器・瓦器などの遺物が出

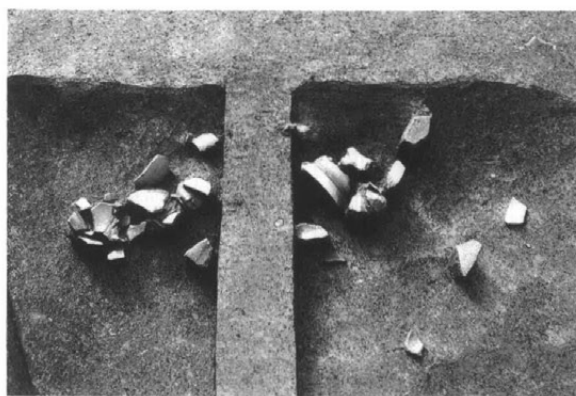


写真7 西調査地北区SX4C02遺物出土状況



図61 SX4C01・4C02平・断面図

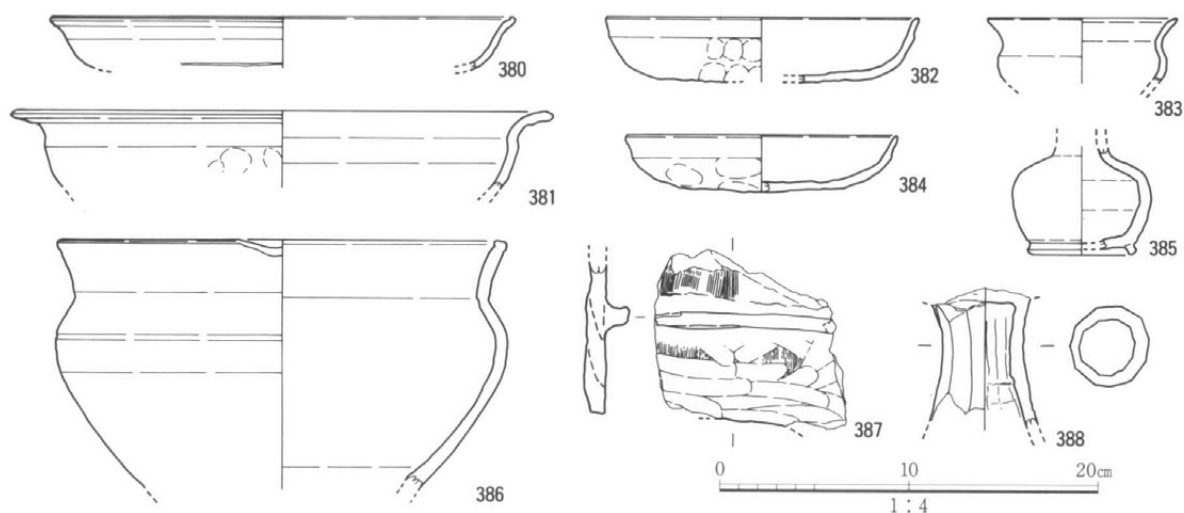


図62 SX4C02出土遺物実測図

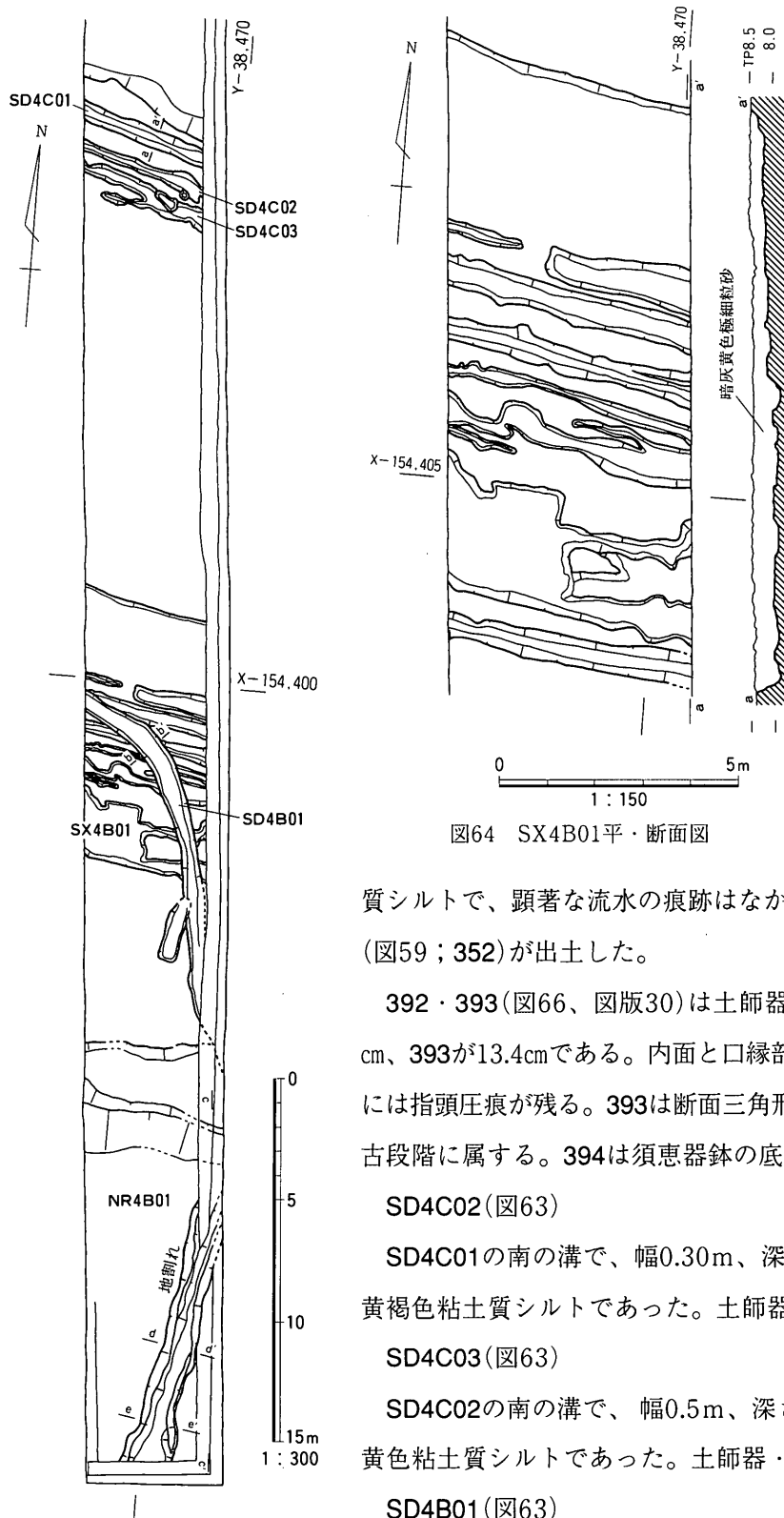


図63 西調査地北区遺構配置図
(平安時代)

図64 SX4B01平・断面図

389(図66、図版30)は土師器皿である。口径15.2cmで、口縁部外面をナデ調整し、底部には明瞭な

土した。耕作に係わる遺構と考えられる。

390(図66)は土師器皿である。内面と口縁部外面をナデ調整している。平安時代Ⅲ期に属する。

391(図66)は小型の平瓶の頸部である。図化できないが瓦器の破片を含んでおり、遺構の時期は平安時代Ⅳ期に下るものと考えられる。

ii) 溝

SD4C01(図63・65)

幅0.70m、深さ0.15mで、東西方向で検出された。埋土は灰黄褐色粘土

質シルトで、顕著な流水の痕跡はなかった。土師器・須恵器・土鍾(図59; 352)が出土した。

392・393(図66、図版30)は土師器碗である。口径は392が14.0cm、393が13.4cmである。内面と口縁部外面をナデ調整し、外面下部には指頭圧痕が残る。393は断面三角形の高台がつく。平安時代Ⅲ期古段階に属する。394は須恵器鉢の底部である。

SD4C02(図63)

SD4C01の南の溝で、幅0.30m、深さ0.15mであった。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。土師器・須恵器が出土した。

SD4C03(図63)

SD4C02の南の溝で、幅0.5m、深さ0.1mであった。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。土師器・須恵器が出土した。

SD4B01(図63)

調査区南部で検出された。幅0.9m、深さは0.2mで、弧状に延びていた。埋土は3層に分れる。上層は灰黄褐色シルト質粘土層、中

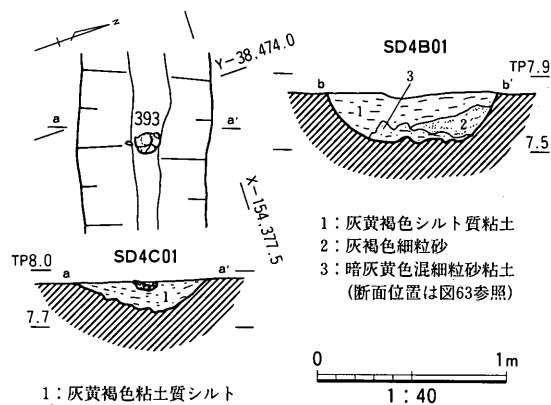


図65 SD4C01・4B01平・断面図

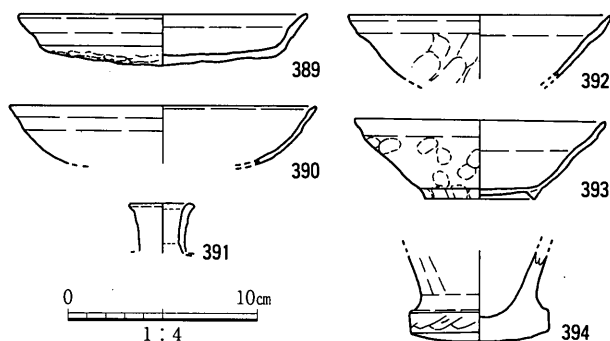


図66 SD4C01・SD4B01・SX4B01出土遺物実測図
SD4B01: 389, SX4B01: 390・391, SD4C01: 392~394

指頭圧痕が残る。平安時代Ⅳ期新段階に属する。底部内面は摩擦によって表面が平滑化しており、胎土中の砂粒が移動した痕跡もある(図版37)。内面全体が黒く変色しており、硯に転用されたものと考えられる。

iii) 自然流路

NR4B01(図63・67、図版15)

調査区南端を東西に横切って検出された自然流路である。南側の肩は調査区外にあり検出できなかったが、幅は18m以上であった。埋土は4層に分れ、上層は細～粗粒砂層、中層はシルト質粘土～中粒砂層、下層は砂礫層で、最下層はシルト質粘土～中粒砂層であった。特に上層には西下がり of ラミナが規則正しく並ぶ河川成の堆積状況(図68)が観察され、東から西へ流れる河川と判断された。中層にはシルト質粘土のラミナがみられ、川が一時期滞水状態にあったことがわかった。下層は激しく下位層準を侵食しており、底部にあたる下位層上面には、東西方向のグループキャストが観察された。また、下層と最下層には明確な切合いがあり、層理面付近には粘土の偽礫が観察された。このことから、最下層はNR4B01に先行する河川の堆積物である可能性が高い。

同河川内で、流れの方向に直交する溝状の落込みが検出された(図63)。幅は約1.4m、深さは0.5～1.0mほどで、内部は50cm～数cmの暗灰褐色粗粒砂混りシルトの偽礫と灰色粗粒砂で埋められていた(図68、図版15)。偽礫は上位層準である3層に由来するもので、上位層が偽礫化して陥没したものと判断された。このほかに、上下を砂に挟まれた中層のシルト質粘土のラミナに幅10cmほどの割れ目がみられたり(図68)、同ラミナが寸断され、かつ、団子状に丸まっていたり、砂が上位のラミナを突

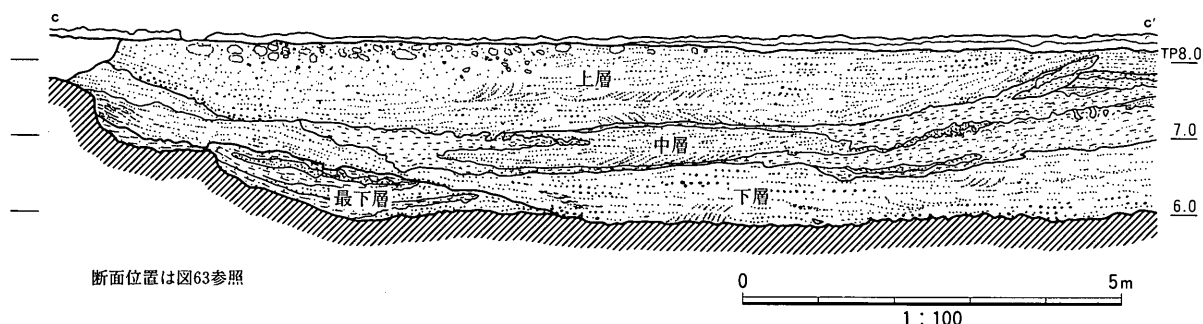


図67 NR4B01断面図

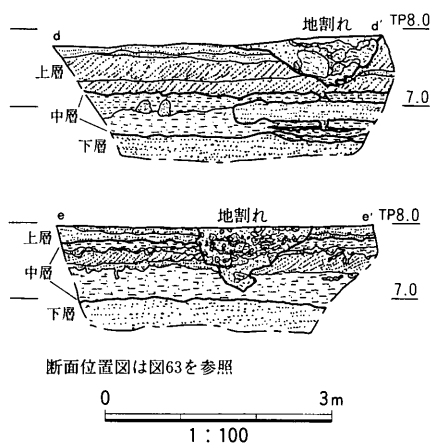


図68 NR4B01内地割れ断面図

き破って上方へ噴出していたりという状況が散見された。こうした状況は、地下水を豊富に含む旧河道におそらく地震による強い揺れが加わり、地割れ、噴砂、上位層の陥没、ラミナの変形といった現象が同時多発的に起った結果と考えられる。2層は陥没などの影響を受けていないので、地震発生の時期は、NR4B01の廃川・3層の形成以後で、2層の形成以前ということになる。

396・399・401～419・422・423・426・427は土師器、395・397・400は瓦器、398・420・421・425は須恵器、424は灰釉陶器である(図69、図版29・30)。上層からは396・395などが出土した。395は小皿で、内面を密にヘラミガキ調整する。C－Ⅱ期に属する。396は皿で、底部には指頭圧痕が残る。平安時代Ⅳ期中～新段階に属する。397～400は中層から出土した。397・400は椀で、内・外面にヘラミガキを施す。C－Ⅱ期に属する。398はTK10型式ごろの杯蓋、399は平安時代Ⅰ期ごろの椀で、ともにこの

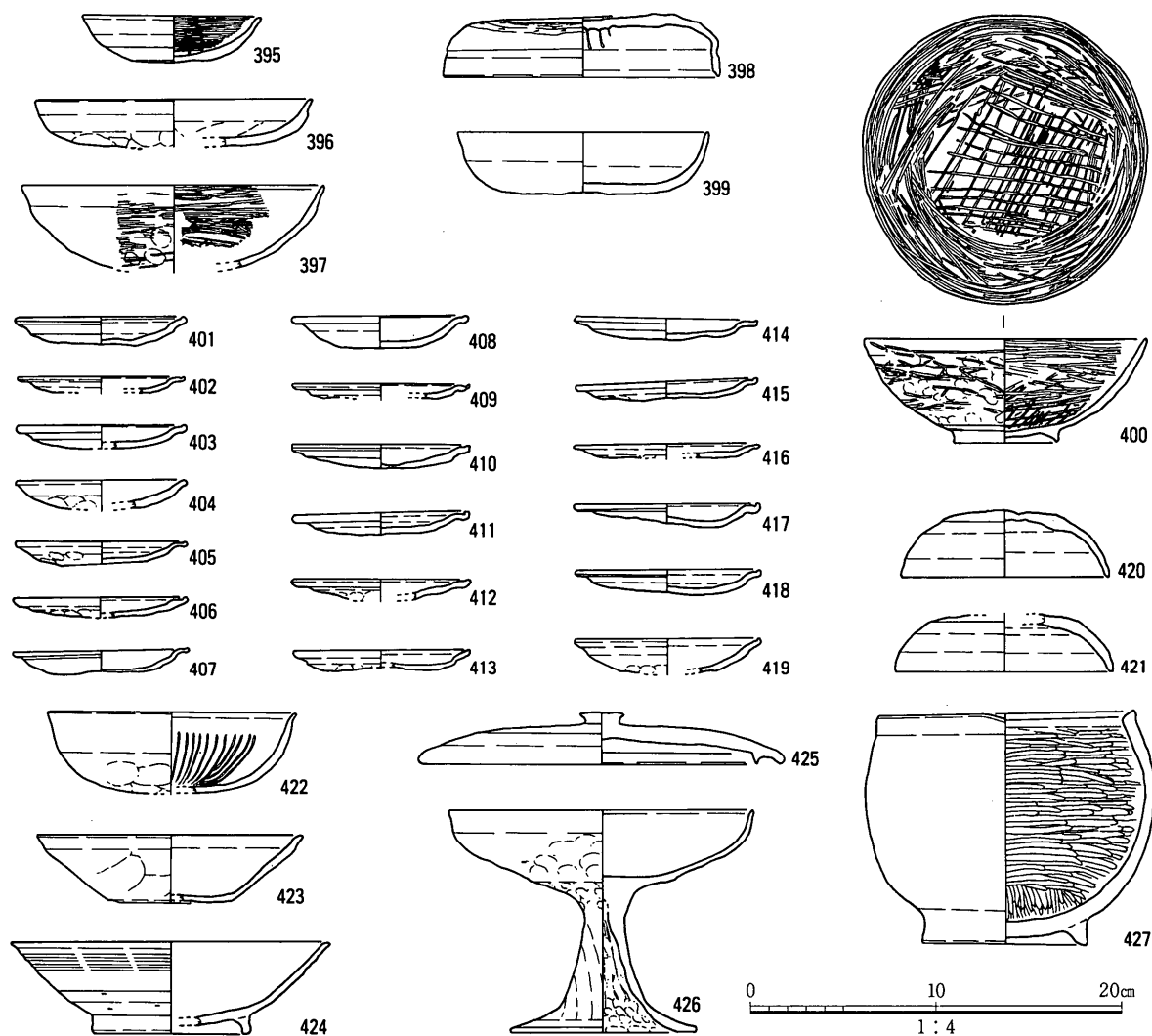


図69 NR4B01出土遺物実測図

上層：395・396、中層：397～400、下層：401～427

流路の年代を示すものではない。401～427は下層から出土した。401～419は小皿である。口径は9 cm前後で、口縁部はみな「て」字状を呈する。器高は、401・408・419は2 cm弱でやや高めであるが、その他は低平なものが多い。401・408・419は平安時代Ⅳ期古段階、その他の低平なものは平安時代Ⅲ期新段階に属する。423は椀である。口径は14.5 cmで、外面下部には指頭圧痕が残る。平安時代Ⅱ期古段階に属する。424は椀で、外面上部に3条の凹線が巡り、底部付近は回転ヘラケズリで調整されている。平安時代Ⅱ期ごろに属する。427は高台付の鉢である。口径は13.8 cm、高さは12.5 cmである。端部外面口縁直下にナデを加えて口縁端部をやや上方へつまみ上げている。内面は密にミガキ調整を施して平滑に調整している。平安時代Ⅲ期とされる平城京左京5条6坊15・16坪跡SE01[奈良市教育委員会1993]や、薬師寺西僧房床面[奈良国立文化財研究所1987]出土資料に類例があり、同時期のものと考えられる。420・421はTK217型式の杯蓋、422・426は飛鳥Ⅱの杯・高杯である。これらは飛鳥時代前半の遺物である。425は大型の杯蓋で奈良時代前半のものとみられる。

以上のように、出土遺物の年代観から、11世紀後半ごろから流れ始め、12世紀に入ると、中層に粘土質シルトが堆積することから、一旦滞水する時期があったとみられる。その後再び水が流れるようになるが、間もなく12世紀の内に埋没したものとみられる。また、最下層からは遺物は発見されなかったが、さらに古い自然流路があったものと思われる。また、地震は14世紀後半以降、16世紀までの間におこったものと考えられる。

(高橋)

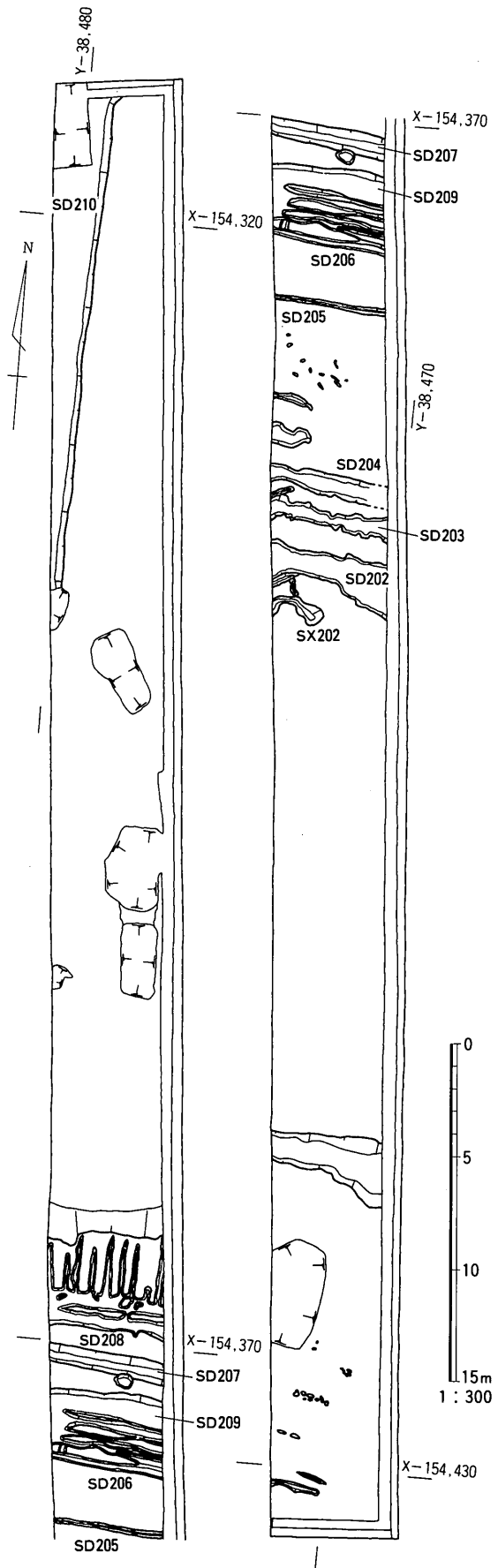


図70 西調査地北区遺構配置図(江戸時代以降)

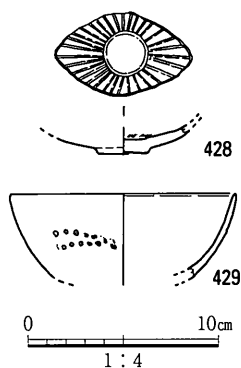


図71 2層下面検出溝群出土遺物実測図
SD207 : 428、SD208 : 429

4)江戸時代以降の遺構と遺物

2層の下面で溝群が検出された(図70)。調査区中央付近から南は東西方向の溝が多数掘られていた。SD208のように直角方向に小溝が派生しているものもあった。その平面形態から畠の畝間の溝と考えられる。調査区の北半部は南半部に比べて10cmほど低くなっており、西壁沿いにSD210が掘られていた。SD210は幅2.4m以上、深さ約0.3mで、埋土は黄灰色シルト～極細粒砂であった。島畠の溝であるのかもしれない。

428・429は陶磁器である(図71、図版24)。428はSD207から、429はSD208から出土した。江戸時代以降に属する。

(高橋)

第3節 西調査地南区(NG96-40次調査)

1) 地層と遺物

i) 層序

本調査地では現代の地層である0・1層の下に、2層、3層、4C(i~vii)層、5層、6層、7A(iii・iv・vi)層、8~9A一括層の分布が確認された(図72、図版1・3)。地層確認のための深掘りトレンチでは9B層、9C層、10A層が、さらに検土杖による調査で10B層も確認された。4C層・7A(iii・iv・vi)層については本調査地が模式地のひとつである。

2層は3分された。それぞれ上部・中部・下部と呼称する。層相は上部はオリーブ灰色細粒砂質シルト層、中部は黄褐色シルト質中粒砂層、下部はオリーブ褐色シルト質細~中粒砂層であった。いずれも作土層で、層厚はそれぞれ10cm以内であった。

3層は2分された。それぞれ上部・下部と呼称する。層相は、上部が褐色中粒砂質シルト層、下部がオリーブ褐色中粒砂質シルト層であった。いずれも作土層で、層厚はそれぞれ約10cmであった。上部・下部ともに下面で溝やピットを検出した。

4C層は7分された。4Cii・iv・v層の下面、4Cvi・vii層の基底面でそれぞれ溝やピットを検出した。

4Ci層：オリーブ褐色中粒砂混りシルト層で、層厚は約8cmであった。

4Cii層：黄褐色中粒砂混りシルト層で、層厚は最大で8cmであった。下面で溝を検出した。

4Ciii層：灰オリーブ色中粒砂混りシルト層で、層厚は6~10cmであった。

4Civ層：にぶい黄褐色シルト混り中粒砂層で、層厚は8~12cmであった。下面で溝を検出した。本層準はおもに中粒砂によって構成され、その形成において河川の影響を強くうけた可能性がある。

4Cv層：暗灰黄褐色シルト層で、層厚は最大で14cmであった。

4Cvi層：灰黄褐色細粒砂混りシルト層で、層厚は約10cmであった。下面で溝や土器埋納遺構を検出した。

4Cvii層：暗灰黄色細~中粒砂混りシルト層で、層厚は5~20cmであった。基底面で溝を検出した。

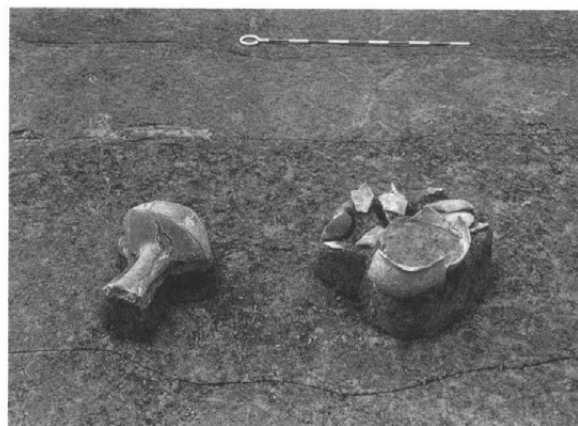


写真8 西調査地南区5層内遺物出土状況

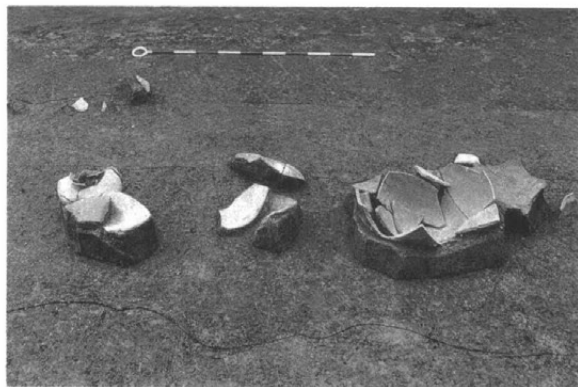


写真9 西調査地南区5層内遺物出土状況

5層は暗灰黄色シルト混り細粒砂層で、層厚は最大で30cmであった。基底面で溝を検出した。土師器・須恵器などが出土した(写真8・9)。

6層は灰オリーブ色シルト混り中～細粒砂層で、本調査地では細分できず、一括層準とした。層厚は約5cmで、部分的に暗色を呈していた。

7Aiii層の層相は暗オリーブ灰色粗～細粒砂層であった。南端付近で斜行葉理が顕著となり、層厚は最大で125cmであった。側方に細粒化し、約5cmの厚さで調査地全体に分布していた。

7Aiv層の層相は暗緑灰色粘土質シルト～暗オリーブ灰細粒砂層であった。南端付近で層厚は最大の100cmに達した。粘土質シルトの薄層と細粒砂の薄層が互層に堆積する状況がみられた。

7Avi層はオリーブ黒色粘土～浅黄色粗粒砂層で、層厚は最大で100cmを測り、斜行葉理が顕著な水成層であった。

8-9A層は1層に収斂していた。上部は灰色シルト質粘土、下部は灰色粗粒砂混り粘土であったが、両者の層界は漸移的で不明瞭であった。層厚は20～30cmで、上面で偶蹄類の足跡を検出した。

9B層は灰色粗粒砂混り粘土層で、層厚は約30cmであった。下半部で粗粒砂の含量が増加していた。

9C層の層相は暗オリーブ灰色粗粒砂層であった。非常に固くしまった層で、層厚は北端付近で約15cmあったが、南部には分布しなかった。

10A層は灰色粘土層で、層厚は約45cmであった。本層以下は検土杖による調査の所見である。

10B層は暗緑灰色粘土層で、層厚は50cm以上とみられる。

(高橋)

ii) 各層出土の遺物

2・3層出土の遺物(図73、図版33)

430は2層、431～434・438は3層からの出土である。430・431は瓦質焼成の平瓦片である。432・433は東播系須恵器鉢の口縁部である。432は13世紀以降に下る。434は瓦器碗の底部で、形骸化した低平な高台が貼付けられており、最終末の形態に近い。C－Ⅳ期でも新相とみられ、14世紀後半以降に下るものとみられる。438は黒色土器A類の碗で、高台の発達度合から平安時代Ⅲ期古段階に属するとみられる。下位層準からの混入品であろう。434の形態からみて3層は14世紀後半以降とみられる。

4C層出土の遺物(図73、図版33・34)

435・437・439～443・445・447～457は4C層から出土した。435・441～443・445・453～457は土師器、437・447～452は須恵器、439・440は黒色土器である。瓦器は出土していない。445は碗で、4Ci～ii層の出土品である。口径は13.6cmを測り、外面下部には指頭圧痕が残る。平安時代Ⅱ期古段階以前に位置づけられる。456は甕で、4Civ層から出土した。口縁部が外方に折り曲げられる。平安時代ⅡないしⅢ期に属する。441は碗で、4Cv層から出土した。口径は13.9cmで、高台が付く。平安時代Ⅲ期古段階に属する。435・439・442・443・447は4Cvi層から出土した。435は小皿で、口径は9.7cm、器壁はやや厚手である。平安時代ⅡないしⅢ期に属する。439はA類の碗で、内面を密

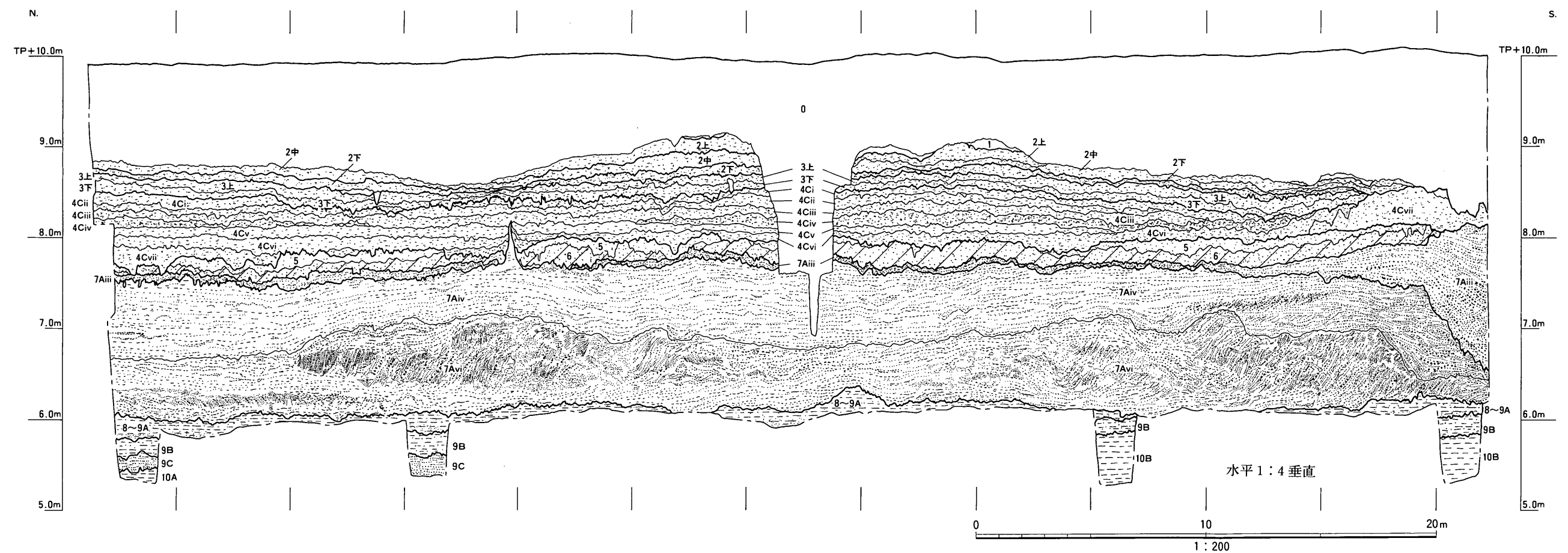


图72 西調查地南区東壁地層断面図

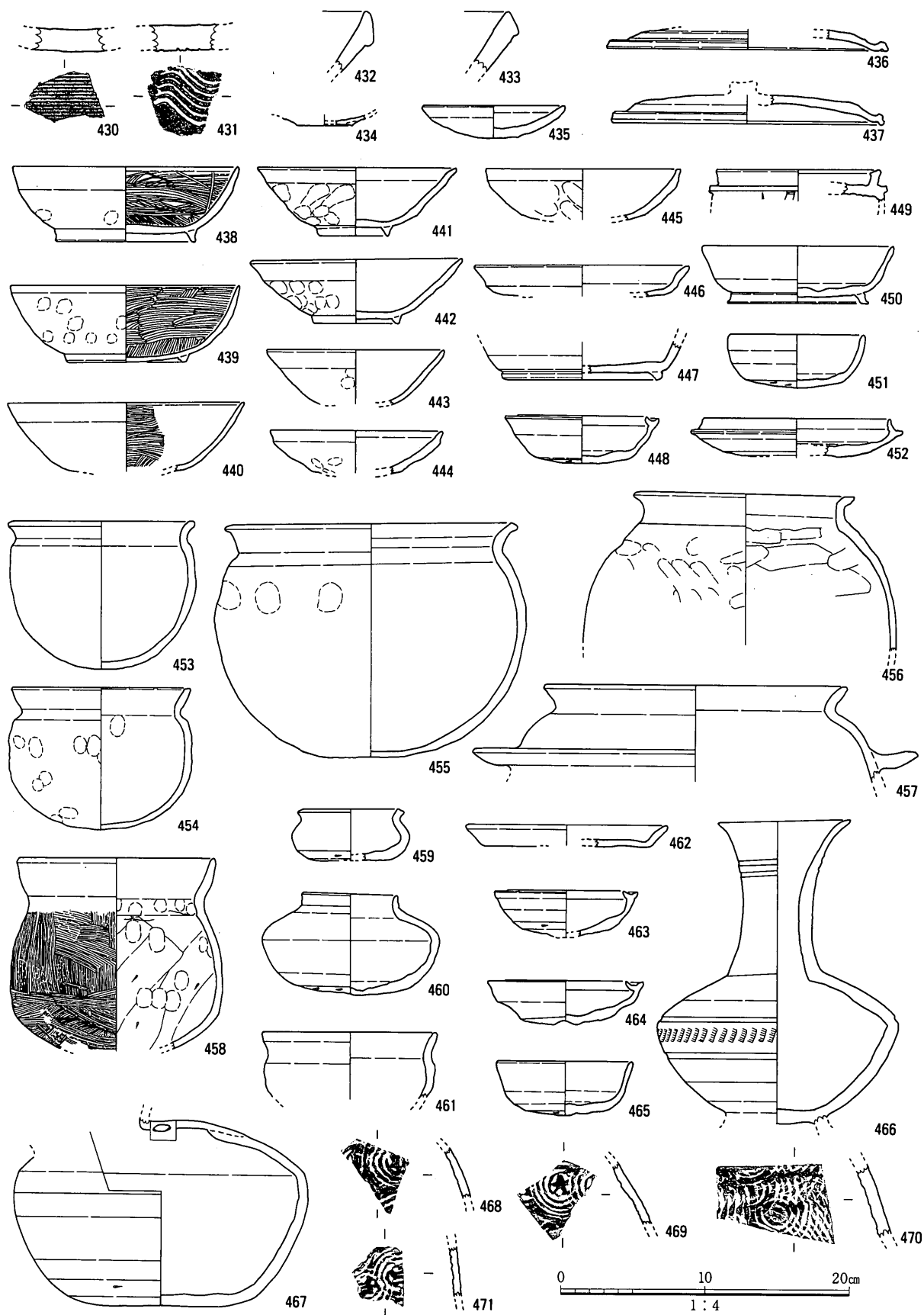


図73 西調査地南区各層出土の遺物

2層：430、3層上部：431～434、3層下部：438、4Ci～vii層：437・445・449・469、4Civ層：452・456、4Cv～vi層：448・450・451・454、4Cv層：441、4Cvi層：435・439・442・443・447、4Cv～5層：444・446、4Cvi～vii層：440・455、4Cvi～5層：458・459・463、4Cvi～6層：436・468・471、4Cvii層：453・457、5層：460～462・464・466、6層：465・467・470

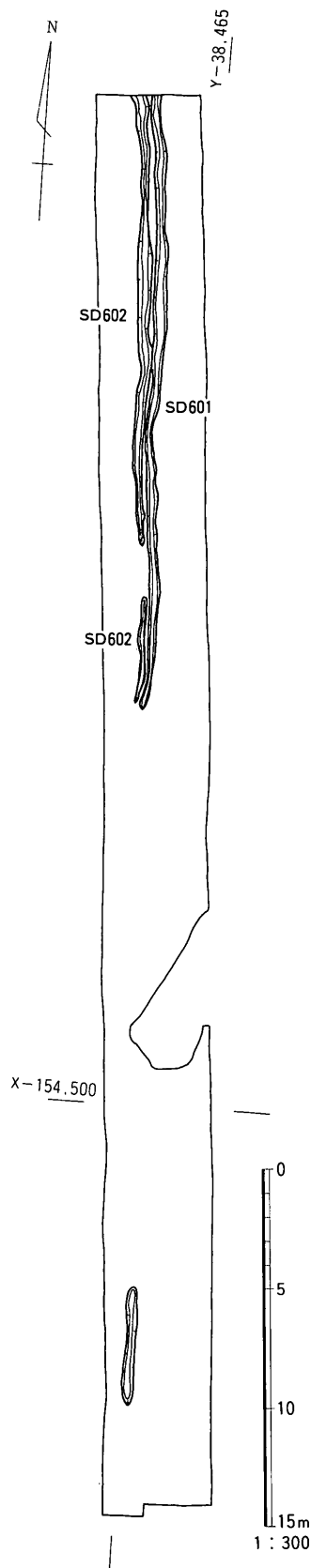


図74 西調査地南区遺構配置図
(飛鳥時代)

なヘラミガキで調整する。高台はさほど発達しておらず、平安時代Ⅱ期中段階ごろに属する。442は椀である。口径は14.6cmで、高台をもつ。平安時代Ⅱ期中段階～Ⅲ期古段階に属する。443も椀で、平安時代ⅡないしⅢ期に属する。453・457は4Cvii層から出土した。453は甕で、頸部がやや低くなってきており、平安時代Ⅰ期に属する。457は羽釜である。454は4Cv～vi層から、455は4Cvi～vii層から出土した甕である。ともに平安時代Ⅰ～Ⅱ期に属するものとみられる。437は杯蓋で、奈良時代後半から平安時代前半のものである。449は円面硯で、スカシ孔のある圈足をもつ。硯面は陸と海の境界が明瞭でなく、堤を設けない無堤式[植崎彰一1982]に属する。脚部上端の突帯の断面が方形を呈するものは、平安時代Ⅰ期以前のものに多く、本例も平安時代初頭以前に属すると考えられる。448・450～452は飛鳥時代の須恵器で下位層準からの混入品であろう。これらの遺物から考えて、4Cvii層は8世紀末から9世紀初頭、4Cvi層は9世紀から11世紀前半で、4Cv層以上も瓦器を含まないことから11世紀前半のうちに収まるものとみられる。

436・444・446・458・459・463は4C～6層から出土した遺物である。須恵器杯蓋436・土師器椀444・土師器皿446は、奈良時代末から平安時代前半に属する遺物である。土師器甕458・須恵器壺459・須恵器杯身463は飛鳥～奈良時代初頭の遺物である。458は飛鳥Ⅴ、463は飛鳥Ⅱに属する。

5・6層出土の遺物(図73、図版34)

460～462・464・466は5層から出土した。461・462は土師器、460・464・466は須恵器である。須恵器はすべて飛鳥時代の遺物である。壺461は奈良時代によくみられる器形である。皿462は口径14.1cmで、口縁が底部から直線的に立上がる。こうした特徴の皿は平城宮土器Ⅱ以後に登場するようである。飛鳥時代の遺物を多く含むものの、5層の年代は8世紀中葉以降に下るとみられる。

須恵器465・467・470は6層から出土した。465は杯身で、口径は9.5cmである。飛鳥Ⅱに属する。467は平瓶で、肩部は丸みを帯びており、飛鳥時代に属するものである。470は甕体部の破片で、内面に車輪文当て具の痕跡がみられる。468・469・471も同様で、中心の文様が星形である。車輪文は飛鳥時代に多くみられる当て具痕である。こうした遺物から、6層の年代は7世紀前半代に求められる。(高橋)

2) 飛鳥時代の遺構と遺物

SD601(図74、図版16)

調査区北半部の5層基底面で検出し、南北方向に延びていた。幅0.65m、深さは0.10m、埋土はオリーブ褐色シルト混り細粒砂であった(図78)。SD602を切っており、埋土には顕著な流水の痕跡はなかった。内部より土師器・須恵器が出土した。

472・474・480は須恵器、473・475・476～478は土師器である(図75・76、図版34・35)。472は杯身で、口径は10.6cmである。飛鳥Ⅲに属する。474は平瓶で、胴部最大径18.5cmである。肩部は丸みをもっており、飛鳥ⅡないしⅢに属する。480は甕で(図76・図版35)、口径20.1cm、高さ42.4cmである。底部外面の3個所に、直径13～14cmの円形に自然釉が付着していない個所がある(図版37)。その輪郭線上には同じ須恵質のものが付着している。焼成時に窯内部で正立させるための焼台が溶着したものと考えられる。飛鳥時代に属する。475は甕で、口径は14.6cm、高さは13.7cmである。口縁部に強いナデを施している。飛鳥ⅡないしⅢに属する。478は把手付甕である。口径は22.3cm、高さは28.4cmで、胴部中位に上反りで断面が扁平な把手がつく。口縁部はナデ、胴部外面はハケ、胴部内面はナデで調整する。476・477は曲げ庇竈の破片で、476は口縁部から庇部、477は焚口部にあたる。473は皿である。口径は15.0cmで、口縁部外面には強いナデが施され、やや外反ぎみに立上がる。こうした皿は奈良時代前半に出現するようで、遺構の上下の地層の年代と矛盾はしないが、奈良時代に下る遺物はこれだけで、混入品の可能性が高い。

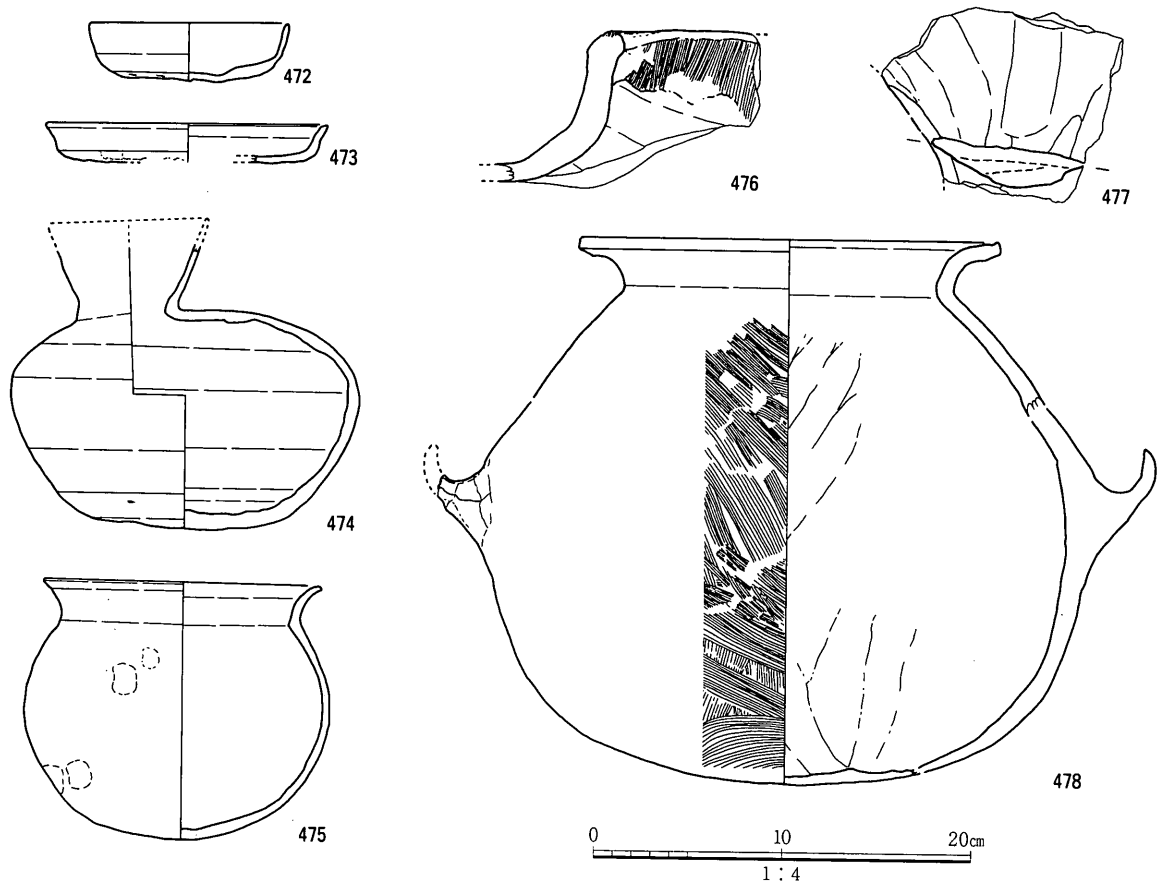


図75 SD601出土遺物実測図

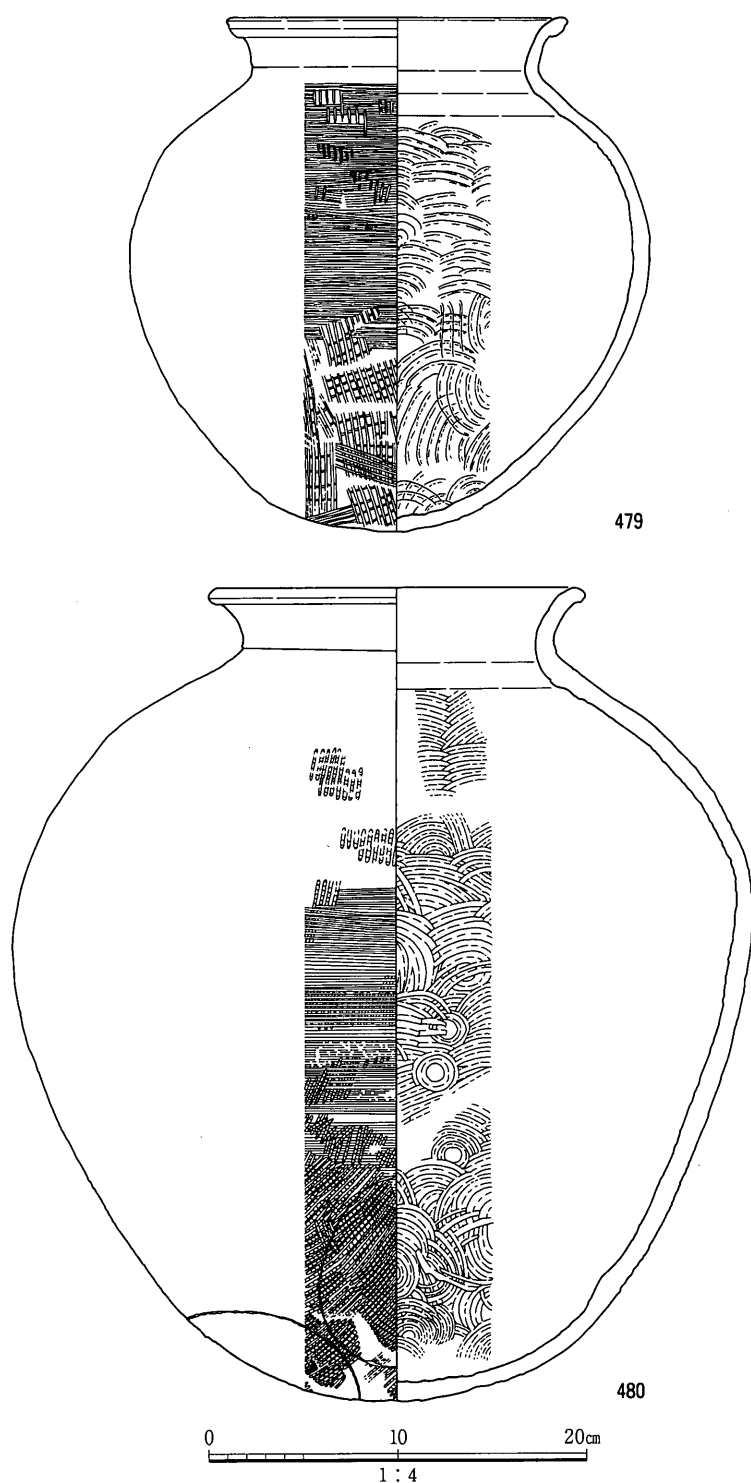


図76 SD601・602出土遺物実測図
SD601：480、SD602：479

Wで、西肩は調査区外にあたり全幅は不明であるが、検出された部分で最大幅は2.6m、深さは約0.5mであった。埋土は上下2層に分れ、上層は灰褐色砂質シルト、下層は灰オリーブ色シルト混り細～中粒砂からなっていた。下層にはラミナが観察され、流水があったと判断された(図78)。

上層出土の遺物には土師器481～483・487・490・509・511、須恵器492・494・503～506・508・516・517、黒色土器489、製塩土器513・515、瓦512、鉄滓518がある(図79、図版35)。481～483

SD602(図74)

SD601と平行する溝で、幅0.7m、深さ0.1mであった。埋土はオリーブ褐色シルト混り中粒砂で(図78)、4Cvii層基底面で検出した。底部に薄い水成層が観察できる個所があり、流水があったものとみられる。土師器・須恵器が出土した。

479は須恵器甕で、口径は19.6cm、高さは26.7cmである。

(高橋)

3)平安時代の遺構と遺物

i) 溝

SD4C11(図77右)

調査区南部の4Cvii層基底面で検出した。幅0.80m、深さは0.15mで、埋土は暗褐色シルト質中～細粒砂であった(図78)。調査区南端付近で、SD4C10に切られていた。土師器・須恵器が出土した。

493(図79)は土師器碗である。口径は14.5cmを測り、口縁部外面に強いナデ調整を施している。平安時代I期に属する。

SD4C10(図77右)

調査区の西壁沿いに全域にわたって検出した。検出面は4Cvi層基底面であった。溝の方向はN4°

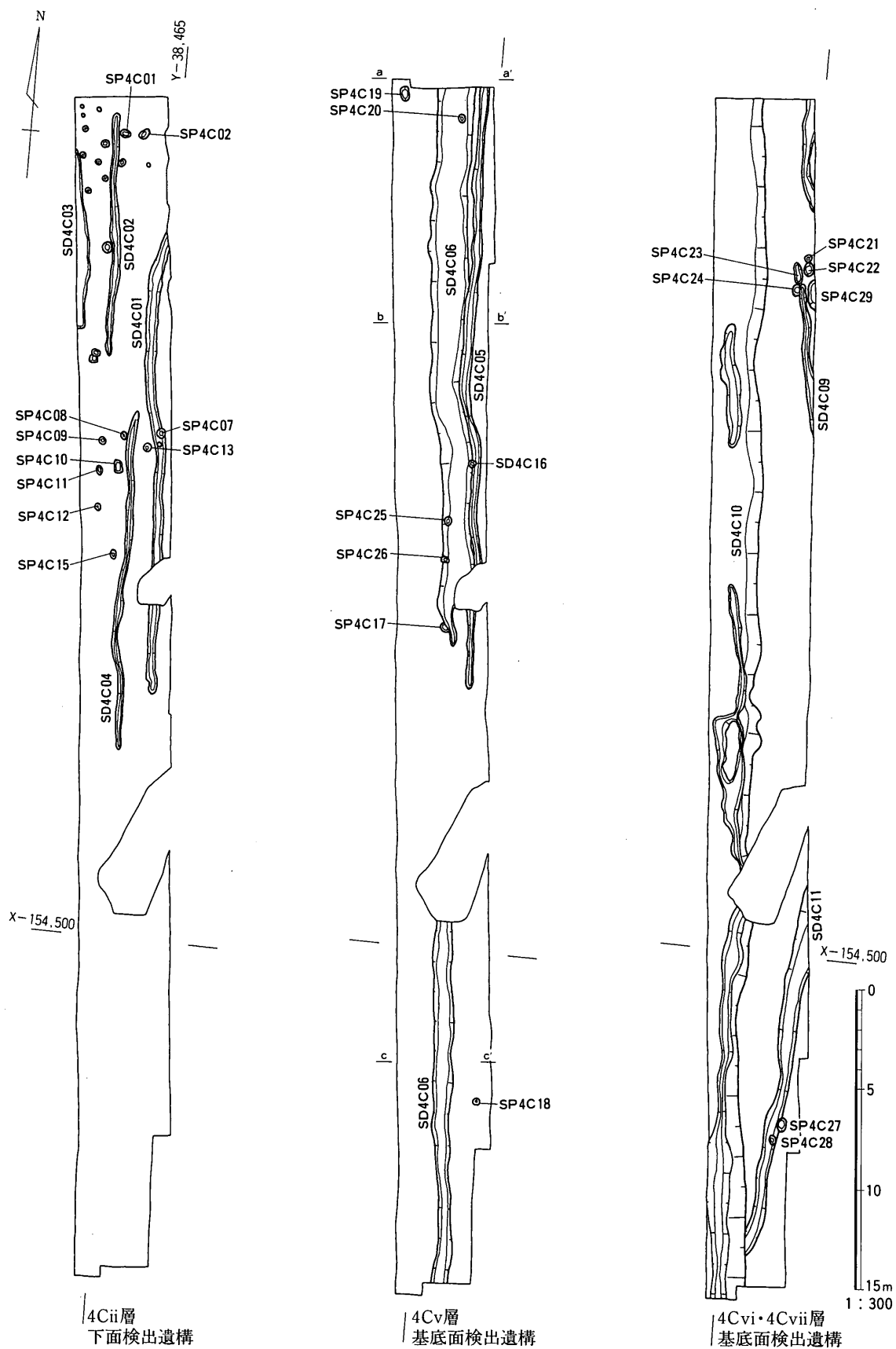


図77 西調査地南区遺構配置図(平安時代)

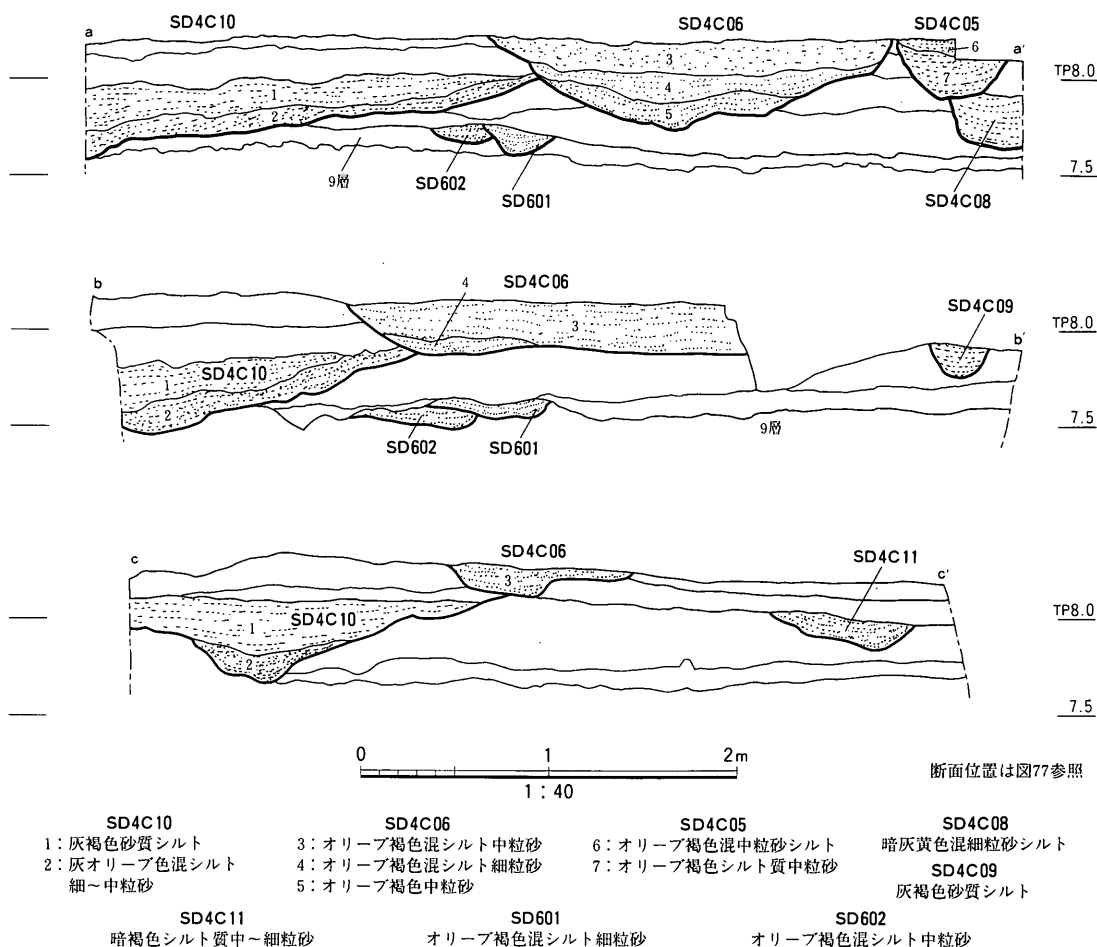


図78 飛鳥～平安時代溝断面図

は小皿である。481・482は「て」字状口縁をもち、低平な器形で、口径も10cmを超える。483は口径が11.2cmで、底部には指頭圧痕が残る。これらは平安時代Ⅲ期古段階に属する。487は皿Dで、口縁部に強い横ナデを加える。平安時代Ⅲ期古段階に属する。490は椀で、口径が15.0cmと大型で、平安時代Ⅱ期古段階に属する。489はA類で、高台がかなり発達しており、平安時代Ⅲ期とみられる。511は竈の支脚下端部で、いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。曲げ底竈の一部であろう。492・504～506は杯身である。506は平城宮土器Ⅱ、492は高台の断面形やその位置から、平城宮土器ⅤないしⅥに属すると考えられる。504・505と杯蓋503は飛鳥時代のもので、飛鳥Ⅱ～Ⅲに属する。494は小型の壺で、回転糸切り底をもつ。平安時代Ⅱ期ごろに属するものとみられる。508は鉢の底部である。516は甕胴部の破片で内面に車輪文当て具の痕跡が残る。飛鳥時代の遺物であろう。517はおそらく甕の一部で、環状の把手がついている。513は外面にタタキメが残り、6世紀後半から7世紀ごろの備讃瀬戸系の製塩土器とみられる。515は内面に布目の圧痕がみられ、8世紀のものと考えられる。このように、上層出土の遺物は飛鳥から平安時代にかけての遺物を含む。量的には平安時代Ⅱ期の遺物が中心で、一部、平安時代Ⅲ期に下るものも含んでいる。

下層出土の遺物には、土師器484～486・488・496～498・500～502・510、須恵器491・495・499・507、製塩土器514がある(図79、図版35・36)。485・486は椀で、底部に指頭圧痕が残る。NG 87-35次調査南Ⅱ区SD007出土遺物[大阪市文化財協会1992a]に同時期と思われる資料があり、平安

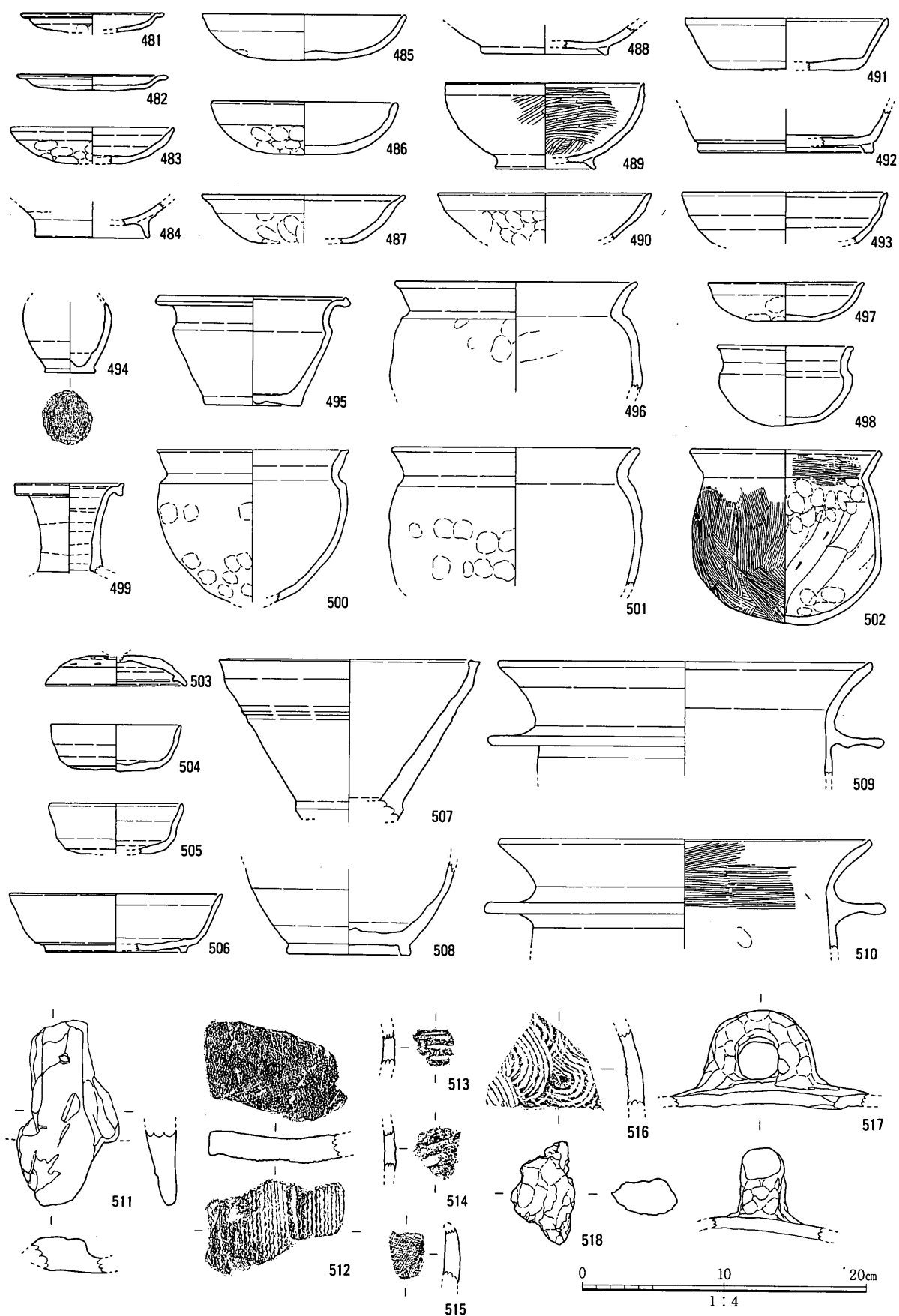


图79 SD4C10·4C11出土遺物実測図
SD4C11 : 493、SD4C10 : 481~492・494~518

時代Ⅰ期に属するものであろう。488は杯Bの底部で、やはり平安時代Ⅰ期に属するものであろう。497は小皿で、口径10.8cmである。形態の変化が乏しく、時期を決めにくい遺物であるが、平安時代Ⅱ期に下る可能性もあろう。498は小型の壺で、奈良時代に多くみられる器形である。496・500～502は甕である。502は飛鳥Ⅴ前後に属する。496・500・501は口縁部外面に強いナデ調整を施し、胴部外面には指頭圧痕が残る。奈良時代末から平安時代初頭ごろに属するとみられる。491は杯で、口縁部の立上がりは直線的である。平安時代Ⅰ期に属する。495は小型の広口壺で、奈良時代に属する。499は壺の頸部で、平安時代でも早いころの遺物であろう。514はタタキを施した備讃瀬戸系の製塩土器である。484は碗の底部で、高台の高さからみて瓦器出現期ごろに下るとみられるが、平安時代後半の遺物はこれだけで、上層からの混入品とみられる。このように、下層出土の遺物は平安時代Ⅰ期前後の遺物がほとんどで、その時期を奈良時代末から平安時代初頭に求めることができる。

SD4C09(図77右)

調査区北半部の東壁際で検出した。検出面は4Cvii層基底面で、幅は0.30m、深さは0.18mであった。埋土は灰褐色砂質シルトで、土師器・須恵器が出土した。

SD4C06(図77中、図版18)

調査区中央部の4Cv層基底面で検出した。溝の方向はN4°Wで、幅は最大で2.1m、深さは0.4mであった。埋土は3層に分れ、上層はオリーブ褐色シルト混り中粒砂層、中層はオリーブ褐色シルト混り細粒砂層、下層はオリーブ褐色中粒砂層であった(図78)。顕著なラミナは観察されなかったが、4C

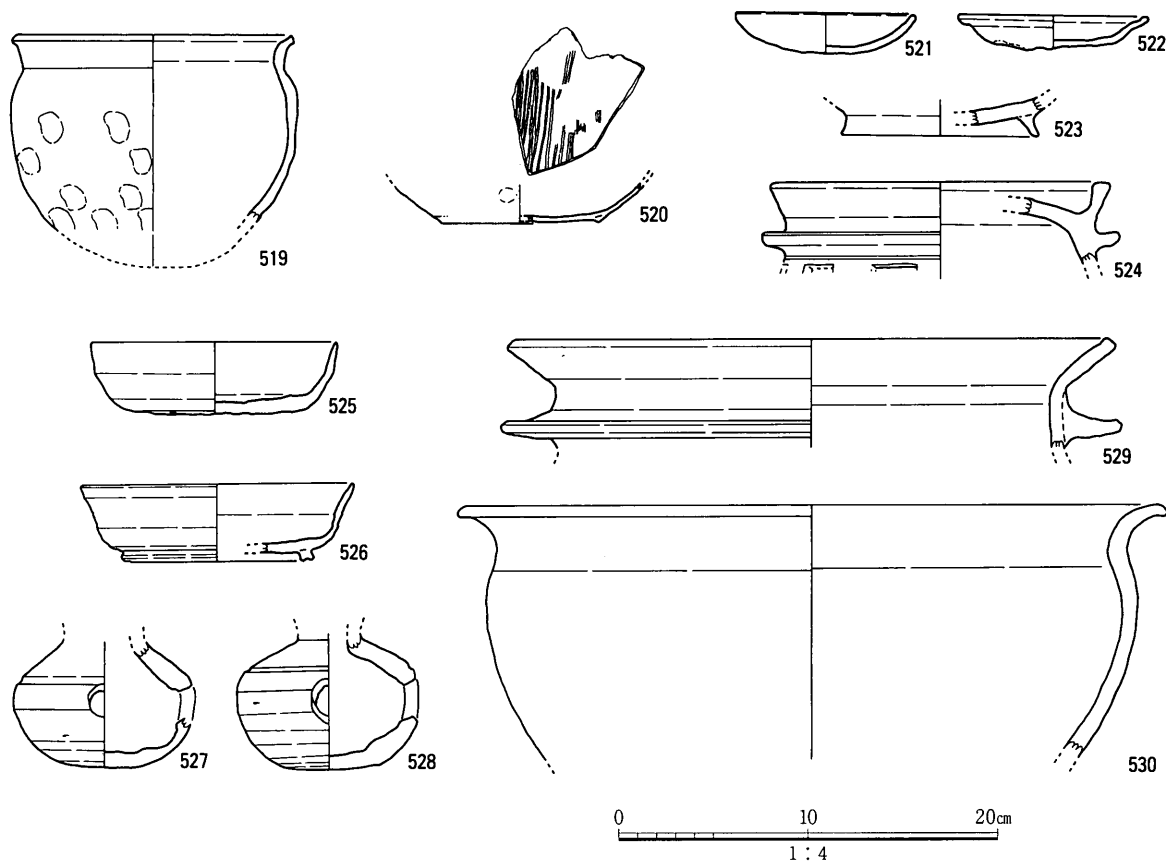


図80 SD4C06・SP4C18出土遺物実測図
SP4C18：519、SD4C06：520～530

層の遺構の中では、砂の含有率が高いのが本遺構の埋土の特徴である。SD4C05に切られており、須恵器・土師器・黒色土器が出土した。

521～523・529・530は土師器、524～528は須恵器、520は黒色土器である(図80・図版36)。521・522は小皿で、522は「て」字状口縁をもつが、口径は10.5cmと比較的大きく、やや古相とみることができる。ともに平安時代Ⅲ期に属する。523は碗の底部で、高台は発達しており、平安時代Ⅲ期に属するものであろう。529は羽釜、530は鍋である。524は円面硯で、スカシ孔のある圈足をもつ。海と陸の境目は明瞭でない。平安時代Ⅰ期以前のものであろう。525・526は杯身で、飛鳥時代末から奈良時代前半のものである。527・528は甕でTK217型式以前のものである。520は碗の底部で、低平な高台をもつ。平安時代Ⅱ期の古段階に属する。このように、本遺構出土の遺物の年代は飛鳥時代から平安時代に及ぶが、土師器小皿の形態からみて下限は11世紀前半に求められよう。

SD4C05(図77中、図版18)

調査区北半部で、SD4C06の東肩沿いに検出された。検出面は4Cv層基底面で、幅は0.6m、深さは0.3mであった。埋土は2層に分層でき、上層はオリーブ褐色中粒砂混りシルト層、下層はオリーブ褐色シルト質中粒砂層であった(図78)。土師器・須恵器が出土した。

SD4C01～04(図77左)

4Cii層下面で検出した。これらの溝は、幅は0.4～0.5m、深さは0.1m程度で、埋土は灰褐色シルト質細粒砂からなっていた。

ii) 土器埋納遺構

SP4C28(図77右・81、図版17)

調査区南部で、SD4C11を切って検出されたピットで、検出面は4Cvi層基底面であった。東西0.25m、南北0.37m、深さは0.15mで、埋土は灰茶褐色シルト質細粒砂からなっていた。土師器杯533の上に土師器甕535を重ねた状態で出土した。ほかに須恵器532が出土した。

甕535(図83、図版36)は口縁部にナデを施し、体部外面には指頭圧痕が残る。口縁がやや短くなっており、平安時代Ⅱ期前後とみられる。杯533は口径13.5cmで、口縁部外面に強いナデを加え、底部

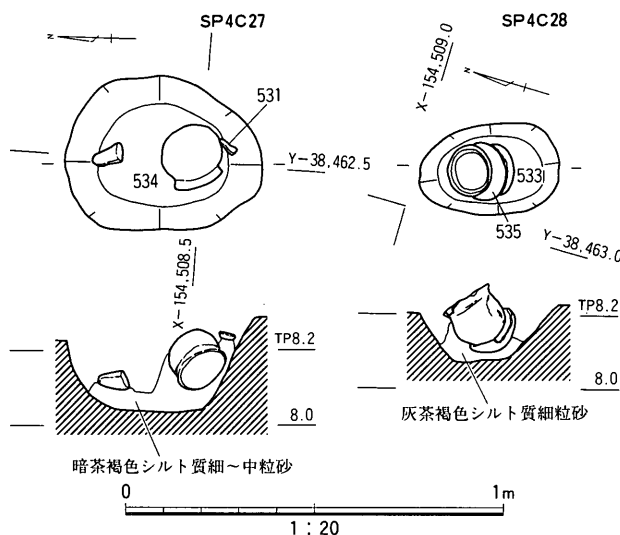


図81 SP4C27・4C28平・断面図

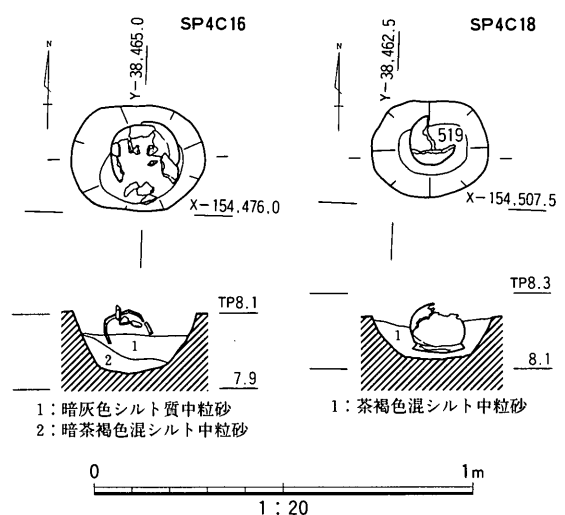


図82 SP4C16・4C18平・断面図

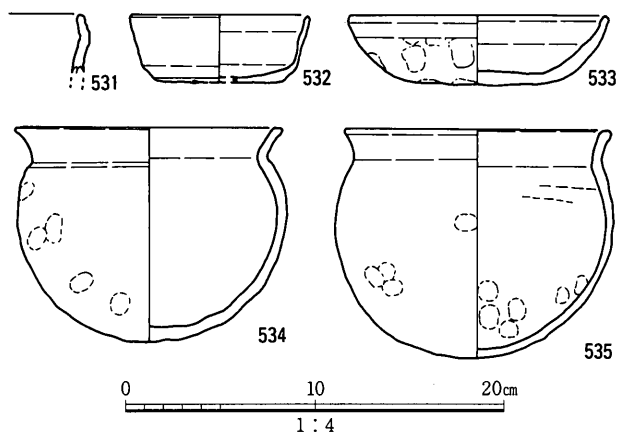


図83 SP4C27・4C28出土遺物実測図
SP4C27: 531・534、SP4C28: 532・533・535

には指頭圧痕が残る。平安時代Ⅰ期に属する。杯身532は飛鳥時代前半のもので混入品とみられる。

SP4C27(図77右・81、図版17)

SP4C28の北東約1mの地点で検出した。検出面は4Cvi層基底面で、SD4C11を切っていた。東西0.40m、南北0.50m、深さは0.25mで、埋土は暗茶褐色シルト質細～中粒砂からなっていた。土師器甕534が口縁を下にした状態で出土した。ほかには製塩土器片531

が出土している。

甕534(図83、図版36)は、口縁部にナデを施し、体部外面には指頭圧痕が残る。平安時代Ⅰ期に属する。

SP4C18(図82、図版19)

調査区南半部の4Cv層下面で検出した(図77中)。東西0.30m、南北0.25m、深さは0.10mで、埋土は茶褐色シルト混り中粒砂からなっていた。土師器甕519が底部を上にして出土した。

甕519(図80、図版36)は口縁部外面のみをナデ調整し、体部外面は指頭圧痕が残る。平安時代Ⅱ期古段階に属する。

SP4C16(図82、図版18)

調査区北半部で、SD4C05・4C06に切られて検出された(図77中)。検出面は4Cv層下面で、東西0.35m、南北0.26m、深さは0.18mであった。埋土は上層が暗灰色シルト質中粒砂層で、下層が暗茶褐色シルト混り中粒砂層であった。土師器甕が底部を上にした状態で出土した。

(高橋)

4) 鎌倉時代以降の遺構と遺物

i) 溝群(図86)

3層下部下面と3層上部下面で検出した。おおむね幅0.2～0.4m、深さ5cm程度であった。埋土はそれぞれの上位層と同質のものであった。3層下部下面検出のものの中には、底部に鋤跡がみられ、鋤溝と判断されるものがあつた。溝の方向はほぼ一定しており、N10°E前後であった。

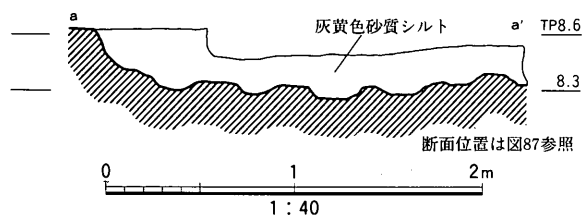


図84 SX301断面図

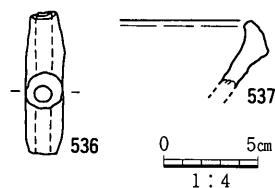


図85 SX301出土遺物実測図

ii)その他の遺構

SX301(図84・86)

調査区中央部で検出し、方形に掘込んで高さ約30cmの段を形成していた。検出面は3層下部下面で、南北約12m、東西4m以上で、調査区の東側へ続くものとみられた。底部はさらに南北方向の溝状に掘られていた。土師器・須恵器・瓦器・土錘(図85)などが出土した。

536は土錘である。長さ7.5cm以上、幅約2.1cmである。須恵質の焼成である。537は東播系の須恵器鉢の口縁部で、13世紀以降とみられる。

噴砂跡(図86・87)

3層下部下面、調査区中央部南側で検出した。砂脈は北から南に延びて、途中から南東方向に向きを変えていた。南北方向の部分は溝群と同じ方向で砂脈が噴出しており、南側では噴砂が平面的に広がる状況がみられた。

(高橋)

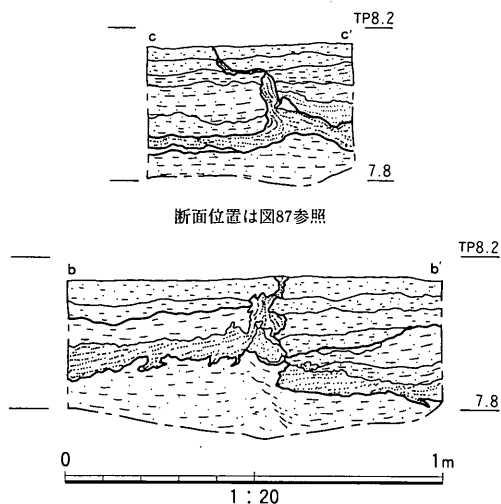


図86 噴砂断面図

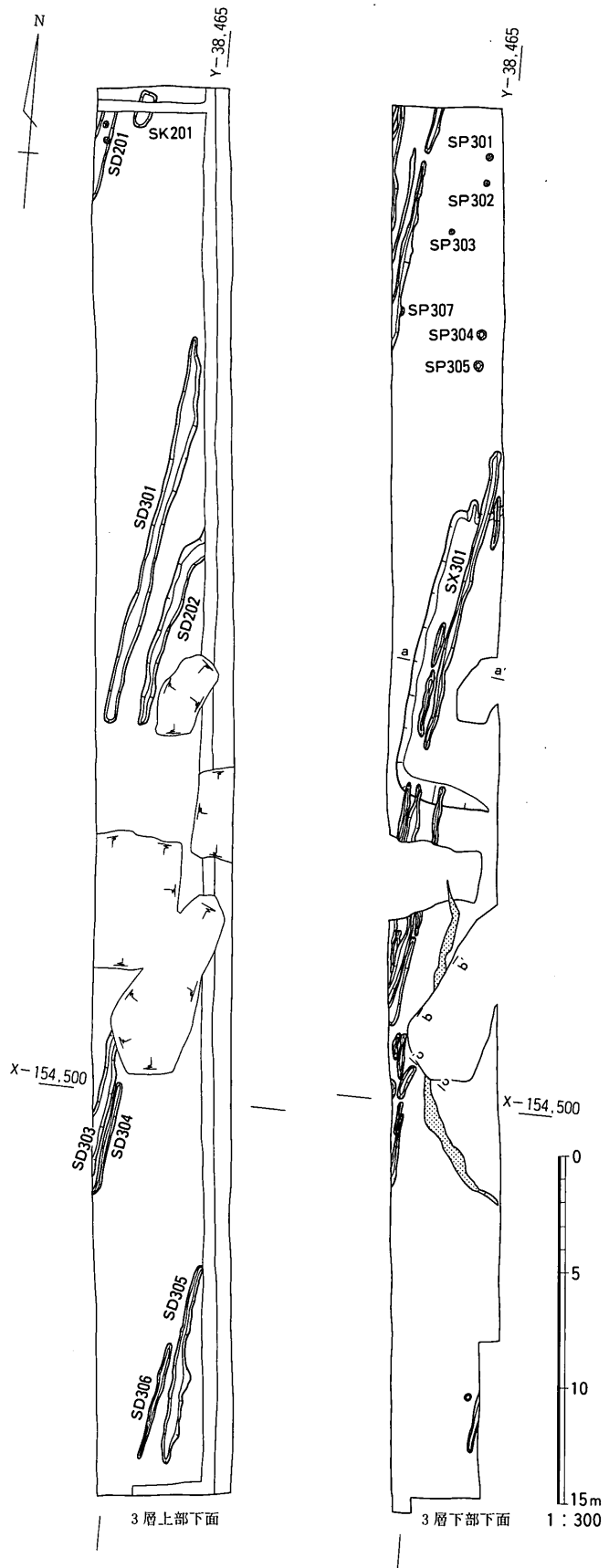


図87 西調査地南区遺構配置図(鎌倉時代以降)

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態

1)はじめに

第Ⅱ章で示したように、当該地区の基本層序と長原遺跡のその間には、おもに古墳時代から奈良時代の層序に関して大きな差異がある。そしてその差異が、沖積平野と台地という堆積環境の差に起因するであろうことは想像に難くない。本章では、特にRK(六反;以下同)7A層の堆積によって地形環境が大きく変化したと考えられる古墳時代と飛鳥時代の地形復元を試み、地形変化の様相を具体的に明らかにしてみたい(註1)。対象とした範囲は、長原遺跡に加えて八尾市域にあたる長原遺跡北側の周辺地域を含む(図88・表5)。これは、台地部と沖積平野部の地形変化を比較することによって、長原遺跡東北地区が立地する沖積平野の特性を、より鮮明に浮かび上がらせようという意図に基づくものである。

また、上に設定した時代と地域の中には複数の集落が展開する。それらの集落と生産域・墓域の関係、各集落の消長について、地形環境や政治的背景の変化との関係を考察しながら、地域としての動態に言及してみようと思う。

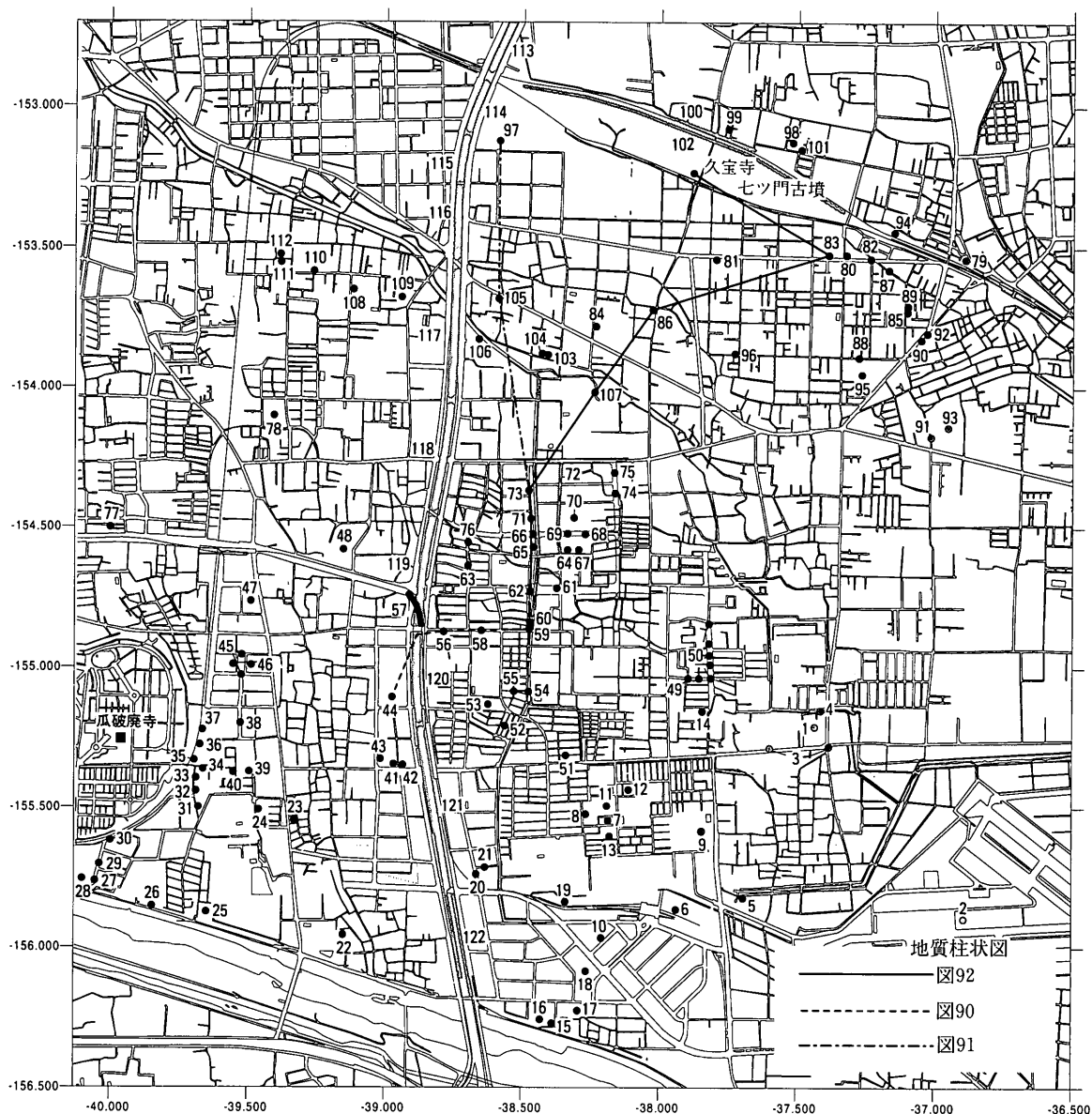
2)古墳時代中～後期前葉の地形

古墳時代後期前葉(須恵器MT15型式)までに形成された地形を復元し、後期中葉(須恵器TK10型式)までの遺構を記入した図が図89である。範囲は長原遺跡と北部周辺遺跡を含む約3km四方にあたる。

瓜破台地

図89に示した地域の南西部は台地地形で、TP+7.5～13.5mの等高線がほぼ等間隔に北西－南東方向の曲線を描く。この部分は、低位段丘構成層のNG15～13B層とその表面を覆う沖積層下部層のNG13A層(長原地山層)からなる瓜破台地の北東縁辺部にあたり、南西から北東に向って標高が下がる地形である。地山層の上位にはNG7B層や12層が堆積しているが、いずれも層厚は薄く、古墳時代以前は台地上での堆積作用は弱かったとみられる。長原遺跡中央地区東側の、大阪文化財センターによる城山(その3)調査では、縄文時代から古墳時代後期にかけて流れていた自然流路1・2が見つかるが、古墳時代中期以降には黒色粘土が堆積し、流水はほぼなくなっていたものとみられる[大阪文化財センター1986a]。

台地上を南から北北西へ延びる谷は、馬池谷と呼ばれている。谷内部のこのころの堆積状況は、上流側のNG96－32次調査で河成の砂層が見つかり、ほぼ常時、水流があったと推定されている[大阪



国土地理院発行 1:10000 数値地図「八尾」のデータを使用

図88 長原遺跡と周辺遺跡における主要な調査(番号は表5に対応)

市文化財協会1996b]。下流側のKR94-7次調査では、比較的細粒の堆積物が堆積し、乾湿が繰返されたと推定されている[大阪市文化財協会1994e]。谷を一気に埋積するような大規模な氾濫があった形跡はない。こうした堆積状況から、谷地形の中を小規模な自然流路が流れており、時折それが溢れて上流側から徐々に谷内部を埋めていたものと考えられる。馬池谷の西岸には南西から北東方向に延びる支谷がある。支谷は小字名から「小谷」と呼ばれ、馬池谷西岸の台地上にみられる浅い谷状の地形はこの支谷に連なるものと考えられる。この台地上の馬池谷より東側は長原遺跡西・中央・南の各地区と北・西南・東南地区の一部にあたり、さらに馬池谷の西側は長原遺跡西南地区の一部と瓜破遺跡東南地区にあたる。

台地東方沖積平野

台地の東側にはTP+7.5~11.5mの高さで、南から北、ないし南東から北西に向って緩やかに傾斜

表5 長原遺跡と周辺遺跡における主要な調査一覧

	調査名		調査名		調査名		調査名
1	SK81年調査	33	NG95-76次	63	NG83-1次	93	UM91-626・627次
2	SK2次	34	NG95-13次	64	NG97-41次	94	SKT90-1次
3	SK4次	35	NG95-41次	65	NG97-43次	95	TS1次
4	SK90-176次	36	NG96-76次	66	NG97-13次	96	TS3次
5	SK91-468次	37	NG95-14次	67	NG96-79次	97	KH9次
6	八尾南遺跡調査会	38	NG86-41次	68	NG97-12次	98	KH11次
7	YS81年調査	39	NG96-71次	69	NG97-52次	99	KH85-191次
8	YS3次	40	NG96-32次	70	NG95-77次	100	KH63-269次
9	YS7次	41	NG85-23次	71	NG96-40次	101	KH91-150次
10	YS8次	42	NG89-25次	72	NG12次	102	久宝寺遺跡竜華地区
11	YS10次	43	NG82-4次	73	西調査地北区	103	KM1次
12	YS18次	44	NG87-35次	74	東調査地	104	KM南亀井4丁目
13	YS19次	45	NG83-53次	75	西調査地南区	105	KM88-586
14	YS22次	46	NG83-70次	76	NG83-22次	106	亀井・城山
15	NG93-1次	47	NG84-25次	77	KR94-7次	107	KM府教委88年調査
16	NG89-48次	48	NG93-37次	78	DD85-1次	108	TK1次
17	NG82-41次	49	NG82-48次	79	AT安中町3丁目	109	TK3次
18	NG93-56次	50	NG84-4次	80	AT春日町1丁目	110	TK4次
19	NG14次	51	NG96-103次	81	AT4次	111	TK5次
20	NG87-16次	52	NG92-97次	82	AT6次	112	TK95-179次
21	NG87-62次	53	NG89-86次	83	AT7次	113	久宝寺南(その2)
22	NG94-47次	54	NG84-6次	84	AT8次	114	亀井北(その1)
23	NG94-34・66次	55	NG85-36次	85	AT12次	115	亀井北(その2)
24	NG97-60次	56	NG83-63次	86	AT18次	116	亀井北(その3)
25	NG95-28次	57	NG1次	87	AT19次	117	亀井
26	NG92-11次	58	NG83-65次	88	AT21次	118	城山(その1)
27	NG92-46次	59	NG84-86次	89	AT92-623次	119	城山(その2)
28	UR86-11次	60	NG16次	90	AT94-059次	120	城山(その3)
29	NG87-65次	61	NG97-56次	91	UM1次	121	長原(その1)
30	NG84-24次	62	NG80-1次	92	UM90-433次	122	長原(その2)
31	NG89-67次	凡例 SK: 木の本遺跡 YS: 八尾南遺跡 NG: 長原遺跡 UR: 瓜破遺跡 AT: 跡部遺跡 UM: 植松遺跡 SKT: 洪川庵寺 TS: 太子堂遺跡 KH: 久宝寺遺跡 KM: 亀井遺跡 TK: 竹濤遺跡					
32	NG97-18次						

する地形が形成されている。この地形は、おもに沖積層上部層以上の堆積層(NG12層～7B層)で構成されている沖積平野である。長原遺跡東南地区から八尾南遺跡西部にかけては上記堆積層の砂が発達するが、北東側の木の本遺跡周辺では粘質が強くなっている。この違いはこの地域の地形が、長原遺跡東南地区付近で発見された、古長原川・古川辺川・東川辺川・西川辺川[大阪市文化財協会1995a]などの、おもに縄文～弥生時代の河川の氾濫によって形成されたことを示している。木の本遺跡周辺はこうした氾濫原の周辺部にあたるとみられる。この沖積平野には、西から長原遺跡東南地区、八尾南遺跡、木の本遺跡が立地している。

出戸自然堤防

長原遺跡の北側に広がる沖積平野には自然堤防とみられる微高地が4箇所(図89)みられる。台地の北東側で、7.5mの等高線が巡る部分を出戸自然堤防と呼ぶ。その北東で図上に網かけで示した部分を六反自然堤防とする。さらにその北側に、東南東から西北西に延びる2条の帯状の微高地を、南から亀井自然堤防、久宝寺自然堤防と呼称する。

出戸自然堤防の平面形態は、南南東から北北西に主軸方向をとる南北約700m、東西約250mの楕円形を呈し、NG7層下面で周囲と比較すると、20～30cmの高さがあることがわかる(図90)。自然堤防のほぼ中央にあたるNG83-63・65次調査地には、層厚が最大1.3mに達する砂礫層が分布している[大阪市文化財協会1983d・e]。NG83-65次調査地では、砂礫層上面で弥生中期の遺構が発見さ

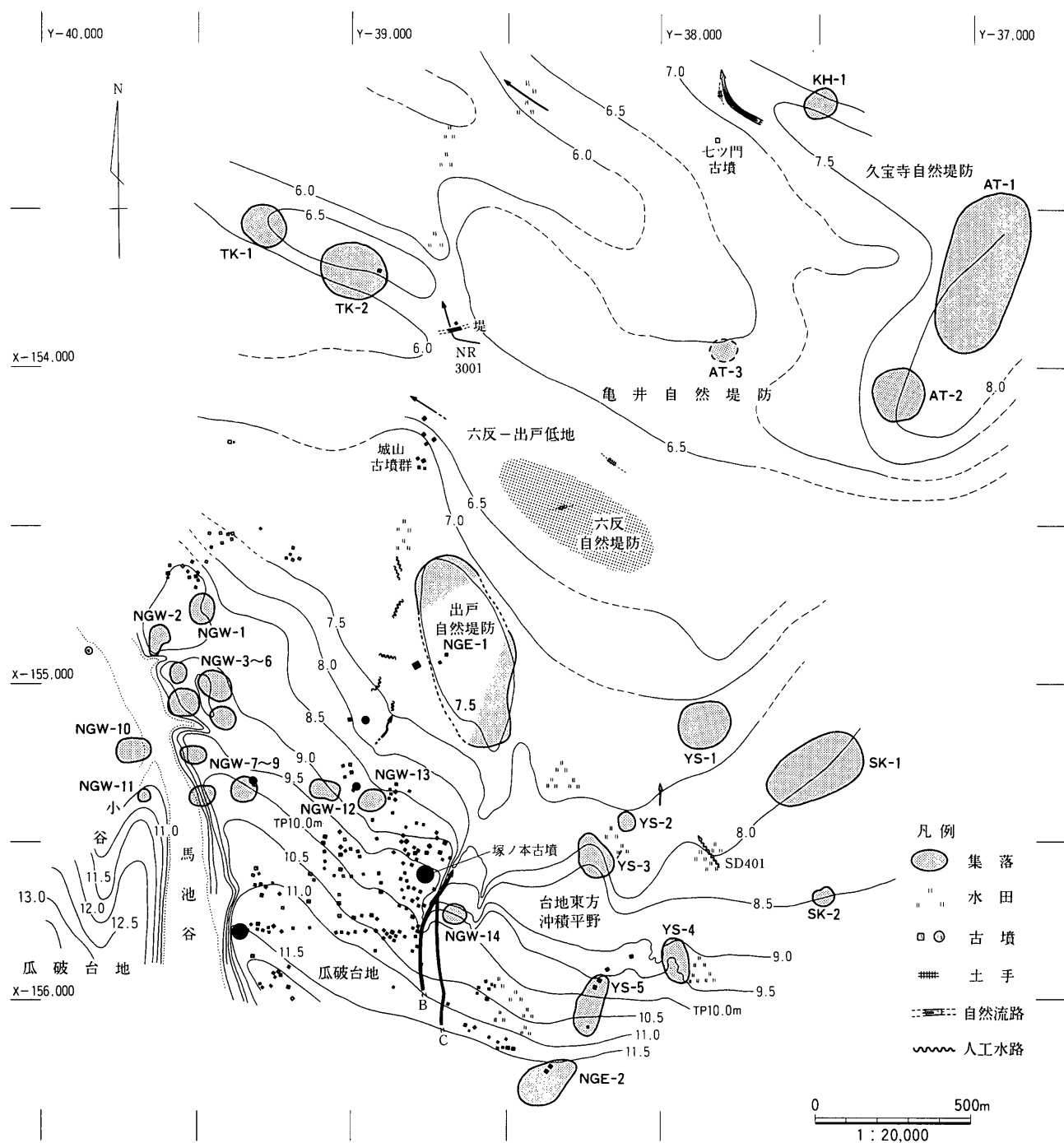


図89 古墳時代中～後期前葉の地形復元図

れており、砂礫層に縄文晩期の遺物が含まれることから、この層がNG8C層に対応することがわかる。NG8C層は南南東方向の長原遺跡東南地区と八尾南遺跡西部で分厚く堆積しており、洪水はその方面から、旧東除川の前身とされる塚ノ本古墳東側の浅い谷[趙哲済1994]を經由して台地縁辺部を流れ下ったものと考えられる。水流は沖積平野との傾斜変換点にいたって流速を減じ、粗粒の堆積物を堆積させてこのような自然堤防が形成されたのであろう。この北側で、標高のより低い長原遺跡東北地区では、NG8層に相当するRK9層は泥質であるばあいが多く、層厚もせいぜい30cm程度である。このことから、出戸自然堤防が南からもたらされた氾濫性堆積物によって形成されたということは頷けるであろう。出戸自然堤防には、弥生時代中・後期の集落が立地し[京嶋寛1991]、自然堤防東

部のNG84-6次調査地では庄内期の方形周溝墓も検出されている[大阪市文化財協会1984b]。古墳時代中期以前には、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて存続する集落が立地していたとみてよいであろう。

六反自然堤防

六反自然堤防は、長原遺跡東北地区にあって、須恵器TK23・47型式の時期までにRK7Aviii～v層

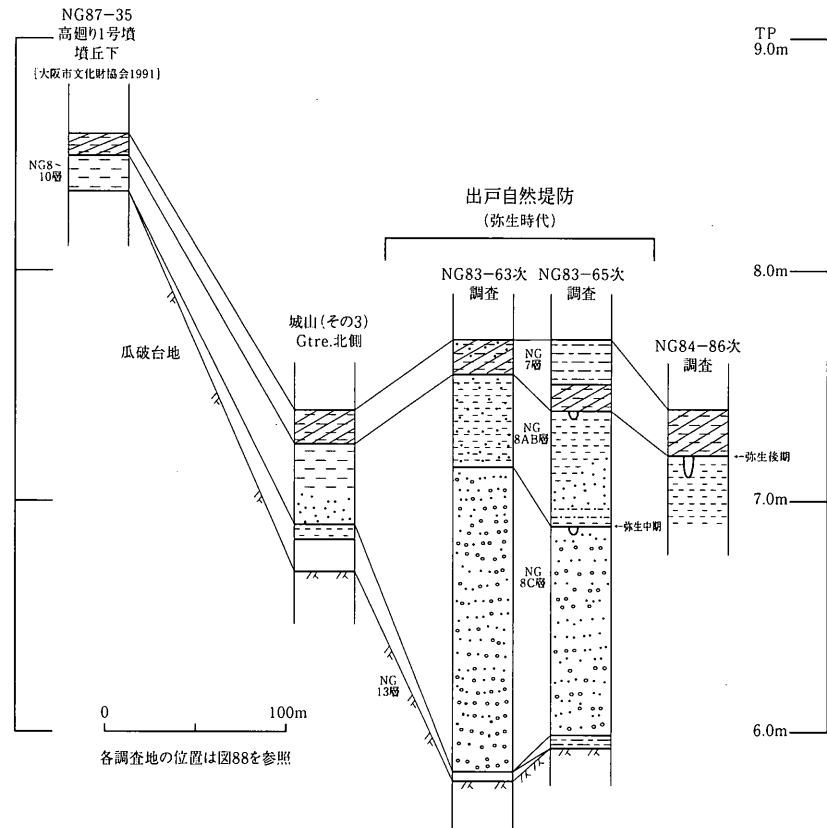


図90 出戸自然堤防地質柱状図

が堆積した段階である。これらの層準を検出した調査地点がまだ少いため、等高線を描くにいたっていない。西調査地北区では、RK7Avi層上面の最高所はTP+7.8m前後で、流心以外は泥質の部分が多い。出戸自然堤防の北側で、TP+6.5～7.0mの等高線が北に張出す個所は、地山の尾根状の高まりをまだ反映しており、先端部に初期須恵器・韓式系土器を出土した城山1～6号墳を含む8基の古墳が築かれている[大阪文化財センター1986a]。古墳を埋めるような大規模な水成堆積層はみられないので、RK7Avi層の段階(須恵器TK23・47型式)に氾濫した河川は、この付近ではかなり運搬能力が弱まっていて、ほぼこの地点以東で自然堤防の形成は終るものとみられる。第三章第2節でもふれたように、RK7Avi層内の葉理の構造から六反自然堤防を形成した洪水は、ほぼ東から西に流れたものと考えられる。

亀井自然堤防と六反一出戸低地

亀井自然堤防は跡部遺跡北東部で長瀬川本流から分岐し(図5・89)、植松遺跡内を南西方向に進んだのち、太子堂遺跡との境界付近でほぼ直角に近い角度で屈曲し、竹淵遺跡のある西北西方向に延びている。平野川の旧河道にあたり、その輪郭は現在の街区にも反映している。平野区平野町付近まで追跡が可能で、幅は200～500m、延長は3km以上にも及ぶものとみられる。植松遺跡付近ではTP+8.0mの等高線が巡り、周辺の低地との比高が2mに達する個所もある。一方、西方の竹淵遺跡付近では、最高点はTP+7.4m前後で、周囲との比高は1mほどとみられる。自然堤防上には東から、植松、跡部、太子堂、亀井、竹淵の各遺跡が立地する。この自然堤防と南の台地に挟まれた長原遺跡東北地区から北地区にかけては、東南東から西北西方向に延びる幅広い帯状の低地になっていた。この

88-586次調査や南亀井町4丁目41-1の調査ではTP+6.8mで弥生時代後期の包含層が検出され[八尾市教育委員会1990b、八尾市文化財調査研究会1989b]、文化財センター調査地よりも高いことがわかる(図91)。西側の竹渕遺跡でも、後述するように古墳時代後期でTP+7mを超える地点があるので、文化財センター調査地は、亀井ポンプ場付近から北北西方向へ抜ける小さな谷状地形([清水和明1998]の支谷D)の中にあたるものと考えられる。

西方の竹渕遺跡でも、複数の時期の水成堆積層が存在する。竹渕遺跡4次調査では、TP+7.4~6.7mで古墳時代後期の遺物を含む砂層が見つかっている[八尾市文化財調査研究会1996d]。竹渕遺跡3次調査では、TP+6.5mでMT15型式の須恵器を伴う古墳が検出された。その20cmほど下で弥生時代前期の土壌が検出され、土壌の下位には砂礫層が堆積していた[八尾市文化財調査研究会1993c]。このことは、弥生前期以前にさかのぼる地層がこの地形を構成しており、かつ、この地点では、その後古墳時代後期前葉まで顕著な堆積がなく、地形的に安定していたことを示している。

久宝寺自然堤防

久宝寺自然堤防は植松遺跡付近で旧長瀬川から分岐し、東南東から西北西方向へ延びる。跡部遺跡北東部の八尾市春日町1丁目における発掘調査地では、TP+7.7mで古墳時代中期、7.3mで布留式土器を含む古墳時代前期の遺物包含層が検出されている[八尾市文化財調査研究会1991a]。両層はいずれも粘土層であるので流心から側方へずれた地点での堆積とみられる。流心は最も標高の高いJR大和路線付近に求められるものと考えられる。竜華操車場内における久宝寺遺跡竜華地区の発掘調査では、TP+7.3m前後で、厚さ3mを超える分厚い氾濫性(図92)の堆積層が見つかっている[大阪府文化財調査研究センター1996・1998]。層内には数回にわたって堰が設けられ、数次の氾濫性堆積層が認められており、その時期は古墳時代前期から中期にかけてとされている。また、[大阪府文化財調査研究センター1996]によれば、調査地点付近で水流の方向に変化があり、古い時期には調査地から西方向へ、あとの時期には北西や北東方向へ流れたとされている。これらの水流の連続は大阪文化財センターによる西側の久宝寺北・南遺跡の調査区に延びていると考えられ、久宝寺南遺跡(その2)調査地最南部で検出された弥生時代中~後期の自然流路と、北西の久宝寺北遺跡調査地で検出された古墳時代前期の河道がこの自然堤防から派生したものとみられる[若林邦彦1997]。このように、久宝寺自然堤防はおもに古墳時代中期までの氾濫によって形成され、古い氾濫は弥生時代中期にまでさかのぼる可能性がある。また、北西方向へ派生した自然堤防の存在にも今後注意を要する。

以上のように長原遺跡北部の沖積平野にみられる自然堤防は、亀井・久宝寺自然堤防のように、多くは弥生時代から形成されはじめ、古墳時代前・中期の氾濫現象によってさらに発達したとみられる。堆積物の供給源は、六反・亀井・久宝寺の自然堤防については東側の長瀬川とみられる。出戸自然堤防については南からの堆積物の流入が考えられた。そして自然堤防どうし、あるいは自然堤防と台地地形の間の低地に流入した水流によって、六反自然堤防のように新たな自然堤防が形成されたものと考えられるのである。

後背湿地と自然流路

自然堤防の側方には、粘土やシルトなどの微細な堆積物によって後背湿地が形成される。上記各自

然堤防の間の低地がそれにあたると考えられる(図92)。たとえば、久宝寺自然堤防で古墳時代中期の砂礫層上面の最高所がTP+7.6mに達した久宝寺遺跡竜華地区調査地の南約500mに位置する跡部遺跡4次調査地では、6.9mで古墳時代前期の遺構が見つかり、その上には粘土とシルトの分厚い互層堆積がみられた[八尾市文化財調査研究会1989a]。古墳時代中期の生活面はこうした粘土～シルト層の中のいずれかに求められる。また、その東側約400mの地点にある跡部遺跡第7次調査地は、久宝寺自然堤防の南の縁辺部に位置する。ここでは、TP+7.0mで古墳時代前期の遺物包含層が、7.8mで飛鳥時代の遺物を少量含む地層が検出された。その間にはやはり粘土とシルトが互層に堆積しており[八尾市文化財調査研究会1993a]、古墳時代中期の砂礫層と同時に堆積した地層がこの中にあるはずである。こうした粘土やシルトは、自然堤防が形成されたさいに側方で同時に形成された後背湿地の堆積物とみることができる。

後背湿地では自然流路も確認されている。久宝寺遺跡9次調査地は久宝寺自然堤防南側の後背湿地内にあたるが、ここでは、東南東から西北西に流れる幅15mほどの自然流路が見つかっており、時期は古墳時代中期と報告されている[八尾市文化財調査研究会1992a]。六反―出戸低地内では、城山遺跡(その1)ANトレンチで、やはり東南東から西北西に流れる幅10mの自然流路が検出されており[大阪文化財センター1986a]、下層埋土の検討から古墳時代中期に流れていた流路とされている。流路は褐色粗砂で埋没しており、埋没後に堆積した青灰色粘土からMT15型式の須恵器が出土している。このことから流路の埋没時期は6世紀前葉とすることができる。その年代から褐色粗砂はRK7Aiv層に対応するとみられ、5世紀後半に長原遺跡東北部に氾濫をもたらした流路とみられる。

亀井遺跡でみられた、南南東から北北西方向に自然堤防を横断する小支谷内には、同方向へ流れる流路が存在した。この流路は弥生時代後期の自然流路NR3001の後身で、古墳時代中期まで継続したとされている[大阪文化財センター1980]。この流路は亀井自然堤防の南縁部をほぼ東西に流れ、亀井・城山遺跡の亀井ポンプ場調査地で北北西に方向を変えて小支谷に流入している。

3)古墳時代後期中葉～飛鳥時代の地形

図93に示した地形は、古墳時代後期中葉(須恵器TK10型式)から飛鳥時代までに形成されたものである。遺構は古墳時代後期後葉(須恵器TK43型式)から飛鳥時代のものを示している。

瓜破台地東縁部

元来、台地上では堆積現象は顕著でなかったが、後述するように、飛鳥時代になると高所に人工の水路が掘削されたため、その氾濫によって氾濫性堆積層が形成されるようになる。こうした氾濫は、少なくとも飛鳥時代にNG6Aii・6Bii層の2回、奈良時代にNG5A・5B層の2回を数えることができる。その度に台地斜面は砂層に覆われ、特に水路の近くでは分厚い砂が堆積した[京嶋覚1990]。

出戸自然堤防と六反自然堤防

出戸自然堤防は、南方からの堆積物の供給がなくなったために、ほとんど地形に変化はない。台地と亀井自然堤防の間の六反―出戸低地には、古墳時代後期中葉におこった大規模な氾濫(RK7Aiv層)によって、ほぼ東西に延びる六反自然堤防が形成された(図92・93)。RK7Aiv層の堆積は本書で紹介

を含むことから飛鳥時代前半に埋没したものと判断される。年代からみてRK7Aii・7Ai層のいずれかに対応するとみられる。六反自然堤防は、このような河川の氾濫によって、飛鳥時代前半ころまで低地を埋積しつつ南に向ってその幅を拡大させたものと考えられる。自然堤防の北側にあたる城山(その1)遺跡調査地ANトレンチでも、NR2とはほぼ同様な幅、方向をもつNR1が検出されている。NR1もTK209型式の須恵器を含んでおり、飛鳥時代初頭には埋没したとみられる。こうした河川が存在を考えれば、自然堤防北側も南側と同様に亀井自然堤防との間の低地を埋積しつつ自然堤防の幅が拡大していったと考えられるのである。このようにして形成された自然堤防は、最高点は東調査地付近でTP+8.2mに及び、南側の低地との比高は1m前後あったとみられる。幅は300～400mで、東側は植松遺跡付近で亀井自然堤防と接している。自然堤防を構成する堆積物の葉理の傾きから判断される水流の方向は、おおむね東から西で、氾濫の水流はやはり長瀬川からもたらされたものとみてよいであろう。

亀井自然堤防

亀井自然堤防上でも、古墳時代後期以降の氾濫によって堆積したと判断される地層がある。長瀬川との分岐点に近い安中町3丁目52-2における跡部遺跡の調査地では、TP+6.9mで古墳時代後期の遺構が検出され、その上位には飛鳥時代の遺物を含み、層厚約1mを測る粘土層が堆積していた[八尾市教育委員会1985b]。この地点はすでに微高地化していた地点なので粘土が堆積したものと考えられる。自然堤防のほぼ中央にあって、跡部遺跡との境界にほど近い太子堂遺跡3次調査地では、TP+6.6mで布留式から古墳時代中期の土器を含む遺物包含層が検出され、8.0mでは奈良時代の溝が検出されている[八尾市文化財調査研究会1992d]。この間の堆積物についての記載はないが、古墳時代中期から奈良時代の間に堆積したものであることはまちがいない。その西北西約300mの跡部遺跡18次調査地では、TP+8.7mで層厚2mに及ぶ砂礫層(図92)が発見されており、奈良時代の土器が出土しているという[八尾市文化財調査研究会1995a]。このことは奈良時代にも氾濫があったことを示している。また、自然堤防北縁にあたる大阪文化財センター亀井北遺跡調査地のIトレンチでは、飛鳥時代の自然流路NR4401が見つかっている[大阪文化財センター1986c]。NR4401は幅約22mで、自然堤防とはほぼ平行に東南東から西北西に流れる。氾濫によって一気に埋没したと報告されており、周辺にあふれ出た堆積物は亀井北遺跡全体に広がっている。河道および砂層から出土した土器にはTK209型式の須恵器が含まれ、氾濫は飛鳥時代初頭におこったものと判断される。砂層上面の標高はNR4401付近がもっとも高くTP+7m前後に達し、亀井北遺跡北端部では約6.2mとなっている。NR4401の氾濫は亀井自然堤防の北縁を拡大したものとみられる。

久宝寺自然堤防

久宝寺自然堤防上では、古墳時代中期以後の大規模な氾濫の痕跡は見つかっていない。しかし、先に述べた久宝寺遺跡竜華地区の調査では、古墳時代中期までとされる第5層出土遺物の中にTK209型式の須恵器杯身が含まれる([大阪府文化財調査研究センター1996]図22の遺物番号111・112)。また、久宝寺遺跡85-191次調査の報文[八尾市教育委員会1990a]の最後に記載された7世紀代の大規模な流路が、竜華操車場内で検出された久宝寺遺跡63-269次調査の流路[八尾市教育委員会1989]

を指すのであれば、久宝寺自然堤防も飛鳥時代の氾濫によってさらに発達したものと考えられる。

4) 古墳時代中期～飛鳥時代の集落の変遷

ここでは図89・93で復元した地形の中で、古墳時代中期(須恵器出現以後)から飛鳥時代にかけて展開する集落を概観してみたい(表6)。集落として認定する際の条件は、住居址・井戸・土壌などの遺構が検出されることと、包含層から比較的多くの遺物が出土することである。厳密には居住に係わる遺構ではない祭祀址もこの範疇に含まれるが、人間の生活に深く係わるものとしてあえて除外していない。図89・93では集落の存在が想定される地点を網かけで示し、遺跡名の略号と番号を付して集落名とした。略号のNGEは長原遺跡東部、NGWは長原遺跡西部、YSは八尾南遺跡、SKは木の本遺跡、TKは竹淵遺跡、ATは跡部遺跡、KHは久宝寺遺跡を示す。時期区分は[京嶋寛1993a]の1～4期をそのまま援用して、TK73型式とTK216型式を1期、ON46型式とTK208型式を2期、TK23型式とTK47型式を3期、MT15型式とTK10型式を4期とした。5期以降に変更を加え、TK10型式新相(MT85型式)とTK43型式を5期、飛鳥Ⅰ・Ⅱを6期、飛鳥Ⅲ・Ⅳを7期とした。

出戸自然堤防の集落遺構

NGE-1集落は出戸自然堤防上に立地する。NG16・83-1・84-6・84-86・92-97・95-36次などの各調査で掘立柱建物・溝・土壌などの遺構や祭祀址などが検出されている[大阪市文化財協会1979b・1983b・1984b・1984d・1992f・1995d]。遺構や包含層から出土する遺物は1・2期のものばかりで、いわゆる定型化した須恵器を含まない。また、韓式系土器が含まれる割合も高い。調査地点はさほど多くはないものの、この周辺ではどこを調査してもこの時期の遺物が出土するという感があり、自然堤防上に展開するかなり大規模な集落の存在を想定できる。

この後の3～6期には遺物はほとんど出土せず、集落に係わる遺構も発見されていない。自然堤防北端に近いNG83-22次調査地では、包含層中から飛鳥時代末から奈良時代にかけての遺物が出土し[大阪市文化財協会1983c]、同地点周辺に集落が営まれた可能性がある。

台地東方沖積平野の集落遺構

出戸自然堤防の東から南東にかけての台地東方の沖積平野にも集落が点在する。

SK-1集落は木の本遺跡西部に位置する。南木の本4丁目5～9番地における1981年度の調査のほか、木の本遺跡4次調査・90-176次調査で井戸・溝・土壌などの遺構が検出されている[八尾市文化財調査研究会1983c・1991b、八尾市教育委員会1992b]。遺構・包含層出土の土器は韓式系土器を含み、1・2期に属するものが多いが、3期のものも存在する。

SK-2集落は木の本遺跡西南部に位置する。木の本遺跡91-468次調査で土壌状遺構が検出されている[八尾市教育委員会1993b]。遺構・包含層から出土した土器は4期に属する。

YS-1集落は八尾南遺跡と長原遺跡東北地区の境界付近に位置する。NG84-4次調査で溝・土壌が検出され[大阪市文化財協会1984a]、NG82-48次調査・八尾南遺跡22次調査で包含層から遺物が出土した[大阪市文化財協会1982d、八尾市文化財調査研究会1996f]。長原遺跡側の調査地では須恵器・土師器・韓式系土器に混って滑石製品・製塩土器が出土しているので、これらの地点は祭祀址に

表6 古墳～飛鳥時代の集落

立地条件	遺跡名	地点名	1	2	3	4	5	6	7	おもな調査と文献
出戸自然堤防	長原	NGE-1								NG16、83-1、84-86、92-97、95-36[大文協1979b・1983b・1984d・1992f・1995d]など
出戸自然堤防	長原	NGE-1						○	○	NG83-22[大文協1983c]
台地東方沖積平野	木の本	SK-1			○					81年調査、SK4[八文研1983c・1991b]、SK90-176[八教委1992b]
台地東方沖積平野	木の本	SK-2								SK91-468[八教委1993b]
台地東方沖積平野	長原・八尾南	YS-1								NG82-48、84-4[大文協1982d・1984a]、YS22[八文研1996f]
台地東方沖積平野	八尾南	YS-2								YS18[八文研1993f]
台地東方沖積平野	八尾南	YS-3								YS3-19[八文研1985a・1994d]
台地東方沖積平野	八尾南	YS-4			○	○				78・79年調査[八尾南遺跡調査会1981]
台地東方沖積平野	長原・八尾南	YS-5								YS8[八文研1995c]、NG93-56[京嶋寛1994]
台地東方沖積平野	長原	NGE-2								NG82-41、93-1[大文協1982c・1993c]
台地東方沖積平野	長原	NGE-3								NG14[大文協1982a]
台地東部	長原	NGW-14				○				NG87-16・62[大文協1994a]
台地東部	長原	NGW-15								NG82-4[大文協1982b]
台地東部	長原	NGW-1～9・12・13								NG83-53・70、84-25、86-41、89-25[大文協1992b・c、1984c、1993a・b、佐藤隆1989]など
台地西部	長原	NGW-10・11								NG95-13・14[大文協1995b・c]
台地西部	瓜破・長原	URW-1								UR86-11、NG87-65、92-46[大文協1986、南秀雄1987、大文協1994a・1992e]など
台地西部	長原	URW-2								NG84-24[大文協1992c]
台地西部	長原	URW-3								NG92-11[大文協1992d]
台地西部	長原	URE-1								NG89-67、95-41・76、96-76[大文協1995a・e・f、1996d]
台地西部	長原	URE-2								NG95-28[大文協1996a]
六反自然堤防	長原	NGEN-1								NG96-66(本巻)
六反自然堤防	長原	NGEN-2								NG96-9(本巻)
六反自然堤防	長原	NGEN-3								NG12、96-79、97-12[大文協1979a・1995h・1997d]
亀井自然堤防	太子堂	AT-3			○					TS3[八文研1992d]
亀井自然堤防	跡部・洪川庵寺・植松	AT-1			○			○		59年調査[八教委1985b]、AT92-623[八教委1994]、SKT90-1[八文研1990]など
亀井自然堤防	跡部・太子堂・植松	AT-2				○		○	○	TS1[八文研1993c]、UM91-626-627[八教委1993a]
亀井自然堤防	跡部	AT-4						○	○	AT8[八文研1993b]
亀井自然堤防	竹測	TK-1								TK5[八文研1996e]、TK95-179[八教委1996b]
亀井自然堤防	竹測	TK-2								TK1[八文研1989c]
久宝寺自然堤防	久宝寺	KH-1								KH11[八文研1992b]、KH85-191[八教委1990a]
時期区分										
1期：TK73・TK216 2期：ON46・TK208										凡 例
3期：TK23・TK47 4期：MT15・TK10										遺構・遺物あり ○同左少数あり ○遺物出土
5期：TK10新・TK43 6期：飛鳥Ⅰ(TK209)・飛鳥Ⅱ										大文協＝大阪市文化財協会 八教委＝八尾市教育委員会 八文研＝八尾市埋蔵文化財調査研究会
7期：飛鳥Ⅲ・Ⅳ										

あたるのかもしれない。出土土器は1・2期に属する。

YS-2集落は八尾南遺跡西北部に位置する。八尾南遺跡18次調査では、2面の検出面に分れて、掘立柱建物・井戸・溝・土壇・ピットなどが検出された[八尾市文化財調査研究会1993f]。出土遺物の詳細は未報告であるが、[西村公助1993]によれば初期須恵器・韓式系土器・滑石製品などが出土している。遺構の時期は、八尾南遺跡の集落・墓域・生産域の変遷を紹介した[原田昌則1995]によると1期に相当する。

YS-3集落は八尾南遺跡西北部に位置する。八尾南遺跡3次調査などで掘立柱建物・土壇・溝・ピットなどが検出されている[八尾市文化財調査研究会1985a]。報文によれば、出土遺物には初期須恵器・韓式系土器・製塩土器があり、また、[原田昌則1995]によれば、遺構の時期は2期に相当する。また、八尾南遺跡第19次調査では土壇・溝・ピットなどが検出されており[八尾市文化財調査研究会1994d]、遺構から出土した土器には4期に属するものがある。

YS-4集落は八尾南遺跡中部に位置する。古墳時代前期から後期まで存続した集落で、古墳時代中期に属する遺構としては、掘立柱建物・井戸・土壇・ピットなどが検出されている[八尾南遺跡調査会1981]。遺物は土師器・須恵器のほかに韓式系土器も多く出土している。1・2期に属する遺構が多く、3・4期になると遺構の数は急激に減少し、4期を最後に集落は廃絶するとされている。

YS-5集落は八尾南遺跡と長原遺跡東南地区の境界付近に位置する。八尾南遺跡8次調査では、

掘立柱建物・溝・井戸・土壇・ピットなどが検出されている[八尾市文化財調査研究会1995c]。出土土器は2期に属する。またSE04からは木製の鞍が出土し、馬の足跡らしきものが無数に見つかっていることから、馬の飼育に携わった集団の集落という想定もなされている。長原遺跡側では、NG93-56次調査などで掘立柱建物・井戸・溝・土壇などが検出されている[京嶋覚1994]。出土遺物は1・2期に属する。

NGE-2集落は長原遺跡東南地区東南部に位置する。NG82-41・93-1次調査で、掘立柱建物・井戸・溝などが検出されている[大阪市文化財協会1982c・1993c]。出土遺物は土師器・須恵器のほかに韓式系土器が含まれ、2期に属する。

NGE-3集落は長原遺跡東南地区に位置する。NG14次調査で掘立柱建物4棟が検出された[大阪市文化財協会1982a]。また、付近には土器埋納遺構が群集して検出され、出土した土器は飛鳥Ⅰ～Ⅲに属する。これらの土器は掘立柱建物の時期をも示すものとみられる。

出戸自然堤防のNGE-1集落とこの地域のYS1～3、YS5・6集落は、その時期が1・2期に限られ、3期には断絶しているという点で共通している。SK-1・YS-4集落はともに3期の遺構・遺物が発見されてはいるが、2期までの遺構・遺物の出土状況に比べると明らかに減少している。4期にはSK-2、YS-3・4集落で遺構や遺物が発見されているが、2期に比べるとその出土量はやはり少ない。5期に属する集落遺構はこの地域では未発見である。また、6・7期では、現在のところNGE-3集落が唯一の集落である。

瓜破台地の集落遺構

NGW1～9・12・13集落は長原遺跡に属し、いわゆる古墳時代の「西ムラ」とされる集落で、馬池谷東岸の台地高所に立地する[岡村勝行1993]。南北に細長く密集した分布状況を示し、時期は2～4期にあたる。これらの集落の遺構・遺物の詳細については[大阪市文化財協会1984c、1992b・c、1993a・b、京嶋覚1986・佐藤隆1989]を参照されたい。

NGW-10集落は馬池谷西岸に位置する。NG95-14次調査地では、2～3期の井戸・溝や同時期とみられる掘立柱建物などが検出された[大阪市文化財協会1995c]。

NGW-11集落は「小谷」をはさんでNGW-10集落の南側に位置する。NG95-13次調査では、溝や不整形な遺構から4期の土器が出土した[大阪市文化財協会1995b]。

NGW-14集落は長原遺跡東南地区に位置し、瓜破台地の東の縁辺部に立地する。NG87-16・62次調査で柵が検出されており、隣接する溝の中から4期と6期の土器が出土している[大阪市文化財協会1994a]。

NGW-15集落は長原遺跡中央地区に位置し、瓜破台地北東縁の斜面に立地する。NG82-4次調査で井戸・溝などの遺構が検出された[大阪市文化財協会1982b]。出土遺物は6期(飛鳥Ⅰの新相)に属する。

「西ムラ」とされるNGW1～9・12・13集落の変遷や構造の分析については[京嶋覚1993b]に詳しいので、これを援用する。要点をまとめて紹介すると、時期ごとの変遷については、まず、集落中でもっとも古い遺構は2期のもので、この時期に東方の沖積平野にあった集落が台地上に移動してきた

と考えられる。2期の集落はおおむねNGW-2・8・13を結んだL字形の範囲に分布する。3期になると馬池谷東岸沿いの南北に細長い地域(NGW-1～9の範囲)が集落の分布範囲となる。そして、4期になると集落の中心が南のより標高の高い地点へ移動するとされている。

集落の特質としては次のような点が指摘されている。台地東方沖積平野の集落が掘立柱建物のみで構成されるのに対し、台地上の集落には竪穴式住居が含まれる(註2)。竪穴式住居には作付け竈は設けられず、移動式竈を用いる。他遺跡と比較して、掘立柱建物は総柱の建物の比率が高い。3期に大型の建物が登場する。2・3期においては竪穴式住居1棟と掘立柱建物2～3棟からなる単位が存在し、さらにそれら2～3単位が井戸を共用しながら建物群(註3)を構成している。

以上の成果は現在も認められるべきものであるが、筆者は4期以降の様相について異なる意見も持っている。[京嶋寛1993b]では4期には集落の中心がさらに南方へ移動し、後述する馬池谷西岸の7世紀初頭(TK209型式)の建物群へ連続してゆくものとされている。4期の遺構を含む集落は、NGW-5・7・9であるが、その南で行われたNG94-34・66、96-71、97-60次調査[大阪市文化財協会1994b・d、1996c・1997k]の内容はどうであろうか。NGW-9集落の南縁部にあたるNG96-71次調査では、古墳時代後期を通して存続したとされるSD701が検出されたが、4期の遺物はほとんどない。その南側に位置するNG97-60次調査地でも4期の遺構は検出されていない。NG94-34・66次調査地は、NGW-9集落の南約150mの地点で、馬池谷東岸の稜線状の高所にあたるが、方墳1基が検出され、古墳時代の集落に係わる遺構は検出されていない。これらの調査地点は、3期の集落がその規模に変化なく南へ移動したのであれば当然その遺構が検出されてよい場所であるが、4期の遺構は見つかっていない。仮に、馬池谷の対岸に移動したとしても、NGW-11集落でTK10型式の須恵器を出土した不整形な遺構が検出されているが、祭祀関係の遺構である可能性が強く、明らかに居住に関係するといえる遺構は見つかっていない。こうしてみると、4期の集落は中心が南へ移動したというよりも、3期の集落の範囲内の南方へ縮小したとみる方が適当と思われる。また、NGW-14集落のように台地縁辺部でも4期の土器を出土した集落も出現するので、3期のような密集した集落の在り方から分散化したものへ変化したともみられる。また、NG96-71次調査地ではTK43型式の須恵器を出土した土壌が発見されたが、これ以外ではこの時期の顕著な集落遺構は発見されていない。

以上のことを理由に、筆者は、4期には長原遺跡の集落はかなり衰退し、かつ、分布状況は2・3期のような密集した在り方から分散した状況へ変化し、さらに後続する5期(TK43型式の時期)には台地上の長原遺跡の集落の系統が一旦途絶するものと考えている。

その後、6期以降の集落遺構は、おもに瓜破台地の馬池谷西岸地域で検出されている。馬池谷の西岸地区は、小谷によって東西に分れた2つの尾根状の地形が復元され、西側にはURW-1～3集落、東側にはURE-1・2集落が立地している。これらは長原遺跡西・西南地区・瓜破遺跡東南地区に含まれる。

URW-1集落は、UR86-11・NG87-65・92-46次調査等で掘立柱建物26棟が検出されている[南秀雄1987・大阪市文化財協会1986・1994a・1992e]。[南秀雄1987・大阪市文化財協会1986]に

よると、UR86-11次調査検出の建物群は方位を揃え(N-10°-W前後)、計画的配置に則って建設されており、周囲に柵や溝を巡らせている。細長い平面形態をもつ建物と総柱の建物の占める割合が高いのも特徴である。建物群には大きな建替えが2回認められ、時期は飛鳥Ⅱ・Ⅲであるという。この建物群の性格については、有力豪族の居館あるいは屯倉に関する施設である可能性が考えられている[南秀雄1987]。

URW-2集落はURW-1集落の北に位置し、NG84-24次調査で、掘立柱建物3棟と井戸1基などが検出されている[大阪市文化財協会1992c]。掘立柱建物の主軸の方位はURW-1集落のものとほぼ同じで、やはり7間×2間という長大なものが含まれている。遺構と包含層から出土した土器は飛鳥Ⅲ・Ⅳに属する。

URW-3集落は東西の尾根状地形の鞍部に立地する。NG92-11次調査で掘立柱建物1棟と、建物に平行する溝群を検出した[大阪市文化財協会1992d]。建物の主軸方位はURW-1の建物群とほぼ同じである。遺構の時期は飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する。

URE-1集落は、NG89-67、95-41・76、96-76次調査で、掘立柱建物6棟が見つかった[大阪市文化財協会1995a・e・f、1996d]。またその後のNG97-18次調査でさらに4棟の掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会1997f]。これらの建物の主軸方位はURW-1のそれとほぼ同じものもあるが、大きく外れるものもあり、全体としては不統一がめだつ。柱穴が30cmほどと小規模な建物が含まれることも特徴である。また、建物群をとりまくような、柵や溝といった区画施設も見つかっていない。遺構・包含層出土の土器は飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する。

URE-2集落は、NG95-28次調査で、飛鳥Ⅱの土器を出土した井戸が検出された[大阪市文化財協会1996a]。飛鳥時代の顕著な遺構はこれだけであるが、URE-1集落とこの調査地との間の未調査地域にさらに建物群が存在する可能性を示す遺構として注目される。

[京嶋覚1992b・1993b]では、この地域の集落が、NG89-67次調査地(URE-1)、UR86-11次調査地(URW-1)、NG84-24次調査地(URW-2)、さらに北方の喜連東遺跡の建物群[京嶋覚・西畑佳恵ほか1990]の順で移動したことが指摘されている。また、URW-2集落の北側で、現在の瓜破霊園内には瓜破廃寺遺跡が存在し、白鳳様式の埴仏の出土が伝えられることから、その創建年代を7世紀後半とする意見もある[黒田慶一・京嶋覚1992]。

六反自然堤防の集落遺構

長原遺跡北側に広がる沖積平野の自然堤防上でも、長原遺跡・竹渕遺跡・跡部遺跡などで集落に係わる遺構が発見されている。

長原遺跡東北地区の六反自然堤防上には、NGEN-1～3集落が立地する。NGEN-1集落は今回報告した西調査地北区周辺、NGEN-2集落は東調査地にあたる。NGEN-1集落は古墳時代後期後葉(須恵器TK43型式)から奈良時代の掘立柱建物・ピットなどが検出され、飛鳥時代前半から奈良時代には一部が畠地化した。NGEN-2集落は飛鳥Ⅰ～Ⅱの掘立柱建物・土壌などが検出された。詳しい内容については第Ⅲ章第1・2節を参照されたい。

NGEN-3集落は、NGEN-1の南東約100mにあたる。NG97-12次調査でピット・竈屋とみら

れる建物などが検出され、建物内からTK209型式の須恵器が出土した[大阪市文化財協会1997d]。NG96-79次調査では井戸・溝・土壌などの遺構が検出された[大阪市文化財協会1995h]。出土遺物は7世紀前半のものが多く、また、NG12次調査では流路の内部からTK209型式に属する多くの土器が出土している[大阪市文化財協会1979a]。六反自然堤防の集落遺構は5～7期に属する。

亀井自然堤防西部の集落遺構

TK-1集落は竹渕遺跡中部に位置する。竹渕遺跡5次調査では土壌群が検出され、遺構・包含層から須恵器・土師器が出土しており[八尾市文化財調査研究会1996e]、これらの遺物は3期に属する。竹渕遺跡95-179次調査でも、包含層から3期の土器が出土している[八尾市教育委員会1996b]。

TK-2集落は竹渕遺跡東部に位置する。竹渕遺跡1次調査では竪穴式住居・土壌・溝などの遺構が検出され[八尾市文化財調査研究会1989c]、出土遺物は4～5期に属する。竹渕遺跡の2つの集落については、TK-2集落の方が新しく、古墳時代後期初頭にTK-1集落から同2集落へと移動がなされたという指摘がある。

亀井自然堤防東部の集落遺構

亀井自然堤防が長瀬川から分岐し、南南東へ延びる個所にAT-1・2集落が立地する。さらに蛇行して北北西へ向う個所にはAT-3・4の集落が想定される。

AT-1集落は洪川廃寺遺跡東部・跡部遺跡東部から植松遺跡中西部にかけての地域に位置する。

5世紀代の遺構の存在は未確認であるが、洪川廃寺90-1次調査では、古墳時代中期の包含層が存在することが報告されている[八尾市文化財調査研究会1990]。

一方、6・7世紀の集落遺構の発見例は豊富である。安中町3丁目における59年度跡部遺跡調査地では土壌が検出され、内部から4期に属する須恵器・土師器が出土した[八尾市教育委員会1985b]。土壌上位の包含層には、4～7期の遺物が含まれていた。跡部遺跡92-623次調査では、包含層と土器集積遺構からTK43・209型式の須恵器が出土している[八尾市教育委員会1994]。これらの土器は5・6期に属する。同じ敷地内で行われた跡部遺跡12次調査では古墳時代後期の溝、後期以降の掘立柱建物・溝・ピットが発見されている[八尾市文化財調査研究会1996a]。出土遺物の詳細は不明であるが、92-623次調査地に隣接することから同調査地出土のものに近い年代が想定される。また、この南東にあたる跡部遺跡94-059次調査では、6期(TK209型式)の須恵器が出土した土壌が検出され[八尾市教育委員会1996a]、土壌の下位には4期の土器を含む包含層も発見されている。跡部遺跡6次調査では、飛鳥～奈良時代とされる溝が検出されている[八尾市文化財調査研究会1992c]。植松遺跡では、90-433次調査で自然流路が検出され、内部から4期(MT15型式)の土器がまとまって出土しており[八尾市教育委員会1992a]、付近に同時期の集落が存在するものとみられる。洪川廃寺90-1次では飛鳥時代前半とされる土壘状遺構・掘立柱建物・井戸等が検出され[八尾市文化財調査研究会1990]、鵜尾の破片が出土したことから寺院の存在が想定されている。

AT-2集落は跡部遺跡の南東部にあたり、植松・太子堂遺跡との境界付近に位置する。太子堂遺跡1次調査では包含層から4期(MT15・TK10型式)の土器が多量に出土した[八尾市文化財調査研究

会1993e]。植松遺跡91-626・627次調査では、飛鳥Ⅰ～Ⅲのころの土器を含む包含層が検出されている[八尾市教育委員会1993a]。跡部遺跡21次調査や太子堂遺跡1次調査では、奈良時代の井戸が検出されており[八尾市文化財調査研究会1996c・1993e]、奈良時代まで集落が存続したものと考えられる。

AT-3集落は太子堂遺跡中北部にあたり、跡部遺跡との境界付近に位置する。太子堂遺跡3次調査で古墳時代中期の遺物を含む包含層が検出されている[八尾市文化財調査研究会1992d]。顕著な遺構は検出されていないが、この時期の集落が存在したことが想定される。

AT-4集落は跡部遺跡南西部に位置する。跡部遺跡8次調査で奈良時代までの遺物を含む包含層から飛鳥Ⅱ～Ⅲの土器が出土している[八尾市文化財調査研究会1993b]。ほかには奈良時代の井戸も検出されており、飛鳥～奈良時代に集落が存在した可能性が高い。

以上のように亀井自然堤防東部には、5世紀にはAT-3集落が成立していたものと考えられる。6世紀代には、東側のAT-1・2集落付近の状況から遺構・遺物が増加した。7世紀の遺構・遺物もほぼ同じ地域で発見されており、6・7世紀の遺構・包含層が上下に重なって検出される例もあることから、大規模な集落の移動はなかったとみてよい。7世紀前半には地域の西側に寺院が建立された。また、奈良時代に入る遺構・遺物も発見されており、このころまで集落は存続したとみられる。

久宝寺自然堤防の集落遺構

調査件数が少ないが、久宝寺自然堤防の上でも集落に係わる遺構・遺物が発見されている。

KH-1集落は久宝寺遺跡南部にあたり、久宝寺自然堤防北側に立地する。久宝寺遺跡11次調査で、溝・土壇・ピットなどが検出された[八尾市文化財調査研究会1992b]。出土土器は3～5期に属する。この南側のJR竜華操車場内の調査でも氾濫性堆積層から古墳時代中期の土器が多数出土している。久宝寺遺跡85-191次調査では流路状の遺構が検出され、内部から須恵器・土師器が多量に出土し、近くに集落が存在することが想定されている[八尾市教育委員会1990a]。出土土器は飛鳥Ⅰ～Ⅲに属する。また、久宝寺遺跡91-150次調査では包含層からTK209型式の須恵器が出土している[八尾市教育委員会1992c]。これらのことから久宝寺自然堤防上には、3～7期にかけての集落が存在した可能性が高い。

5)古墳時代中期～飛鳥時代の水田遺構

ここでは、古墳時代中期～飛鳥時代の農業生産と地形・集落との関係を探るために特に水田遺構に注目してみたい。水田遺構は上面が水成層で覆われているばあいには良好に遺存するが、別の作土層が直接上位に重なると、下位の水田の上面は破壊され検出が困難である。このため、畦畔や耕作面を含む水田の上面が検出されたばあいはもちろんのこと、これに加えて流水の痕跡があり、明らかに灌漑用水路とみられる溝が発見された地点についても水田の存在を想定した。このほかに用水の水源となる人工あるいは自然の流路、流路を制御するための土手などにも注目した。

瓜破台地東縁部

古墳時代中・後期には水田耕作が行われた痕跡はなく、北部は居住域、南部は専ら墓域として利用

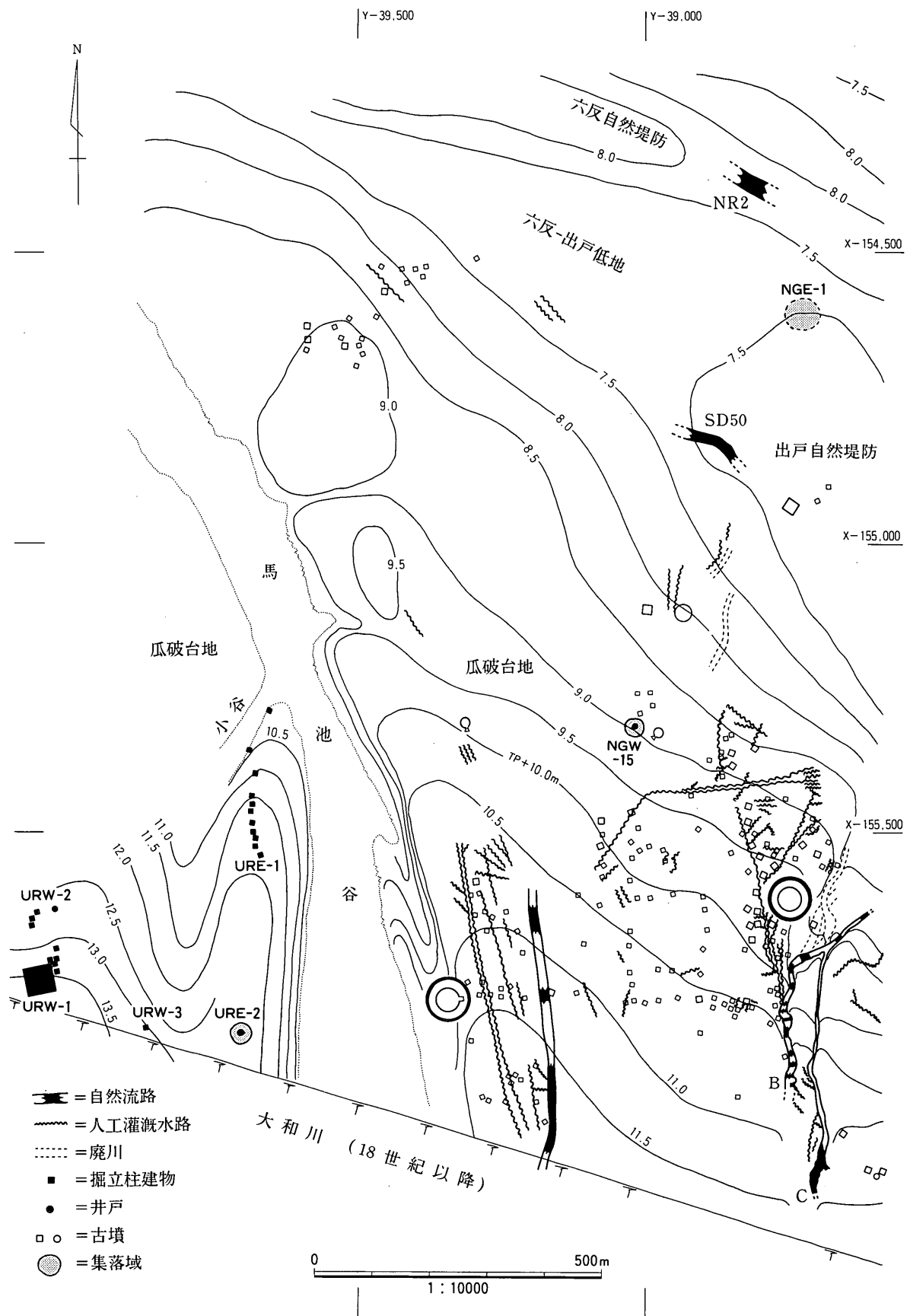


図94 長原遺跡台地部における水田開発と集落

されていた。飛鳥時代に入ると馬池谷東岸沿いの稜線状に高い部分に人工の流路が掘削され(図93・94)、そこから灌漑用水をひくことによって台地東縁の斜面が水田化された[木原克司1982・広瀬和雄1983b・京嶋覚1990]。開発の開始時期は[京嶋覚1992b]によれば7世紀初頭(飛鳥Ⅰの新相段階)とされている。基幹水路は馬池谷東岸沿いの台地最高所を南北に延びる溝で、もっとも古い段階では4～5条の溝からなっている(図94)。NG94-66次調査ではこの溝から飛鳥Ⅰ新相の土器が出土した。飛鳥時代後半には、基幹流路はやや東よりに設けられたようで、NG94-47次調査では、幅6m以上で土手をもつ溝が検出されている[大阪市文化財協会1994c]。溝からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。この溝から約450m東にある自然流路B・C[大阪文化財センター1978・1985]も基幹水路として利用されている。自然流路Bは弥生時代から奈良時代末まで流水があったようで、ここから取水して北へ導水した人工水路がみられる。自然流路Cは、弥生時代から飛鳥時代前半まで流水があったようである。各水田への給水はこうした基幹水路から派生した人工水路によって行われたとみられ、溝などの分布状況から水田の範囲は馬池谷東岸の台地全域に及んだとみられる。この地域の水田は、灌漑水路からの氾濫による埋没と復旧を繰返し、最終的には奈良時代末のNG5層を堆積させた氾濫によって全滅したとみられる。

台地東方沖積平野

古墳時代中期では、YS-2集落北東の八尾南遺跡10次調査地とYS-4集落の東部で水田遺構が発見されている[八尾市文化財調査研究会1994c、八尾南遺跡調査会1981](図89)。YS-2集落北東の水田は[原田昌則1995]によると須恵器TK73型式平行期と位置づけられている。これはYS-2集落の時期と同じであり、位置的にも近いことからYS-2集落の居住者によって経営された水田とみてよいであろう。YS-4集落東方の水田については[八尾南遺跡調査会1981]によれば、弥生時代後期から古墳時代中期末ないし後期初頭までの間、集落とともに存続したとされている。この水田の経営母体は西に隣接するYS-4集落の居住者に求められるであろう。

古墳時代後期～飛鳥時代では、YS-3集落東方の八尾南遺跡7次調査地で水田址[八尾市文化財調査研究会1994b]が、YS-5集落東方の長原遺跡東南地区内で灌漑用とみられる溝群が検出されている(図95)。八尾南遺跡7次調査地では3面の水田址(註4)が見つかっている(図89・93)。下位の水田址には、幅約5mで土手を伴い南東から北西に流れる灌漑水路SD401が伴っている。このような本格的な水路の存在は、周辺にかなり広い水田域が展開することを想定させる。下位水田はSD401から溢れ出した水成層で埋没しており、水成層中から出土した遺物にTK10型式の須恵器が含まれることから、水田の年代はおよそ6世紀前葉から中葉ごろとみてよいであろう。また、上位水田は、直上層から平安時代の遺物が出土しているものの、水田作土層からはTK217型式の須恵器が出土しており、飛鳥時代前半の水田である可能性が強い。とすると、中位水田は古墳時代後期から飛鳥時代前半の間に属することになる。下位水田は出土遺物からみて、YS-3・SK-2集落と同じ年代に属し、これらの集落の生産域とみることができる。

長原遺跡東南地区の川辺3丁目地域では、灌漑用とみられる溝群が検出されており(図95)、水田が存在したことが想定される。この地域内の南方にあたるNG89-48次調査地では、幅2～3mの溝3

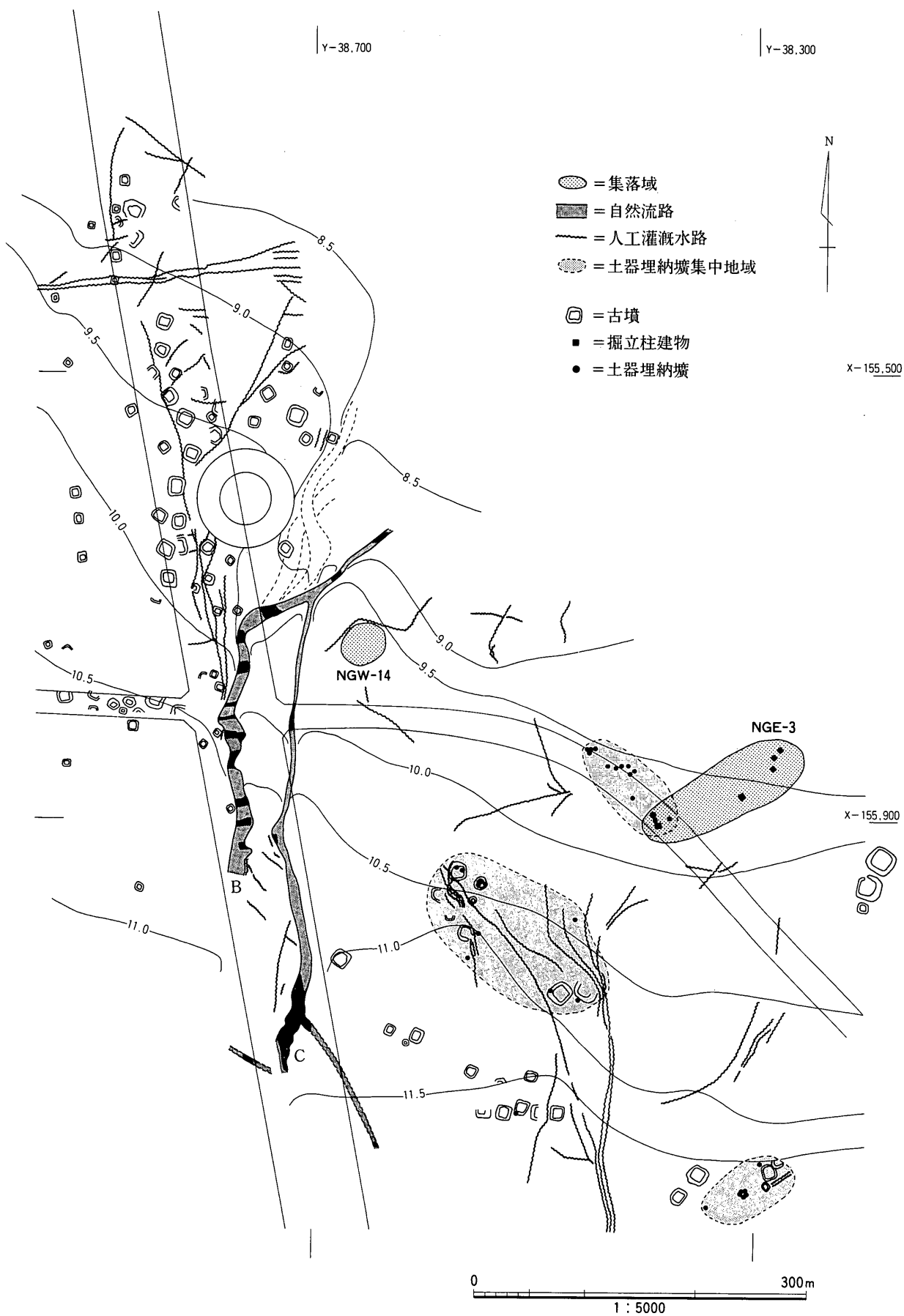


図95 長原遺跡南・東南部における水田開発

条が検出されており、溝の埋土には流水の痕跡が観察された[大阪市文化財協会1989b]。この溝は灌漑用の基幹水路とみられ、北方では各水田への導水のための細い溝が枝分かれして扇状に広がっている。溝から出土する土器は、須恵器でみるとMT15型式からTK217型式までの各型式のものが揃っており[大阪市文化財協会1995a・1997a]、溝が古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけて機能していたことがわかる。水田の作土は上位層の耕作によって破壊され、遺存していないが、この時期に水田耕作が行われていたとみてよいであろう。水源については、西側の自然流路B・Cから取水したものとみられる。また、一部の溝は古墳や弥生時代の周溝墓の周溝を経由しており、これらの周溝を灌漑用の水溜めとして利用していたものと思われる。周溝からは古墳時代後期の須恵器が数多く出土しており[大阪市文化財協会1995a]、水溜めに係わるなんらかの祭祀を行っていた可能性がある。またこの周辺では古墳時代後期～飛鳥時代前半にかけての土器埋納遺構群が発見されている。これについては水田開発に伴う古墳の破壊に係わる地鎮の意味をもつとした興味深い考察[櫻井久之1993b]がある。この説が認められるのならば、古墳時代後期から墳丘を破壊するような水田開発が行われたことを傍証する事象となろう。飛鳥時代の水田の経営母体としては、NGE-3集落が考えられよう。

ほかに飛鳥時代の水田は、NG84-4次調査地[大阪市文化財協会1984a](古墳時代中期YS-1集落)でNG7A層の水田作土が検出されており、木の本遺跡91-468次調査地[八尾市教育委員会1993b](古墳時代後期SK-2集落)でも同層準とみられる水田作土層が検出されている。これに先の八尾南遺跡7次調査の上位水田と長原遺跡東南地区の灌漑溝から復元される水田を加えると、飛鳥時代にはこの地域のかかなり広い部分が水田化されたと考えられるのである。

六反一出戸低地

古墳時代中期の農業生産に係わる遺構の検出例は多くない。出戸自然堤防の北西にあたる城山遺跡調査地Dトレンチで、小区画ではほぼ正方形の区画をもつ水田址、畠地とみられる溝群などが検出されている[大阪文化財センター1986a]。同一検出面で検出されたSX0743で1期の土器が出土していることから、水田址等にも近い年代が与えられよう。また、出戸自然堤防の南東にあたるNG96-103次調査地でも古墳時代中期の耕作に係わるとみられる溝が検出されている[大阪市文化財協会1996e]。これらは、出戸自然堤防上のNGE-1集落の生産域に属する可能性が強い。また、これらの遺構の立地は、六反一出戸低地のなかでも、標高がTP+7.0～7.5mと比較的高い、テラス状の緩斜面上にあることが注目される。

一方、TP+7.0m以下の低地内でもっとも低い部分では、長原遺跡東北地区のNG95-57・77、97-52次調査地で、土手状遺構(註5)が検出されている[大阪市文化財協会1998・1995g・1997i]。これらの遺構は3・4期に設けられたもので、杭と植物の敷物状のもので土留めをしながら盛土を行う敷葉工法[工楽善通1995]によって築かれている。古墳時代中期の長原遺跡東北地区一帯は、第Ⅱ章第1節で述べたようにRK7A層を堆積させた氾濫に度々見舞われ、水田耕作が可能な地形的条件などはおそらくなかったものと考えられる。5世紀前葉ごろの地層であるRK7Bi層の段階でも、生物擾乱などによって葉理が乱されている個所はみられたが、明らかに耕作に係わる痕跡は確認できていない。とすれば、これらの土手状遺構の機能は灌漑用ではなく、氾濫が周辺の集落や耕作地に及ぶこと

を防ぐために低地内に流路を固定することであったと考えられるのである。

低地の北側にあたる大阪文化財センターによる亀井・城山遺跡調査地では、高さ2 m弱、長さ80 mにも及ぶとされる堤状遺構が検出されており[大阪文化財センター1980・大阪府教育委員会1994]、築造時期は古墳時代中期末とされている。この堤状遺構は六反―出戸低地から亀井自然堤防を横断して北北西へ抜ける小規模な谷の南側をふさぐように築かれており、その下流(北北西)側の亀井北遺跡などでは、古墳時代中期から後期にかけての水田址が複数面検出されている[大阪文化財センター1980・1986c]。堤状遺構は、これらの水田に向って南側からRK7A層段階の洪水が流入するのを防ぐ役割をもっていたと考えられるのである。この仮説が正しいとすれば、堤状遺構を築いたのは亀井北遺跡などの水田を経営したであろう亀井自然堤防上に居住した集団であったと考えられる。

飛鳥時代では、六反自然堤防の南側で、六反―出戸低地の西側にあたるNG93-37次調査地でNG7A層に相当する作土層が検出され、層内から6期の土器が出土している[大阪市文化財協会1993d]。先にふれたNG96-103次調査地でもNG7A層相当の作土層と溝が検出されている。また、出戸自然堤防上の南部にあたるNG89-86次調査地でも畦畔状の遺構と溝が検出されている[大阪市文化財協会1989c]。こうした調査例は多くはないが、飛鳥時代にも六反―出戸低地内南側のやや標高の高い部分は耕作地として利用されていたようである。また出戸自然堤防の北西に接して流路SD50が存在し、内部から6期の遺物が出土している[大阪市文化財協会1978]。この流路の続きは明らかでないが、低地内を流れ、上記水田の灌漑用水の水源となったものとみられる。同時に台地側の水田からの排水を受ける機能をも有していたものと考えられる。

亀井・久宝寺自然堤防間の後背湿地

古墳時代中期～飛鳥時代には、亀井・久宝寺両自然堤防の間の後背湿地にあたる低地内に多くの水田址が検出されている。久宝寺自然堤防南側の久宝寺遺跡9次調査地では、東南東から北北西に流れる古墳時代中期の自然流路と、同時期の水田址が検出されている[八尾市文化財調査研究会1992a]。また、亀井北遺跡(その1～3)の調査地から亀井遺跡の調査地[大阪文化財センター1986c・1982・1983・1986b・1987a]にかけて、3～6期の水田址が複数面検出されている。こうした水田の経営母体は、位置的に近い久宝寺、亀井いずれかの自然堤防上に居住した集団であったと推定できる。

亀井自然堤防南側の後背湿地にあたる、大阪府教育委員会による1988年度の亀井遺跡発掘調査地では、奈良時代の作土層が検出されている[大阪府教育委員会1989]。この作土層と下位のRK7Bi層に相当するとみられる植物ラミナを多く含む層の間には、作土層が3層存在する。これらの作土層の詳細な時期は不明であるが、古墳時代中期から奈良時代の間に属することは確実である。このことから、六反自然堤防と亀井自然堤防の間の後背湿地は、奈良時代以前で古墳時代中期以降の時期にも水田耕作地として利用されていた可能性が高い。亀井自然堤防上のAT-4集落、もしくは六反自然堤防上のNGEN-1～3集落の農業生産域の一部が、この後背湿地内に存在したことは確実であろう。

ここまで古墳時代中期から飛鳥時代にかけての地形復元を行い、長原遺跡とその周辺に展開する集落と水田を主とする生産域について概観してきた。古墳時代中期の段階での基本的な土地利用形態は、台地や沖積平野でも比較的標高の高い地域は居住域・墓域として、そして沖積平野内の自然堤防

は居住地として利用され、農業生産は自然堤防の側方の後背湿地で行われていたとみることができ、古墳時代後期には、台地縁辺部の比較的標高の高い沖積平野でも水田開発が行われ、さらに飛鳥時代になると台地上でも水田耕作が行われるようになり、土地利用形態に大きな変化が生じたことが明らかになった。

6) 集落の系統と特性

この地域の古墳時代中期～飛鳥時代には、集落とみられる地点が数多く存在したことがわかったが、それらの集落は、おもにその立地条件からいくつかの系統に分類することが可能である。台地とその東側の沖積平野では、長原グループと瓜破グループ、八尾南・木の本グループの3つの系統があることを指摘できる。

長原グループは、出戸自然堤防上のNGE-1集落とその東方のYS-1～3(YS-3は2期の遺構を指す)・5・NGE-2集落からなっている。これらの集落は、近辺に直前の段階の集落が存在せず、突然出現していること、韓式系土器を多く出土すること、出土土器が2期までのものに限られ、3期に続かないことで共通しており、一連の集落群として捉えることができる。NGE-1集落は想定される規模からみて、長原グループ集落群の中核的な位置を占めていたものと考えられる。一方、台地東方の沖積平野に立地するYS-1～3・5・NGE-2集落はそれぞれせまい範囲で完結しており、NGE-1集落に対する分村のような在り方を示している。この集落群は、[京嶋寛1993b]で指摘されたように2期のうちに西方の台地上に移動すると考えられ、おもに馬池谷東岸に展開するNGW-1～13集落が後続の集落群とみられる。集落の範囲は東西約800m、南北約700mの三角形を呈し、個々の集落の単位が密集した在り方を示している。4期になると遺構の数は減少し、NGW-5・7・9・11で遺構が発見されているが、集落群としての範囲も縮小している。次の5期の段階になると遺構・遺物ともにほとんど見つかっておらず、この時期に長原グループの集落の系統は途切れるものと考えられる。

瓜破グループは、URW-1～3・URE-1・2集落からなっており、6期に馬池谷の西岸地域に出現する。出土土器の型式からみて、集落の中心はURE-1、URW-1、URW-3の順で移動したとみられる。URW-1集落のように、溝や柵などの区画施設をもち、計画的な配置に則った掘立柱建物群を含むことから、長原グループの集落とは質的にも大きな差異がある。5期に時間的な間隙があることから、長原グループの集落に後続するものではなく、系譜的に別の集団によって営まれた集落とみることができよう。7世紀後半創建の可能性のある瓜破廃寺に近く、同廃寺は瓜破グループの集団が建立したものとみることができよう。

八尾南・木の本グループは、SK-1・2、YS-3・4(4期の遺構を指す)・NGE-3集落からなっている。SK-1・YS-4集落は1・2期の韓式系土器を多く含むが、ともに少ないながら後続する時期の遺構があり、YS-4集落は弥生時代から連続する集落であることから長原グループと切り離して考えた。SK-2・YS-3は4期に属し、この時期には小規模な集落が分散する在り方を示すものと考えられる。

沖積平野の自然堤防上には、竹渕グループ・跡部グループ・久宝寺グループの3系統の存在を指摘することができる。

竹渕グループは亀井自然堤防西部のTK-1・2集落である。TK-1集落は3期、TK-2集落は4・5期に属し、4期に集落の移動があったものとみられる。6期以後に続く集落は未発見である。

久宝寺自然堤防上では、KH-1集落があり、小規模な集落ながら3～7期の遺構・遺物が連続して検出されている(註6)。

跡部グループは、亀井自然堤防東部のAT-1～4集落、六反自然堤防上のNGEN-1～3集落からなっている。5世紀の遺構は未発見であるが、AT-1・3集落で包含層から遺物が出土しており、3期には集落が形成されていたと考えられる。4期から7期にかけての集落の中心は、標高8m前後の高所に位置するAT-1・2集落付近にあったとみられ、6期にはAT-1集落の西側に渋川廃寺が築かれた。古墳時代後期から飛鳥時代にかけて亀井自然堤防が発達し、六反自然堤防が亀井自然堤防から派生して形成されると、亀井自然堤防上にAT-4集落、六反自然堤防上にNGEN1～3集落が出現する。これらの集落の出現は、AT-1・2集落が、自然堤防の発達に呼応してその領域を拡大した結果とみられる。このグループについては、長原・瓜破グループのように大規模な居住地の移動や集落の系統の断絶などの劇的な変化は少なく、自然堤防上に集落が連綿と存続したという特徴を指摘することができる。

次に、これらの集落群について、既に紹介した水田や古墳群などとの係わりにおいていかなる特性が見いだせるのかを検討してみたい。

まず、長原グループ集落の特性を物語るものとして韓式系土器の出土と古墳群の存在がある。1・2期に属する出戸自然堤防と台地東方沖積地の集落は、すべての集落から少なからぬ量の韓式系土器が出土している。また、各集落ともに直前段階の集落址が付近にほとんど見つかっていないことをあわせて考えると、集落の住民に占める朝鮮半島からの移住者の割合がかなり高かったものと考えられるのである。

長原古墳群は、長原遺跡の台地高所を中心に1997年度までに207基の古墳が発見されている。古墳群は[櫻井久之1993a]によれば、墳形・時期・規模が判定可能なもののうち、98%が方墳で、91%が1～3期に属し、93%が墳丘の一边ないし直径が15m以下のものである。つまり、大多数が1～3期の小規模な方墳であるとみてよい。古墳群のすべての古墳が、長原グループ集落の居住者が葬られたものでないにしても、もっとも盛んに古墳が築造された時期が、集落の最盛期と同じであること、古墳群の造営が収束する時期と、集落で遺構が激減する時期とが同じであることなど、その消長が符合するので、長原グループ集落の住民を被葬者とする古墳がかなりあったとみられる[京嶋覚1986]。

長原グループ集落の生産域は、六反-出戸低地内南側のTP+7.5～7.0mにかけての緩斜面にあると想定されたが、水田遺構の検出例はあまり多くない。古墳時代中期に属する例はNGE-1集落の北西と南東の調査地とYS-2・3集落の間で発見されているだけである。これらの水田遺構の時期は集落との関係から、1・2期とみられるが、3期に下る水田遺構の確実な発見例はない。このような状況から、生産域と想定される地域での調査件数があまり多くないことを差し引いても、長原グ

ループ集落群に属する農業生産域はさほど広い面積をもっていなかったのではないかと考えられるのである。特に、2期に従来の生産域を捨てて耕作に適さない台地上に集落を移動し、3期に到っては明確な水田遺構も発見されていないということから、集落に居住した集団は、経済的基盤としての農業生産にさほどの重きを置いていなかったのではなかろうか。この仮説が正しいとすれば、5世紀の段階で200基以上の古墳を築いたという意味で希有な古墳群をしたがえ、東西800m、南北700mの広範囲に集落を築いた集団の生業が何であったかということが問題になる。

瓜破グループの特性は明確である。[南秀雄1987・京嶋寛1992b]ですでに述べられているように、集落の出現は台地上の水田開発の開始と同時であり、この開発において主導的な役割を果たした集団の居住地とみることができる。台地上の水田開発を可能にしたのは人工流路の掘削であり、人工流路の水源としては古市大溝が考えられる。古市大溝は南河内の羽曳野丘陵を耕地として開発するために、7世紀初頭に掘削された灌漑流路とする説が有力で、[広瀬和雄1983b]によれば長原遺跡の南側までその延長が想定されている。[広瀬和雄1983a]によれば、古市大溝開削の時期を示す土器は飛鳥Ⅰに属するとされ、瓜破台地上の人工流路・瓜破グループ集落出土の土器と同型式とみられる。このことから大溝の開削・瓜破グループ集落の出現・台地上での水田開発は同時に起った事柄とみられるのである。また、瓜破グループは5世紀の長原グループとは系譜的に別の集団であることを想定したが、古市大溝の開削と南河内丘陵部の開発が「国家主導」によって行われたとするならば、瓜破グループに居住した集団もそれに係わった一団であったのかもしれない。

八尾南・木の本グループの1・2期の集落も韓式系土器を多く出土する点は長原グループと共通する。5世紀代の水田遺構はYS-4集落の東側に隣接して発見されている。6世紀に入ると集落は小規模分散化したが、水田遺構は2個所で検出されており、YS-2集落東方では古墳時代後期から飛鳥時代にかけての水田が上下に重なって堆積している状況がみられた。飛鳥時代の水田はほかにもう1個所で検出されており、古墳時代中期から飛鳥時代まで連綿と水田耕作が継続されたものとみられる。長原遺跡東南地区川辺3丁目でみられた灌漑溝群からは6～7世紀の各型式の須恵器が出土しており、5期に集落の断絶があった長原グループの生産域とみるよりも、八尾南・木の本グループの生産域である可能性が高いように思われる。

自然堤防上のグループに対応する生産域は、久宝寺・亀井・六反各自然堤防の間に形成された後背湿地に求められた。久宝寺・亀井自然堤防の間の後背湿地では、久宝寺・亀井・亀井北遺跡で古墳時代中期～飛鳥時代にかけての水田遺構が複数面検出された。亀井・六反自然堤防の間の後背湿地でも、亀井遺跡の調査地で奈良時代以前に3枚の作土層が確認された。こうした多くの水田址の検出例から、自然堤防上のグループは、古墳時代中期から奈良時代にかけて一貫して後背湿地での農業生産を主な生業としていたものと考えられる。また、古墳時代中期の集落は明らかでないが、亀井遺跡の大規模な堤状遺構は水田と氾濫現象との関係からみて、自然堤防上の古墳時代中期のグループによって建設されたとみられた。さらに、飛鳥時代には寺院を建立しており、こうした事業を行い得る経済力をも蓄積していたと考えられるのである。

7) 土地利用形態の変遷と政治的背景について

前項で述べた集落の動向の背景には、自然現象(おもに洪水)と政変などによる社会体制の変化があったものとする。その要因について若干の解釈を加えて本節を締めくくりたいと思う。

5世紀では、長原グループ集落が出戸自然堤防周辺の沖積平野から台地上へと移動した。移動の時期とはほぼ等しい初期須恵器の段階(1・2期)に、六反一出戸低地内ではRK7Avii層を堆積させた氾濫が発生し、以後、飛鳥時代まで6回の氾濫があったことが確認されている(第Ⅱ章第1節)。洪水時の最高水位は自然堤防の高さを超えるので、西調査地北区のRK7Avi層(3期の段階)の上面がTP+7.8mに達していることから、氾濫による冠水の被害範囲は、出戸自然堤防上のNGE-1集落をほぼ飲み込んだものとみられる。上面を著しく削剥されているため最高水位の復元はできないが、RK7Avii層(1または2期)の段階にもこうした冠水の被害があった可能性は高い。このことから、氾濫に対処するために集落の移動が行われたものとみられるのである。そして、集落の移動は長原グループのみに限らず竹淵・跡部グループでもみられ、6世紀代の集落は5世紀代のものよりもそれぞれの地点で高所に移動している。つまり、こうした集落の移動は、洪水に対する沖積平野に立地する集落に共通した動きと捉えることができるであろう。

5世紀の長原グループの集落については、大規模な集落と古墳群をもちながらも、農業生産域はあまり広くなかったのではないかと指摘した。特に古墳の数においては、連綿と農業生産に携わったとみられる集団が居住した亀井自然堤防上で、古墳が2基(註7)しか発見されていないことと対比させるとその特殊性は一層鮮明なものとなろう。当時の畿内の状況を考えるに、おそらくは百舌鳥・古市古墳群の被葬者を頂点とする体制のもとに、須恵器生産の陶邑、土器製塩の小島東遺跡や西庄遺跡、製鉄の大県遺跡など、特殊な手工業を主たる生業とした集落が成立していたとみられる[大阪府教育委員会1978、和歌山県文化財センター1995、柏原市教育委員会1996]。また、桜塚古墳群のように大量の武器武具を集積していることから、軍事関係の職掌を分担した集団も存在したとみられる[柳本照男1987]。こうした手工業や職掌がどの程度の専門性をもったものかは明らかではないが、長原のばあいもなんらかの特殊な手工業に従事したり、特定の職掌を担当するということがあったのではなかろうか。現在、生業の内容を説明する積極的な証拠はないが、渡来人の居住した痕跡が濃厚であることから、馬飼いやあるいは政権の外交や事務管理など、渡来人との係わりの深い内容が考えられてもよいであろう。一方、渡来人については、[田中清美1989]・[清水和明1998]のように土地開発との関係を重視する意見もある。しかし、当該地域内での比較においては長原グループの農地開発への関与はむしろ少なかったことは既に述べたとおりで、長原グループの渡来人(およびその子孫)は、政治的により高い次元で、政権中枢部の職掌を担当するような集団だったのではなかろうか。

長原グループの集落が4期に大幅に縮小する原因は、RK7Aiv層を堆積させた氾濫と関連づけることもできる。しかし、当時の社会情勢が、百舌鳥・古市古墳群造営の収束や、帆立貝式前方後円墳の普及に象徴される古墳の規制[小野山節1970]、甲冑集中管理体制の変容[藤田和尊1988]など、社会体制が大きく変化した時期にあたり、上記のような長原グループ集落の特性を考えると、その一連の変化の余波を受けたものとも考えられよう。

7世紀になると、瓜破台地北東部が水田化された。従来、居住域と墓域にしか用いられなかった台地高所に人工水路を掘削し水田化を可能にしたことは、土地利用形態の面からみて画期的な出来事であった。そして、これを主導した集団は長原グループとは系譜の異なる集団で、その集落が瓜破グループであるとみられた。この時期の水田遺構は、瓜破台地のほかに台地東方の沖積平野や久宝寺・亀井両自然堤防間の後背湿地でも検出されている。六反自然堤防上では5～6期に跡部グループの集落が進出してきており、この新しい自然堤防の周辺の後背湿地もまた水田開発されたものと思われる。こうしてみると、飛鳥時代の水田開発は「国家主導型」[広瀬和雄1983b]と表現される丘陵上の開発ばかりでなく、農業用水の水系の面からみても別グループに属する跡部グループのような沖積平野の自然堤防上に集落を築いた在地系の集団をも巻き込んで、この地域全体としての増産を指向しているように思われるのである(註8)。

(高橋)

註)

- (1)同様な視座のもとに著された論文として[藤永正明1986]・[清水和明1998]がある。本稿も両氏の業績に触発された部分が多い。
- (2)住居の形式の選択は、住居の基盤の土質との関係が深いように思われる。東方の沖積平野は沖積層の砂やシルトを基盤としており、雨水等が浸透し易いために竪穴式住居はあまり居住に適していなかったものとみられる。一方、台地上では住居の基盤が、段丘構成層の堅くしまったシルトや粘土であり、こういう地点では、竪穴式住居が採用されたものと考えられる。しかし、亀井自然堤防上の竹濶遺跡1次調査[八尾市文化財調査研究会1989c]では沖積層の砂・シルトを基盤に建築された竪穴式住居が検出されている。これについては居住した集団の差に起因する可能性がある。
- (3)本稿のNGW-1・2・3…等の集落の単位に等しいと思われる。
- (4)ここでいう上・中・下位水田は[八尾市文化財調査研究会1994b]の第2・3・4面水田に対応する。
- (5)[大阪市文化財協会1998]で柵(しがらみ)とした遺構も含まれる。本稿では盛土を伴うものは土手として扱っており、[大阪市文化財協会1998]の遺構も盛土を伴うので土手とした。
- (6)大阪文化財センターによる久宝寺南遺跡調査地では奈良時代に属する多数の掘立柱建物群が検出されている[大阪文化財センター1987b]。集落は奈良時代にも継続するとみられる。
- (7)1期の亀井古墳[大阪文化財センター1980]と4期の竹濶遺跡3次調査[八尾市文化財調査研究会1993c]検出の古墳で、いずれも方墳である。また、久宝寺自然堤防上の調査で横穴式石室を有する古墳が発見された[大阪府文化財調査研究センター1998]。KH-1集落の住民が葬られた古墳とみることができよう。
- (8)目的としては徴税などが考えられよう。

第2節 動物遺体の調査結果と検討

1) 資料の概要

動物遺体は表7に示す23点が出土した。資料はいずれも西調査地北区において、調査中に発掘したもので、水洗選別によるものはない。これらの推定年代は、古墳時代中期～平安時代Ⅲ期である。

出土状況は二つに大別でき、地層中から単独かそれに近い状況で出土した資料1～11と、柱が採取られた柱穴SP6001から出土した資料12～23である。後者の出土状況は既に第Ⅲ章第2節で述べた。

資料の保存処理・同定・分析は、[久保和士1995]と同様な方法で行った(註1)。同定の結果、動物遺体の種類は下記の2種に属する歯と骨であることが判明した。

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

2) 資料の記載

資料1 作土のRK4C層から単独で出土した。ウマの右下顎の第4前臼歯P₄で、歯根を欠損する。咬合面もわずかに欠損し、歯冠の頬舌幅(エナメル質で計測、以下同じ)は15.4mmである。全歯高([西中川駿・松元光春1991]のTotal Height cent. p. 以下同じ)は56mm以上で、[西中川駿・松元光春1991]

表7 動物遺体一覧表

資料番号	層準	遺構	時期	種類	部位	左右	部分	備考
1	RK4C層上・下部		平安Ⅰ～Ⅲ	ウマ	下顎遊離歯	右	第4前臼歯	歯根形成不明
2	RK4C層下部		平安Ⅰ	ウマ	下顎遊離歯	左	第1後臼歯	
3	RK4C層下部		平安Ⅰ	ウシ	上顎遊離歯	右	第2後臼歯	咬耗初期
4	RK5層		奈良	ウシ	上顎遊離歯	左	第2後臼歯	咬耗初期
5	RK5層		奈良	ウマ	下顎遊離歯	右	第2後臼歯	歯根形成不明
6	RK5層		奈良	ウマ	下顎遊離歯	左	臼歯片	永久歯
7	RK5-6層一括層		飛鳥・奈良	ウマ	上顎遊離歯	左	第1後臼歯?	歯根形成不明
8	RK7Aiv・vi層		古墳中期後葉～後期中葉	ウマ	踵骨	左	体部片	
9	RK7Aiv・vi層		古墳中期後葉～後期中葉	ウマ	中足骨Ⅱ	左	近位端片	
10	RK7Aiv・vi層		古墳中期後葉～後期中葉	ウマ	中足骨Ⅲ	左	近位端片	
11	RK7Aiv・vi層		古墳中期後葉～後期中葉	ウマ	中足骨Ⅳ	左	近位端片	
12	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	肩甲骨	左		
13	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	肩甲骨	右		
14	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	上腕骨	左		16と交連
15	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	上腕骨	右		18と交連
16	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	橈骨+尺骨	左		外側欠損、尺骨は体部のみ
17	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	橈側手根骨	左		
18	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	橈骨+尺骨+手根骨	右		尺側・中間・橈側・副手根骨
19	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	大腿骨	左		
20	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	大腿骨	右		22と交連
21	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	脛骨+距骨	左		
22	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	脛骨	右		
23	RK5-6層下面	SP6001	古墳後期後葉～飛鳥前半	ウシ	距骨	右	内側破片	

の計算式によって年齢を推定すると、6才よりも若い個体のものであることがわかる。

資料2 RK4C層の下部から単独で出土した。ウマの左下顎の第1後臼歯M₁で、歯冠の破片である。歯冠の頬舌幅(エナメル質で計測、以下同じ)は14.1mmである。

資料3 RK4C層の下部から単独で出土した。ウシの右上顎の第2後臼歯M²である。歯根は形成の初期か、まだ形成されていなかったと思われ、咬耗もさほど進んでいない段階のものである。歯冠高は約59mmである。[Sisson,S.1953]によるとM²は生後1～1.5年で萌出するので、これを少し上回った年齢のものと推測される。

資料4 RK5層から単独で出土した。ウシの左上顎の第2後臼歯M²で、歯根形成・咬耗の程度は資料3と同様である。

資料5 RK5層から単独で出土した。ウマの右下顎の第2後臼歯M₂である。近心側と歯根を欠損する。全歯高は50mm以上で、8才よりも若い個体のものと推定される。

資料6 RK5層から単独で出土した。ウマの左下顎臼歯の破片である。

資料7 RK5-6一括層から単独で出土した。ウマの左上顎臼歯で、第1後臼歯M¹と思われる。全歯高は50mm以上で、6才よりも若い個体のものと推定される。

資料8～11 RK7Aiv・vi層から一括して出土した。すべてウマの左後肢に属する部位で、踵骨・第2～4中足骨からなる。各中足骨を交連させると違和感がないが、遠位側の破片は見あたらない。踵骨以外の足根骨がないのも問題であるが、廃棄時には足根骨と中足骨が交連した状態であったと思われる。細片化が著しく、計測は不可能であった。

資料12～23 SP6001から一括して出土した。時期はTK43型式～飛鳥Ⅰに属すると思われるが、より詳細には限定できない。各部位は全体の形状は留めるものの、細部にいたっては遺存状態が悪く、骨表面の剥落が著しいものもある。そのため、表7に示した計測値には若干の誤差が内包される。また、部分的な欠損のため、十分な計測が行えなかった部位もある。欠損の要因は、埋納時、SD604掘削時、発掘時のいずれかに求められる。

以下、前肢骨から順に資料の状態を記載する。

肩甲骨は12が左側、13が右側である。両者とも外側面を上位にし、背腹方向の向きはほぼ正反対の状態出土した。上腕骨とは交連していなかった。左側は棘下窩を大きく欠損する。また、肩峰・後縁・背縁にも欠損がめだつ。しかし、いずれも発掘によるものであり、もとは完形であったと推測される。右側は前縁と肩峰が欠損し、関節窩と後縁も一部欠損する。両者とも骨端は癒合している。

上腕骨は14が左側、15が右側である。両者とも外側面を上位にし、遠位端は橈骨と交連していた。左側は大結節・小結節を欠損し、内側上顆をわずかに欠く。右側はこれらの部分と上腕骨頭外側をわずかに欠き、外側上顆・上腕骨滑車外側を欠損する。これらの大半は発掘による損傷である。両骨端とも癒合している。

前腕骨(橈骨・尺骨)・手根骨は16・17が左側、18が右側である。橈骨と尺骨は骨幹では癒合する一方、近位端では癒合していない。左側は橈骨の外側を発掘時に大きく欠損する。内側茎状突起は残存していたので、最大骨長は計測可能であった。尺骨は体部が約6cmにわたって残存したにすぎない。

い。この部分より遠位側は上記の欠損のため、もともとの有無は不明である。一方、近位側では十分な余地があるにもかかわらず、尺骨が認められなかった。埋納時に欠失していたか、SD604掘削時に欠損したかいずれかと考えられる。肘関節にずれが認められなかったことから、後者の可能性が高い。手根骨は近位・内側に位置する橈側手根骨のみがややずれた位置で見つかったので、このことも埋納後に攪乱が生じたという想定と矛盾しない。右側は左側に比べて残存状態が良好である。尺骨肘頭をわずかに欠損する。手根骨は近位列のすべて(橈側手根骨・中間手根骨・尺側手根骨・副手根骨)が交連状態にあった。左側ももともとこれと同じ状態であったのではないだろうか。

後肢骨に移ると、大腿骨は19が左側、20が右側である。左側は内側面を上位に、後面を西側にして出土した。遠位端は脛骨近位端と近接するが、両部位の向きが対応しないので、交連していなかったと判断した。大転子端部・大腿骨頭・大腿骨滑車の内側半・内側顆の内側半を発掘時に欠損する。一方、下位にあたる外側顆も欠損しており、これは埋納時に失われていた可能性がある。右側は外側面を上位に出土し、脛骨と交連状態にあった。大転子を発掘によって欠損するほかはほぼ完存する。ただし、膝蓋骨は左右とも見あたらなかった。

脛骨・足根骨は21が左側、22・23が右側である。左側は外側面を上位に、後面を西側にして出土した。遠位端外側面が発掘によって欠損していたので、踝骨(腓骨遠位端に相当する)の有無は不明である。しかし、距骨が存在することから、踝骨も交連していた可能性が高い。距骨は足関節で強く前方へ折り曲げられた位置で交連していた。踵骨はもともとない。右側は内側面を下位にして出土した。近位端が大腿骨と交連し、遠位端は若干欠損していた。この欠損は発掘によるものである。一方、右距骨が内側面を下位にして、足関節からやや外れた位置で出土していることは、SD604掘削時の移動によるものと想定される。距骨は外側半を欠損する。踝骨や踵骨の破片は見あたらず、左側と同様な状態であったと推測される。

以上の資料の計測結果を表8に示した。計測は[Driesch, A. von den. 1976]に従って行った。これによると、左右とも計測できた項目では、左右に大きな隔たりはない。また、左右いずれかしか計測できなかった項目においても、肉眼的観察の結果、さほど隔たりのないことが確認できる。したがって、各部位の左右は同一個体に由来すると推測される。そして、前肢骨と右側の後肢骨は交連していたので、前肢・後肢骨の左右が同一個体であるといえる。また、表8には[西中川駿・松元光春1991]による在来牛各部位の実測値の平均値と標準偏差も並載した。これと比較すると、SP6001出土骨の値は口之島牛雄にもっとも近いことがわかる。大半の計測項目において若干小さめであるが、標準偏差のうちに収まっている。この傾向や格差は前肢・後肢骨とも共通することから、前肢骨と後肢骨も同一個体に由来すると推定される。したがって、前後・左右の各肢骨は一頭の牛の四肢骨であるといえる。なお、在来牛の計測値との細部にわたる比較や、非計測学的形質の検討は、将来的に標本と比較した上で行うことが望ましいと考え、ここでは深く言及しない。

次に、これらの計測値から、[西中川駿・松元光春1991]の推定式を用いて体高を算出すると、比較的信頼できる計測値による計算値の平均は、119cmであった。在来牛の体高は口之島牛雄122cm、雌112cm、見島牛雄132cm、雌114.9cmであり[松元光春・西中川駿1991](註2)、やはり口之島牛雄

表8 SP6001出土牛骨計測値一覧表

部位	肩甲骨			上腕骨							
	後縁長	関節突起長	関節窩幅	最大長	骨頭からの骨長	近位端径	体中央幅	体中央径	遠位端幅	滑車幅	遠位端径
計測項目	DHA	GLP	BG	GL	GLC	Dp	SD	DD	Bd	BT	Dd
左		6.6	4.9		25.7+				7.8+	7.1	
右	33.2			30.0±0.3	26.2	11.0	3.8	4.2			8.0-
口之島牛♂		6.95±0.28	5.25±0.23	30.65±1.23		11.10±0.45	4.00±0.28	4.47±0.12	8.76±0.21		7.52±0.17
口之島牛♀		6.29±0.31	4.71±0.18	28.02±0.76		9.48±0.24	3.66±0.15	4.14±0.16	7.72±0.21		6.63±0.19
見島牛♂		7.14	5.86	32.78		12.04	5.16	5.00	9.57		8.06
見島牛♀		5.80	4.54	27.49		9.57	3.38	3.61	7.33		6.48
黒毛和種♂		9.02±0.50	6.58±0.41	35.32±1.08		13.60±0.74	5.16±0.22	6.18±0.35	11.01±0.60		8.66±0.32
黒毛和種♀		7.66±0.64	5.47±0.40	30.99±1.33		11.35±0.79	4.33±0.28	5.00±0.37	9.04±0.65		7.77±0.39

部位	尺骨		橈骨					
	肘突起での径	肘頭最小径	最大長	近位端幅	近位端径	体中央幅	遠位端幅	遠位端径
計測項目	DPA	SDO	GL	Bp	Dp	SD	Bd	Dd
左			27.8+		4.3			
右	6.0	5.6	28.2	8.4	3.9+	4.2	7.1+	4.1
口之島牛♂		5.52±0.30	28.38±0.84	8.42±0.22	4.11±0.04	4.04±0.36	7.52±0.43	4.68±0.29
口之島牛♀		4.99±0.16	26.73±0.91	7.51±0.19	3.67±0.13	3.75±0.12	6.68±0.22	3.96±0.18
見島牛♂		6.36	29.60	9.27	4.65	5.41	8.74	5.24
見島牛♀		4.93	25.77	7.29	3.67	4.40	6.50	3.64
黒毛和種♂		6.77±0.32	32.04±1.02	10.51±0.50	5.23±0.25	5.82±0.23	9.55±0.44	5.64±0.40
黒毛和種♀		5.92±0.39	29.12±1.32	8.79±0.61	4.53±0.33	4.50±0.28	7.81±0.53	4.34±0.40

部位	大腿骨							
	最大長	骨頭からの骨長	近位端径	骨頭径	遠位端幅	体中央幅	体中央径	遠位端径
計測項目	GL	GLC	Dp	Dc	Bd	SD	DD	Dd
左	36.5±0.5					3.5-	4.3-	
右		34.1	6.5	4.4	8.5±0.3	3.4	4.1-	11.9
口之島牛♂	37.48±1.41	33.82±0.73	6.80±0.71	4.82±0.10	9.68±0.51	3.41±0.18	3.95±0.29	12.05±0.35
口之島牛♀	34.72±0.99	31.97±0.78	6.34±0.27	4.31±0.15	8.69±0.22	3.33±0.12	3.69±0.20	11.28±0.29
見島牛♂	39.34	36.74	7.40	5.22	10.87	4.19	4.85	13.35
見島牛♀	34.09	32.11	5.85	4.44	8.93	3.17	3.64	11.46
黒毛和種♂	44.11±1.28	40.61±1.07	10.07±0.53	6.05±0.31	12.16±0.66	4.88±0.27	5.19±0.20	15.13±0.35
黒毛和種♀	38.97±1.70	36.37±1.52	8.44±0.82	5.31±0.36	10.46±0.69	3.97±0.30	4.28±0.29	11.28±0.29

部位	脛骨						距骨
	最大長	近位端幅	近位端径	体中央幅	体中央径	遠位端径	
計測項目	GL	Bp	Dp	SD	DD	Dd	内側半での径 Dm
左	34.5+	9.8	8.9	3.7		4.7	3.6+
右	33.5±1.0			3.7	2.8		
口之島牛♂	33.68±1.48	9.99±0.29	9.08±0.34	3.98±0.39	3.08±0.50	4.61±0.15	
口之島牛♀	31.85±1.48	9.08±0.22	8.41±0.23	3.70±0.25	2.81±0.09	4.29±0.15	
見島牛♂	35.56	11.43	9.97	5.37	3.49	5.30	
見島牛♀	32.04	9.07	8.19	3.79	2.78	4.37	
黒毛和種♂	39.38±0.82	12.44±0.60	11.30±0.47	5.52±0.23	3.86±0.27	6.11±0.28	
黒毛和種♀	35.78±1.58	10.90±0.67	9.84±0.65	4.59±0.29	3.33±0.24	5.40±0.40	

単位はcm、+数値は予測可能な欠損分を、+-は微量(0.2cm以下)の誤差を示す。
現生品種の計測値は[西中川・松元1991]による。

に近いことが確認できる。古代の遺跡から出土したウシの体高としては平均的な大きさで、やや大型の部類に属すると考えられる。

次に、一個体の肢骨であることを前提とした上で、SP6001牛の年齢を検討する。肢骨から年齢を検討するばあい、骨端の癒合状況を調査するのが有効である。各骨端の癒合年齢がおおむね決まっているからである。しかし、残念なことに、SP6001出土骨はすべての骨端が癒合しているので、年齢の最小値しか明らかにできない。[Sisson,S.1953]によれば、上腕骨近位端・橈骨遠位端・尺骨肘頭・大腿骨遠位端・脛骨近位端の癒合時期が3.5～4才ともっとも遅いことから、この牛は3.5才以上であると推定しうる。幼若個体ではない成牛の骨であることが少なくとも確認できた。

性別の判定には、骨の大きさが手がかりとなり、多くの資料の中に位置づけることによって判断できる。当地域には同一時期のウシ遺体に計測データが公表されたものはなく、今後、計測資料を蓄積する必要がある。ただし、全国的な見地から、雄の可能性が高いとのご教示を得ている(註3)。

なお、上記の一括資料には、骨表面の遺存状態が悪いこともあって、解体痕などの人為的痕跡を確認することができなかった。しかし、鉋で切断したような深い傷があったとは考えられない。左大腿骨の外側顆の欠損はこれに相当する可能性もあるが、刃の痕の有無を判断できる状況ではなかった。

3) 小結

以上、1996年度の調査で出土した動物遺体について記載した。

これらの中でもっとも注目されるのはSP6001出土例で、管見によれば、全国的にも例を見ない資料である。しかも、ただ稀有な事例としてだけでなく、行為のプロセスやその意義を問える資料的価値も有していると考える。よって、次項においては、その解釈と意義を検討する。

ほかに注目されることとして、資料8～11により[久保和士1998]に続いて、長原遺跡東北地区におけるウマの出土例を追加することができた。出土層準であるRK7Aiv・vi層の形成時期はTK23型式～TK10型式段階で、長原遺跡西地区でウマ遺体が豊富に認められる時期に、東北地区でも馬が飼育されていた可能性が高まってきたといえる。しかし、本例も水成層中の断片的な出土例であるので、長原遺跡の各集落における馬の保有状況などを検討するためには、いましばらく、新たな出土例や過去の出土遺体に関する記録を蓄積する必要がある。

また、資料1～6は作土層中から出土したもので、これまでも同様な事例をしばしば確認している。牛馬の遊離歯がなぜ水田やその周辺から頻繁に見つかるのか、問題視する必要がある。

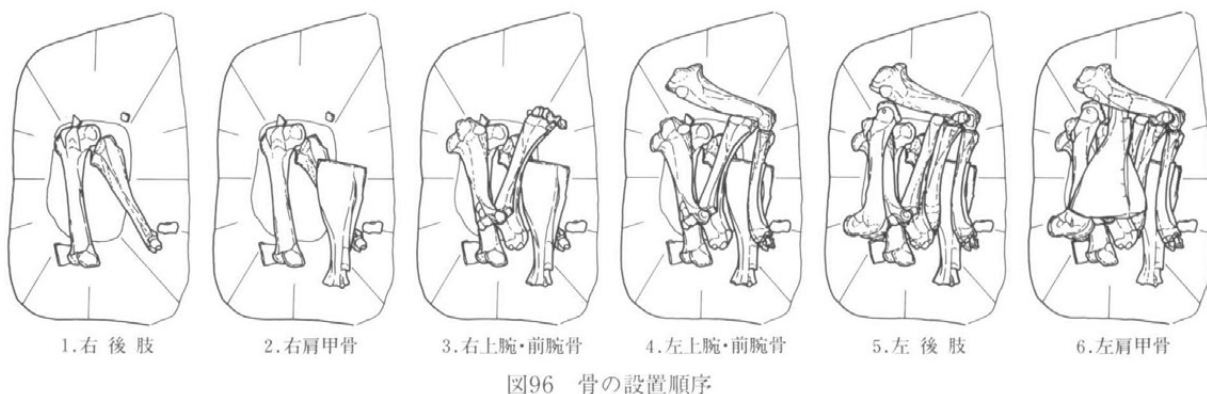
このように、今回報告した動物遺体を総体的に評価すれば、古墳時代から古代末期にかけての動物利用の諸相を探るための手がかりと課題を提示したといえる。

4) SP6001出土牛骨に関する若干の考察

i) 各部位の上下関係からみた埋納順序

遺構に関する記載(第Ⅱ章第2節)でも述べたように、各部位には左右に対応する上下関係がみられた。まず、その上下関係から埋納した順序を明らかにしておきたい(図96)。

はじめに置かれたのは右後肢骨である(図96-1)。膝関節で「V」字形に折り曲げた状態で、ほぼ中央に位置する。次に、その脛骨に重ねるように右肩甲骨を(同2)、そして、右後肢骨とは「V」字形の向きを違えた状態で、肘関節で強く折り曲げた右前肢骨を置く(同3)。この時点で、穴の底全体を骨が覆ったような状況になり、次は位置を若干北側に移動して継続したようである。まず、左前肢骨を肘関節で「L」字形に曲げた状態で置く(同4)。上腕骨頭の後端は穴の北側の法面に接し、上腕骨を骨が置かれる範囲の北辺に、前腕骨(橈骨・尺骨)をその東辺に位置づけたと思われる。そして、唯一、関節で外されていた左側の大腿骨と脛骨を平行に置く(同5)。大腿骨は遠位端の後端を西法面に接し、骨が置かれる範囲の西辺を画するように位置づけられる。脛骨の近位側は、右尺骨肘頭と右肩甲



骨の間の隙間に落とし込むように置かれる。大腿骨近位端や脛骨遠位端は、左上腕骨よりも北にはみ出さないように意識された可能性が高い。最後に、左肩甲骨が遠位端を左上腕骨の下位に差込むようにして置かれた(同6)。これによって、多くの骨が交錯する中央部に蓋をしたような状態となり、長方形の範囲に骨を据える行為が完了する。

以上のプロセスには、右側→左側の行為の順序が明らかに認められる。単なる偶然とは思えず、これらの部分や埋納する順序に意味が見い出されていたと推測される。これに係わる文献資料として、『延喜式』の「大学寮式」に記された釈奠(孔子など儒教の先哲を先聖・先師として祭る祭儀)の規定を見てみよう。これによると、儀式で供えられる三牲(大鹿・小鹿・豕)の骨付き肉はすべて右側を用いなければならないらしい。その理由は、獣は左半身を下にして寝るので左側を用いないからだという。このような規定は「雑式」の諸国釈奠式でも同様である。延喜式よりも古い釈奠に関する記録を渉獵していないが、平安時代前期の公的な儀式の牲獣において、左右の脚を序列化して認識していたことがわかる。『延喜式』の釈奠に関する条項は字句の末までほとんど唐の『大唐開元礼』に倣っており[弥永貞1972]、このような細部までを実際に行われていたこととして全面的に受け止めるのは危険かもしれないが、SP6001例で得た解釈ともまったく無縁ではないように思われる。そして、この対比が妥当なものであれば、SP6001例にも大陸的な思想が表れているといえるのかもしれない。

また、このような復元作業を通じて、外されていた左の大腿骨と脛骨が離れた順位でなく、同じ順位に位置づけられることから、両者が設置時までそのセット関係を保持されていたか、設置の直前に外されたことも知ることができる。また、扁平な肩甲骨が蓋のように利用されるというような形態的

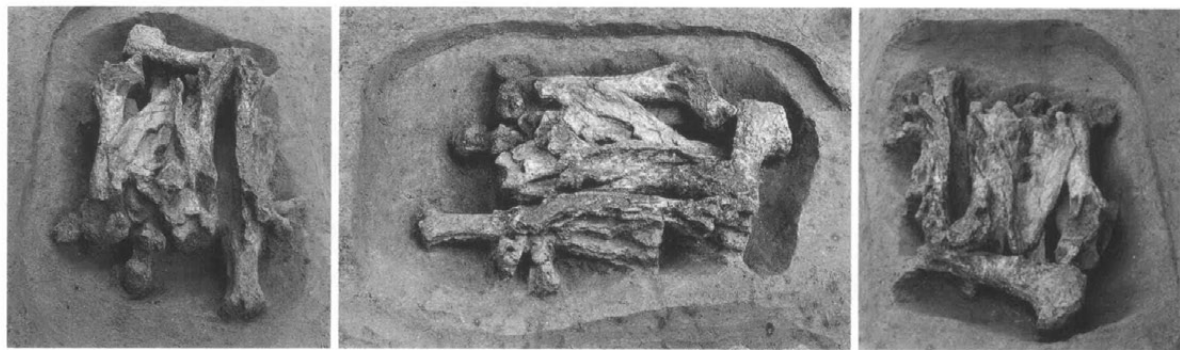


写真10 SP6001牛骨出土状況(左：南から、中：東から、右：北から)

な特性が活かされていたこともわかる。

このように、出土した骨は単なる廃棄物的に扱われていたのではなく、行為の細部にわたって注意しつつ、埋納されたと考えられるのである。

ii) 出土部位選択の意味

次に、なぜこのような部位が選択されたのか、その意味を考えてみたい。

出土部位(図97)には頭蓋や胴骨(椎骨・肋骨・胸骨)は含まれていなかった。また、肢骨でも中間列の手根骨・足根骨以遠は含まれていない。つまり、前後の足首の関節より先の部分がない一頭分の肢骨(後肢骨では寛骨を欠く)だけが埋納の対象となったのである。その意味を考えるにあたって、埋納されたのは肉が豊富に付く部位ばかりであることに注目したい。もちろん、頸や腰、肋の部分

も肉量は豊富であるが、前述したように、骨を埋納する行為をも重視したばあい、解体によって分割される単位の中で、もっとも選択されそうなのは四肢と思われる。足首の関節から先がないのは、この部分に付く肉が少ないため、あらかじめ除去されたからであろう。また、股関節で外されているのは、解体や持ち運びに利便なためであろう。

ここで、再び『延喜式』の積奠の記述を参考にしてみよう。犠牲獣を礼器に盛る方式の記述を見ると、三牲の骨付き肉11個の内訳は、前脚3節、後脚2節、脊椎に沿った部分3個(前・中・後部)、肋3個(おそらく前・中・後部)とある。前脚の3節は「肩臂臑節一段」とあり、骨では肩甲骨、上腕骨、前腕骨に相当する。後脚の2節は「後脚三節。『毎』節一段。去下一節。載上肫脰二節。」とあり、骨では大腿骨から中足骨までの3節から、下一節つまり中足骨を取り去った部分、すなわち大腿骨と下腿骨(脛骨・腓骨)に相当する。四肢に関する限り、この組み合わせはSP6001例とまったく同じである。積奠では参列者一同に牲肉が分配され、宴座も設けられているので、肉が食べられたことは間違いないだろう。したがって、肉の食用利用を目的とした際の四肢の選択性は上記の通りに働くと考えられる。現代の食肉業界でも、中手骨・中足骨以下は切り落とされ、流通ルートには乗らない。

以上から、出土部位はこれに付く肉の利用と骨の埋納を効果的に行うために、選択されたと考えられるのである。既に述べたように、各骨の接近度や、左後肢骨が膝関節で外されていたこと、膝蓋骨がなかったことは、埋納以前に肉が除去されたことを物語っている。とはいえ、交連する関節も多いことから、肉の除去と骨の埋納にはさほど時間的な隔たりがなかったことや、食するに足る鮮度を保っていたことが想定される。また、明らかな解体痕は認められなかったが、上記の推測からみて、

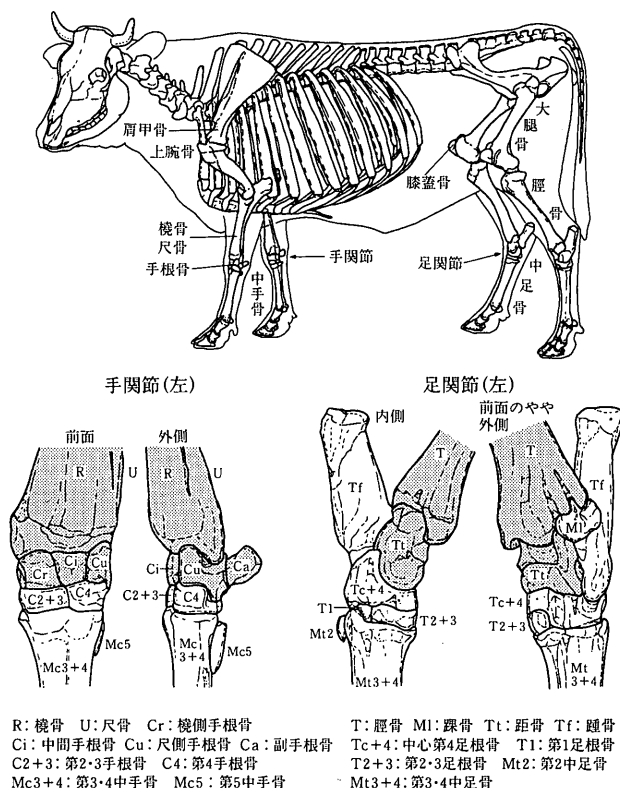


図97 骨格中に占める出土部位の位置

([Sisson,S. 1953]をトレース・改変)

骨表面には軽微な刃物痕が付いていたと推察される。また、靱帯を残したまま肉を切り離していることからみても、解体における要所や効率的手順を踏まえた解体技術がうかがわれよう。

ただし、四肢が選択された要因には、上記のような機能的なものだけではなく、観念的な意味合いもあったのかもしれない。この点に関しては後述したい。

以上から、骨に付いていた肉がどのように利用されたのか、これが骨の埋納と並んで重要な事象として浮かび上がる。

肉の利用と骨の埋納、このような二つの事象は、どのような行為において伴うのであろうか。日常生活や手工業生産における消費や廃棄などの行為では、これを説明しがたい。やはり、祭祀行為との関連性を想定するのが蓋然性が高いと考える。[松井章1995]が指摘する、土壌や井戸における牛馬骨の出土例を祭祀に短絡することの危険性をも十分傾聴した上で、これまでに述べた観察と検討の結果は、この関連性を支持すると考える。

iii) 祭祀行為の過程と目的

では、どのような過程を経て祭祀が行われたのか、推測してみよう。まず、これまでに行った検討から想定しうるプロセスを以下のように考えた。

- ①建物を取り壊し、柱を抜く。
- ②牛の肉付きの四肢を神に捧げる。
- ③肉を骨から切り離し、神と人々とで共食する。
- ④骨を柱拔取り穴に据え、埋める。

最後の行為では、骨に先立って土器片を底部隅に置いた可能性もある。そして、このような限定しうる時空で行為が遂行された状況からみて、四肢を供した牛は病死や自然死によるものではなく、殺されたと考えるのが妥当だろう。つまり、②は牛を殺し、解体し、肉付きの四肢を神に捧げる行為であったと思われる。ちなみに、この牛の体格を考慮して精肉量を想像すると、四肢以外の肉も加えれば、100kgくらいにも及ぶだろう(註4)。そして、牛を殺す行為自体も重要な儀式性を帯びていたにちがいない。以上から、この祭祀行為は動物犠牲を伴ったものであるといえよう。

さて、一連の行為の目的は何であったのか。直接的な契機としてはSP6001が支えた建物の解体と考えられようが、それは建物群の終焉とも同一であったのだろうか。つまり、1棟の建物の終焉か、建物が属した集落のそれなのか、判断を要する。そこで、SP6001よりも新しい建物があつたかどうかが問題となる。調査担当者によれば、SP6001より新しいSD604などの溝群の存在から、局地的な耕作地への変換があるものの、集落としての継続性は認められるという。したがって、具体的な状況は不明ながら、上記の祭祀行為の後にも建物が新たに建てられたと考えて問題なかろう。そうすると、SP6001が属した建物の性格が継承されたのか否かによって、建物の取壊しあるいは建替えが契機となったとする二通りの考えが成り立つ。今回得ることができたデータのみからではいずれとも決しがたいが、いずれにせよ、建物に係わる祭祀であることは確認できよう。また、数多く検出された柱穴のうち、このような埋納例はSP6001を除いてほかにはないので、対象となったのは特別な機能を期待された建物であったと想像しうる。

建物に係わる動物祭祀の例は決して多くないが、石川県羽咋市寺家遺跡で報告されている[小嶋芳孝1988]。ここでは、官社として発展した気多神社の政庁に係わると推測される、9世紀に属する大型建物群の掘形や周辺からウマの歯や種不明の骨片が出土した。その解釈として、建物群建築にあたって漢神信仰の殺牛殺馬儀礼が行われていた可能性が示唆されている。漢神信仰とSP6001の関係については後述する。

以上から、SP6001の牛骨出土状況は、建物の取壊しあるいは建替えに際して、動物犠牲(殺牛)を伴う儀礼が行われたことを示すと考えるのである。しかし、その際にどのような思想的背景から何を祈念したのか、考古資料のみから明らかにすることには困難が伴う。

iv) SP6001と出土牛の意義

さて、6世紀後半～7世紀前半の長原遺跡でこのような祭祀が行われたことが明らかになったことは、いかなる意義を有するのであろうか。今後、さらに考察が深められれば、多くの分野に係わっていくと予想されるが、ここでは、牛を犠牲とした儀礼、牛の普及時期、長原遺跡における動物祭祀の変化、牛馬祭祀の系譜という、四つの問題に係わって簡単に検討しておきたい。

a. 牛を犠牲とした儀礼

第一に、本資料は牛を犠牲とした儀礼を知る上で、重要な事例となる。

[松井章1995]は古代・中世の村落における動物祭祀に係わる牛馬遺存体出土例を整理した。その際、「発掘における記録と動物遺存体そのものの観察に基づいて、動物儀礼を、生きた動物を殺して神に捧げる犠牲と、それが形骸化したと思える動物骨をシンボルとして捧げる儀礼の2つが存在すること」を明らかにした。また、この判断には出土状態の厳密な検討が重要と述べた。筆者もこの考え方には同感であり、かつて長原南口古墳の殺馬儀礼を推定した際、同様な手続きを経たことがある[久保和士1995]。今回のSP6001に関しては、発掘の時点から動物考古学的手法が採用され、南口古墳よりも出土状況に係わる資料的な価値は高いと考えている。

では、牛を犠牲とする儀礼には、どのような考古資料があるのだろうか。[松井章1995]はその例として、草戸千軒町遺跡第36次調査のSG3450(室町時代後半)に廃棄された遺存体を提示した。四肢を一個所で縛り、殺して、首を切り取った後に、池に投棄した状況がうかがわれ、失われた頭部が祭祀に用いられたと推測された資料である。一方、牛頭骨を用いる祭祀は、各地で検出された井戸や水田の水路・畦畔への埋納例が紹介されたが、いずれも白骨化したものが用意されていた可能性が高いとし、殺牛を伴う儀礼と断定できないとした。また、多くの研究者によって殺牛例としてしばしば引用される神奈川県横須賀市鉾切遺跡C地点SK01例(7世紀初頭)[小出義治1986]も、犠牲を伴うかどうか不明と位置づけられている。その理由の一つは、下顎骨を欠いていたことと察する。また、松井氏が引用されなかった東京都港区伊皿子貝塚第2方形周溝墓例(弥生時代中期)[金子浩昌ほか1981]も、頭蓋の背面に下顎骨が載せられたような状態なので、同様に判断しうるかと思われる。

このように、犠牲として牛を殺したと論証しうる例は決して多くないのが現状である。これまで殺牛祭祀と解釈された資料の多くは、殺牛行為の根拠という基本的な問題を再検討しなければならないだろう。殺したことの考古学的な決定証拠を得ることは不可能に近く、いかに説得力のある状況証拠

を蓄積するかが重要と考える。したがって、殺牛を想定しうるSP6001例は、貴重な資料となるのである。

さて、出土部位選択の理由や、儀礼の目的の一部については前述した。ここでは文献資料をうかがうことによって、考古学的には解明しにくい思想的側面を探りたい。平安時代初期に成立した『日本霊異記』中巻の「漢神の崇りに依り牛を殺して祭り、又放生の善を修して、以て現に善惡の報を得し縁」に次のような説話がある(註5)。少し長くなるが、要約してみよう。

摂津国東成郡撫凹村の富裕な家長が、聖武朝のころ、漢神の崇りによって、祭祀として7年間、毎年1頭ずつ牛を殺して供えた。家長は祭祀を終えた後、重病にかかり、その理由を「殺生の業」に拠ると考え、7年間、毎月6日間は心を清め仏の戒めを守り、生き物を放生してやったが、死んでしまった。臨終の際の遺言通り死体をしばらくそのままにしておくと、9日目に生き返り、家長は冥界での話をした。冥界で家長を閻魔大王のもとに誘導した7人の非人は、かつて殺された7頭の牛であった。彼らは閻魔大王に怨を報いることを強く訴えた。これに対して、彼を弁護しに現われた千万余人は家長が放生した生き物たちであった。両者のせめぎ合いが続いた9日目に、閻魔大王は多数決により判決を下し、家長は生き返ることができた。これより後、自分勝手に神を祀らず、ますます仏教を信心することで、90余歳まで生きながらえた。

漢神を「崇れる鬼神」として異端視し、仏教思想の優位性を説く意図から記された説話で、その中で注目される件として、牛を殺して祭祀をした状況として、「(家長が)主と作り、我が(非人つまり牛の)四足を截りて、廟に祀り利を乞い、膾に賊りて肴に食いし」(括弧内筆者註)と祭祀の状況が詳しく記されている個所である。廟とは死者の霊を祭る場所で、漢神を祭る所とも解されるという[中田祝夫1979]。牛を殺して、四肢を祭った後、肴として食べた(おそらく饗応した)のであり、ここでも四肢選択の理由が生肉にあったことが確認できよう。そして、この記述とSP6001から推測された行為に思想的な共通性を求めたい。

では、漢神の祭祀とはどのような思想なのか。漢神祭祀に係わる史料には上記のほかに、『続日本紀』延暦10年9月甲戌条や『日本紀略』延暦20年4月乙亥条が知られている。[佐伯有清1967]によれば、中国でも5～6世紀以降、祀廟に牛を殺して祭る祭祀が盛んで、その対象は崇りの神として民間の崇敬を受けた項羽神的怨霊神であった。これが上記史料に見られるわが国の漢神祭祀のルーツとなった。そして、「牛を殺し、その肉を食べ、酒を飲み、多くの男女が会集して、賑やかに項羽神的怨霊神を祭ること」が、わが国での漢神祭祀の核心であったと描いている。怨霊の具体的な現れ方には病氣などが考えられ、『日本霊異記』中巻第24の牛の肉を欲する鬼神の説話をもとに、[佐伯有清1967]は病氣にかけると牛を犠牲に捧げる風習があったと推測する。以上から、[笠井敏光1979]も明確にしたように、漢神祭祀と殺牛は密接な関連を持っていたことが理解されよう。漢神祭祀の中では、牛に対して馬は特別な意味を持たず、両者への動物観の違いが表れているものと考えられよう。

また、先述した四肢を選択した要因が、肉の利用や骨の埋納に適するといった機能性以外にもあるとすれば、牛の象徴的部位の捉え方にあったのではないだろうか。『日本霊異記』では牛の象徴として頭や蹄、反芻行動などが捉えられていたことを読み取ることができ、四肢もその一つに考えられてい

た可能性も想定できよう。

このように、文献資料からうかがわれる奈良時代の漢神信仰による牛犠牲を伴う儀礼が、飛鳥時代前半にさかのぼって当地で行われていたことを推測しうるのである。これまでも考古資料を漢神信仰と結びつける解釈はいくつか示されていた。しかし、漢神祭祀の特性ともいえる殺牛の根拠を提示しうる例は少なく、SP6001はそのもっとも有力な事例の一つとなるであろう。

b. 牛の普及時期に関する問題

第2に、牛の普及時期の手がかりとしても注目される。本例はウシ遺体として、長原遺跡では古い部類に属する。これよりさかのぼるものとして、隣接する瓜破遺跡では5～6世紀に属するものがある[樽野博幸1982]が、他では今のところ認められない。府下に対象を広げても、5世紀以前のものは、豊中市勝部遺跡例(弥生時代前期)[渡辺誠1972]があるにすぎない。ウシの足跡化石でも、長原遺跡では、RK7Bi層上面(非作土層；第Ⅲ章第1節)で検出された6世紀前半とみられる偶蹄類の足跡がその可能性を持つのみで、普遍的に認められるのはこれより後のNG7A層より上位の作土層と考えられる。このような状況は、全国的に見ても同様で、弥生時代～古墳時代中期に属するウシ遺体[松元光春・西中川駿1991]や足跡化石は非常に限られている。これらの資料を十分吟味できていないので、牛の移入時期については議論する術をもたないが、普及時期は6世紀後半以降から飛鳥時代前半に位置づけられるのではないだろうか。これは[山田昌久1989]が論証した牛馬耕の開始年代とも符合する。おそらく、それは牛の生産が本格化した時期を表していると思われ、その目的として農耕や耕地開発などの労働力としての利用が推測される。馬の普及時期は5世紀前半から中ごろに位置づけられるので、馬と牛では時期差があったと考えられる。長原遺跡で見つかる動物遺体や足跡化石にはこのような様相が顕著に現われており、このことは当遺跡における集落の展開とその性格、例えば、生産構造と耕地開発などの問題とも密接に係わってくると推測される。また、当時の牛の形質を知る上でも、貴重な資料となると思われる。

c. 長原遺跡における動物祭祀の変化

第3に、第2の問題に関連して、本例は古代の長原遺跡における動物祭祀の新たな様相として位置づけることができるのではないかと予測する。その理由として、5世紀前半の馬の導入期以来、6世紀中葉までは、儀礼に用いられた動物は馬が大半を占めていたと推測されることがある。猪や鹿も用いられたかもしれないが、現段階では祭祀を示唆するような出土状況の資料は未発見で、牛は動物遺体としての検出例がごくわずかにしかない。馬に係わる儀礼には、動物犠牲を伴うと推測しうるものとして南口古墳での葬送儀礼がある[久保和士1995]。これを除けばウマ遺体はすべて集落内で認められ、井戸や土壙からの出土例、谷斜面での祭祀遺物との共存例などから、犠牲を伴ったかどうか明らかでないが、馬と祭祀との係わりが推測される。そして、祭祀だけでなく、集落近辺でさまざまな形態で利用された動物は馬を主体としていたと考えて差し支えない。この背景には、馬の飼養技術とともに、祭祀も含む馬利用の文化ももたらされたことが推測される。

しかし、6世紀後半に、集落内では祭祀に関連するような馬の出土例が一旦途絶えると思われるのに対して、本例が牛を用いる動物犠牲として現われる。また、これよりやや遅れて、水田の畦畔付近

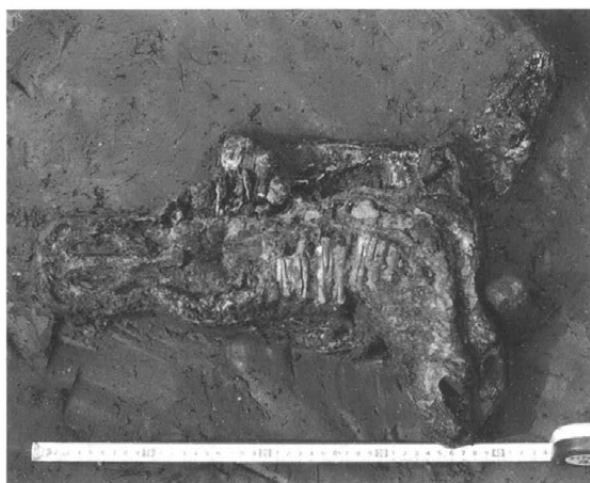


写真11 NG89-63次調査牛頭蓋出土状況

で出土し、下顎の左側面が頭骨の腹面に接していたことから、下顎を外した状態で凹みに据えたと推測される。このほかは、作土中の遊離資料が多いが、祭祀の後に耕作によって移動したとも解釈できよう。文献資料では、『日本書紀』皇極元年7月戊寅条を初出として、雨乞の際に牛馬を殺す祭祀が散見され、[佐伯有清1967]は雨乞も農耕儀礼として捉えることができると指摘した。長原遺跡のばあい、水田域での牛馬出土例の初現は、耕作地としての系譜がたどれる飛鳥時代初期にまでさかのぼる可能性がある。もしこれが妥当であれば、漢神祭祀と推測されたSP6001例と、農耕儀礼の色彩の濃い水田域での出土例とは、出現時期が近接し、何らかの関連性を有する可能性が高いという考えが生じよう。しかし、後者には必ずしも犠牲を伴っている例ばかりでなく、また、馬が多数を占める点において、前者とは異なる特徴を持っている。

d. 牛馬祭祀の系譜

最後に、このような様相を牛馬祭祀の系譜に関連づけて検討したい。[荒木敏夫1986]は民間における牛馬の屠殺祭祀が、天皇を中心とした屠殺忌避の祭祀への変容の強制によって、表面的には伏在化し、非常の際に散発的に屠殺を伴う祭祀に回帰したと推測した。[松井章1995]も漢神信仰が仏教との争いに敗れて、歴史の表層から姿を消し、文字を残さない階層の人々の間に命脈をつなぐと推測し、雨乞祭祀としての「殺牛・殺馬」は度重なる国家の禁止令にもかかわらず、中世・近世まで民間祭祀として存続したことを論証した。また、[笠井敏光1979]は雨乞祭祀での牛馬の利用に、牛のもつ漢神の性格と、馬にみえる水との深い関連性との結合を見だし、前者は副次的と推測した。これらの諸論を長原遺跡の様相に照らしてみると、SP6001が漢神信仰にあたり、これ以降にみられる水田域での牛馬遺体出土例が雨乞などの農耕儀礼として継続した民間祭祀を反映していると考えられるのではないだろうか。そして、前者の漢神信仰を、5～6世紀前半の馬を用いた祭祀とは別系統の、6世紀後半～7世紀でもごく初期のうちに新たに大陸よりもたらされた思想と捉え、同じころかやや遅れて普及し始める後者の思想に少なからず影響を及ぼしたと考えるのである。これには既往の研究史と係わる二つの問題点がある。第1に漢神信仰と農耕儀礼における動物祭祀の系譜、特に来歴の解釈、第2に古墳時代中期の祭祀とその後の農耕儀礼の双方において、馬が用いられていることに関連性があるのかどうかという点である。

や水路、谷などで牛馬出土例が現れ、奈良時代ごろから近世まで継続して認められる。この中には斃牛馬処理の廃棄物も含まれているが、水田域での牛馬骨埋納例は農耕の豊饒儀礼が動機とされ[松井章1995]、長原遺跡の水田域での資料もこの範疇で捉えることができるのではないかと予測される。その一例として、8世紀前半の水田域に隣接する大きな凹みの中から牛頭蓋が出土している(NG89-63次調査、写真11)[大阪市文化財協会1989d]。この頭蓋は仰向けの状

まず、第1の問題に関して、漢神信仰の殺牛儀礼は大化改新以後に大陸からもたらされた外来の思想であることについてほぼ見解が一致しているという[桜井秀雄1992]。一方、農耕儀礼としての殺牛馬祭祀の系譜に関しては、[佐伯有清1967]による日本固有の一般的な習俗であるとする説、[下出積興1972・上田正昭1993]などによる漢神信仰と同様な外来の思想とする説がある。また、両者の前後関係については、漢神信仰の方が新しいとする見解[佐伯有清1967・笹生衛1984・上田正昭1993など]がめだっている。筆者は研究史を十分把握しているとはいいがたいが、先に述べたSP6001例と長原遺跡での動物祭祀に係わる予測は、このような見解に対して一石を投じるものと考えている。

では、第2の問題についてはどのように考えられているのであろうか。[瀬川芳則1991]は四条畷市奈良井遺跡などでの祭祀を検討し、5世紀代の殺馬祭事に、奈良・平安時代の動物祭祀が何らかの形で結びつくと推測した。[桃崎祐輔1993]も古墳に対する牛馬供犠は歴史時代の殺馬殺牛儀礼と時期的に継続し、同じ範疇に位置づけることができるとする。この両説は古墳時代の馬供犠が馬飼集団に密接に関連すると考える点で共通している。一方、[土肥孝1983]は水確保の儀礼での馬を犠牲とする祭祀が、祭祀形態の変容があるとしつつも、弥生・古墳時代から律令期へ継続するという立場をとる。これと同様に、馬の犠牲と水辺の祭祀のつながりを継続的に捉える見解は多い。このように、古墳時代の馬を犠牲とする思想の解釈に差異こそあれ、律令期への継続性を認める説が根強いといえよう。確かに古墳時代中期の水辺からウマ遺体が出土することは少なくないが、水田域から見つかる例は非常に少なく、出土状態は律令期とは異なっていると思われる。したがって、両者が国内的に継続性を持つというには説得力に欠けるように思う。また、古墳への馬の供犠は桃崎氏らが指摘するように馬の飼育や管理を担った集団と関連性がうかがわれるので、異なった思想的背景を有すると考える。おそらく、河内平野周辺での様相をみる限り、古墳への供犠以外の馬祭祀もこのような集団に係わってくるのではないだろうか。つまり、古墳時代中期の馬祭祀と、6世紀後半以降の農耕儀礼における馬祭祀とは、馬と水との係わりの認識での思想的なつながりを部分的に認めるにしても、一連のものではなく、導入時期や系譜を異にする外来の思想ではないだろうか。現段階では結論を出せないが、今後、出土状態を吟味して検討する必要がある。

以上の点からみて、SP6001が営まれた6世紀後半から7世紀初頭頃から顕著となる長原遺跡での動物祭祀の変化は、系譜や性格を異にする牛馬祭祀への転換に基づいていた可能性がある。もし、このような考え方が妥当ならば、長原遺跡だけでなくより広範な現象があったと思われるので、他遺跡での検討も今後行っていきたい。また、この画期と、本章第1節で導き出された長原遺跡の各集落や社会構造の画期とは、現象面では同一時期にあるように思われる。両者に関連性があるのかどうか、今後、長原遺跡での動物遺体の出土例を資料提示し、動物祭祀も含む動物利用のあり様と、各集落の系譜や展開との関係を明らかにする必要がある。

このように、SP6001と出土牛から提起される問題は多岐にわたり、古墳時代中・後期の馬牛の普及によって大きな転換期を迎える人と動物の関係の解明に重要な位置を占めると思われ、地域史の範囲に留まらない意義を有すると評価できよう。その基礎となる出土状況の記載には意を尽くしたつも

りであるが、考察に関連する他地点の資料提示を十分にできなかった。小稿は予察の域を出るものでなく、今後、関連資料をできる限り提示し、検討を深めたい。

なお、小稿をまとめるにあたっては、鹿児島大学農学部西中川駿先生、奈良国立文化財研究所松井章氏、羽曳野市教育委員会笠井敏光・伊藤聖浩両氏に、ご教示ご協力を賜った。記して深謝の意を表する次第である。

(久保)

註)

- (1) 資料の同定・記載には、[加藤嘉太郎1970][競走馬総合研究所1979]に加えて[須川章夫・月瀬東1977]を参考にした。
- (2) 見島牛の雄の体高値が大きいのは、データが保存されている個体が体格のよい種牛によるからであるというご教示を、鹿児島大学農学部の西中川駿先生から賜った。
- (3) 本資料を西中川駿先生に実見していただいたところ、全国で出土している古代牛の中では大型に属し、雄の可能性が高いというご教示を賜った。
- (4) 精肉量の推測は、[佐伯有清1967]146頁の記述を参考にした。
- (5) 原文は全文漢文で、訓み下し文は[中田祝夫1979]に拠った。

第V章 まとめ

第1節 長原遺跡東北地区の基本層序と縄文～飛鳥時代

1) 長原遺跡東北地区の基本層序について

平成7～9年度にこの地区で行われた発掘調査の成果をもとに、長原遺跡東北地区の基本層序を提案した(第Ⅱ章第1節)。この基本層序は、遺跡南部のおもに台地上およびその縁辺部での調査結果をもとに確立されてきた長原遺跡の標準層序[大阪市文化財協会1995a]と河内平野の沖積平野部の調査成果を対比する作業の一助になるものと考えている。

この地域の層序で遺跡南部とまったく異なる特徴的な層準は、古墳から飛鳥時代に堆積した氾濫性堆積層、RK7A層であろう。この層準については、昨年度の調査[大阪市文化財協会1998]では古墳時代後期中葉のものしか見つかっていなかったが、今回の報告で7層準に細分可能なことが判明した。この8層準は将来の調査によって、淘汰ないし更なる細分がなされるであろうが、第Ⅳ章に述べたように、RK7A層が示す氾濫現象が、この地域の地形の変化と人間の活動に大きな影響を与えたものであったということに変わりはないであろう。

この地域の層序に係わる今後の課題としては、RK5～6層の細分とRK4C層中の水成層の問題がある。RK7A層を堆積させた氾濫現象によって六反―出戸低地間に六反自然堤防が形成されたことは第Ⅳ章第1節で述べたが、本書で紹介した調査地はこの微高地上に立地しており、RK5～6層は陸上成の層相しか観察できていない。のちに5)でふれるように、六反自然堤防形成後もその南側は低地のまま残ったとみられ、低地内に堆積したRK5～6層が見つかり、細分される可能性がある。

また、西調査地北区のRK4C層上・下部の間に挟在した砂の薄層や、西調査地南区の砂の含有率が高い4Cv層の存在から、将来、RK4C層中に水成層が見つかる可能性が考えられた。その後、本書執筆中にNG97-56次調査地[大阪市文化財協会1997j]で平安時代Ⅲ期の土器を含む氾濫性堆積層が発見された。これら3者が同一の氾濫現象に由来するのか、複数の氾濫現象に由来するのかは、今後南側の低地を調査する際の課題となる。この問題は先のRK5～6層の問題とともに、六反自然堤防の南側に残された低地の土地利用状況がどのようなものであり、いつごろ埋没して平地化したのかという疑問に係わって重要と思われるのである。

2) 縄文時代

東調査地には縄文土器を含む分厚い氾濫性堆積層が検出された(第Ⅲ章第1節)。この堆積層は粗粒な堆積物で構成され、層厚は5m以上で、上面の標高はTP+5.2～5.3mに達していた。第Ⅱ章第2節で、本層がRK11i層に対比されるかRK10C層に対比されるかは今後の課題とした。しかし、RK

10C層に対比されたとしても、周辺調査地(NG97-12・41次など)ではRK10C層上面の標高がTP+5mを超えている地点はなく、この層準の堆積によって東調査地周辺には微高地が形成されたとみられるのである。

3) 弥生時代

東調査地ではRK9層(一括)基底部から前期の土器が出土した(第Ⅲ章第1節)。また、昨年度調査地では前期の可能性があると考えられたピット・溝などの遺構が検出されている[大阪市文化財協会1998]。土器出土地点の標高はTP+5.5mで、西調査地北区のRK9C層基底面の標高に比べて約0.7m高く、前項で述べた微高地上に前期の集落が立地した可能性を指摘できる。ちなみに周辺地域では、亀井遺跡[大阪文化財センター1983]や竹渕遺跡3次調査[八尾市文化財調査研究会1993c]で前期の集落が見つまっている。

また、東調査地では後期後半の水田が検出された(第Ⅲ章第1節)。北北西には亀井遺跡があり、約500m離れた亀井遺跡1次調査[八尾市文化財調査研究会1988]でも後期の遺構が検出されている。今回検出の水田は、この集落の生産域にあたるかとも思われるが、水田址はむしろ亀井遺跡方面とは逆の、調査地の南方に広がるとみられた。亀井遺跡が水田経営母体である可能性もあるが、より近い長原遺跡東北地区や亀井・跡部遺跡の大阪市寄りの地域で同時期の集落が発見される可能性もあろう。

4) 古墳～飛鳥時代

RK7A層の堆積が示すように、長原遺跡東北地区は数次にわたる氾濫に見舞われた。その結果として六反自然堤防が形成され、自然堤防上は居住地に、周囲の後背湿地には耕作に適した地形的な条件ができあがったものと考えられる。

長原遺跡東北地区における集落の形成は、西調査地北区の調査結果(第Ⅲ章第2節)からみて古墳時代後期後葉(須恵器TK43型式)から始まり、奈良時代に及んだとみられる。飛鳥時代には集落が確認できる地点がさらに増加し、現在のところ、東調査地(第Ⅲ章第1節)・西調査地北区・NG97-52次調査地[大阪市文化財協会1997i]で集落に係わる遺構が見つまっている。

集落の生産基盤は、水田址のような具体的なかたちでは未発見であるが、水田耕作に適した粒径の細かい堆積物と灌漑用水の便に恵まれた、自然堤防側方の後背湿地に求められるであろう。西調査地北区で検出されたアミダ状の平面形態をもつ溝群は、畠作に係わるものとみられ、飛鳥時代には微高地上でも耕作が行われたことを示している。

このように、微高地上に集落をかまえ、側方の後背湿地を耕作地として開発したであろう集団は、集落の形態と系譜・灌漑用水の水系からみて、長原遺跡の台地斜面を開発した集団とは別系統に属するものと考えられる。以上については第Ⅳ章で詳しく述べた。

(高橋)

第2節 奈良時代以降の長原遺跡東北地区

1) 奈良時代

長原遺跡東北地区では、奈良時代に氾濫が起ったことを示す地層は発見されていない。六反自然堤防の南側の後背湿地内にあたるNG80-1次調査地[大阪市文化財協会1980a](図99)では、TP+7.2mで奈良時代の溝が検出されているが、その上・下位に、飛鳥または奈良時代に属するような氾濫性堆積層は存在しない。また、微高地の南縁にあたるNG97-56次調査地では、TP+6.8mで平安時代初頭の堤状遺構が検出されているが、その下位に飛鳥・奈良時代の氾濫性堆積層はなく、上位は前述の平安時代Ⅲ期の遺物を含む砂礫層に覆われている。こうしてみると、飛鳥時代前半(RK7Ai層)までの氾濫によって六反自然堤防が形成されたのち、その南側では飛鳥時代後半から奈良時代の間に顕著な氾濫はなかったとみられるのである。これは長原遺跡の台地側の地域で、この間にNG6Bii・6Aii・5B層と3回の大規模な氾濫があったことと大きく異なる点である。原因としては、台地上の氾濫が人工流路から起ったものである[京嶋寛1990]のに対し、東北地区を含む沖積平野側の氾濫がおもに自然河川から起ったことがあげられる。台地部の水路が維持・管理の面でさほど高い技術水準になかったことは[藤永正明1986]にも指摘されており、自然流路よりも頻繁に氾濫を起したのであろう。このように、奈良時代の東北地区は安定した地形環境下にあったとみることができ、図93に見るように、六反自然堤防と南側の台地およびその東側の比較的標高の高い沖積地に挟まれた、六反・出戸地の名残りの地形から基本的には変化がなかったものとみられるのである。また、西調査地北区で奈良時代の集落遺構や畠作関係の溝群が検出されており、自然堤防上の土地利用状況にも飛鳥時代と大きな変化は認められない。

一方、六反自然堤防の北側で、亀井自然堤防との間の後背湿地内にあたる地点での大阪府教育委員会による亀井遺跡の調査[大阪府教育委員会1989]では、和銅開珎が出土した奈良時代の水田作土層とされる地層がTP+7.5~7.3mで検出されている。この付近は、奈良時代の段階でも六反自然堤防最高所から少なくとも0.5mは低い地形であったとみられる。上・下位に飛鳥・奈良時代に属する顕著な氾濫性堆積物も見つかっていない。このことから、六反自然堤防形成後の飛鳥時代後半から奈良時代にかけては、六反自然堤防北側の低地も地形的に安定しており、かつ耕作地として利用されていたことがわかる。西調査地北区の北端部付近では奈良時代の作土層RK5層が検出されており、奈良時代には微高地の北側斜面にも耕作が及んだとみることができる。

2) 平安時代以降

東調査地では、おおまかにRK4C・4B層の2つの段階に、掘立柱建物や井戸などの集落に関する遺構と、耕作に係わるとみられる溝などの遺構が検出されている(表9)。4C層の遺構としては、十字に交差しほぼ正方位をとる溝群がある。この溝群については畠作に係わるものと考えられた。北側のNG95-57次調査地では同層準の遺構として、北半部に同様な溝、南半部に同方位の掘立柱建物(SB

表 9 平安時代以降の遺構

		NG 9 5 - 5 7		東調査地		西調査地北区			西調査地南区	
		作土層	遺 構	作土層	遺 構	作土層	流路	遺 構	作土層	遺 構
時 代	奈良		SB601			5・6層 溝 群		SB601		
	平安Ⅰ					4 C 層 下 部	NR 4B 01 最下 層？	SX4C01	4Cvii	SD4C11 SP4C27・28
	平安Ⅱ	(4C)	溝群	(4C)					}	SD4C10
	平安Ⅲ		溝群 SB602 SB603 土器埋納遺構		溝群	4 C 層 上 部		SD4C01～03	4Civ 4Ci	SP4C18 SD4C06
	平安Ⅳ	4B	SX501 SB501	4Biv 4Biii 4Bii 4Bi	SD4B01 SE4B01 SX4B09 SP4B30	4 B 層 一 括	NR 4B 01	SX4B01 SD4B01		
	鎌倉									SX301
	室町	3		3	SX311	3			3	

(平安Ⅰ～Ⅳは[佐藤隆1992]の時期区分による)

601～603)が検出されている[大阪市文化財協会1998](図98)。これらの遺構からは平安時代Ⅲ期の遺物が出土しており、同時期に存在したものとみられる。溝群の一部には平安時代Ⅱ期にさかのぼるとみられるものもあるという。建物の分布する範囲はやや広くみても南北30mほどで、屋敷地とみることができ、その周囲に畠地が展開したようすがうかがえる。また、屋敷地の北限付近で、平安時代Ⅲ期ごろの土師器甕の上半部が出土した土器埋納遺構が検出されている。

4B層の遺構は、両調査地でほぼ正方位の掘立柱建物が検出されている。やはり屋敷地の規模としては南北30m強ほどで、4C層段階のものと大差はない。また、建物の南にはやはり平安時代Ⅳ期の土器埋納遺構SP4B30がある。NG95-57次調査地北部では、建物とは方位を違って西南西から東北東方向へ延び、耕作に関係するとされる溝群(SX501)があり、東調査地でもこれと同方向の溝4B03が検出されている。これらの溝と建物は平安時代Ⅳ期の遺物を含み、ほぼ同時期とみてよい。4C層段階の遺構に比べると、建物と溝の方位が異なること・屋敷地がやや南側へずれることなどの相違点がある。

これら2時期の建物群はほぼ同じ位置に分布していることから、平安時代Ⅲ～Ⅳ期に存続した一連の屋敷地とみられる。土器埋納遺構は屋敷地の外れに設けられることが多いことから、建物群は比較的小規模な範囲内に完結した屋敷地とみることができる。

西調査地南区では、RK4C層の段階に、溝・自然流路・土器埋納遺構などが発見されている(表9)。ほぼ正南北に延びる平安時代Ⅰ期のSD4C10(図77)は、南区で60m分を検出し、南側のNG97-13次調査地でその延長部分が、NG97-43次調査地では溝から東へ派生もしくは屈曲する、一連のものと思われる溝が検出されている[大阪市文化財協会1997e・h]。総延長は90m以上が確認されていることになるが、溝の機能が問題になる。溝の埋土下層には流水の痕跡があり、南区では周囲に7層に細分されるRK4C層の作土層がある。このことから、平安時代Ⅲ期よりさらに古いNR4B01最下層を水源とする、4C作土層に用水を供給した灌漑水路とみることもできる。しかし、溝底部の標高

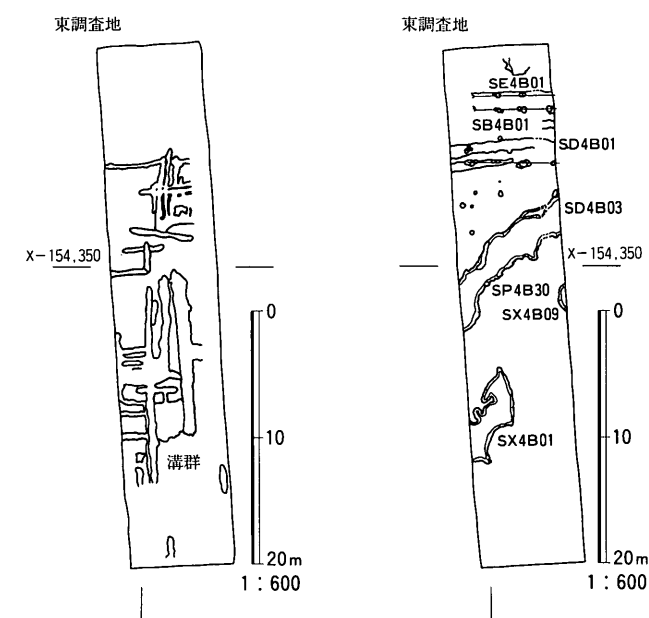
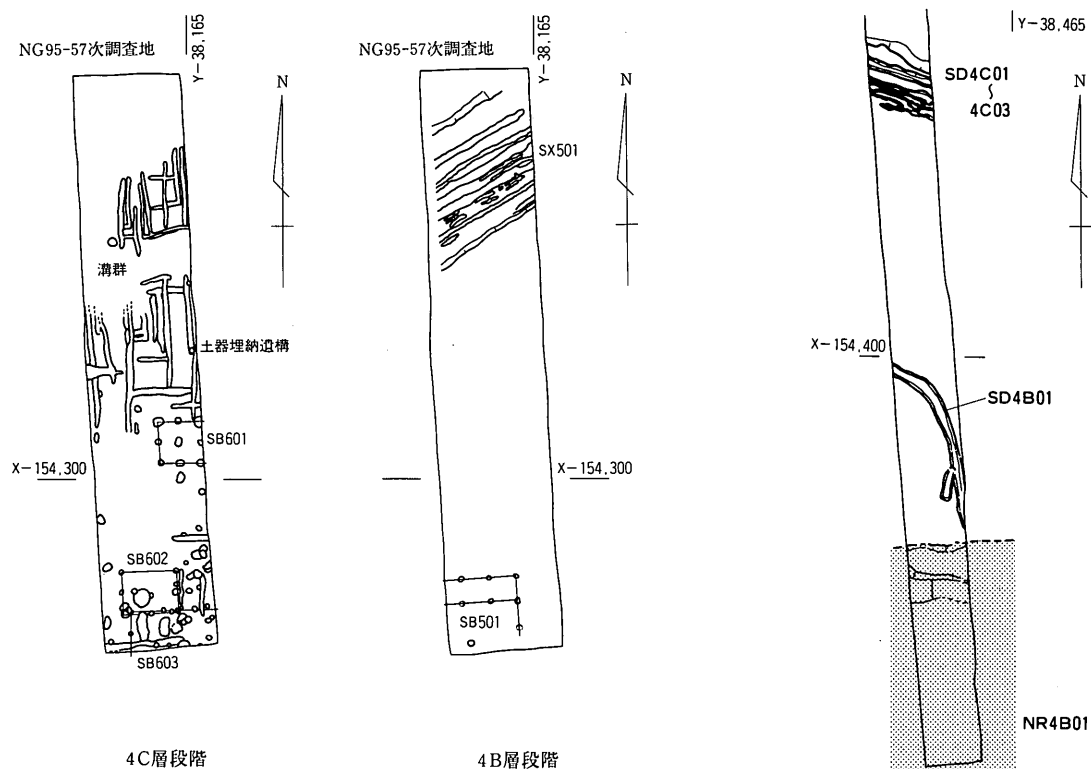


図98 東調査地遺構配置図(左:4C層段階、右:4B層段階)

は、南区内の最北部(もっともNR4B01寄り)でTP+7.5m、最南部付近で同7.7mと南側が高くなっており、南方へ水を引いたとはいえない状況である。むしろ、地下水位の高い水田から水を抜いた排水用の溝であるのかもしれない。また、屋敷地を画する溝という可能性もある。長原遺跡西地区では一辺半町(約51m)の方形に巡る溝に囲まれた平安時代Ⅲ期ごろの屋敷地とみられる遺構群が見つかってい

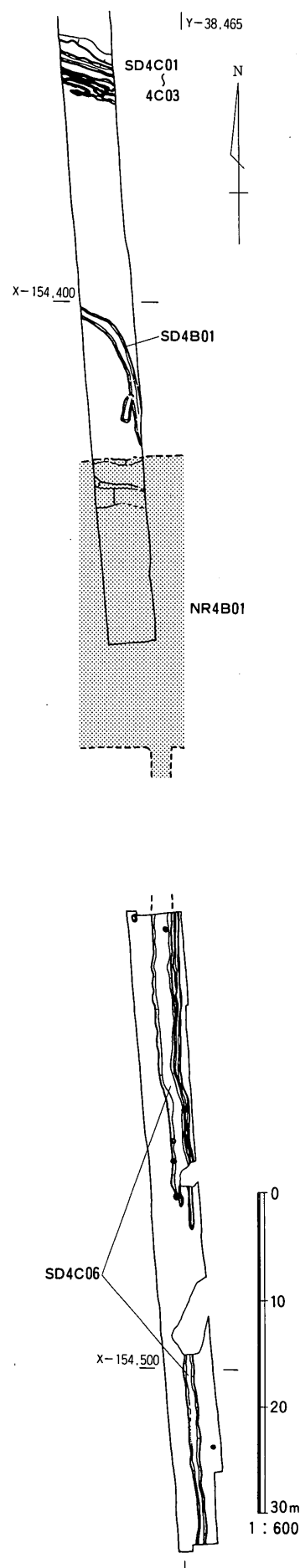


図99 西調査地遺構配置図
(平安時代Ⅲ・Ⅳ期)

る[大阪市文化財協会1992b]。SD4C01の東側にはSP4C27・28などの土器埋納遺構も存在し(図77)、黒色土器の一括資料が出土した土壌が検出されたNG12次調査地[大阪市文化財協会1979a]もほど近いことから(図2・88)、東側に存在が想定される集落を画する溝であるのかもしれない。溝の機能については、このようにいくつかの可能性が考えられるが、解明は今後の調査に委ねたい。

平安時代Ⅱ期にSD4C10が埋没すると、平安時代Ⅲ期にはやや東にずれた位置に、同方位をとるSD4C06が掘削された(図99)。幅こそ狭くなったものの、埋土の状況や底部の標高・土器埋納遺構が付近に存在することなど、SD4C10と共通する点が多く、SD4C10の機能を継承した溝と考えられる。

西調査地北区のRK4C層段階の遺構は、平安時代Ⅰ期のSX4C02(図61)、平安時代Ⅲ期のSD4C01～03(図99)がある。NR4B01の下層からも平安時代Ⅲ期の土器が出土し、最下層は平安時代Ⅲ期に先行する。調査区南端に位置するNR4B01から北側に約30m離れてSD01～03があり、その北側は約40cmの段をなして低くなっている。この段は耕作によって生じたもので、北半部の低い部分にはRK5・4C層上部・下部・4B層の作土層が分布していた。段のすぐ北側にはSX4C02がある。作土層とNR4B01の間はRK5-6層が遺存しており、4C層段階の顕著な遺構はない。出土遺物からみて4C層上部の作土層とNR4B01下層は同時期で、両者の間を結ぶ溝は見つかっていないものの、NR4B01下層から調査地北半部へ灌漑用水が供給されたものと考えられる。4C層下部の作土層への用水の供給源はNR4B01最下層が候補となる。

4B層の段階になると、NR4B01と段の間にSX4B01(図63)が掘削される。この遺構は底部の形態からみて畠作に係わるものとみられ、4C層段階で顕著な遺構がみられなかった地点が畠作地として利用され始めたことを示している。SX4B01の廃絶後、北半部の作土層分布域とNR4B01を結ぶかたちでSD4B01(図63)が掘削される。溝内には流水の痕跡がみられ、NR4B01上層から4B層の水田へ灌漑用水を供給した溝とみられる(図99)。

以上のように、平安時代には、西調査地周辺はNR4B01付近を除いて耕作地化されたものとみられる。作土層は、西調査地南区で平安時代Ⅰ～Ⅲ期にあたる4Ci～vii層、東調査地で平安時代Ⅳ期にあたる4Bii～iv層が存在し、平安時代を通じ、安定して耕作が行われたとみられる。調査件数がまだ少ないので慎重でなければならないが、遺構の分布や遺物の出土量も、平安時代Ⅱ期に属するものがやや少ないものの、さほど大きな変化はみられない。このことは長原遺跡の台地で平安時代Ⅱ期に遺構・遺物が激減する現象[佐藤隆1992]と合致しない。台地地域でみられた変化の原因は、NG5層の氾濫による灌漑水路や水田の埋没に求められている。しかし、城山遺跡(その3)調査地[大阪文化財センター1986a]の地層断面図(図6)でみると、NG5層は層厚こそ分厚いものの、さほど広がりをもつ地層ではないようである。今回の調査地でもこれに該当する地層は発見されなかった。奈良時代の六反自然堤防の南側で低地内にあたるNG97-56次調査地では、平安時代Ⅰ期の氾濫性堆積物で埋積される流路があり、この堆積物がNG5層に対比される可能性がある。しかし、これは低地全体を埋めるような大規模な氾濫性堆積物ではなく、NG5層ほど大きな影響を及ぼしたとは思えない。つまり東北地区では、人工流路から溢れ出たNG5層の氾濫の影響は少なく、その結果として安定した水

田の経営が可能だったのであろう。それでは東北地区の土地開発と長原遺跡台地地域のそれとはまったく別次元に行われたのであろうか。これについては、六反自然堤防の上部のかなり広い範囲が耕地化され、大規模な溝などの遺構が増加する時期(平安時代Ⅰ期)と、長原遺跡台地地域で都と共通する遺物が増え、人間の往来が活発化した[佐藤隆1992]時期とが一致すること、西調査地北区で台地上のNG87-35次調査地[大阪市文化財協会1992a]で特徴的に出土する「○」印墨書土器が出土していることから、あながち無関係であったとも思えない。土地開発の対象地域が、NG5層の氾濫で荒廃した長原遺跡台地地域から、この時期に比較的安定した地形にあった東北地区を含む沖積平野へ向けられたと考えることもできよう。

地形の変化の面では、六反自然堤防南側に残った低地は、すでに述べたNG97-56次調査地の平安時代Ⅲ期の大規模な氾濫でかなりの部分が埋没したのではないかと想定される。しかし、低地東方のNG84-4次調査地[大阪市文化財協会1984a]では瓦器を含み、NG4A層とみられる氾濫性堆積物が検出されており、まだこうした氾濫性堆積物が流入する低地が残っていたことがわかる。また、NG96-79・97-52次調査地では、南から北へ流れる自然流路が検出され、内部から13世紀の瓦器が出土している。城山遺跡(その2)調査地[大阪文化財センター1986a]では、12世紀末ごろの土器を含み、NG4A層と同一層準とみられる自然流路0401が検出されている。これらの流路は南南東から北北西へ流れており、従来の低地内の水流の方向とはほぼ直交している。このことは、NG4A層の時期には低地はほぼ埋め尽くされて平坦になり、自然流路の方向を規制する地形的要因がなくなってきたことを示しているのではなかろうか。こうした氾濫性堆積物の供給源は、木の本遺跡第2次調査地[八尾市文化財調査研究会1984]で平安時代の遺物を含む氾濫性堆積層が見つかったことから、南東方面に求められるであろう。平安時代の地形の変化については以上のように予見するが、詳しい検証作業は六反自然堤防南側の地域での発掘調査で行われなければならない。

なお鎌倉時代以降は、東・西調査地ともに、RK4Bii~2層の各層下面で、畝間・鋤溝・島畠溝など耕作に係わる遺構が検出された。この地区は、鎌倉時代以降、現代にいたるまで、おもに農地として利用されてきたものとみられる。今後、集落の所在や、NG97-52次調査地で見つかったRK4A層準の自然河川と耕作地の関係などを解明することが課題となろう。

(高橋)

引用・参考文献

- 青木遺跡調査団1978、「青木0期よりX期までの土器の概観」：『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、pp.315-326
- 秋山浩三1988、「7 主体部の遺物(5)土器」：『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集、pp.235-245
- 荒木敏夫1986、「古代国家と民間祭祀」：歴史学研究会編『歴史学研究』560、pp.45-51
- 上田正昭1993、「殺牛馬信仰の考察」：『神々の祭祀と伝承』 同朋舎出版、pp.19-34
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1979a、『大阪市下水管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』
- 1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』
- 1980a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』
- 1980b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』
- 1980c、『大阪市下水管渠築造工事(到達堅坑)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』
- 1982a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1982b、『八百氏邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-4)略報』
- 1982c、『大阪市土地開発公社川辺市営住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-41)略報』
- 1982d、『六反下水道管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-48)略報』
- 1983a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1983b、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
- 1983c、『大阪市平野区长吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』
- 1983d、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』
- 1983e、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』
- 1983f、『大阪市住宅供給公社長吉六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』
- 1983g、『長吉出戸六反地区幹線水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』
- 1983h、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』
- 1984a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』
- 1984b、『長吉出戸下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-6)略報』
- 1984c、『出戸駅前再開発ビル建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-25)略報』
- 1984d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』
- 1984e、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』
- 1984f、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』
- 1985a、『出戸市営住宅建設に伴う出戸2丁目所在遺跡発掘調査(DD85-1次)略報』
- 1985b、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』
- 1986、『府営高野大橋第2住宅団地建設に伴う瓜破遺跡発掘調査(第2次)(UR86-11)略報』
- 1988、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』
- 1989a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1989b、『(仮称)平野更生園建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-48)略報』
- 1989c、『長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-86)略報』

1989d、『長吉長原西市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-63)略報』

1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1992a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1992c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1992d、『平成4年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG92-11)略報』

1992e、『平成4年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG92-46)略報』

1992f、『長吉長原東市営住宅(第3期)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG92-97)略報』

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1993b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1993c、『大阪市局生局による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG93-1)略報』

1993d、『大阪市市民局による平野区民センター等建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG93-37)略報』

1994a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1994b、『大阪市都市整備局による長吉長原市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査その1(NG94-34)略報』

1994c、『平成6年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG94-47)略報』

1994d、『大阪市都市整備局による長吉長原市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査その2(NG94-66)略報』

1994e、『大阪市都市整備局による東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡発掘調査その1(KR94-7)略報』

1995a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ

1995b、『平成7年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG95-13)略報』

1995c、『平成7年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG95-14)略報』

1995d、『大阪市都市整備局による長吉長原東住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報』

1995e、『平成7年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG95-41)略報』

1995f、『平成7年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG95-76)略報』

1995g、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』

1995h、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96

－79)略報』

1996a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ

1996b、『平成8年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-32)略報』

1996c、『平成8年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG96-71)略報』

1996d、『平成8年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG96-76)略報』

1996e、『大阪市都市整備局による長吉長原東第2住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-103)略報』

1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ

1997c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ

1997d、『平成9年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その1)(NG97-12)完了報告書』

1997e、『平成9年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その2)(NG97-13)完了報告書』

1997f、『平成9年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(その2)(NG97-18)完了報告書』

1997g、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』

1997h、『長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その3)(NG97-43)完了報告書』

1997i、『平成9年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その4)(NG97-52)完了報告書』

1997j、『長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その5)(NG97-56)完了報告書』

1997k、『平成9年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(その3)(NG97-60)完了報告書』

1998、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ

大阪府教育委員会1978、『小島東遺跡』：『岬町遺跡群発掘調査概要』、pp.1-24

1989、『1988年度 亀井遺跡発掘調査概要—八尾市南亀井町・跡部南の町所在—』

1994、『1992・93年度 亀井遺跡発掘調査概要—八尾市南亀井町所在—』

大阪文化財センター1978、『長原』

1980、『亀井・城山』

1982、『亀井遺跡』

1983、『亀井』

1985、『長原』Ⅱ

1986a、『城山』その1～3

- 1986b、『亀井』その2
- 1986c、『亀井北』その1～3
- 1987a、『亀井』その3
- 1987b、『久宝寺南』その1、2
- 大阪府文化財調査研究センター1996、『久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書』
- 1998、『久宝寺遺跡七ツ門古墳現地検討会資料』
- 岡村勝行1993、「古墳時代の長原ムラの調査から」：大阪市文化財協会編『葦火』44号、pp.4～5
- 小野山節1970、「五世紀における古墳の規制」：『考古学研究』第16巻第3号、pp.73～83
- 笠井敏光1979、「祈雨祭祀と殺牛馬」：『国家と仏教 日本仏教史研究1』 永田文晶堂、pp.197～216
- 柏原市教育委員会1996、「85-2次調査区」：『大泉の鉄』、pp.19～27
- 加藤嘉太郎1970、『増訂改版家畜比較解剖図説』上巻
- 金子浩昌ほか1981、「第2号方形周溝墓西溝出土の家牛(Bos taurus)頭骨」：港区伊皿子貝塚遺跡調査団編『伊皿子貝塚遺跡』、pp.476～486
- 木原克司1982、「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.287～316
- 京嶋覚1986、「河内長原古墳群とその造営集団」：大阪市文化財センター主催『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』
- 1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294～306
- 1991、「群集土壌の性格と意義」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.142～143
- 1992a、「長原・瓜破遺跡の製塩土器」：『同上』、pp.155～160
- 1992b、「飛鳥時代の土器とその時期」：『同上』、pp.149～154
- 1993a、「古墳時代後半期の土器の変遷」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.269～276
- 1993b、「5・6世紀の集落構造の復元とその特質」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.241～258
- 1994、「井戸 井戸 井戸」：大阪市文化財協会編『葦火』49号、pp.6～7
- 京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990、「喜連東遺跡の奈良時代建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』24号、pp.2～3
- 競争馬総合研究所編1979、『馬の解剖図譜』Schmaltz I 日本中央競馬会競走馬総合研究所
- 久保和士1995、「動物遺体の調査結果」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.233～241
- 1997、「牛骨を埋めた柱穴」：大阪市文化財協会編『葦火』68号、pp.6～7
- 1998、「動物遺体の分析」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ、pp.59～60
- 工楽善通1995、「古代築堤における「敷葉工法」—日本古代の一土木技術に関する予察—」：『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』、pp.497～513
- 黒田慶一・京嶋覚1992、「小結」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.48～49
- 小出義治1986、「まとめ」：鉞切遺跡調査団編『鉞切遺跡—C・D地点の調査—』、pp.120～122
- 小嶋芳孝1988、「寺家遺跡出土の動物遺体について」：石川県立埋蔵文化財センター編『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.230～232
- 佐伯有清1967、『牛と古代人の生活』 至文堂
- 桜井秀雄1992、「殺牛馬信仰に関する文献資料の再検討」：信濃史学会編『信濃』第44巻第4号、pp.60～78
- 櫻井久之1993a、「長原古墳群の調査」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.1～7

- 1993b、「長原遺跡の土器埋納遺構」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.268-286
- 笹生衛1984、「古代動物供犠祭祀とその背景」：神道宗教学会編『神道宗教』第114号、pp.77-97
- 佐藤隆1989、「5世紀の建物を発掘―長原遺跡の調査―」：大阪市文化財協会編『葦火』22号、pp.6-7
- 1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 清水和明1998、「長原遺跡北部周辺の前古時代中・後期の様相に関する予察」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ、pp.63-69
- 下出積興1972、『日本古代の神祇と道教』吉川弘文館
- 須川章夫・月瀬東1977、『牛の解剖図説―骨学編―』文永堂
- 鈴木秀典1982、「瓦器碗の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282
- 瀬川芳則1991、「馬飼集団の神まつり」：『古墳時代の研究』第3巻 雄山閣、pp.122-130
- 田中清美1989、「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」：大阪歴史学会編『ヒストリア』第125号、pp.1-25
- 田辺昭三1966、「出土遺物の検討」：平安学園考古学クラブ編『陶邑古窯址群Ⅰ』、pp.35-58
- 1981、『須恵器大成』角川書店
- 樽野博幸1982、「長原遺跡出土の哺乳動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』、pp.196-199
- 趙哲済1994、「長原遺跡における旧石器調査の現状」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.73-84
- 1995、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.19-34
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、pp.41-146
- 土肥孝1983、「日本古代における犠牲馬」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』、pp.383-400
- 中田祝夫1979、『日本霊異記』(中) 講談社学術文庫
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告書』Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第26冊
- 1978、「川原寺西南部の調査」：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第31冊
- 1980、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』10、pp.60-64
- 1987、『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第45冊
- 1989、「左京三条二坊一・二・七・八坪の調査」：『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、pp.46-87
- 1992、「飛鳥池遺跡の調査」：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22
- 奈良市教育委員会1993、「平城京左京五条六坊十五・十六坪 第252次」：『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成4年度』、pp.64-68
- 植崎彰一1982、「日本古代の陶硯―とくに分類について―」：小林行雄博士古稀記念論文集『考古学論考』
- 西中川駿・松元光春1991、「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」：『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、pp.164-188
- 西村公助1993、「八尾南遺跡出土の韓式系土器」：『韓式系土器研究』Ⅳ 韓式系土器研究会、pp.39-44
- 原田昌則1995、「八尾南遺跡(第8次調査)」：『八尾南遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告47、pp.119-129
- 広瀬和雄1983a、「河内古市大溝の年代とその意義」：『考古学研究』第29巻第4号、pp.53-69
- 1983b、「古代の開発」：『考古学研究』第30巻第2号、pp.35-69
- 1988、「近畿地方における土器製塩」：『考古学ジャーナル』第298号、pp.13-20

- 藤田和尊1988、「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」：『橿原考古学研究所論集』第8号、pp.425-527
- 藤永正明1986、「水田について」：『城山』その3、pp.92-106
- 松井章1995、「古代・中世の村落における動物祭祀」：『国立歴史民俗博物館研究報告』第61集、pp.55-71
- 松元光春・西中川駿1991、「遺跡出土の牛、馬の骨の形態計測学的研究」：『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、pp.18-41
- 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp.2-4
- 桃崎祐輔1993、「古墳に伴う牛馬供儀の検討」：『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会、pp.1-141
- 八尾市教育委員会1985a、「跡部遺跡の調査(跡部本町2丁目44-1、45、46-1)」：『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業、pp.1-7
- 1985b、「跡部遺跡の調査(安中町3丁目52-2)」：『同上』、pp.27-33
- 1985c、「八尾南遺跡の調査(若林町3丁目117-119)」：『同上』
- 1989、「4. 久宝寺遺跡(63-269)の調査」：『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書』Ⅱ、pp.9-14
- 1990a、「18. 久宝寺遺跡発掘調査概要(85-191)」：『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告20 平成元年度公共事業、pp.66-70
- 1990b、「亀井遺跡(88-586)の調査」：『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業、pp.15-20
- 1992a、「4. 植松遺跡(90-433)の調査」：『八尾市内平成3年度発掘調査報告書』Ⅱ 八尾市文化財調査報告26 平成3年度公共事業、pp.31-34
- 1992b、「2. 木の本遺跡(90-176)の調査」：『同上』、pp.3-27
- 1992c、「11. 久宝寺遺跡(91-150)の調査」：『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告25 平成3年度公共事業、pp.50-51
- 1993a、「5. 植松遺跡(91-626・627)の調査」：『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業、pp.26-29
- 1993b、「1. 木の本遺跡(91-468)」：『同上』、pp.1-5
- 1994、「1. 跡部遺跡(92-623)の調査」：『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告29 平成5年度国庫補助事業、pp.1-8
- 1996a、「1. 跡部遺跡(94-059)の調査」：『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書』Ⅰ 八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業、pp.1-2
- 1996b、「8. 竹渕遺跡(95-179)の調査」：『同上』、pp.33-34
- 八尾市文化財調査研究会1983a、「跡部遺跡(春日町1丁目57番地)」：『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告2、pp.140-155
- 1983b、「植松南遺跡(永畑町2丁目)」：『同上』、pp.40-61
- 1983c、「木の本遺跡発掘調査概要報告」：『同上』、pp.63-108
- 1983d、「八尾南遺跡(西木の本4丁目11番地)」：『同上』、pp.109-126
- 1984、『木の本遺跡—八尾空港整備事業に伴う発掘調査—』(財)八尾市文化財調査研究会報告4

- 1985a、「2 八尾南遺跡(第3次調査)」:『昭和59年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告7、pp.9-10
- 1985b、「II 八尾南遺跡発掘調査概要報告」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和59年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告6、pp.17-89
- 1988、「20 亀井遺跡(1次調査)」:『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25、pp.147-150
- 1989a、「19 跡部遺跡(第4次調査)」:『同上』、pp.136-144
- 1989b、『亀井遺跡一南亀井町4丁目41-1の調査一』(財)八尾市文化財調査研究会報告19
- 1989c、「II 竹渕遺跡(1次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告23、pp.13-52
- 1990、「23. 渋川廃寺(SK90-1)」:『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28、pp.86-88
- 1991a、『跡部遺跡発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告31
- 1991b、「VI 木の本遺跡(第4次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告32、pp.29-36
- 1991c、「I 久宝寺遺跡(第5次調査)」:『同上』、pp.1-7
- 1991d、「II 久宝寺遺跡(第7次調査)」:『同上』、pp.9-12
- 1992a、「13. 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」:『平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.23-24
- 1992b、「II 久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34、pp.5-13
- 1992c、「XIII 跡部遺跡第(第6次調査)」:『同上』、pp.131-141
- 1992d、「30. 太子堂遺跡第3次調査(TS91-3)」:『平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.42
- 1993a、「I 跡部遺跡第7次調査(AT92-7)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39、pp.1-6
- 1993b、「II 跡部遺跡第8次調査(AT92-8)」:『同上』、pp.9-20
- 1993c、「XV 竹渕遺跡(第3次調査)」:『同上』、pp.179-190
- 1993d、「II 久宝寺遺跡(第1次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37、pp.41-152
- 1993e、「I 第1次調査(TS83-1)」:『太子堂遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告36、pp.1-64
- 1993f、「30. 八尾南遺跡第18次調査(YS92-18)」:『平成4年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.40-42
- 1994a、「I 久宝寺遺跡(第4次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41、pp.1-22
- 1994b、「VI 八尾南遺跡(第7次調査)」:『同上』、pp.115-177
- 1994c、「II 八尾南遺跡(第10次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化

- 財調査研究会報告40、pp.83-108
- 1994d、「八尾南遺跡第19次調査(YS93-19)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告43、pp.98-99
- 1995a、「3. 跡部遺跡第18次調査(AT94-18)」:『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.14-15
- 1995b、「XVI 植松遺跡(第1次調査)」:『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39、pp.195-201
- 1995c、「I 八尾南遺跡(第8次調査)」:『八尾南遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告47、pp.1-130
- 1995d、「II 八尾南遺跡(第12次調査)」:『同上』、pp.131-144
- 1995e、「II 八尾南遺跡(第17次調査)」:『同上』、pp.145-186
- 1996a、「2. 跡部遺跡第12次調査(AT93-12)」:『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』、pp.12-14
- 1996b、「I 跡部遺跡(第19次調査)」:『(財)八尾市文化財調査研究会報告53』、pp.1-5
- 1996c、「III 跡部遺跡第21次調査(AT95-21)」:『同上』、pp.19-24
- 1996d、「II 竹淵遺跡(第4次調査)」:『(財)八尾市文化財調査研究会報告54』、pp.15-22
- 1996e、「III 竹淵遺跡(第5次調査)」:『同上』、pp.25-37
- 1996f、「VII 八尾南遺跡第22次調査(YS95-22)」:『同上』、pp.87-99
- 八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡』
- 弥永貞三1972、「古代の積炭について」:『続日本古代史論集』下巻、pp.353-467
- 柳本照男1987、「総括」:『摂津豊中大塚古墳』、pp.179-183
- 家根祥多1982、「縄文土器」:大阪市文化財協会編『長原遺跡調査報告』II、pp.142-157
- 山田昌久1989、「日本における古墳時代牛馬耕開始再論」:『歴史人類』17 筑波大学歴史・人類学系、pp.202-175
- 若林邦彦1997、「弥生～古墳時代前期の久宝寺遺跡」:大阪の弥生遺跡検討会編『大阪の弥生遺跡I』、pp.13-22
- 和歌山県文化財センター1995、『西庄遺跡発掘調査』I
- 渡辺誠1972、「自然遺物」:豊中市教育委員会編『勝部遺跡』、pp.121-123
- Driesch,A.von den. 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. 136 ps.Harvard:Peabody Museum.
- Sisson,S.1953 The Anatomy of the Domestic Animals(Revised by J.D.Grossman). 4th Edition. W.B.Saunders Co. Philadelphia and London 949ps.

あ　と　が　き

17年間継続している長吉瓜破地区に後発して長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査が開始され、その報告書も、本書をもって第2冊目となった。本事業の対象地域である長原遺跡東北地区で、最初に発掘調査が行われたのは1979年に遡る。その後の15年間で約20件の発掘調査が当該地区で行われ、初期須恵器・韓式系土器や、飛鳥時代の土器が多く出土する地点の存在が知られてきた。しかし、何分にもほとんどが小規模開発に伴う発掘調査であったため、遺構や地層との関係については今ひとつ不明瞭で、隔靴搔痒の感があった。

しかし、1995年度(前年度)に本事業が開始されて本格的な発掘調査が毎年継続的に行われるようになり、本書で報告した2年目にも3件の調査を行った。その結果、資料の蓄積はまだ十分ではないものの、この地区の地形や層序、集落などについてその実態がおぼろげながらも見えはじめてきており、そうした成果の一端は第IV章に示している。内容としては、弥生時代末期の水田・古墳時代後期後半の集落や、RK7A層とした氾濫成堆積層など、従来の長原遺跡の発掘調査ではあまりみられなかった事象が多く、これらは、むしろ北側の八尾市域に展開する諸遺跡との関連で捉えた方がより理解し易いのかかもしれない。

いずれにしても、当該地区における発掘は今後も継続され、本書で結論を保留したいくつかの疑問点も、いずれは自ずと氷解するであろう。大切なことは、この地区の調査で得られる成果・問題点を独り長原遺跡内部のものとし、府下諸遺跡と比較し、日本古代史の中に位置付ける試みを怠らないことであろう。

永島 暉臣 慎

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | | | | |
|---|---------|--|------------|--|
| C | C-I期 | 15, 19, 30 | 伊万里系 | 15 |
| | C-II期 | 15, 19, 30~32, 35, 62 | う ウシ | 25, 45~47, 107, 108, 110, 111 |
| | C-III期 | 15, 19 | ウマ | 107, 108, 111, 115, 117, 119 |
| | C-IV期 | 15, 19, 35, 66 | | |
| M | MT15型式 | 21, 79, 84, 86, 87, 90, 95, 100 | か 河内I-2様式 | 21 |
| | MT85型式 | 90 | 河内I-3・4様式 | 21, 22 |
| T | TK10型式 | 15, 21, 37, 62, 79, 87, 88, 90, 93, 95, 98, 111 | 河内V-3様式 | 21 |
| | TK23型式 | 21, 25, 40, 83, 90, 111 | 河内VI-2様式 | 24 |
| | TK43型式 | 37, 44, 47, 51, 54, 56, 87, 90, 93~95, 108, 122 | 河内型庄内式 | 21, 40 |
| | TK46型式 | 56 | 韓式系土器 | 5, 83, 90~92, 102~104 |
| | TK47型式 | 15, 21, 40, 83, 90 | 漢神信仰 | 115, 117, 118 |
| | TK73型式 | 90, 98 | き 北白川上層II式 | 22 |
| | TK208型式 | 90 | 北白川上層3期 | 16 |
| | TK209型式 | 15, 26, 37, 51, 53, 56, 88, 89, 93, 95, 96 | 北白川上層III式 | 22, 23 |
| | TK216型式 | 90 | 北白川上層式 | 22 |
| | TK217型式 | 15, 27, 28, 37, 51~54, 56, 63, 75, 98, 100 | 畿内第I様式 | 16 |
| あ | 青木V期 | 21 | 畿内第II様式 | 16 |
| | 青木VI期 | 21 | 畿内第IV様式 | 16 |
| | 飛鳥I | 21, 53, 56, 90, 92, 94, 96, 98, 104, 108 | 畿内第V様式 | 16 |
| | 飛鳥II | 15, 21, 25, 28, 51, 52, 53, 56, 57, 63, 68, 69, 72, 88, 90, 94, 96 | け 結晶片岩製 | 24 |
| | 飛鳥III | 37, 52, 69, 72, 90, 92, 94, 96 | こ 後背湿地 | 86, 87, 101, 102, 104, 106, 122, 123 |
| | 飛鳥IV | 37, 55, 90, 94, 98 | 小若江北式 | 40 |
| | 飛鳥V | 52, 55, 68, 74 | さ 柵(さく) | 47, 92, 94, 102 |
| い | 生駒西麓産 | 21, 22, 40, 49, 52, 72 | 里木II式 | 16 |
| | 石庖丁 | 23, 24 | 山陰系 | 21 |
| | 井戸 | 7, 10, 17, 28, 30, 90~96, 114, 115, 117, 123 | し 柵(しがらみ) | 3, 10, 106 |
| | | | 自然堤防 | 4, 81~84, 86~90, 92, 94~96, 100~106, 121~123, 126, 127 |
| | | | 鴟尾 | 95 |
| | | | 車輪文 | 68, 72 |
| | | | 庄内式 | 24, 40, 84 |
| | | | す 鋤溝 | 17, 32, 34, 76, 127 |
| | | | せ 製塩土器 | 37, 40, 41, 54, 58, 72, 74, 76, 90, 91 |

石刃技法	16	平安時代Ⅱ期	63, 66, 68, 72, 74~76, 124, 126
瀬戸内技法	16	平安時代Ⅲ期	15, 19, 21, 29, 35, 60, 63, 66, 68, 72, 75, 107, 121, 124~127
磚仏	94	平安時代Ⅳ期	19, 30~32, 35, 60, 61, 63, 124, 126
た 竪穴式住居	93, 95, 106	平城宮SK820	37
ち 直線刃半月形	24	平城宮土器Ⅰ	37
と 東播系	66, 77	平城宮土器Ⅱ	37, 68, 72
土器埋納遺構	17, 21, 28, 32, 65, 75, 92, 100, 124, 126	平城宮土器Ⅲ	37
土錘	21, 57, 60, 77	平城宮土器Ⅴ	35, 37, 55, 56, 59, 72
土手	3, 96, 98, 100, 106	平城宮土器Ⅵ	35, 37, 55, 59, 72
な 中津式	23	ほ 方形周溝墓	5, 83, 115
長原式土器	16	掘立柱建物	3, 10, 17, 25, 29, 34, 44, 54, 55, 90~95, 102, 106, 123
に 西ノ辻E・D式	21	ま 丸底Ⅰ式	41
日本靈異記	116	む 無堤式	68
は 白鳳様式	94		
ひ 備讃瀬戸系(産)	41, 72, 74		
ふ 船橋O-Ⅰ型式	15		
船橋O-Ⅱ型式	15		
船元Ⅲ式	16, 22		
布留式	16, 24, 40, 86, 89		
へ 平安時代Ⅰ期	15, 35, 59, 62, 68, 70, 74~76, 124, 126, 127		

〈地名・遺構名など〉

- あ (鳥取県)青木遺跡 …… 21
 飛鳥池 …… 53
 跡部遺跡 …… 4, 83, 84, 86, 87, 89,
 90, 94~96, 122
 吾彦火山灰層 …… 14
 う 植松遺跡 …… 4, 83, 84, 86, 89, 95
 馬池谷 …… 79, 80, 92, 93, 96, 98,
 102
 瓜破遺跡 …… 4, 80, 93
 瓜破台地 …… 3, 4, 79, 87, 92, 93,
 96, 104, 106
 瓜破廃寺遺跡 …… 94
 お 大県遺跡 …… 105
 か 亀井遺跡 …… 4, 83, 84, 87, 101, 104,
 122, 123
 亀井北遺跡 …… 89, 101, 104
 亀井古墳 …… 106
 亀井自然堤防 …… 81, 83, 86, 87, 89, 95,
 96, 101, 103~106, 123
 亀井ポンプ場 …… 86, 87
 河内台地 …… 3
 河内平野 …… 119, 121
 川原寺SD02 …… 53
 き 木の本遺跡 …… 4, 81, 90, 100, 127
 久宝寺遺跡 …… 4, 86, 87, 89, 90, 96,
 101, 104
 久宝寺北遺跡 …… 86
 久宝寺自然堤防 …… 81, 86, 87, 89, 96, 101,
 103, 104, 106
 久宝寺南遺跡 …… 86, 106
 喜連東遺跡 …… 4, 94
 こ 古川辺川 …… 81
 さ 阪手火山灰層 …… 13
 桜塚古墳群 …… 105
 し 洪川廃寺遺跡 …… 4, 95
 城山1~6号墳 …… 83
 城山遺跡 …… 87~89, 100, 101, 126,
 127
 た 太子堂遺跡 …… 4, 83, 89, 95, 96
 大正川 …… 3
 竹渕遺跡 …… 4, 83, 86, 90, 94, 95,
 106, 122
 ち 沖積平野 …… 3, 4, 7, 79~82, 86,
 90, 92~94, 98, 101,
 102, 103, 105, 106,
 121, 123
 つ 塚ノ本古墳 …… 82
 て 出戸自然堤防 …… 81, 82, 83, 86, 87, 90,
 92, 100~103, 105
 な 長瀬川 …… 4, 83, 86, 89, 95
 長原遺跡 …… 1, 3, 4, 5, 7, 13,
 14, 16, 21, 37, 79~83,
 86, 87, 90~94, 98,
 100, 101, 103, 104,
 111, 115, 117~119,
 121~123, 125, 126
 長原古墳群 …… 103
 に 西川辺川 …… 81
 西庄遺跡 …… 105
 ひ 東川辺川 …… 81
 平野川 …… 4, 83
 ふ 古市大溝 …… 104
 へ 平城宮長屋王邸宅跡 …… 44
 平城京左京5条6坊
 15・16坪跡SE01 …… 63
 も 百舌鳥・古市古墳群 …… 105
 や 八尾南遺跡 …… 4, 81, 82, 90, 91, 98,
 100
 薬師寺西僧房床面 …… 63
 大和川 …… 3
 り (JR)竜華操車場 …… 86, 89, 96
 竜華地区 …… 87
 ろ 六反自然堤防 …… 81, 83, 86~89, 94, 95,
 101, 103, 104, 106, 121
 ~123, 126, 127
 六反一出戸低地 …… 83, 87, 100, 101, 103,
 105, 121, 123

**Archaeological Reports
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of Excavations
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 1996

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent
archaeological features in this text:

SB: Building

SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Posthole

SX: Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavation of the northeastern sector of the Nagahara Site	1
S.1 Progress and location of current research area	1
1) Details of the excavation background	1
2) Environmental setting and background of the site	3
S.2 Outline and progress of the research	6
1) Eastern investigation area (NG96-9)	6
2) Western investigation area (NG96-40 & NG96-66)	6
Chapter II The standard stratigraphy of the Nagahara site in the northeastern sector	7
S.1 Standard Stratigraphy of the Nagahara Site	7
1) Upper Alluvium I	7
2) Upper Alluvium II	10
3) Upper Alluvium III	12
4) Lower Alluvium	13
5) Lower Terrace Formation	13
6) Middle Terrace Formation	14
S.2 Dating of each layer	15
Chapter III Results of the investigation	17
S.1 Eastern sector (NG96-9)	17
1) Strata and finds	17
2) Features and finds of the Yayoi Period	23
3) Features and finds of the Kofun Period	24
4) Features and finds of the Asuka Period	25
5) Features and finds of the Heian Period	28
6) Features of the Kamakura Period and later	32
S.2 Western investigation area, north (NG96-66)	34
1) Strata and finds	34
2) Features and finds of the Kofun to Nara Period	40
3) Features and finds of the Heian Period	58
4) Features and finds of the Edo Period and later	64
S.3 Western investigation area, south (NG96-40)	65
1) Strata and finds	65
2) Features and finds of the Asuka Period	69
3) Features and finds of the Heian Period	70
4) Features and finds of the Kamakura Period and later	76

Chapter IV Examination of the features and finds	79
S.1 Changes in the geographical and environmental features of the Nagahara site from between the late Middle Kofun and Asuka Periods and the relocation of the settlement	79
1) Introduction	79
2) Geographical feature of the Middle to early-Late Kofun Periods	79
3) Geological features of the Late Kofun and Asuka Periods	87
4) Changes to the Kofun to Asuka Period settlement	90
5) Paddy field features of the Middle Kofun to Asuka Period	96
6) Chronology and characteristics of the settlement	102
7) Political background of the changes to land use	105
S.2 Investigation results of the examination of animal remains	107
1) Outline of the materials	107
2) Description of the materials	107
3) Conclusion	111
4) Some considerations on the cattle bones in SP6001	111
Chapter V Summary	121
S.1 The basic stratigraphy of the northeastern sector of the Nagahara site from the Jomon to Asuka Period	121
1) The Standard Stratigraphy of the Nagahara Site in the northeastern sector	121
2) Jomon Period	121
3) Yayoi Period	122
4) Kofun and Asuka Periods	122
S.2 The northeastern sector of the Nagahara site after the Nara Period	123
1) Nara Period	123
2) Heian Period and later	123
Bibliography	128
Postscript	
Index	
English Summary	

ENGLISH SUMMARY

Outline and progress of the research

This volume details the results of excavation undertaken in the northeastern sector of the Nagahara site in 1996 prior to land rezoning in Eastern Nagayoshi. Three excavations, in the east, northwest and southwest of this sector, were carried out between May 1996 and March 1997, totaling approximately 1500 square metres.

The Nagahara Standard Stratigraphy in the northeastern sector

Until recently, excavations were conducted mainly on the Uriwari terrace. By investigating the northeastern sector, there has been the chance to expand investigation onto the Nagahara alluvial plain. Due to differing environmental conditions, the strata of this area differ from the Nagahara standard stratigraphy. As a result of excavations carried out around the northeastern sector in 1997, the Nagahara Standard Stratigraphy: Northeastern Sector was proposed to explain the differences. The most significant difference is the existence of a layer of flood deposition soil (RK7A), which accumulated between the Middle Kofun and Asuka Periods. This layer can be subdivided into eight distinct layers, and indicates extensive flooding in this area at that time.

The result of the investigation

Yayoi Period

A small number of Late Yayoi Period finds were excavated in the eastern investigation area from a slightly elevated mound formed by Jomon Period flooding. Previous excavation showed evidence of a possible settlement on this mound. A Late Yayoi Period paddy field was also uncovered, this being the first such example in this area.

Kofun Period - Nara Period

Three excavations were carried out in a slightly elevated area formed from a natural levee created by large-scale flooding during the Late Kofun Period. Features indicative of a settlement, including remains of *hottatebashira* and pits and buried soil, were detected in the eastern and northwestern investigation areas. The features dated to the Late Kofun to Nara Period. One feature of note, post-hole SP6001, in which cattle bones were found buried, is discussed below.

Heian Period

Heian Period features, including remains of *hottatebashira*, wells and interred pottery were found in the eastern and southwestern investigation areas. Results this year from the investigation area and the mansion site are in accordance with those of the previous excavation. A Heian Period road and the remains of a ditch were found in the northwestern investigation area. The ditch can be interpreted as either an irrigation canal or as a land division channel related to the mansion site.

Kamakura Period and later

Features from between the Kamakura to Edo Periods, including spade marks and mound farming, all indicate that this area was used exclusively for agricultural purpose from the Kamakura Period onwards.

The examination of the features and finds

Over a 3km range around the Nagahara site, research has been under way to reconstruct the ancient environmental conditions of the Middle Kofun to Asuka Period. As a result, four natural levees have been identified on the Nagahara alluvial plain. Settlement remains have been unearthed from the Uriwari terrace as well as each of the levees, in addition evidence of rice cultivation has been found in the marshy land that lay behind the levees. The settlement and accompanying cemetery seem to have been limited to the terrace during the Kofun Period, however irrigation channels appear to have been dug to enlarge the area of arable land in the Asuka Period. The development of the settlement has been divided into three stages and its political rise and decline seems to be linked to the widespread flooding that this area experienced. The occurrence of cattle bones in a pillar hole is unprecedented within Japan. The bones appear to have been interred within the hole created by the removal of the pillar during reconstruction work. This incident may have been influenced by religious practices introduced from China, in which the flesh of slaughtered bulls was offered as sacrifice.

Further reading

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1992 *Archaeological Reports of the Nagahara sites* Vols. I-VI, Osaka. (In Japanese)

Osaka City Cultural Properties Association

1978-1997 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XI, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

1998 *Archaeological Report of the Eastan sector of Nagahara site* Vol. I, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ながはらいせきとうぶちくはくつちょうさほうこく2								
書 名	長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ								
副 書 名	1996年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書								
巻 次									
シ リ ー ズ 名									
シリーズ番号									
編 著 者 名	高橋工・京嶋覚・久保和士・大庭重信・絹川一徳・杉本厚典・Robert Condon・永島暉臣愼								
編 集 機 関	財団法人 大阪市文化財協会								
所 在 地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833								
発 行 年 月 日	西暦 1999年 3 月20日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしろうたん ながよしでと 長吉六反・長吉出戸		27126	—	34° 36′ 24″	135° 34′ 49″	9次 960423～961017 40次 960805～961202 66次 961105～970331	370m ² 360m ² 720m ²	長吉東部地区 土地区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構				主な遺物		
長原遺跡	田畑 集落 集落 田畑 集落・田畑 田畑	縄文時代					縄文土器		
		弥生時代	水田				弥生土器		
		古墳時代	掘立柱建物				土師器・須恵器		
		飛鳥時代	掘立柱建物・溝・土壇				土師器・須恵器		
		奈良時代					土師器・須恵器		
		平安時代	掘立柱建物・井戸・溝・土器埋納壇				土師器・須恵器・黒色土器・瓦器		
		室町時代	島畠						

原 色 図 版



石庖丁・弥生土器・縄文土器



弥生土器



RK7A層出土の須恵器

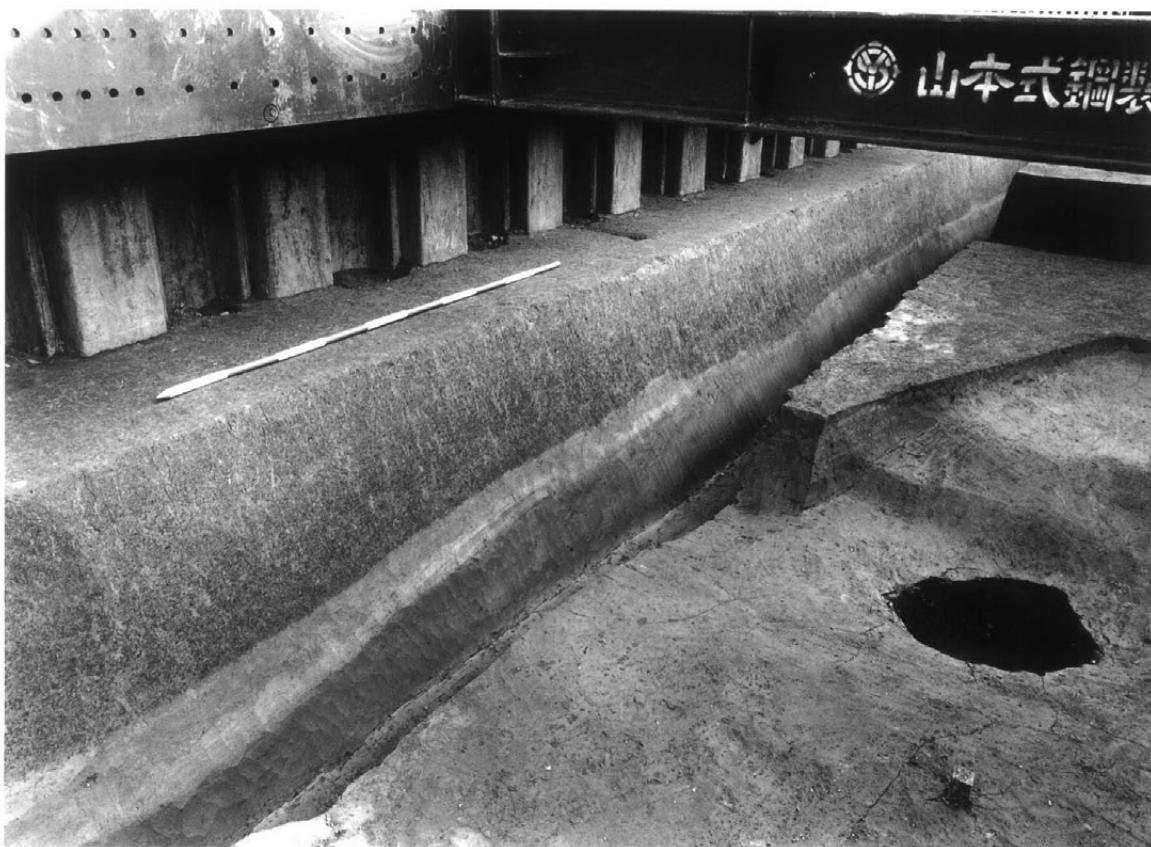


RK4B層出土の陶磁器

図 版



東調査地 東壁 (RK 2・3・4B層)



西調査地南区 東壁 (RK4C・6・7Aiii・iv層)



西調査地北区 東壁 (RK7Aiv・vi層)



西調査地北区 東壁 (RK7Aiv・vi層)



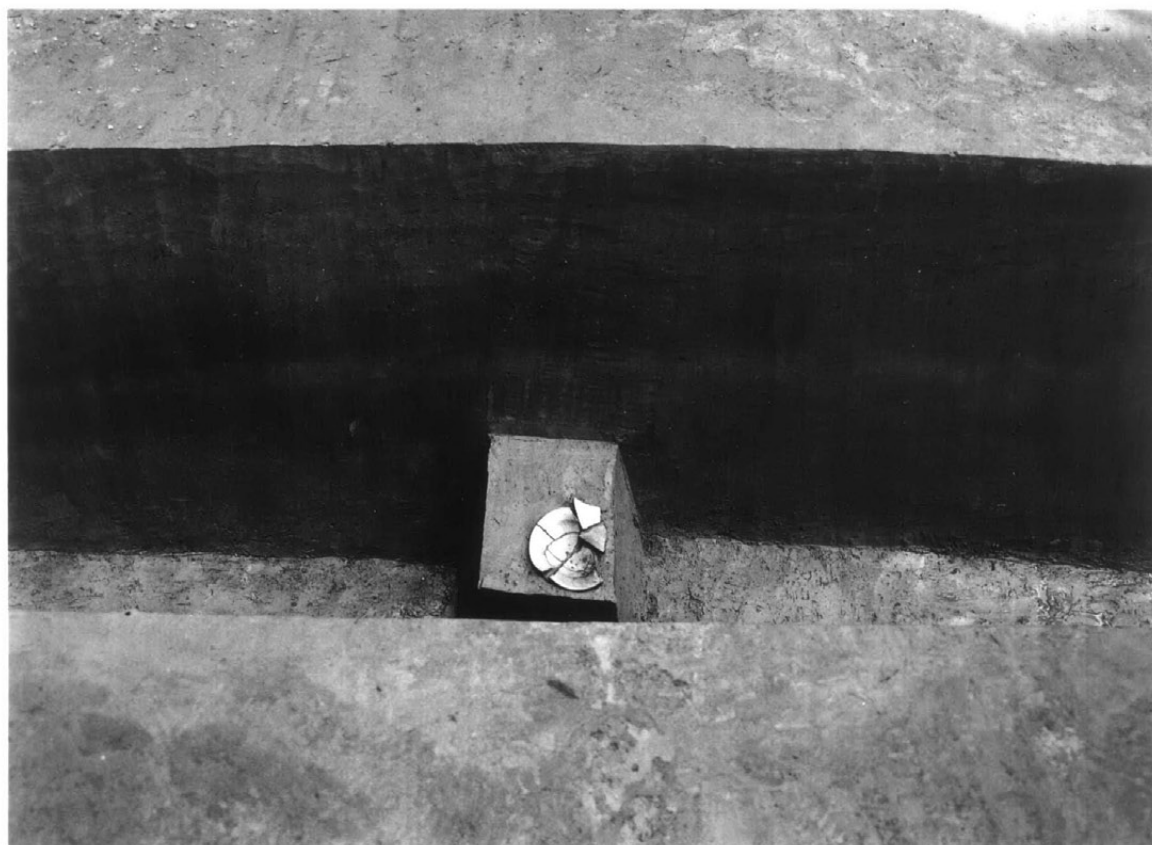
西調査地南区 東壁 (RK7Aiii・iv・vi層)



東調査地 北壁 (RK11i層)



東調査地 東壁 (RK7B~11i層)



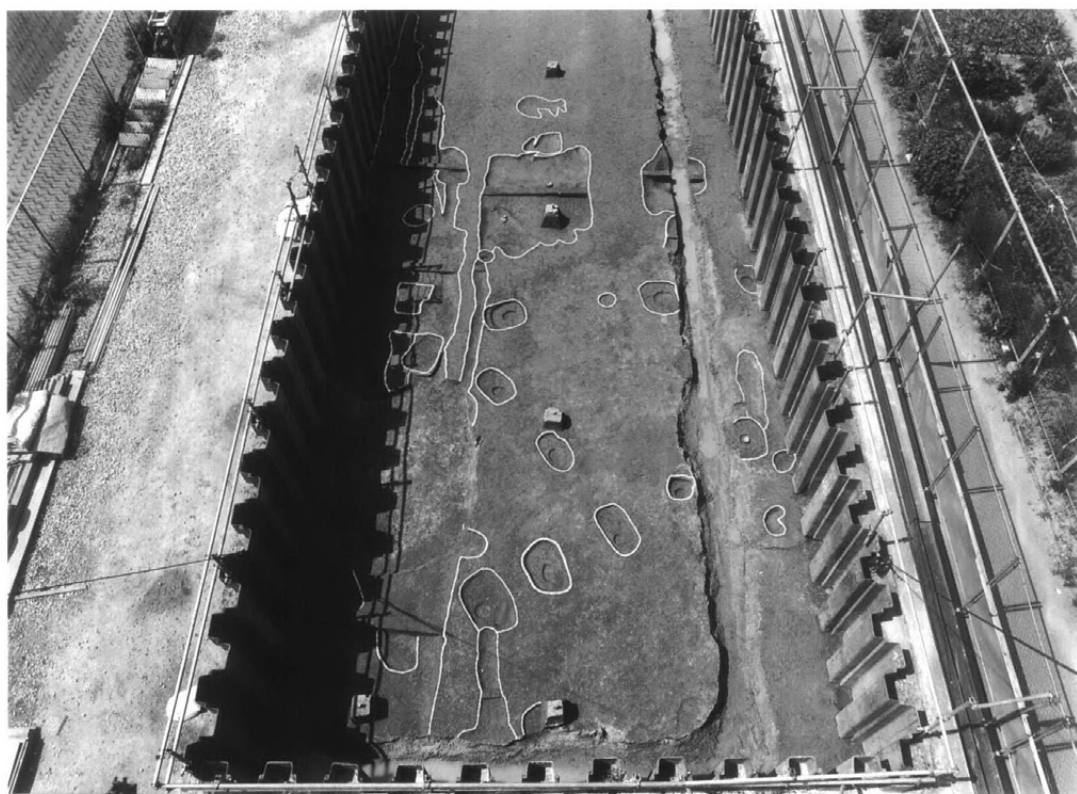
西調査地北区 東壁 (RK7A_{vi}~9A層)



RK8C'層上面検出水田（北から）



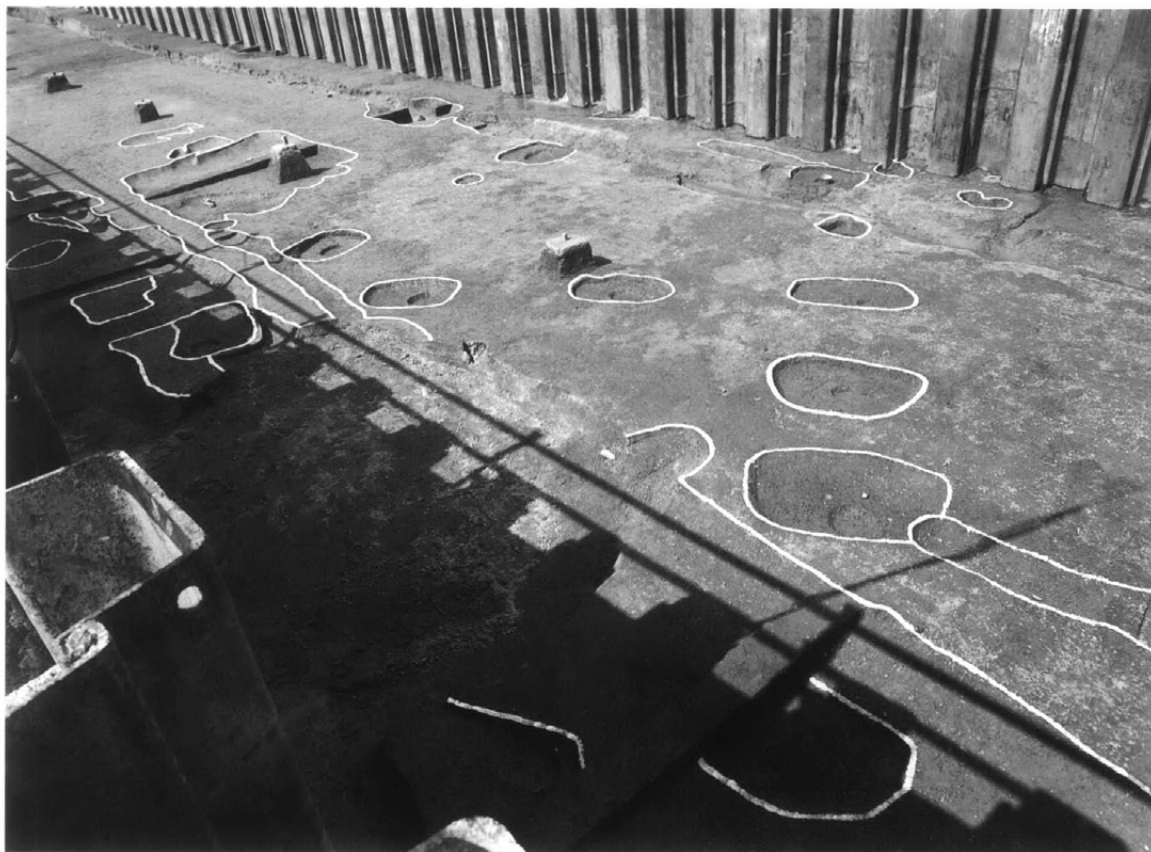
RK7Bi層上面検出踏込み群（南から）



RK4Biv層基底面
掘立柱建物など
検出状況（南から）



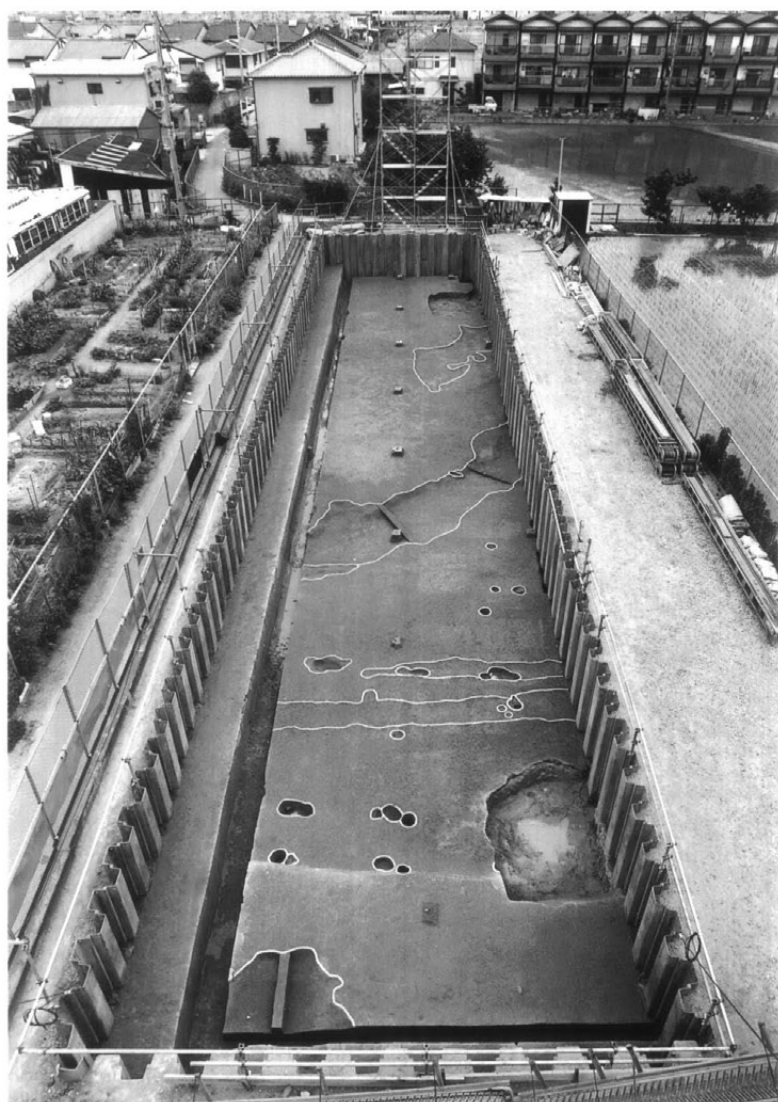
同上完掘状況（南から）



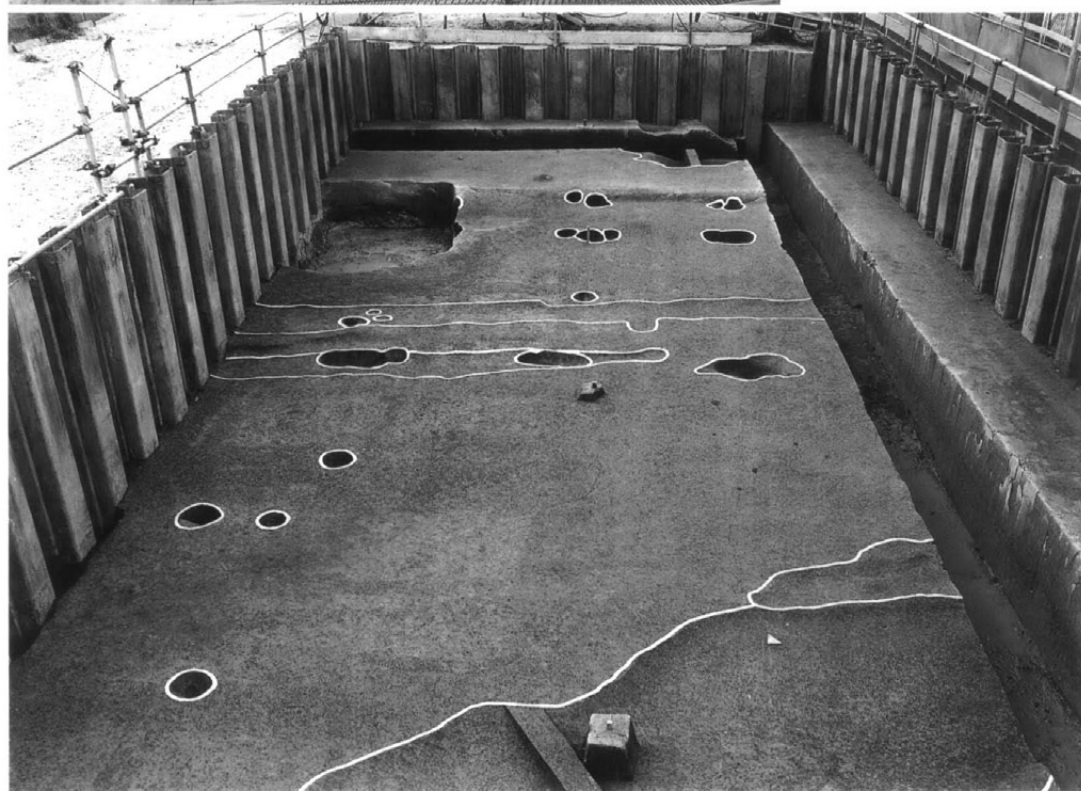
SB602検出状況（南西から）



SB603柱穴遺物出土状況（南東から）



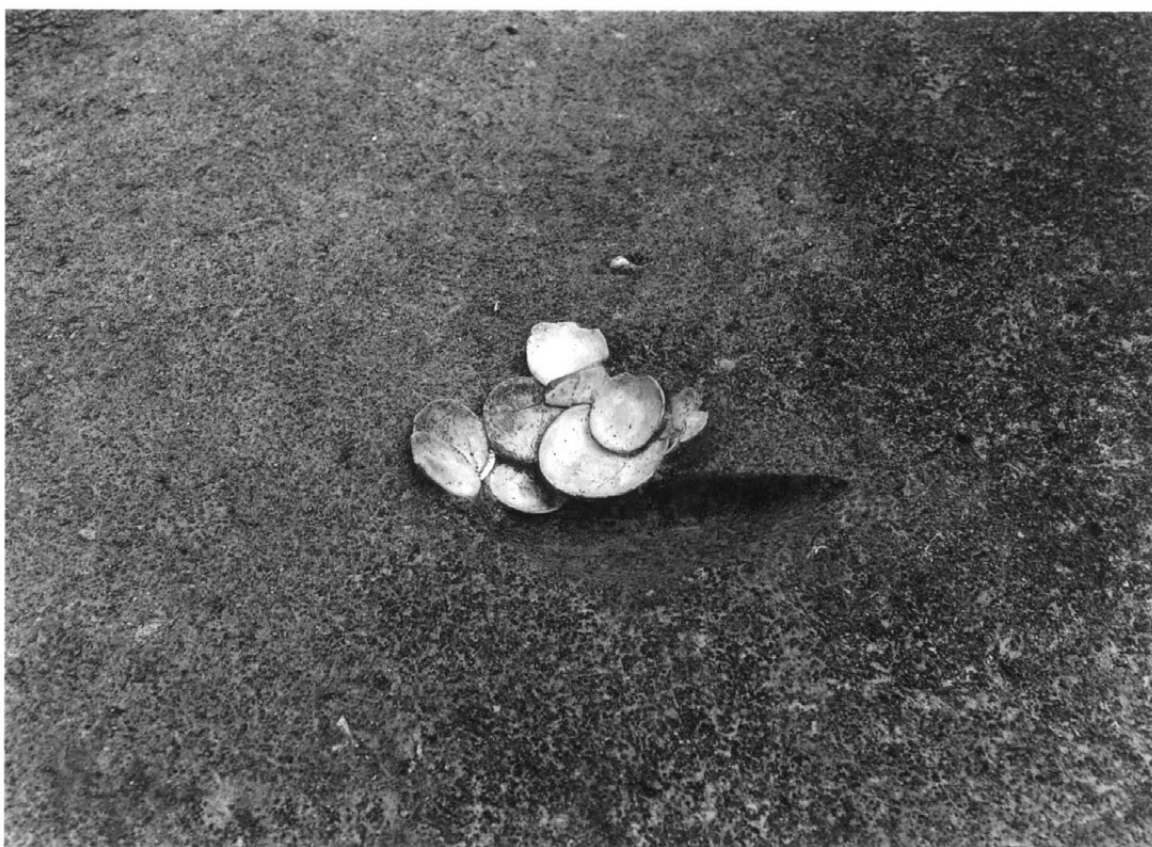
RK4Biii層基底面検出遺構
全景 (北から)



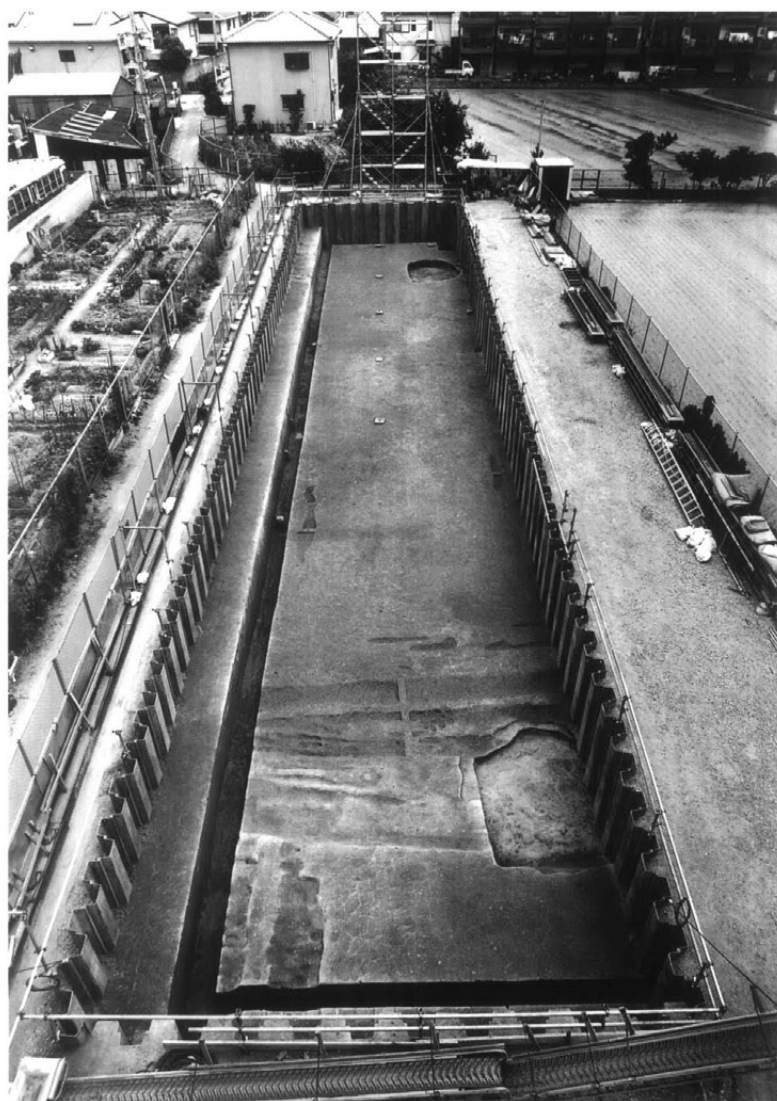
SB4B01など (南から)



SE4B01遺物出土状況（西から）



RK4Bii層基底面検出土器埋納遺構SP4B30（北から）

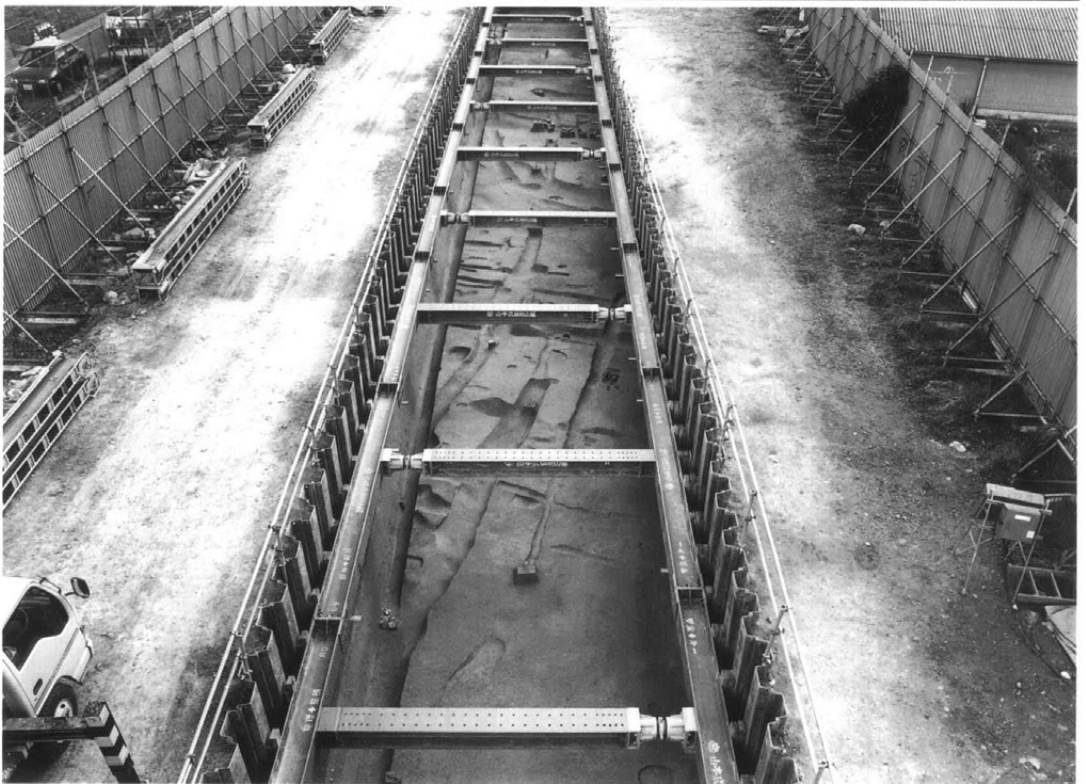


RK4Bii層下面検出遺構
全景（北から）

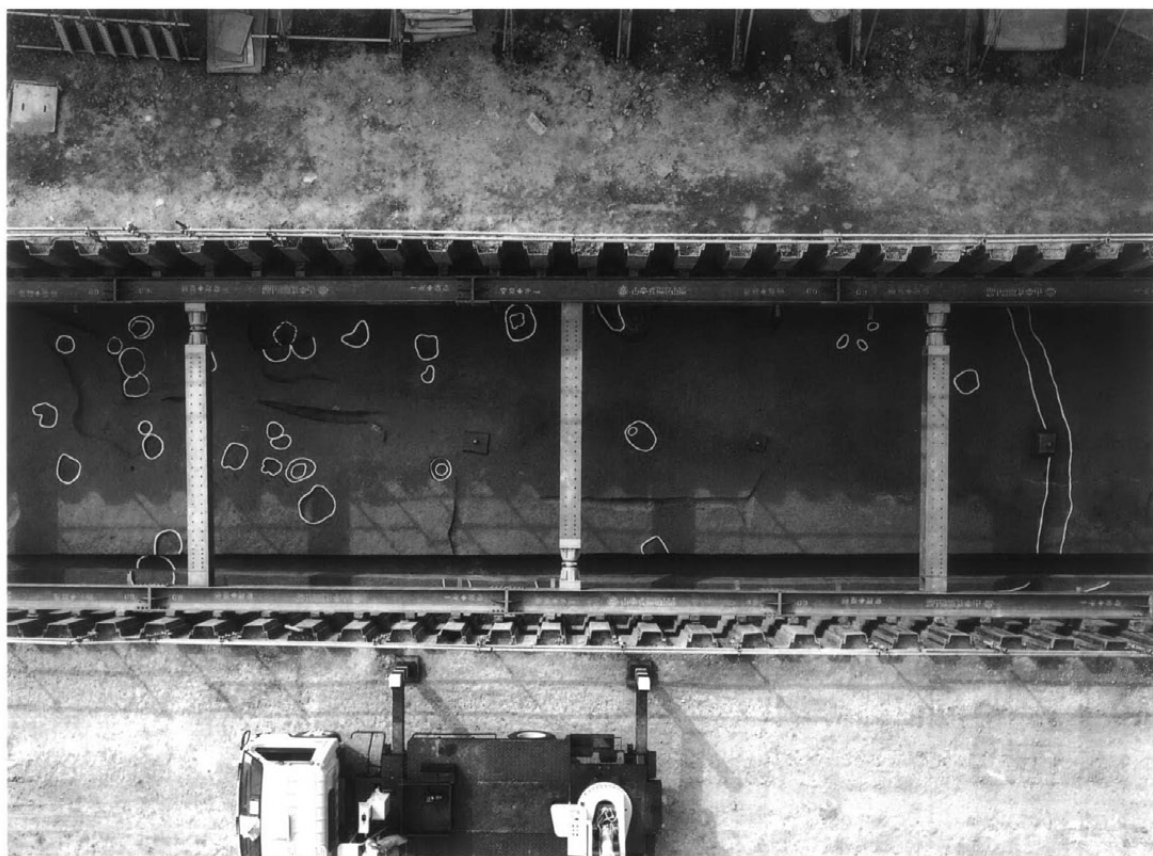


RK3iv層下面検出遺構 全景（南西から）

RK5-6層内検出遺構
全景(北から)



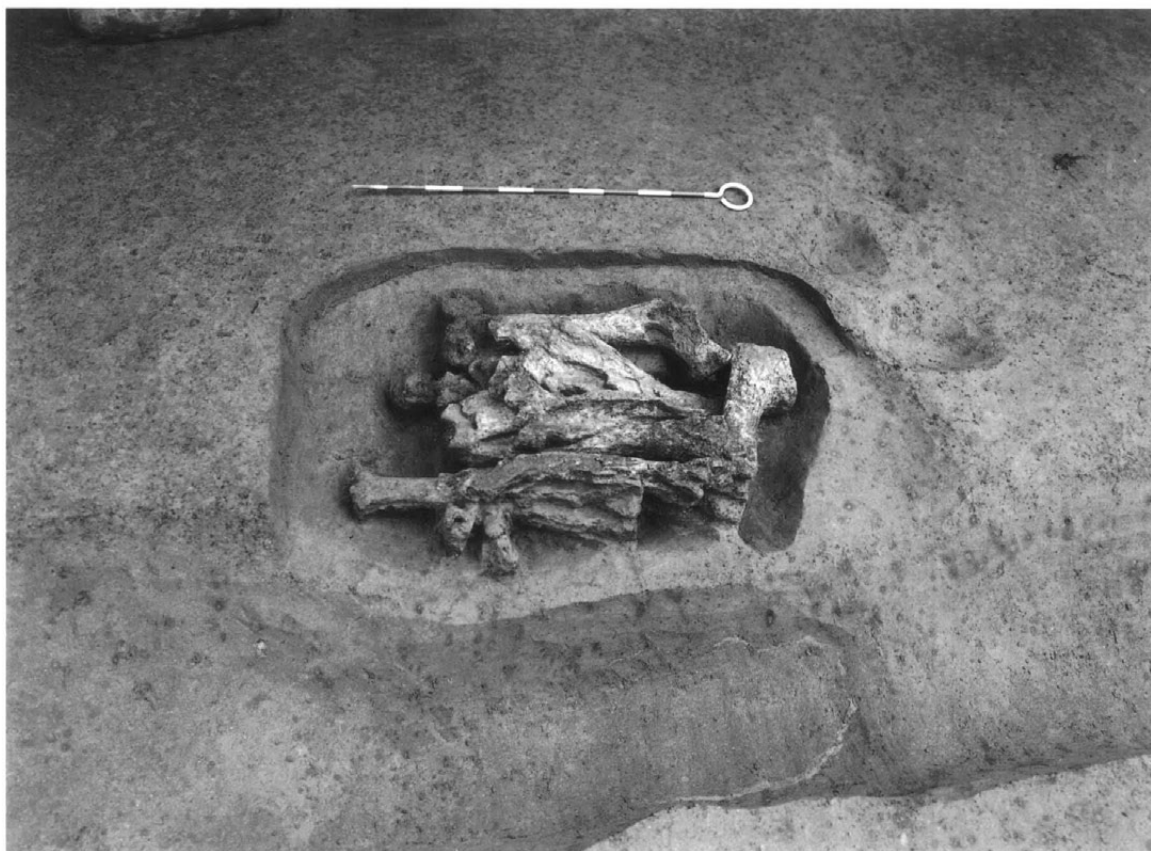
同上 近景(北から)



RK5-6層内検出遺構 近景（SB601など；上から）



同上 近景（SB603など；上から）



SP6001牛骨出土状況（東から）



SP6068断面（西から）



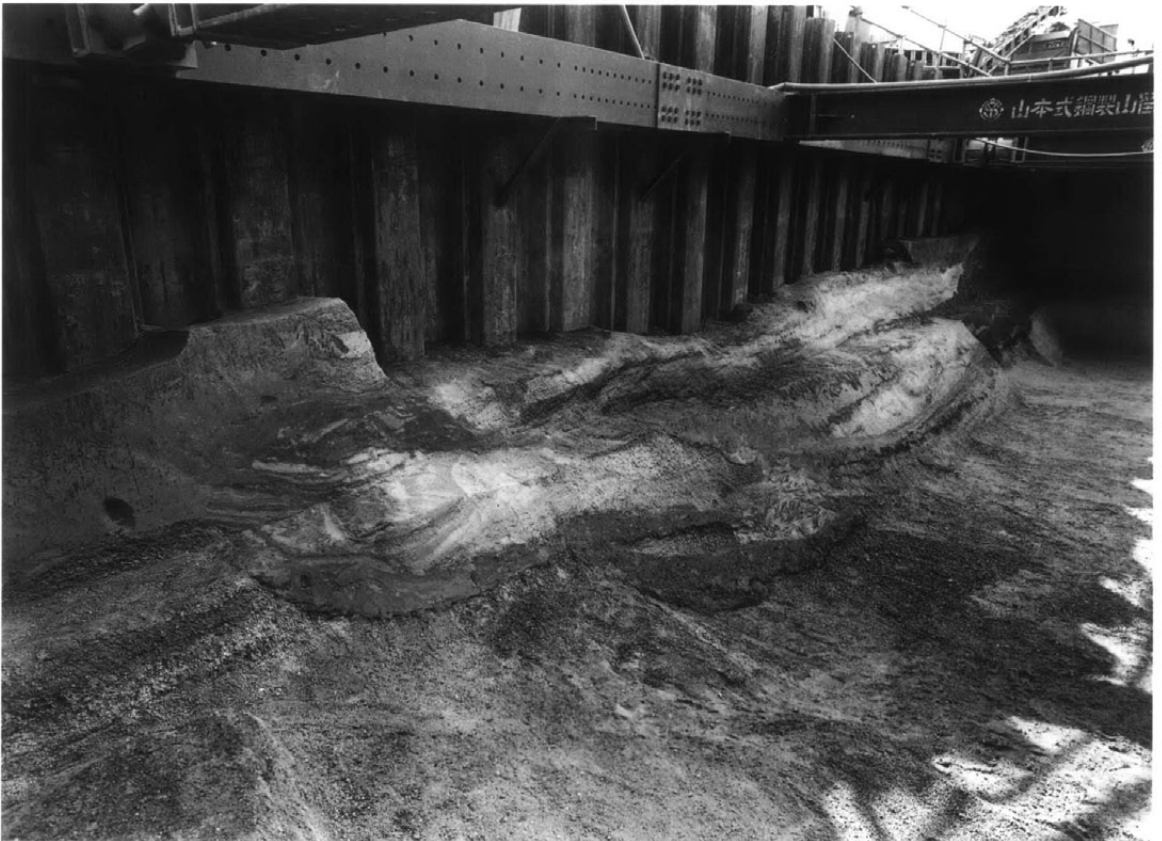
SD602遺物出土状況（西から）



SX608遺物出土状況（東から）



NR4B01内地割れ断面（南から）



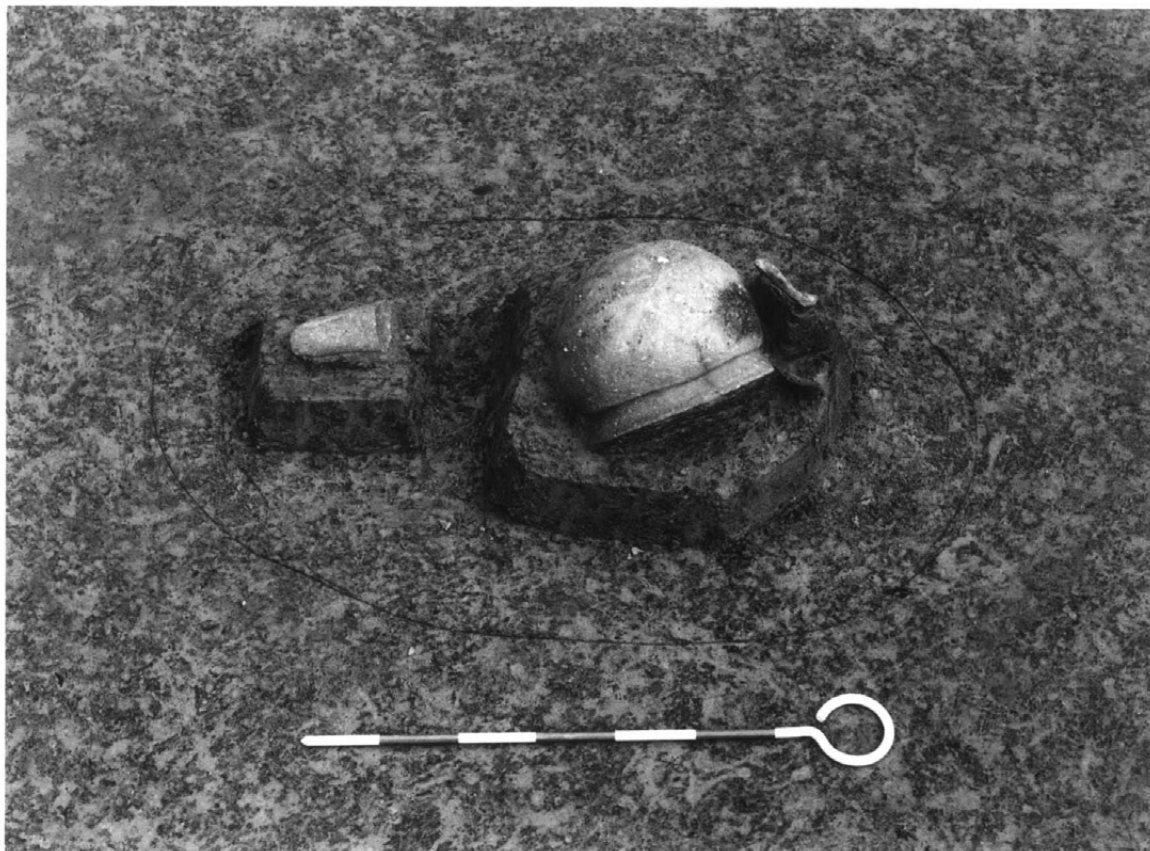
NR4B01断面（北西から）



RK 5 層基底面検出SD601・602検出状況（南から）



SD601・602（北から）



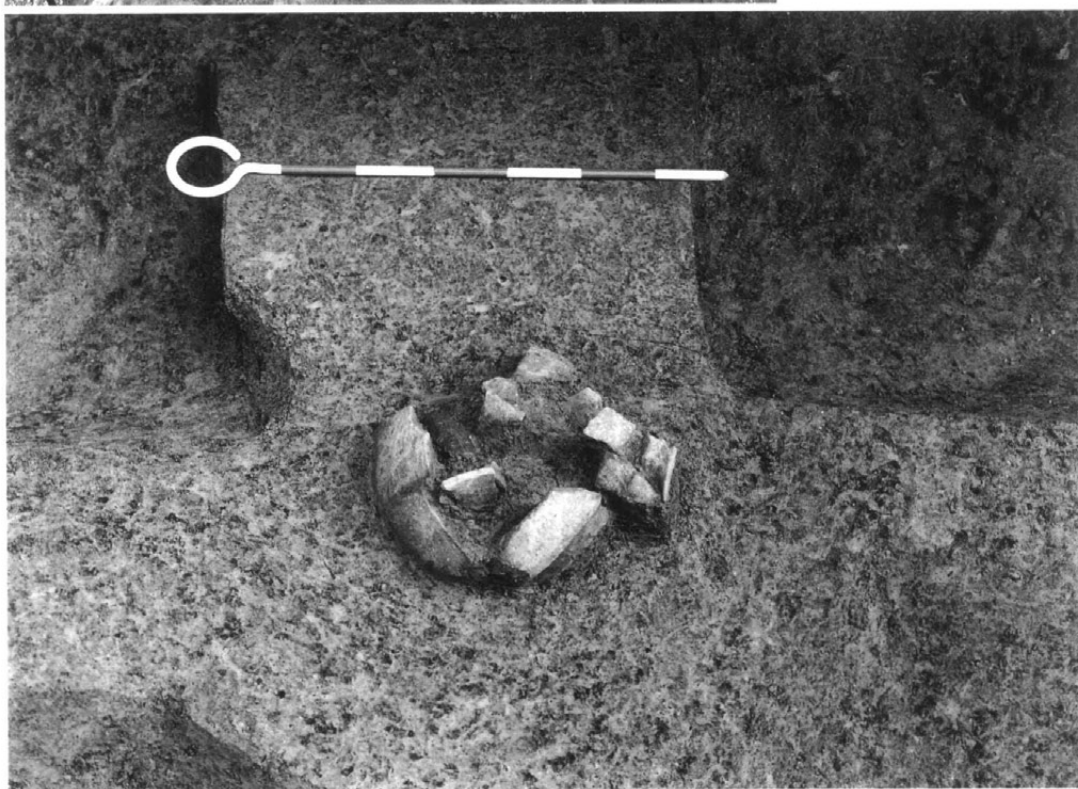
RK4Cvi層基底面検出SP4C27遺物出土状況（西から）



RK4Cvi層基底面検出SP4C28遺物出土状況（西から）



RK4Cv層下面検出遺構
全景 (南から)



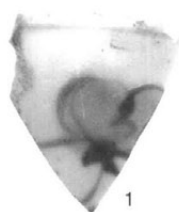
RK4Cv層下面検出SP4C16遺物出土状況 (北から)



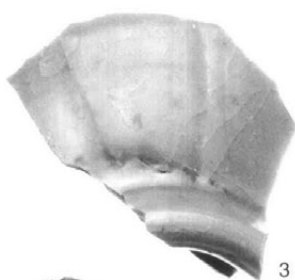
RK4Cv層下面検出
SP4C18遺物出土状況
(北から)



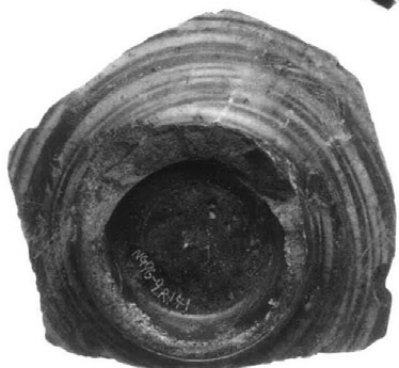
RK4Cii層下面検出遺構 全景 (北から)



1



3



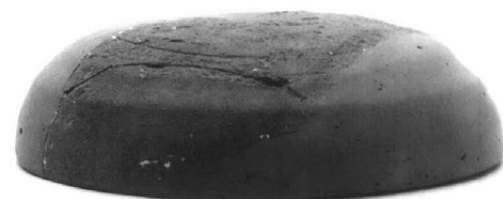
2



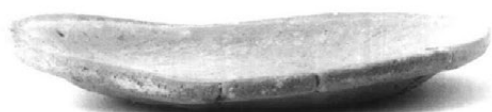
538



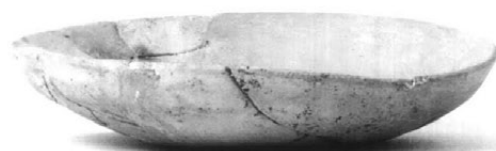
52



51



20



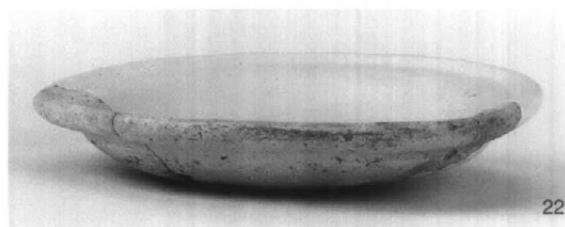
9



25



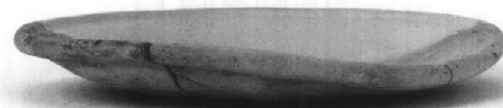
33



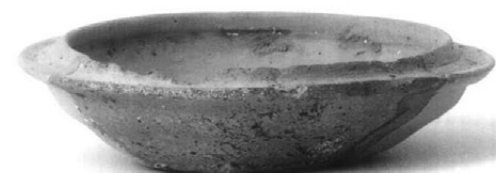
22



30



21



53



36

2層：1・2 3ii層：3 4Biii層：9・20・30・33 4Biv層：52・53
4B②層：21・22・36 4C層：25・51 4B~4C層：538



64



63



68



89



86



90



73



79



100



119



103



118



102



113



104



127



138



91



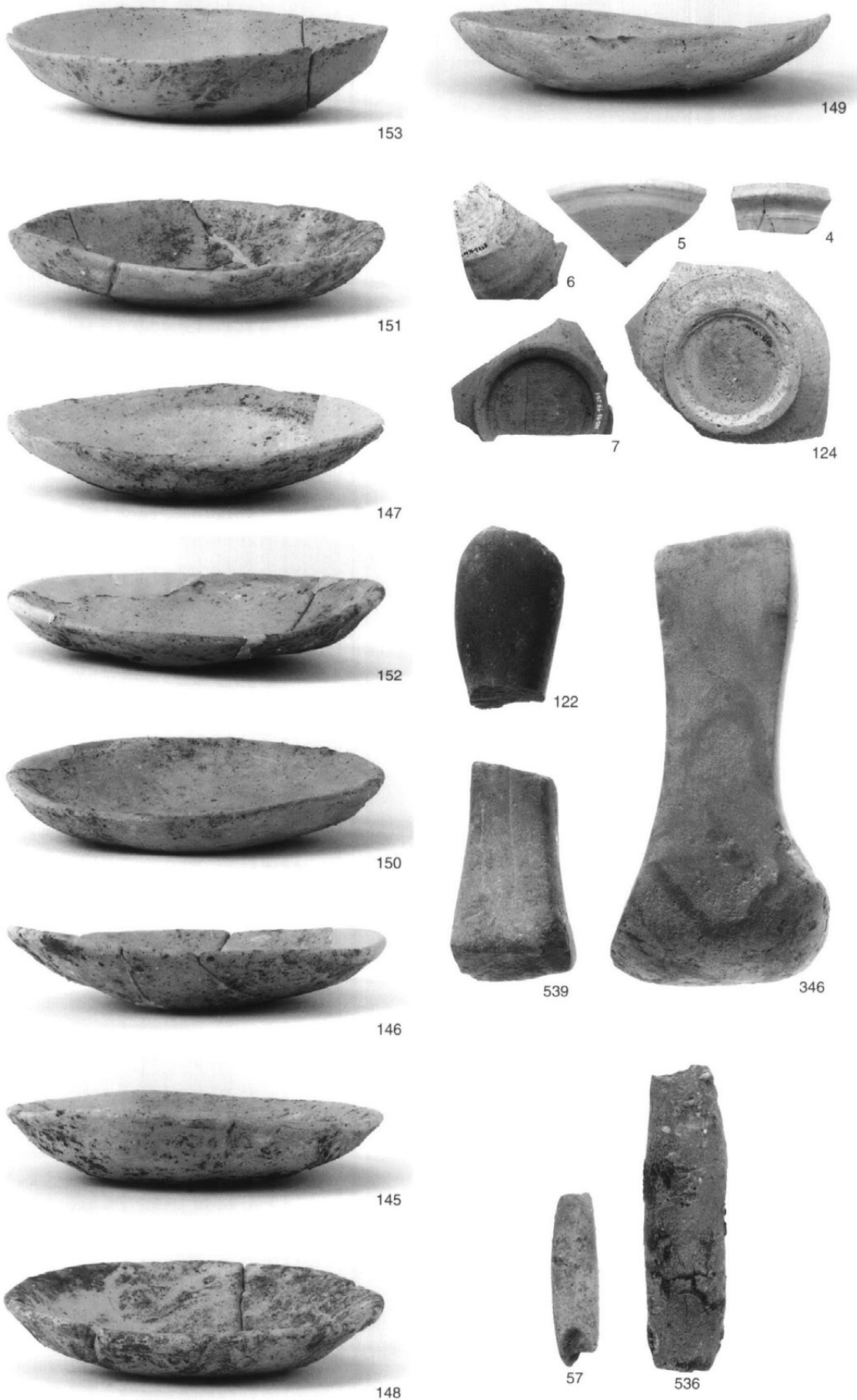
137



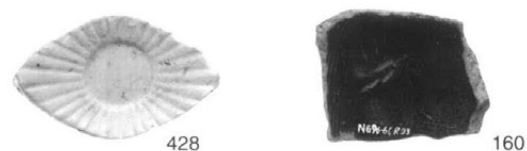
140



117



土器埋納遺構SP4B30：145～153 SX4B01：124 4C層：7・57 4Biii層：4～6・539
SD4B03：122 5層下部：346(西調査地北区) SX301：536(西調査地南区)



2～3層：156・157 2iv層：160 SD207：428 SD208：429
4C層上部：329 4C層下部：339・342 5層：323・325・330・337・343 3～5層：177



338



540



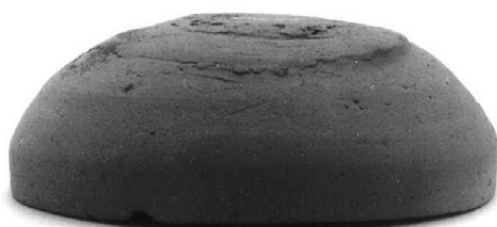
340



186



197



191



205



181



206



180



207

5層：338・340 5-6層：180・181・186・191・197・205～207・540



200



190



196



239



233



252



248



249



244



245



246



261



262



263



266



265



264



284



286



286



283



286



280



285



295



304



291



302



300



396



308



395



307



400



398

SX601 : 291・295 SX608 : 300・302・304・307・308
NR4B01上層 : 395・396 NR4B01中層 : 398・400